
ダイバー 外伝 愚者は心剣(ブレイドアーツ)に恋をした るー

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイバー 外伝 フレイドアーツ 愚者は心剣に恋をした

【Nコード】

N9745Q

【作者名】

るー

【あらすじ】

本日、2011年7月8日より正式にダイバーマブラヴの外伝と致します

IFストーリー

―西暦XXXX年 夏―

―日本国 帝都―

―帝都大学 キャンパス

一人の青年が息を切らせキャンパス内を走っている

2

彼の名は佐橋祐樹、ここ帝都大学の三回生である

なぜ、彼は走っているのか？それは趣味のために全力疾走中

彼は世間一般的にいうオタクという奴だ。ただこの時代のオタクとしてはかなりマイナーなクラシック作品嗜好

クラシック作品とは？一般的には西暦2000年頃のエンターテインメント作品等のことをクラシックと言われている。

現代人の実に6割ほどは存在を知らず知っている者も大半はそういう物があるという程度の認識しかないほどの古い作品群達である。

その彼の趣味にひっかかるのが本日発売の、真剣で私に恋しなさい
タイムダイバー版、である

この他にもこの時代に発売された作品のタイムダイバー版が発売されるが目下、彼の優先順位はこの”まじ恋”のみとなっていた。

『タイムダイバー』

大手ゲームメーカーのアクタイオン社が開発した次世代インターフェース型スピリットダイブシステム。

専用のコントローラーを体に装着、五感等すべてを転送しあたかも自分自身がゲーム内に存在しているかのようにプレイできる。

また世界観やキャラクター等の設定や原画等を放り込むだけであとはコンピュータが自動的に演算、作成等を行うため、ソフトウェア側からも人気がある。

ゆえに、現在世界のゲーム業界の7割のシェアを誇る大人気ハードである

今回、祐樹が買うソフトも過去の作品は著作権の保護期間が過ぎているため
ある企業が保存していたデータを再利用しコストをかけず売り上げをとということで日の目を見ることとなった

―自宅 自室

逸る気持ちのままに祐樹は購入したソフトを早速タイムダイバーにセツトする

―待ちに待ったな〜…さて、飛び込みますか！

コントローラーを装着し―――虚構世界へと潜るゆく

視界が一瞬、緑色の海に潜るような景色を映し出して

佐橋祐樹は白い世界にやってきた

―電脳世界

電脳世界に降り立った祐樹はその場で背伸びを行う

「なんどやってもこの感じだけはなれないな……。」

祐樹はダイブする時の感覚にいつもの不快感を表す

「ようこそ、プレイヤー様。このたびは”真剣で私に恋しなさい
タイムダイバー版”をお買い上げありがとうございます。」

と祐樹の耳に聞きなれた女性が発したような電子音声が入り

「チュートリアルは必要ですか？」

「いや、いい」

祐樹は電子音声の申し出をすげなく断る

チュートリアル——タイムダイバーの基本的な動作等のレクチャーパートだが、何回も潜っている祐樹にはいまさら必要ではないものだ

「さつさと、本編に入ってもらって良いかな？」

「承知致しました。ゲームストーリー等のご説明も必要ないでしょうか？」

「ああ、ストーリーは元のクラシックの方をやったことあるから……
それもいいよ」

ストーリー紹介も省いた祐樹。それに対して電子音声は淡々とした

声音で

「畏まりました。では、本ゲーム内においてプレイヤー様は本来の主人公”直江大和”の立ち位置となります」

「ゲーム、開始時点は原作と同じ。川上学園二年生の2・Fの生徒。境遇や過ごして来た人生は後の追加システムで決まります」

ゲームシステムを説明していき

「先もお伝えしましたが…タイムダイバー版におきましては、最初にプレイヤー様の能力等を付加するためポイントをお渡しします」

電子音声がそう言った後、祐樹の手前に半透明のウィンドが中空にて展開される

「ポイントは50。これはゲーム開始時にしか使わないので使い切りをおすすめします。残しておいてもゲーム内で使用することは御座いません」

ウィンド内に50という数字が現れた後

「このポイントを消費して、ゲーム内におけるステータス等の才能と特技等が決定しますのでよく吟味してくださいませ。では以下から選択を」

電子音声が告げた通りに半透明のウィンドには以下の項目が現れ、一番最初に文が載ってあった

——各項目は最大5LVまで。なお最大値はその作品内における著

名人の能力と互角とする。体、技、心のみ1LVずつ最初から獲得
なお、4LVは5P。5LVは10Pの消費となります

体——力や武術等、身体のパラメータ

1が一般的な男性又は女性とし（プレイヤー様の性別及び年齢によ
って変化）。3が武術の達人。4が武道四天王。5が川上百代と同
レベル

技——対象知識の奥深さ、知力のパラメータ

1が一般的な男性又は女性とし。3が講師を務めことができるぐら
い。4が教授や博士と呼ばれるほど。5が俗に言う天才

注意！知識に対する相思であり、理解力・思考力等はプレイヤー様
本人が基準となっています。

心——対象の芸術、アーティストと呼ばれる、精神のパラメータ

1が一般的な男性又は女性とし。3がアマチュア。4が一般的なプ
ロ。5が世界に通用するモノを持っている

注意！ゴルフの腕。野球の腕。絵描きの腕。シンガーの腕等…専門
分野におけるモノ。重複取りが可能、技においても同様

例：心Ⅱシンガーソングライター

次はフラグ、境遇等……雑多な設定と特典です。獲得には各項目の必要ポイントが必要です

風間ファミリィ所屬——原作と同じに風間ファミリィに所屬している。コレを習得した時点で境遇と歩んできた人生は椎名京の件を除き同じとする。消費P…5

椎名京フラグ——原作における直江大和と同じように依存されているかどうか。習得しない場合、設定された性格通りの行動。極めてフラグを立てるのが困難。上記と一緒に習得すれば原作と同じ展開。消費P…5

榊原小雪フラグ——IFフラグ。原作において身を挺して救い上げたと仮定。習得した場合、椎名京と同じで依存してくるが…普段の行動は原作と同じ。ただし、一番の寄る辺を主人公に託す。椎名京同様、習得しない場合はフラグは極めて困難。消費P…5

華族・経済界の著名の一家——権力又は財閥など、お金や地位の特典。端的に表すとお金持ち。消費P…10

運転：○○——その機械の操作に習熟していること。消費P…3。
倍消費すれば芸術並みの腕を持てる

e t c , e t c ——

——さて、どうしようかな…？

中空に浮ぶ半透明のウィンドと睨めっこしする枯樹であつた

己を決める（前書き）

気分転換とかにしか書かないので…

検索とか引つかからないようにします。

一応本編たるマブラブをしっかりと進めるように意識しますので

…

己を決める

——さて、どうしようかな…？

中空に浮ぶ半透明のウィンドと睨めっこしながら祐樹は考えにふける

今、現在…佐橋祐樹はタイムダイバー版 真剣で私に恋しないさいをプレイ中だ

タイムダイバーについては詳しくは説明しない。とある物語の物の正常に動作している版と思ってもらいたい

そして、祐樹が中空の浮ぶ様々な半透明のウィンド相手ににらめっこしているのも

タイムダイバーの一つの醍醐味たる自身の能力設定だ

——うゝん……最初に体、技、心のステータス能力を決めなければいけなく。かつやり直しは利かない…ボーナスフラグの関係上か…

大雑把な説明を聞いた祐樹は一番最初の項目を見据えながら考えを及ぼしていると

重大なことに気がつく

「……忘れてた！なりきりモードってこれ、搭載されてるかな？」

「はい。搭載されております。今、ウィンドに内容を展開いたします」

電子音声が答えて、新たなウィンドが展開される

昨今タイムダイバーのソフトにおいて流行っているシステム”やりこみモード”

これは、システム上現実世界で6時間くぎりでのダイブアウトする使用を変更し…ゲームクリアになるまで

ダイブし続けるという物。ゲーム内で盛り上がるの所で強制的にアウトされるのがユーザー内で不満となっていたため

ゲーム内時間とシステム内時間の差異を調整し、一日で終わらせる仕様だ

コツコツとやりたい者は今までどおりに。最後まで気分よくやりたい者にはこの”やりこみモード”を…といった具合だ

そして、この”やりこみモード”最近では一部メリットとデメリットを付加させたモードが搭載されていたり

「……………ポイント倍になる代わりに原作知識が一切なくなるか……」

このまじ恋版では能力付加ポイントが倍になる代わりに、プレイヤーつまり祐樹自身が持つ…まじ恋の知識を代償にしろという物

——うゝん……ポイント二倍は魅力だし、恋愛物なんだから……未来を知っていてもつまらない部分もあるかな？

顔を窄めて祐樹は思案していく

——それに

中空に浮ぶ注意書きを見つめ

”補足。習得したフラグは遺憾なく発揮されるので安心を”

の文を読み取り

——これなら……TRPGって奴みたいな感じだし、いいな……もう一人の自分、人生のやり直してやつかな？

心底、面白そうだと顔を綻ばせて祐樹は

「じゃあ……やりこみモードでお願いするね」

「畏まりました。ではプレイヤー様の所持ポイントは1000となります。では選択をお願いいたします」

ウィンド内に在った50の数字が100へと変更され

祐樹は再び、能力の割り振りを難しい顔をして考えだし……

まずは体

——やっぱし……ここは強さは欲しいな……原作でも割と危ない目

に大和君会ったし、最悪…川上百代が暴走しだした時の抑止力かな？あんまし、力で目立たないようにしたいけど………武術とかは何かを護る為のものなのだから…

そう思いながら祐樹はレベル5。マックスへとする

「LV4以上なので、武士テーマを決定してください」

電子音声が告げた言葉に祐樹は感慨深げに言葉を洩らす

「へえ…原作の武士テーマか、憎い演出だな……よし！最初から決まってるも同然！」

生き生きとした表情で祐樹は告げる

「”護”！大事なモノを守り慈しみ——護ることを尊しとせん！」

快々しく、満面の笑みを浮べて祐樹は宣言すると

「了解。戦闘スタイルはどのように致しますか？」

新たな質問に対して祐樹はジェスチャーで伝えるように体を動かしながら答える

「武器は……盾を用意してもらいたい。基本的な動きは……格闘で後は…氣って使える？」

「プレイヤー様の概念を模した物ならお使いなれます。思いながら動いてみてください」

電子音声の声に祐樹は頷き…意識を内側へと研ぎ澄ませ

「こつ…かな！”青龍鱗”！！」

両の掌を合わせて打ち放つように突き出すと——蒼銀の光を纏う一撃が前方へと放たれる

「すこ…！！なら、これもイケルか？！”狼牙”！！」

弓を引くような構えを取り、手に氣…生体エネルギーを集めて貫手を繰り出し——命中したと仮定して腕に集まっているエネルギーを爆発させた

「おお…！さすがはゲームだな…」

両の掌を見つめながら、握ったり開いたりしながら感心する祐樹へと

「受理いたしました。続きまして、技をお願いいたします」

電子音声の言葉と共に新たなウィンドが展開される

次は——技だった

——LV1が今の俺自身がわかること…体も心も、まあ…体はマックスだけど。でもこれ……対象知識ってなってることは

考えを浮べながら祐樹は技を選択すると

——やっぱし…機械工学なら機械工学。考古学なら考古学って複数取れるようになってるのか

技の欄がずらつと並んでおり

——あんまり…意味無いかも……教師とか演じるなら必要だけど、学生がしたいんだし…要らないか。仮にも大学生だし俺…

技にはポイントを割り振らず

続いて心へと

——これも、技と一緒に。だけどこれは惹かれるな……。体で20p使ってるから境遇とかフラグ分考えないと

眼を輝かせながら、居並ぶ項目を見つめる

——うっ……目移りするな…でも、これは絶対欲しい！LV4で！

祐樹が選択したのはシンガー

——マックスはポイント使っし…世界レベルとか明らかにエライことになるだろうしな…。声があれば人に聞かせられるぐらいにはなるかな…？

恥ずかしそうに、頬を掻く祐樹

——まあ、ピアノとギターはそこそこ出来るっぽいし、ゆかりは掛け値なしに褒めてくれるからな…

幼馴染の表情を思い浮かべる

——でも、歌はアイツ絶対評価してくれんからな……はあ、ドへたくそなんだろう……ゲームの中でぐらい夢見させてもらおう……心情で溜息を吐く祐樹。ゆかりの心中は——お察し下さい

そうして、祐樹はシンガーをLV4として習得し……残りのポイントは70

「三項目の入力を確認。これ以降の変更はできません。よろしいですか？」

「うん、いいよ」

祐樹は電子音声に軽く返事をして

「了解。続きましては境遇、出身、技能等の獲得をお願いします」

電子音声がそう言うとなんだ新たな半透明のウィンドが数枚展開され

「……これ、誰得なんだよ……」

ずらりとならんだ項目の中には

「足が臭い、5p……取る奴居るのかこれ……？」

後頭部に冷や汗をかき、顔が引きつるのがわかる

足が臭いを筆頭に、口臭が甘いやら、爪が綺麗やら……意味があるのか分からない物もある中

祐樹がピックアップしたのは物達は――

――これらかな？

風間ファミリー所属――原作と同じに風間ファミリーに所属している。コレを習得した時点で境遇と歩んできた人生は椎名京の件を除き同じとする。消費P…5 注！他のファミリーとの重複は不可

葵ファミリー所属――原作、葵冬馬・井上準・榊原小雪の三人組に所属している。コレを習得した時点で歩んできた人生は榊原小雪の件を同じとする。消費…5 注！他のファミリーとの重複は不可

華族・経済界・政界の著名の一家――権力又は財閥など、お金や地位の特典。基本的に親が偉いだけ。消費P…5
注意！プレイヤー様がご一家の設定を考えない限り、自動でポイント消費によって獲得します

神の恩恵――美しい顔立ち、人に好かれる容貌を持つ。ぶつちやけるとイケメン。消費P…10

呪われた血――なんらかの衝動を身に宿している。戦闘欲求・吸血衝動等。消費P…0

特技：00――料理等、趣味や生活における雑事のうまさ 倍払えばプロ並 三倍払えば特殊なものも習得。例、料理・洗濯 例特殊系、銀細工・ヘアメイク 消費P…5

運転：〇〇――その機械の操作に習熟していること。消費P…5。
倍消費すれば芸術並みの腕を持てる

超回復——呪われた血習得時のみ習得可能。川上百代と同じ能力を持つ。消費P…50

「とりあえず……俺の場合は大体こっぴつのが該当するよな……」

祐樹そう言っつて視線を”華族・経済界・政界の著名の一家”の項目へとやる

——こっぴついうゲームの場合、へんな意識を植え付けないうつに…メインキャラ以外の親族とかは現実と同じように設定するからな…

そんなことを思いつつ

——いいか…。ゲームの中とはいえ他人が親だと、変に感じるし…このまま習得させてもらおう

そうして、上げた物の中で祐樹はとりあえず

無言で

”神の恩恵”を習得する

………木枯らしが吹いたような気がする（うつせい！俺だつて…俺だつてモテたいんだよ！ちくしょううう！）

最終的に残りの選んだものは

”特技：ヘアメイク””運転：バイク”共に倍払いにて習得する

ヘアメイクは自身の好みたる女性の髪を弄くれる大義名分のため――
――エロイくて小ざかしい祐樹である…

バイクは移動が便利といの名の……やっぱし女の子にモテたいから
という男の典型的な考えです

そして――

「やっぱ、これが欲しいよな」

” 風間ファミリー所属 ”

―― まじ恋と言えば、これがメインだしな

首をうんうんと縦に振りながら祐樹は満足げに頷いた時

「続きまして、フラグへと移行いたしますがよろしいですか？」

電子音声の問いかけにも頷く祐樹。さらに新たなウィンドが手前に
展開される

椎名京フラグ 消費 5 p

原作における直江大和と同じように依存されているかどうか。習得

しない場合、設定された性格通りの行動。極めてフラグを立てるのが困難。

榊原小雪フラグ 消費5p

IFフラグ。原作において身を挺して救い上げたと仮定。習得した場合、椎名京と同じで依存してくるが…普段の行動は原作と同じ。ただし、一番の寄る辺を主人公に託す。椎名京同様、習得しない場合はフラグは極めて困難。葵ファミリー習得時、消費P…5 習得なし30

鉄乙女フラグ 消費10p

つよきす出演キャラ、鉄乙女との出会いフラグ
先は……自身の行動次第

九鬼あげはフラグ 消費10p

君が主で俺が執事で出演キャラ、九鬼あげはとの出会いフラグ
先は……自身の行動次第

「君あるにつよきすのキャラも?! たしかに、乙女さん出てたけど…立ち絵なしで、あげはさんは成長してたけど…」

驚きの声を上げるも選択が終わり

「さてと…」

フラグの習得も終わった祐樹へと電子音声が問いかける

「全選択項目終了。ボーナスフラグの発生を確認」

「ボーナスフラグ？」

電子音声の声に祐樹は問いかけると

「境遇ボーナス。ゲーム開始時点を幼少時に変更。ではプレイヤー様、いつてらっしゃいませ」

「うえ？…ってちよっと、いきなり？！」

その電子音声の声を最後に祐樹の意識は飛ぶ——真剣で私に恋しなさいの世界へと

「エクストラボーナスの起動を確認」

クロス・ハート
心鎧を獲得

風の少年と泣き虫武士娘と大人な子供

「ほら、祐樹。ご挨拶よ」

青年の意識は母親によって揺り起こされた

視界に広がる数々のモノ

家々が並ぶ住宅街の中

自らの頭上には母が柔らかい笑顔と暖かな呼びかけ己へとくれ

対面にはどこか飄々とした雰囲気を持ちながらも傍らに立つ少年を
暖かなモノを持って接する女性と

「おれ、かざましょういち！おまえは？！」

快活な笑みを浮べて…年の頃五歳程の男の子——風間翔一が祐樹
を指差す

「ったく…！この馬鹿息子は…礼儀正しく出来ないのかね？」

呆れた表情を作る妙齡の女性に

「いいじゃない、彗子。男の子なんだもの…これぐらい元気があつ
たほうがいいわよ。うちの子なんか、おとなしくて…」

頬に手を当てながら祐樹の母——佐橋久子は楽しそうな笑顔を浮べて——女性、風間慧子へと答える

「はあ……いいじゃない手間が掛からなくて久ちゃんは……うちのなんて年がら年中大暴れ、うるさいの何の……」

そう言つて答えた慧子と久子は二人して愚痴と談笑を重ねる中

祐樹は——

「俺は……祐樹、佐橋祐樹。よろしく、風間」

柔らかい笑みを浮べて答える

この日が…風の少年、風間翔一との初の出会いであり

青年——いや、少年の暖かな日々の始まりであつた

——自宅 祐樹の部屋

翔一との出会いから時は半年が経つた

「……以外と慣れるものなんだな……」

のんきな声で自分の勉強机の椅子を揺り動かしていた

意識が半年前、翔一、後にキャップと呼ばれる少年との出会いの時に覚醒した時から感慨深く思っていたことだ

——精神が体に引つ張られるってやつなのかな？……それとも、俺自身が出会った事のない奴だからかな…？

苦笑——いや、暖かな笑みと楽しげな表情を浮べる祐樹はそう思う

精神年齢とでも言えば良いのか？実際には大学生というもはや、社会的には立派な大人の意識を持っているはずの祐樹だが

——こういう風に、友達と外で遊んだ記憶ってなかったよな…

翔一の破天荒だが……気持ちのいい男振りに祐樹は毎日振り回されるも、心の底から楽しかった

——転校、転校、また転校の日々だったし……左目の件もあったしな

思い起こす。本来の幼少期の記憶……8歳頃からの記憶しか明確に記憶していないが

ゆかりと出会うまでは各地を転々とする日々。何時から持っていたわからない左目のトラウマたるモノ

——こつちじゃ、綺麗さっぱり消えているけどさ……

机の上にある手鏡を手繰り寄せて、全体的に長い髪を掻き分けて左目を視界に晒す祐樹

——まさか、イケメン能力ってこれで相殺？……はあ…ねえよ…

鑑に映る自身の素顔に溜息を吐く祐樹。特典として取ったはずのイケメンとして期待していた素顔は現実の己の幼い頃とまったく同じで落胆する

………鑑しつかりみろよ主人公ゆっき

どっかの誰かの恨み事が挟まったが

——しかし、もののみごとに……記憶から消えてるな。わかるのは”真剣で私に恋しなさい”って世界にダイブしたと能力に關してだけ

手鏡を置いて祐樹は部屋を下りて、リビングへと向かいながら思う

——子供とは思えない身体能力はまさしくゲームならではの…ってことか

拳を開いたり、閉じたりしながら祐樹は翔一との出会いから試した自身の体について考える

——氣殺をもっとうまく使えるようにならなきゃ…力を抑えていても分かる人には分かるしな…

一応、元になる世界が世界だ。とんでもないことが起こるかもしれないと川原で祐樹は力を一瞬、解放しようとしたが

——鉄心さんに会えてよかった…

どこからともなく現れた好々爺なおじいさんという容貌をしながら

武道の最高峰、川神院の総代…川神鉄心によって制され

——あの時の鉄心さん、本当に恐かった…。でも、力の制御を教えてくれるし…じい様居なかったから、本当のじい様みたいで

今でこそ、こうやってポヤポヤと考えに上げられるが出会いは最悪の部類であつた

五歳児に対して般若の形相を持って相對した鉄心。祐樹は思いつきり顔が引きつり、涙を目の端に浮べて…おまけに

——この歳になって盛大に洩らすなんて…

溜息が出そうになる程の落ち込む。それはそうだ。祐樹が一応、精神年齢を食っているから堪えられただけで

普通に五歳児程度がああ形相を見れば、良くてトラウマ、最悪泡吹いて心臓停止でお陀仏だ

——鉄心さんも川神院が忙しいからな……できるだけ迷惑かけないようにしないと

出会いは最悪だったが、根は真面目で優しさを持つ祐樹の人柄ゆえに…すぐに鉄心に気に入られ

忙しい時の合間を縫って、月に一度は土日を利用して靈山山脈へと赴き稽古をつけてくれる

——とりあえず、鉄心さん曰く……今でも師範代クラスには見つかるけど、それ以外は大丈夫だって言ってくれるし…このまま頑張ろう。面倒ごととは勘弁だし…力は力を呼ぶって言ってたし、うん。

現時点で…祐樹の力を知っているのはルー・リー師範代と釈迦堂師範代のみ

流石に現時点の百代には気づけるものではなく。そも、鉄心自身が祐樹へと百代を近ずけておらず…祐樹も彼女の存在を知らない

知ったとしても、原作知識がないゆえに……第一印象は男勝りな女の子という終わってしまう。まあ…一瞬で印象が変わるのは請け合いだが

そんなことを取りとめもなく考えながら

祐樹は飲み物を飲む為にリビングの扉に手を掛けた時——玄関のチャイムが鳴った

現在時刻13時……この時間にチャイムが鳴るということは

往々にして祐樹は自分の予想が9割方当たっているだろうという考えを持ちながらも

「はい…どちら様ですか？」

閉じた扉の外に居るであろう人物へと問いかけを放つと、案の定

「おーい！ゆうきーあそぼっぜー！！」

子供の快活な返事。翔一の声が返ってきたのを確認して祐樹は扉を開ける

「おっ！ゆうき！あそびにいこうぜ！」

翔一のいたずら小僧が浮べそうな子供の笑顔を浮べて祐樹を外へと連れ出そうとする

「うん…。わかった。翔一、準備するからちょっと待ってて」

祐樹はそう告げて翔一を玄関の中に招き、自身は足早に自室へと駆け

「よっ…と」

机の上の物架けに吊るしていた流涙型イヤリング——PAKは子供の身では耳に着けることが敵わないゆえにペンダントのように自身の首へとかけ

「後は…飲食代持つてと」

引き出しから父から貰った1000円札を取り出し——

前に翔一がはしゃぎ過ぎて、出かけ先で脱水症状を起こした時、金が無かったゆえにエライ目にあいかけた

それ以降、祐樹は無理を言って親に頼み込み……遊びに行く時、お金を持たせてもらえるようにしている

普段まったくわがままを言わず、求めたこととて友達を大切に思うからこそその発言、さらには時に子供とは思えない程の思慮を見せる祐樹

家が父の外交官と母の実家が名のある家ゆえに、お金に困ることもない要因も重なり…持たせてもらえることに

かわりに家の家事手伝い……まあ、マブラブ編でも告げた通りに母は料理が壊滅的にダメな為、味付け等は祐樹がもはや担当しているがそれと、おやつ等の物は一切与えてもらえなくなったが…特に困ったことは祐樹にはない

子供の体ゆえに燃費はエライ悪いが、それすらも野菜を齧るかトーストを焼いて食べたりとお菓子等より実際に腹の足しになるものを食べていた

まあ……甘い物は別腹というか、大好物なので翔一と何か食べる時は基本的に甘い物ばかりだ

「お待たせ、翔一」

「おせえぞ〜ゆうき〜」

翔一は唇を尖らせて文句を言うも

「ひみつきち、いくぞ！」

すぐに引っ込めて、笑顔を浮かべながら玄関に突撃をかまして、外へと踊り出す

「ちょっと、待ってくれよ翔一」

駆け出した翔一の後を祐樹が慌てて追いかける

その胸に光るペンダントにしたPAKを揺らしながら

そんな二人を見つめる

茶髪を小さなサイドテールにした少女が電柱から隠れ見ている

――秘密基地？

ダンボールで出来た虚構の城

しかし、それでも子供にとっては破格の居場所

幼心に甘く響く名……秘密基地

翔一が主体で場所を見つけ、祐樹が材料となるダンボールを商店や

らなにやらから集めてきた

二人のかけがえの無い居場所だったのだが――

「知らないおっさんが居る……」

祐樹の啞然とした声に

「この～！おっさん！そこはオレたちのばしょだぞ～！」

翔一は声を荒げて…ダンボールの中に居る浮浪者の男に食って掛かるも

「……………」

荒み切って病んでいる瞳が二人を見つめ返すも……何も無かったかのように再びダンボールの城の中で丸くなる

「きいてんのか！おっ――」

「翔一……やめとこ」

祐樹は尚も声を荒げる翔一を静止する。頭を振りながら、あきらめろという視線を翔一に向けながら

「ゆづき！」

翔一はあきらめられないのだろう…静止する祐樹へと食って掛かるも

「翔一！また、いいのを作ろう！俺とお前なら……これよりもつと

良いもの作れるだろ？」

祐樹もまた……友が傷つくのは嫌だ、それにこういう目をした奴に関わっても碌な目に会わないのは空気で分かる

「でもよ……！」

祐樹の真剣に自身を案じる眼差しを感じ取った翔一は不貞腐れたような声音で、なおも祐樹へと声を上げるも

「川原に行こう。翔一」

祐樹が諭すように柔らかに言って翔一の背を押す

形ばかりの抵抗をして翔一は祐樹のなすがままに押されていく…

そんな二人をまたも小さなサイドテールを持つ少女は見つめて——
——二人が向かった方角へと進み、彼らを尾行するのであった

——土手

ぶつくさといいながらも翔一は祐樹の前を歩いて

二人は川原へと向かっていたのだが…

「…………やはり、付けられているな」

祐樹は先ほどから同じ気質を持つ人間——ようは誰かが自分達を尾行しているのに気づく

「どうしたんだよ？ ゆうき」

翔一が微かに唇を尖らした顔で後ろを振り返り、祐樹へと問いかけを放つ

「翔一」

「うん？」

「後ろに誰か居ないか？」

「うん……おんながいるぜ！……はは……ん」

祐樹の問いかけにキョトンとし……答えるも

次の瞬間には瞳を輝かせて

「逃げるぜ！！！」

ワザと——追いかけてきている。土手の側に生えるススキに身を隠しながら付いて来た……サイドテールの少女に聞こえるように叫び

「えっ？ あっ、おい？！ 翔一？！」

声を掛けるも、五歳児にしては速い足でいきなり駆け出していく翔一へと声を掛けながら祐樹も走り出そうとすると

付けてきていたサイドテールの少女は、サイドテールをぴこっ！と激しく一瞬、逆立てた後

ガサガサとススキから飛び出して祐樹達の後を追おうとするも

「あうー！」

盛大に転んでしまい…

「う……うああ……」

案の定、膝小僧でも擦り剥いたのであるのか？地面にうつ伏せていた顔を上げて、膝を瞳に映すと盛大に泣き始める

翔一を追おうと駆け出そうとした足を止め、祐樹は盛大な泣き声が聞こえてくる背後を振り返って……駆け出す

「大丈夫か？」

ポケットからハンカチを取り出しながら泣く少女へと手を差し伸べつつ

——翔一の野郎……ワザとやりやがったな

翔一の魂胆が見えた祐樹は内心で溜息を吐きながらも

「立てるか？……ちょっと待ってろ」

少女にそう問いかけて、膝へとハンカチを当てて、少しでも擦り剥

けた膝小僧につく砂利などを払ってやり

最後に汚れた面を外向けにして…少女の膝小僧にハンカチを巻いてやる

「よし……ちょっと痛いだろうけど、泣くなよ。可愛い顔が台無しだ」

着ている服の袖で涙をぬぐってやる

「あううう……」

祐樹の問いかけと言葉に声にならない声を上げる少女へと

「君、名前は？」

名を問いかける

「かずこ——おかもとかずこ」

小さなサイドテールを持つ泣き顔の少女はそう答える

後の泣き虫わんこ

——川神一子との出会い

祐樹にとっては可愛い妹分との出会い

一子にとっては兄であり、そして——

こうして、風の少年と泣き虫武士娘と大人な子供が集い

ファミリーが形成されだしていく

風の少年と泣き虫武士娘と大人な子供（後書き）

てなわけできくつとキャップとワン子と出会う祐樹でした

年齢と意識とかは正直ご都合主義ってことで……

ゲームって体裁をとっていても、そこ突っ込まれると物語がなりた
たないorz

割りとすんなりと書けたので、モチベは戻りつつあるかな？

次回は時間さらに過ぎて…乙女さん編を予定。夏休みって便利だね
〜

まあ…自分は“予定は未定”という格言を持っているのでそうなる
かわ不明ww

後、一子ルートに入ってしまったたら自分の場合、プロットでは悲劇
を招くことにしかならんw

名前順だと佐橋のさの次は？——心に傷を負った武士娘

月日が流れるのは子供特有のことだろうか？

気がつけばあれよあれよと時は過ぎ…

—比叡山 山脈内

「はあああああ………」

静かに息を少しずつ吐きながら祐樹は

山脈内に生い茂る草木や、駆け回る動物達の氣の中に己を埋没させていく

そんな祐樹を見守るは

「こりゃ！祐坊！また、乱れとるぞ！」

おん年、幾つか誰にも分からない老人——川神鉄心

その鉄心が祐樹の氣の微かな乱れに喝を飛ばす

「はい！お師匠様おしやうさま！すみません！」

答えを返しながらも祐樹はさらに氣の制御に必死に取り組む

「ん……」

祐樹の氣をその細い目の上に乗る長い眉をピクツと動かした後は

ただ、沈黙を持って祐樹を見守っており

時が過ぎること約一時間

「ふむ……よいぞ。祐坊、切り上げい」

胴着が雨で濡れたかのように汗まみれにした祐樹へと鉄心は声をかけ

「はい！……ふう……」

元気よく祐樹はその声に答えた後、徐々に高ぶった氣を押さえながら息を吐く姿に鉄心

——よい。よい。心根が真っ直ぐの子ゆえに、真綿が水を吸収するが如くに上達しておる

表面上は厳しい趣で祐樹を見ている鉄心は内心でそんなことを考えており

——百代に匹敵する才を持ちながら、此れほどまで澄み切っているとは……本当に子供なのかと問いたくなるわい

脳裏に浮べる孫娘のやんちゃな姿に溜息を吐きながらも、所々で見られる本当に子供なのか？という思慮と行動に鉄心は疑問を生じるも

——せんなきことを考えても仕方ないの。笑い話にもならん

心の中で被りを振りつつ

——そろそろ…百代に引き合わせるかの…？良い方向に向かってくれるじゃろうて

「お師匠様！この後はどうすれば？」

地面に正座して鉄心の前に座る祐樹の問いかけに

鉄心の意識は浮上し

「帰り支度をなさい。もう一週間も立つゆえな…」

「はい！……今度は何時、こう…纏まったご指導をしてもらえますでしょうか？」

もはや、祐樹にとって鉄心は実のじい様同然ゆえに……遠慮がちにも構ってもらえる日々を訪ねると

「ふむ……また、しばらく手が離せんのじゃが…」

鉄心の物言いに祐樹がしゅんとするも

「その代わりといつては、なんじゃがの…今年の夏休みにはある男の元に向かつてもらいたのじゃよ」

鉄心の言葉に頭上に？マークを浮べて

「お前さんの父親の知り合いとは、別口の強い者の所にな」

「????」

月日は祐樹が小学二年生の春休み

名目は川神院のキャンプ。実体は山籠りであった

さて、新学年……新学期が始まる今日この日

「おい！ゆうき！がっこういこうぜー！！」

「ゆうきーがっこういこうー！！」

玄関にて身支度をしていた祐樹の耳に届くは翔一と一子の声に

「キャップ！ワン子！今行く！」

二人のあだ名で持って返答しながら荷物を持って玄関を開けると

「さあ！きゃつぶさまとおなかまのしゅつじんだー！」

威勢のいい、キャップの掛け声

この頃より、翔一は頭に赤いバンダナを巻いて自身のことをキャップと呼ぶように強制しており

「はやく〜ゆづき〜」

キャップの隣に立つ一子

泣き虫で、その表情やらしぐさからキャップに子犬っぽいと指摘されあだ名としてつけられたのが…ワン子

土手での一幕の後、一子・翔一（これ以降キャップと明記）・祐樹の三人は仲良く遊び

帰り道にて一子が近くの老婆の家の養女とわかり、それ以降は常に三人一緒に行動するように

普段の様子は――

「こら。ワン子、寝癖が付いたままだ。ちょっと待ってろ」

サイドテールの横から飛び出した、ちょっとした寝癖を

一子の頭を優しく固定して手グシで整えてやる祐樹

「うん。ゆづき」

成すがままに気持ちよさそうに受け入れる一子

小さな犬耳をちょこんと飛び出させながら、ほにゃ〜と顔の表情を崩す

「おい！おまえら、おれをのけものにするなよ〜」

そんな一子と祐樹の微笑ましいやり取りにキャップが唇尖らせて突っ込む

先ほどまで、かなり先を行っていたにもかかわらずにだ……子供の頃から風の子というわけだ

「悪い悪い、キャップ。じゃあ、行こうぜ」

「こら！ゆつき！しゅつじんのあいずは、おれがとるんだぞ！！」

「うん！！」

祐樹が朗らかにキャップへと笑いかけ促すとキャップは憤慨したかのように言い募り、一子は満面の笑みで頷く

「じゃあ…キャップ。我等のリーダー、出陣の合図を」

その、なんともキャップらしい物言いに祐樹は苦笑を浮べて…参謀ぽく告げると

「お〜し…！いくぞ！」

「お〜し！！」

元気よく声を上げて拳を振りかざし、釣られて一子も小さな拳を上げて高らかに声を上げる

こうして、三人はワイワイガヤガヤと楽しく雑談をしながら一路――学校へと向かうであつた

――小学校

「ことしは…ふたりといつしよのきょうしつになれるかな？」

不安げな表情を浮べて一子はクラス分け表が乗る中庭に出された黒板を見上げる

「そうだな……。ことしからはワン子もいつしよがいいよな！」

キャップも一緒になつて黒板を見上げ

「そうだね。ワン子もキャップも一緒だったらいいな」

一年生の時は、運悪く一子のみクラスが違つてしまい……クラス分け発表後の一週間はかなり愚図つていた時を思い出す祐樹

内心、ドキドキしながら黒板を見上げると――

「おっ！あつたあつた！おれのなまえ！…え」と……よっしゃあ！
ゆづきもワン子もいつしよだぜ！」

いち早く己の名前を見つけたキャップが己のクラスの中に二人の名がないかと探すと

幸運にも二人の名もあり

「やった〜!!」

一子のはしゃいで小さくピョンピョンとジャンプを繰り返し

「よかった……今年も引き続きよろしくな、キャップ。ワン子はこれからよろしく」

長い前髪に隠された両の眼を細めて柔和な笑顔で二人へと声を掛ける祐樹

「おう!!」「うん!よろしくね〜ゆうき!!」

両者共に元気よく答えて……三人は振り分けられたクラスへと向かい

「名前順で座ってそうだな」

三人が入った教室は、何人かグループ立って窓際や教室の隅っこでおしゃべりをしており

その他の者が皆大人しく席についている状況から……席順を予想した祐樹

「お!そうだな!!とりあえず、かばんがじゃまだからせきにおいてくる!」

そう言ってキャップは自分の席を探しに行き——まあ…結局、机の上に名札が名前順に置いてあった

「あ！ことはちゃんがいる！ことはちゃんがあそこってことはだいたい……あたしのせきは」

隣で祐樹に引っ付いていた一子は……一年生の頃の同じクラスの友達を見つけて、ブンブカと腕を振ってそちらへと足を向ける

「二人共動いたし……俺も探すか」

そう言っつて祐樹は己の席を探し出し

「さ、さ……つとあった」

そう言っつて祐樹が自分の名札が置いてある席を見つけると

自分が座るべき席の後ろに座る——瘦せこけた体に陰鬱な空気を背負う少女がうつむき加減に席へと申し訳ないようにチヨコンと座っており

「……………」

物悲しげに机と見合いをしている少女へと祐樹は

「え〜と……初めまして、俺は佐橋、佐橋祐樹。君は椎名——」

屈託の無い笑顔で祐樹は伏せてしまっている……青みが掛かった紫の髪を持つ少女は

「……………」

ものすごいビククリした表情を祐樹へと晒して

「さんだね。よろしく」

そう言つて祐樹が声を掛けた時

クラスの中に緊張が走る

本筋ならば、直江大和に——” 仁”……深き愛を持ち、それを貫
き通した武士娘

さて…この物語ではどうなるやら

波乱の一幕が待つ

名前順だと佐橋のさの次は？——心に傷を負った武士娘（後書き）

まじ恋の中では一、二を争う好きなキャラ…京ちゃん

しかし、本編が本編だから考えている展開が違和感しかないかも…

傷を癒す者（前書き）

チヨロチヨロと更新。情報にも載っていますが…

二名脱退かな？

傷を癒す者

―クラス

緊張が走る

祐樹が椎名――京へと声を掛けた瞬間に教室の時間が一瞬、止まった後

「うわ！こいつ、椎名菌としゃべってるぞ！！」

京と祐樹の会話に割り込むように叫んだのは隣に座る名も知らぬ少年

「うわ～～～～～～こいつもいんばいがうつつたぞ～～！！」

さらに煽るように向かいに座る少年も同調して叫ぶ

――はあ？

いきなり、わけのわからないことを叫ばれ祐樹は怪訝な表情を浮かべて京へと視線をやると

「うっ………」

弾かれたように上げた顔を再び伏せて……京は小さく唸りながら、縮こまっていく

その様子にさらに、調子に乗った少年たちは増長していき

「こいつのはおや、インバイってやつだ！」

「せいびょーでしんじやうらしいな！！」

「つまり……椎名菌だ！こいつもしいなとしゃべったから椎名菌がうつった……！！」

次々と心ない言葉を京へと浴びせる少年たち

周りの少女たちは関わらないように視線を避けるか……クスクスと笑っている

「……うつ……ぐす……」

見ていられない。……見たくなんか無い光景

祐樹の脳裏にフラッシュバックのように——蘇る光景

——何処に行っても……あるんだな……！

ギリツと小さな齒軋りが聞こえる。形相は怒りに歪むが……その長く伸びた前髪ゆえに、子供たちにはその様子はまったく伝わらず

「あううう……あの——」

祐樹が発すモノに気づいた京が……流れた涙を拭いながら祐樹へと問いかける

優しい娘だ。己が傷つけられていながら、今初めて——会話した祐樹を心配げに涙に濡れた瞳で見つめるのだから

京自身が思ってることは違つかもしれない。もしかしたら……声を掛けてくれた祐樹が離れていかないように

縋る気持ちで問いかけただけかもしれない——だが、それでも祐樹へと心配げな瞳を向けることに変わりはない

「あー！かいわした！おまえ椎名菌がうつるぞー！」

さらに……子供としてはガタイのいい体格、文字通り頭一つ分。クラスの子供たちより背の高い少年が祐樹へと声を掛け

「う……」

その大きな叫び声と図体に京が怯えて、小さな呻きを洩らして……体を縮こまらせて、机へと顔を伏せてしまう

「あぶなかったな。おれさまにかんしゃしろよ」

京の様子に勝気になり、馴れ馴れしく祐樹へと声を掛ける少年

「……………」

無言の祐樹

「しかし……ガリガリだな。あいつ」

そう言って少年は、縮こまる京へと一瞥して

「おまえになにかいいたそうだぜ？　いろおとこお」

ニヤニヤとした笑みを浮べてさらに祐樹へと声を掛ける

「黙れ。喋るな……カスガ」

声を張り上げて言った訳ではない

ドスを効かせた訳でもない

ただ……淡々と少年へとそう答える。まるで、道端にある路傍の石に向けるような冷たい視線を向けながら

「なっ？！　てめえ……！！」

祐樹の物言いにガタイのいい少年はメンチを切るかのように祐樹を睨みつけ

「が、がくと！」

その隣に居た……気の弱そうな少年、師岡卓也が——がくと……島津岳人を止めようとする

一触即発の空気。誰もが、子供ですら……解る程に空気が痛い

しかし、子供に空気を読めということが土台無理なこと……特に男の子には

「おい！おまえ、なまいきだぞ！」

「やっちまえ！しまづー！」

周りに居る少年達が煽る。自分に向けられた訳ではない言葉。

しかし、子供にとって気に食わないことは——暴力で解決しようとする傾向が強い

少年達も……例外ではなくガクトを先頭に祐樹へと拳を振り上げた時

「おれ！ゆうきのピンチにさんじょうー！」

「うげ！」

ガクトの背へと飛び蹴りを放ち、転倒させ……普通の子供ではできないような

蹴った勢いを使って宙返りをしながら祐樹を背にして正面に立つキヤップ

天に愛された少年だからなのか——ぶっちゃけ、一言で言う
とキヤップだからありだろう

その姿、まさしくヒーローと言える

「ずるいぞ！ゆうき、おれもませろー！」

ニカッと八重歯を光らせながら笑顔を浮べるキヤップは祐樹へとそ

う告げて

「りゆうはいらん！おれは、ゆうきのがわにつくぜ！！」

まあ…………祐樹、いや——ファミリー限定のヒーローだが

それでも、やっぱりヒーローには違いない

「てんめえ！かざまあ！」

蹴り倒されたガクトが起き上がりながら吠えるたが——

「こら！お前達、何をやってるか！！」

濃い紅の髪をバレッタで止め、魅惑の首筋を晒し…………少しキツメに見える鋭利な瞳をより一層と鋭くさせて

小島梅子。最短での教員試験を突破し、この春より祐樹達のクラス
の副担任を任された女性と

四十台のほんわかした女性が教室へと入ってくる

「席に着きなさい！！！」

本編では高校時代の大和達の2・Fの担任を務め、鞭による教育の
愛…本当に愛のなのか？…を響かせる。三十路を控える独身女性だが

この物語では、新進気鋭の新任教師。今回の副担任も経験を積ませ

る為に、ベテランが補佐となるよう組まれた配置

話が逸れたが……教師の登場に鼻息荒くし、怒りをほとばらせていたガクト達はスゴスゴと退散するも

「ほうかご……おぼえてやがれ!!」

始業式ゆえに、本日は半ドン。お昼前に学校は終わる為

ガクトは脅すように祐樹へと吐き捨てて席へと戻る。他の子供たちも同様だ

——はぁ……いろんな意味で泣ける……

波乱の騒動も祐樹に取っては只、溜息が洩れるだけ

しかし——それを見ていた京にとっては

「だ……だいじょぶ?」

本編の様子からは考えられないような、小動物チックな上目遣いに祐樹は

——うおっ……か、かわいい……

一瞬、眼を奪われる。だが——その瞳に浮ぶ不安とまだ少し濡れる瞳をしっかりと認識し

「大丈夫だよ。なんともなるさ」

梅子にどやされない様に、小さく京へと囁いて

京の前たる自身の席へと着く

知識を持ってないと……こういう弊害も起こりえる

本来の歴史ならば、風間ファミリーに所属するはずの島津岳人と師岡卓也

しかし、新学期早々に祐樹の怒りに触れ…対立することに

いささか、速すぎるが……既に物語が違う方向へと走り出している

当たり前だ。直江大和だからこそ、たどった本編であり

佐橋祐樹にとってはまた違う物語なのだから

傷を癒す者（後書き）

ということ……ガクトとモロ（ただの巻き添えw）と対立することに

本編の話の中ではガクトも、積極的にはないにしろ。いじめ側ゆえに多分、このままフェードアウトかな？

代わりに他のキャラをファミリー入りさせようとw

あと、梅先生の経歴はオリジナルです。最短で短大突破すれば20歳で教員になれると……計算すれば、ちゃんと高校時代に28で登場できるようになっておりますw

決別——そして、新たな出会いへ（前書き）

あくまで、子供の考えを自分なりに解釈して描写しています

決別——そして、新たな出会いへ

—学校 裏庭

「……………何、この遙か昔の定番風景…」

ボソツと祐樹が洩らした言葉は周囲の者達の耳へと入らなかった

意識はこの時代の遙か先の未来の青年。このような風景は祐樹の趣味たるクラシック漫画の中でしか見たこと無いような風景

——キャップと祐樹を囲むようにクラスの男子の半分と島津岳人がそこに居た

「おうおう…おれさま。あいてににげずにきたな…」

指の骨をパキパキ鳴らせば格好がつくと思っているのだろう

祐樹の意識の中でも、偉大な漫画として名が残された「〇〇の拳」のようにしたいのだろうか……

——いや、拳を握りこんで鳴るなら…様になるが、根元を一本一本鳴らしてるのは格好がつかないんじゃないか…？

正直な話まったく恐くなど思えない

子供で拳を握りこんで鳴らせる者等、居るのであるのか？居たとし

ても、ごく少数。それこそ、川神百代等なら平然と出来るだろうが
同い年の中では平均以上でも……大人と比べては非力

たとえば、本編のようなガタイに成長したとしても…世界相手では比
べることにすら出来ない

まして――

――ナリは同じだけど……子供相手に力を行使してもな…

己のトラウマ。そして、己の中で理不尽に分類されるモノに対して
祐樹は…は抗議する

――でなければ…何の為に”力”を手にしたんだ…

ギユと絞られた握り拳を見つめて自問する中

「おい…ゆつき。あいつら、そろそろかかってきそつだぜ?」

背中合わせにして立つキャップがウズウズとしたような声音で祐樹
へと囁く

「キャップ。無理だけはするな…だが」

周囲を油断なく見回しながら祐樹は背中合わせにするキャップに警
告と

「わかってるって!ゆつき!こいつらに、おれらにてをだしらいた
いめにあうっておしえてやらねえと!」

祐樹が言わんとすること理解しているキャップ

——そうだ。ここで力を示さなければ、椎名さんも俺達もこれから…うざったいちょっかいを受け続けるハメになる…！

すり足で地面を鳴らしながら祐樹は思う。子供は調子に乗れば……
際限なく増長する

「おらああああ…！」

ガクトの雄叫びからのラリアットを開始合図にして

「いくぜ！ゆうき…！」

「ああ！キャップ！後ろは任せろ…！」

クラスの男子VS祐樹とキャップの戦いが幕を開けた

——あたるわけが無い

全速力でガクトは突っ込んできているつもりだろうが、祐樹にとっては動いてるのかと問いたくなる程の遅さ

それでも、子供相手…そして無闇に力を振るえばどうなるか

——釈迦堂さんみたいな奴を引き寄せたくは無い……！

前回触れたおり、祐樹の力を知っているのは——じい様たる川神鉄心。ルー師範代。そして…釈迦堂師範代

なれ初め話はこちらでは割愛する。今は

「キャップキック！！イエーイ！6のけいけんちをゲット！！」

ガクトの先制を回避した祐樹の耳にそんなキャップの声が届く

思い切り、腹を蹴飛ばして相手を吹っ飛ばして決めポーズを取るキャップの背後に迫る奴が居るも

「まったく！世話が焼けるよ！キャップは！」

かわした体勢から勢いよく体を振って、キャップの背後から殴りかかるうとする少年を迎撃し

「へっへっん！ゆうきがうごくのはわかってっからな！」

決めポーズそのままに笑顔を浮かべながらキャップは呆気らかんと言いつ切る

二人の体制は最初と同じ背中合わせに対峙する形へ

「こんのおおお！！たたきつぶすぜ！おれさまああ！」

その姿に激化したガクトの雄叫びを合図に戦い……子供の喧嘩が本格的に始まる

「キャップ……ゆうき……！！頑張れ……！！」

その二人の様子を力一杯声を上げて応援する一子。巻き添えにならないようにかなり離れた位置から

隣には

「あう…………ど、どうしてかばってくれるの…?」

己の性で二人——祐樹とキャップが絡まれたというのに、喧嘩売って…京の眼には死闘と映るほど過酷な状況

洩れでる言葉は当然で、その表情は信じられないという顔をしていた

「えっと…しいなさん…ううん、みやこってよぶね！わたしのことはかずこかワン子って呼んで！」

その問いに答える為に一子は屈託の無い笑顔を浮かべなら京へと声を掛け

「え…あ…………う…」

面食らった表情を浮かべる京

「かずこ。おかもとかずこだよ」

なおも、人懐っこい笑顔を浮かべる一子

「みやこ…………しいなみやこ。……………よろしくね！
かずこ！」

ポツリポツリと京は己の名を告げた後——長い沈黙の後、

顔クシャクシャにして涙を流しながらも京は笑顔で一子の名を呼び

「うん!!」

一子は一子らしい。誰をも和ませ、安らかな気持ちにさせる笑顔を
浮べる

そんな二人を――無粋な者が近づく

――所詮は子供。連携も戦術もクソもない

いかに徒党を組もうが、相手は子供。袋叩きにしようと一斉に動い
たりするぐらいの知恵はあろうが

本格的な戦術を駆使することができないわけではない

現実世界で肉体を虐めると共に戦いのイロハを面白半分に叩き込
まれた祐樹には彼らの動きは愚鈍にしか見えない

「やゝつと…!はんぶんかよゝゝ」

キャップは満身創痍とは言わないまでも疲れて体の動きに鈍りが出
始めている

言葉もそれに応じたモノが飛び出してくるが……ガキ大将まんまの
笑みは収まることを知らない

祐樹はキズ一つなく、息を荒げることもない

キャップが突っ込む先を逐一、フォローし確実に一人一人沈めれるように連携して

今や――

「くっそおお…」

こちら也大振りの攻撃ばかり全力で行ったゆえに自滅に近い疲れを洩らすガクト

周りで立っている者はもはや、二人だけ

「まだ――やるのか？」

祐樹の問いかけが發せられ

「やるにきまつてんだろ！！椎名菌やろくにまける…おれさまじゃねえ！」

なおも、祐樹の怒りに触れる言葉を吐くガクト

「――」

もはや、聞く耳を持つことをしないと決めた祐樹

「ゆづき！いこうぜ！」

少しずつ息を整えているキャップガクトの発言と祐樹の表情を感じ取り、少しだけ表情を引き締めて声を上げた

だが——その時

「さはし！かざま！とまりやがれ！！」

何時の間にやら……一人の少年が

「わぁ〜ん！ゆうき〜キャップ〜……」

一子を人質にしてその首へと腕をかけていた

「わんこ！！」「一子！！！！」

キャップと祐樹のハモツた呼び声

「でかしたふくま！！しっかり、おさえてろ！！おれさまがこいつ
らしずめるまで！」

ガクトはその機転に歓喜して犬歯を剥き出しにして祐樹達へと歪んだ
笑みを向ける

——ちっ……一子達までにも手を出すか！！！！

相対するガクトを視界の端に捕らえながら祐樹は一子を捕まえた男
を視界の中に入れ

「この……！！」

手に入れた友達が聞きに晒されている。京は己を奮い立たせて

幼いながらも少しずつ、初歩の初歩だが……椎名流弓術に鍛えた力を振るおうとする京へと

少年は――

「くんな！ばいきん！！しんじまうだろうが！！」

大声で喚き立て

「……………！！」

京はその言葉に硬直してしまい

「おまえなんか！がつこうくんなよ！なんで、いきてんだよ！」

子供は残酷だ。遊び感覚で蟻を踏み潰したり、蝶の羽を？いだり……命を容易く殺すことに平然とかかれる

だから――人の心を平気で傷つける言葉は吐ける

追い詰められていたのであろう。皆が同調するから、祐樹とキャップ……たった二人の少年が粹がっていると見て取れた少年にとって

むかつくから、皆がそう言ってるから、状況に流されるままに勝ち馬に乗ろうとしたゆえに

この状況を理不尽に思ってしまう。だから――護ることを尊しとせん男の逆鱗に触れた

「一子と椎名さんから離れろ」

「なにいつ——」

祐樹の問いかけに叫びだそうとした少年は——祐樹と視線を交差させた瞬間……倒れ

視線から叩きつけられたのだ。内に眠らせている莫大な氣を。死なない程度に圧縮して

浴びせられた少年にしかわからない程に研ぎ澄まされたモノを

「死んでいい命なんかない」

「……!!」

続けられた言葉は京の顔を跳ね上げさせた

「おい?!ふくま?!」

突然、倒れたふくまという少年へとガクトは声を掛けるも少年はピクリともせず

「島津」

「なん——ひっ!」

祐樹の能面とした声音にガクトはイラただしげに返すも、眼光に怯えて息を洩らしてしまう

「俺とキャップに手を出すのは良い。男同士だ。拳でケリをつけるのはありだろう」

周りに居た少年達はガクトから聞いたことのない怯えの声を聞いた瞬間に逃げ出しており

祐樹が近ずいてくるのに反応して、ガクトは腰を抜かして尻餅つきながら後退する

「だが——女の子に手を出すというのなら」

後ずさる。後ずさるなければ……己がどうなるかわからない程の恐怖に駆られるガクト

「俺の大事な人達に手を出すというならば……一切容赦はしない。わかったな？」

祐樹はそう告げて、ガクトへと振るとガクガクと首を振ったガクトは逃げ出す

この場に祐樹達……風間ファミリーと京のみとなり

「うへへ……ゆつきおこらすとおっかねえな」

キャップが右手の指、中指三本を第一関節まで口で挟みながら言い

「まっ！でも、ゆつきはおれをおこらないからかんけいないけどな！」

あっけらかんと口に挟んでいた指を離して言い放つ

「……………おいおい。キャップ。ダメなことしたら俺は怒るぞ？」
——キャップ……………ありがとう

雰囲気のを和らげて、呆れたように祐樹は言い返す。心中はキャップへと感謝を述べる

果たして、察して発言したのであるうか。それとも素でそう思ったのかは……………キャップの性格が代弁してくれるだろう

「うわあ〜〜ん！ゆうき！こわかったよ〜〜！！」

一子が涙を零しながら祐樹の胸元へと飛び込んでき

「あ……………よしよし……………。ワン子、頑張ったな」

涙目にはなっていたものの、常とは違い泣き出さなかった一子を褒めて

祐樹は流れ出る涙と鼻水を

「ほれ。ワン子ちーん。」「ちーん！」

取り出したティッシュで拭ってやる。小さな犬耳を出しながら祐樹に言われるがままにする一子……………いとかわゆし

そして、そんな祐樹とキャップと一子のやりとりを見ていた京へと

「椎名さん。ありがとう。一子を助けようとしてくれて」

やんわりと……優しい、木漏れ日のような笑顔を浮べて祐樹は京へと礼を言う

「う……ん。わたし、とめられなかった……」

祐樹の礼に対して京は顔伏せながら答える

「いや…助けてくれようとしたことに礼を言いたいんだ」

「……おれいをいうのはわたし。さはしくんが」

紡ごうとした言葉は祐樹の表情を伺うように上目遣いで見ていた京の視界に入った

唇の上に人差し指を乗せたジェスチャーで途切れた

「お礼を言うことじゃないよ。俺が嫌だったから。俺の我儘でここまで大事になつたしね……」

罰の悪そうに祐樹が己の頭を掻く姿に京は弾かれたように顔上げた

「ちがうよ！わたしは…わたしはうれしかった…！」

涙をボロボロと流しながら京は言い募る

「いきてて……いきてていいって！さはしくんが——」

叫びだそうとした言葉は今度は……祐樹が京を抱きしめたゆえに途

切れ

ただ――祐樹は優しく…そのやせ細った身体を包み込み。今は艶がない…青みが掛かった紫の髪を優しく梳く

――青空に溶け込んでいく。か細いが……心の全てで流す涙と慟哭は

――四年生のクラス

「……！！……いまのは？！……？」

教室で帰り支度をしていた百代の氣の琴線に微かに、一瞬のみ触れた氣

「爺でもない。ルー先生でもない…釈迦堂さんでもない」

真剣な表情を浮べているも…その中に含まれる感情は喜び

――学校の中からってことは………同い年かもしれない！

その莫大でありながら…微かにして一瞬のみしか己に感知させないほどの力を持つ者ならば

――あたしと…あたしと同じ奴かも！！

本来の歴史でなつてしまった…飢えた狼のようになってしまつて己の
未来の姿の片鱗をかもし出しながら

教室を飛び出すも

「こら！川神！廊下を走るな！！」

梅子の一喝と共に——百代にのみ行使を許された小島流鞭術を行
使して百代を足止めする

「……！！くつ、このー」

川神院の修行僧にも勝つてしまふ百代だが、今だ小さなその身体と
少ない経験では

「まだ、お前には抜けれんよ。反省する気はないようだな…川神」

梅子の足止めするような絡め手を突破することは敵わない。……何
時まで通用するかは甚だ疑問であるが

「くつそ……！！！」

百代は腹の底から——悔しさに濡れた声音を上げた

愛に飢えていた

椎名京という少女は愛に飢えていた

家庭環境は最悪。娼婦と呼ばれる母親とそんな母親の血を引くというだけで愛を注いでくれない父親

学校にもその影響は及び……。本来の歴史では自殺を促す会までもが作られるほどになる程……。辛い人生を歩むはずの

”仁”を持つ武士娘

しかし——この世界では……。早くも出会う

その左目のトラウマゆえに、暗い過去を持つ少年と——大人な子供と

異なる”物語”の中で、未来を理不尽に刈り取られていく少女達のために戦い始めた青年——幸せな結末を求める青年と

「へっ！これでいっけんらくちやくうー！！さらに！なかまひとりゲットお！」

「わぁーいー！」

キャップと一子が喝采を上げ、祐樹は優しく京の背を撫で、京は祐樹の胸元にしがみつく

ここに椎名京——”仁”を持つ武士娘がファミリーへと加入した

そして――

――時は学生がもっとも嬉しい季節

夏休みへと突入し

「ここが……」

その背中に大きめのリュックを抱える祐樹は、聳え立つように見上げなければいけない和風の門

「そうだぞ。祐樹、今年の夏休みはここで過ごすことになるのじゃ。お前のことだから……粗相は無いと思うが、ちゃんと言うことを聞くんだぞ？」

隣に立つ鉄心が祐樹へとそう告げて

「はい。わかりました！お師匠様」

屈託のない笑顔で祐樹は頷き

聳え立つ門に掲げられた

――”鉄”の名を視界に入れた

決別——そして、新たな出会いへ（後書き）

ということ、ガクトとモロは終了。

子供編の内に乙女さん。北陸の武士娘。額に×印のキズを持つ女性を書かないと

中学編は至高のシンデレとフカヒレさんを出せればいいんだけど…

夏休み——乙女編（前書き）

すいません。活動報告にも上げた通りに間違った部分——鉄心の登場の
はずが、父親になっているのでそこだけ修正しております

夏休み——乙女編

―鉄家 門前

川神市とは断然、過ごしやすさが違う

肌で感じとれるほどに……この時期の北陸はよい

そんなことを思いながら祐樹は眼前にある門を見据えていると

「鉄心先生……お待ちしておりました」

中から三十台に乗ったぐらいだろうと思われる男性が現れ

笑みを浮かべながら、隣に立つ鉄心へと声を掛ける

「久しぶりじゃの……一条」

鉄心も皺が多くを締める顔を歪ませて笑みを浮かべて男の名を呼び

「祐坊。こやつが夏の間、面倒を見てくれる鉄一条じゃ」

顔を足元に居る祐樹へと向けて、対面に立つ男を紹介し

「佐橋祐樹と申します。ご迷惑をおかけすると思いますが、よろしく願います」

紹介された…長身の穏やかそうな男性へと祐樹はお辞儀をして挨拶する

「はは、礼儀の良くてきている子ですね。うちのお転婆娘にも見習わせたいですよ…先生」

朗らかに小さく笑いを上げて、祐樹の感想を鉄心へと述べる一条

「じゃろう？百代にも見習わせたいもんじゃ」

カッカツと笑い声を上げながら同調する鉄心

「父さん！着たのか？！」

二人して笑いあう最中、門の中から元気の良い少女の声が上がったと思えば

駆け足で祐樹の前へと現れた——二つの髪留めで両サイドの長めに切られた片方を止め、うなじが見えるぐらい切り上げられた髪型の少女

「ああ、乙女。こちらの子が言っていた…佐橋祐樹君だ」

瞳を輝かせて、破顔した顔で祐樹を見つめ

「私は乙女、鉄乙女だ！よろしくな！祐樹！」

御歳11歳の小学六年生の鉄乙女……通称、乙女さんは手を差し出してき

「はい、よろしくお願いします。鉄さん」

乙女に対してもペコリと頭を下げた後、柔らかな笑みを携えて手を伸ばす

——くうくう！かわいい！「そんな、堅苦しいのは性に合わないんだ。お姉ちゃんと呼んで欲しい！」

内心で祐樹の仕草に喝采を上げる乙女。祐樹の呼びかけ方を変えようと声を上げ

「え…と…では、乙女お姉さんでいいですか？」

子供達のやり取りを微笑ましく見やった後、鉄心と一条は先に家中へと消えていき

祐樹は乙女の要望に答えるも

「まだ、硬いな…。もっと、親しげに呼んでもらいたいぞ？お姉ちゃんは」

——レオは口答えが煩いけど、この子は何とも……前髪が鬱陶しいと思う以外は、私好みな雰囲気を持っている…！

一人っ子ゆえに、祐樹の存在はまさしく乙女にとっては弟同然

夏休みと言つ一月以上…一緒に居るといふのならば、この機会を是非ものとし

姉としての立場を確立しようとさらに要求を強める

——どこまで呼んでいいのか…

内心で苦笑を浮べるも、乙女のお姉ちゃん発言から祐樹は思い切って

「じゃあ……乙姉って呼べばいいですか？」

冒険してみる。——祐樹は知らないが、某ゲームの略称そのまんまだ

「くうくう！いい！それがいい！それで決定だ！！」

乙女はその呼び方に心の琴線が触れた快感に身を震わせながら、歓喜の大声を上げ

祐樹の腕を取ってグイグイと家の中に連れて行く

「わっ！わっ！乙姉！まつ、待ってください」

「そんな堅苦しい言葉遣いは、お姉ちゃんが好きじゃない！気軽に呼ぶんだ、祐樹！」

唐突に腕を取られて引つ張られるのにバランスを取りながら祐樹はそう問いかけ

乙女はそんな祐樹の言葉遣いに不満げな顔で聞く耳持たずに、祐樹を家の中へと案内するのであった

そうして、祐樹が鉄家で過ごすようになって3週間

「起きろ！祐樹！！」

スパンと襖を飛ばすように開け放ちつつ、テンションの高い声を上げる乙女だが

「あつ、おはようございます。乙姉」

——…はあ、今日は無理だったか…

心の中で溜息を吐く乙女

時刻は朝の五時。今時、こんな時間に起きだしてくる学生は居るのであろうか？

という疑問が上がる程に早い時間帯。空など…今だ暗さが残っている

そして、何故…乙女がこの時間に祐樹の部屋に強襲するのかといえ

生来の気質から、乙女は祐樹を起こそうと行動を起こすも

尽く空振りに終わっていた。初めは6時からスタートしたが…鉄心から課せられた日課のランニングの為に既に部屋の中はもぬけの殻

次は一時間、早くの五時に出向けば起き上がって敷布団を片付けている最中…

そうして、さらに一時間早い…4時に起こしに行けば——案の定、

安らかに眠る祐樹の寝顔を遠目からだが見ることができたのだが…
一歩部屋の中に入ればバチッと祐樹が眼を覚まし、目的の起こすこととは叶わなかった。

しかし、寝顔を遠めに見ることが出来た。ゆえに、次回も寝顔だけでも見ればと……この一瞬は思ったが

その寝顔を見る為の代償はでかかった……とにかく、その日一日、不機嫌だったのだ祐樹が

後で、乙女が祐樹から聞いた話ではきっかりと決まった時間——
睡眠を取らなければとてつもなく不快になるという

その影響で八つ当たりこそしないが……纏う空気がとてつもなく負のオーラと化すと……

体内時計がしっかりと整っているのか、大体五時前後に起き出す祐樹
ゆえに、乙女はもはや勝負感覚で祐樹の部屋へと毎朝強襲している。
戦績は10戦3勝7敗と順調に負け越している…

「…朝ごはんが出来ている。今日は先に食べていかないか？」

「は…うん。わかった、先に頂きます。乙姉」

若干、下降気味になった気分を取り直して乙女は祐樹へと問いかけ。
祐樹は言いなおしつつ答える

祐樹が答えたのをかわぎりに乙女は一旦、襖を閉め。それを確認し

た祐樹は身支度に取り掛かり

「しかし……なぜ、父さんは私と祐樹と一緒に鍛錬するのを禁じる？ランニングですら禁止するのはどうなのだ？」

襖越しに乙女は、こちらに祐樹が来た表の理由。遠縁の子を預かったという理由からでは察せ無い事柄に言及する

「うーん…それは、俺に聞かれましても…」

心苦しくあるも、苦笑いとお茶を濁した言葉でやんわり回避する

実際の理由たる乙女の父親、鉄一条から直々に稽古をつけてもらうことであるがゆえに

現時点で、既に才能を開花させ……中学生相手でも余裕で勝てるぐらいの武を持つ乙女ですら

あしらえるほどの武を磨いてる祐樹

しかし――

「まあ…俺と乙姉では…ね」

心苦しく思うも……祐樹はなるべく己の力を無闇に他人に知ってもらいたくはない

強い力は強い力を引き寄せてしまうのを自覚しているゆえ――そして

——戈を止めると書いて……武の一字

衣服に袖を通しながらも祐樹は思う

——護る為の武だ。競う為のものじゃない

想いにふける祐樹に

「まあ……いい。祐樹！この前、言った通りに小見山に行くぞ。取って置き場所を教えてやるからな！」

襖の向こうから楽しげに祐樹へと問いかける乙女の声に意識を戻した祐樹は

「え？そこって……この前、一条さんが行ってはいけな行って行った場所じゃ……？」

「心配するな。地獄蝶々も持っていけば、どうということはない。私は武には自信があるのだからな！」

乙女の得意げな声音が襖越しに聞こえ

「いや、でも……一条さんは十兵衛って地元の人が恐れる熊が出るから行くなって」

そう襖越しの乙女へと問いかけたつもりだが……しばらく、待っても返事が無く

着替え終わった祐樹が襖を開けると——そこには乙女の姿はなく

「はぁ……一度言い出したら、どんなことでも曲げない人だからな……乙女さんは」

2週間ちよつとの付き合いであるが、心根を理解してしまった祐樹は不快溜息を吐いて……台所へと向かう

一方、その頃のファミリー

「やつぱ、ゆうきのかあちゃんがいったとおりにさうなつやすみじゆうはかえってこねえよ」

糸目になりながら三人の内、ただ一人男でありファミリーの大黒柱たるキャップが言葉を紡ぎ出し

「くっそっ！ゆうきのやろう！かってにぼうけんにいきやがって

！おれもさそえよ……」

口を尖らせて悪態を付くと

「おばさんがいつてたとおりだと、あとひとつぐらいかえってこないわよ……」

一子はキャップに相槌打ちながら、少しだけ涙目になりつつ声を上げる

いつでも、一緒に居て何かと一子の世話を焼いてきた祐樹が居ない状況は一子にしてみれば

言葉に表せない寂しさと空虚さが心を占める

そうして、新しくファミリーの一員となった京は

「さはしくん………」

悲しげな瞳を浮べて、祐樹の名をポツリと呟く

春からの始業式から夏休み直前までの期間、一学期中に祐樹を筆頭に奔走し京へのイジメはなくなった

イジメを消滅させた要因がガクト達が洩らした祐樹の恐さがもつとも起因しているが……

おかげで祐樹はクラス内は一子とキャップ、京以外から倦厭されている。まあ、祐樹にとってはまったく堪えることではないが

そうして、京の傷ついた心は……同じ傷を持つ祐樹が懸命にフォロ
ーした結果

祐樹に対しては子供特有のコロコロと表情を変えて接する——それ
でも、表情豊かとは言えないが——ことを可能とし

ファミリーのメンバーたるキャップ、一子に対しては屈託無く接す
ることができるまでに

「……………ゆうきくん」

少女は無償の愛をくれる大人な子供を待つ

夏休み——乙女編（後書き）

なんか……筆が動くままにしていたら、ブラコン気味なお姉ちゃん
キャラになってました。乙女さん……（：・・）

意外な弱点……とは思わない（前書き）

ちよつと、脱線している部分もあるが…関連する部分でもあるので

意外な弱点……とは思わない

―小見山

とにかく…移ろい易いものだ

「もう少しだぞ！祐樹！」

山の天気という物は

だが――そんなことは祐樹より少し前を元気よく歩いていく少女――
――鉄乙女には関係なく

「乙姉。雲行きが怪しいですよ……今日は戻りませんか？」

そんな乙女に対して祐樹は空模様を気にして欲しいと進言するも

「む…たしかに、雲行きは少しだけ怪しいが……」

少しだけムツとした表情を浮べて祐樹へと振り返り

「もう少しで着く！ここまで来たからには、拜んで帰らないと無駄骨になってしまう」

今までの行程――約1時間近く、山を登った道程を強調しながら

聞く耳持たずの態度で前を向いてどんどんと山道を歩いていく乙女に

——降らなきゃいいけど……

一抹の不安を感じながらも祐樹はそんな先行く

乙女の後ろを見守るような瞳でついて行くと

「着いた!!」

乙女の晴れ晴れとした声音が後ろを歩く祐樹の耳に届く

雲行きのやりとりをしてから大体15分ぐらいの道程の結果見たモ

ノは——

「こんなところに……滝があつたんだ……」

瀑布とか飛瀑とか……立派な水音をがなりたてるような滝ではないも

——大体……5メートルぐらいの分岐型か

一般的に言われる分岐瀑。落ち口から幾重にも分岐して流れを作る
女性的な滝の姿を取るその光景

例を上げれば……伏見ヶ滝に酷似する光景は——

「どうだ?!すごいだろ?!奥地過ぎるから地元の間人でも知って
るいるのは少数なんだぞ?」

胸を張って自慢する乙女に納得できるほどに綺麗だった

「ほんと……すごいね。乙姉」

素直に感心してしまうほどに乙女の爛々とした笑顔とその後ろに控える滝の光景に

眼を奪われ……穏やかな笑顔で祐樹はゆっくりと頷いた

「?!?!……!そつ、そうだろ!そうだろ!」

一瞬、乙女は祐樹の笑顔に息を詰まらせたかのような表情を浮べると

祐樹の問いかけにうんうんと首を縦に振って頷く。――類は

「とつ……とりあえず!お腹が空いただろう?お姉ちゃんに任せろ!すぐに魚を取ってやる」

誤魔化すように乙女は祐樹に背を向けて蹲り

靴と靴下を脱ぎ、私服の短パンのベルトに差していた地獄蝶々を引き抜き

静かに波音を立てないように川へと入っていく

見事なまでに……水中の魚達の気を散らさない動きで

「……………はっ!」

川の中央に立ち……掛け声を上げて水面へと腕を走らせて

熊のように魚を岸へと叩き出す。その姿を見て祐樹は

「…とりあえず、火の準備が要るか…」

岸辺に竈を作る為に落ち木と枯葉、風除けの大きめの石を集めだす

そうして、二人は――

「うん！塩を持ってきておいて正解だったな！！」

モグモグと口に含んでいた焼き魚の身を飲み込んだ乙女が感想を洩らす

彼女、ちゃっかりと家から粗塩の入れた袋を持参していたようんだ

……

「そうだね…」

祐樹もそれに頷いて自身が調理した――腸の除去と粗塩を少量揉み込む――焼き魚を食して

「ん…いける」

声を洩らす。二人はそのまま、空腹が命じるままに焼き魚を食べていく

残りが串に刺さって火から遠ざけられた二尾になった時――乙女が表情を引き締めて

「祐樹」

「……なんですか？乙姉」

乙女の表情に祐樹は悟るも——努めて、いつも通りの表情を作り

「聞きたい……ことがある」

そう乙女が切り出そうとした時、天から……

「あつ…雨」——天の恵みって奴か？……さむ。まあ何にせよ…助かった

祐樹が洩らした言葉通り、ポツポツと大玉の雨が降り出してき

「ん。たしかに——だが、ゆう」

乙女も天空から降り注いでくる雨に頷くも話を逸らされないように続けようとしたが

「やばい……本格的に降ってきた」

予想以上に叩きつけるような雨が降り出してき

「ぐっ……。っ……！仕方ない！避難するぞ！祐樹！」

叩きつけてくる雨で一気に服が濡れていくの自覚できた乙女は息詰まった声と唸り声を上げ

そう断言して、祐樹の手を掴んで駆け出す。火は自然に雨に掻き消

されていた

——くっ……せっかく、遠出までしたというのに……！

そんなことを思いつつ乙女は顔をしかめるも

しっかりと掴んだ祐樹の手を引っ張って山を降りようと駆けて行く。
が——

山というからには……頂までは上り坂になっているのが常識

ならば……降りていく時は下り坂なのは必然

普段ならば、大粒の大雨が降る中……所々急斜面になっていようが

持ち前の天賦の才と弛まぬ努力で鍛えてきた身体は一人の少年を引っ張りながらも

軽々と危なげなく下山できる地力を持つ乙女には苦も無いことであつたが……

しかし——

視界が一瞬……白く染まった後、続くように強烈な音が辺りに木霊する。

……“雷鳴”が辺りを

それは

「きゃああああ？！？！」

鉄乙女にとって……致命的に身を竦めさせてしまうほど

「？！乙姉？！」

掴んでいた祐樹の腕を振りほどいて、我武者羅に駆け出し――

足を滑らせて仕舞う程に恐怖に震えてしまう……弱点

そして、山で足を滑らせて仕舞うということは、運が悪ければ

「あつ……」

乙女が呆然とした声音を洩らし……落ちていく

走っていた斜面の横、切り立った崖の下へと落下していきながら

ただ…乙女は呆然とその結果を受け入れるしかない。このままでは

いくら、天賦の才があろうと鍛えてきたであろうと……その身はただ小学生

恐怖に戦慄き、何の予備動作もなく崖へと身を投げ出してしまえば
――なす術などない

だが――

「乙女！……！」

それを阻止するのはいつだって

「?!?!」

声が出ない。“馬鹿！なにやってる？！”“お前まで飛び込んで？！” e t c e t c

脳裏にグルグルと渦巻く多の言葉。乙女はそれだけを考えていた

いや、そうじゃない……ただ、祐樹までもが崖から身を投げ出した現実を認めたくはなかった

このままでは、二人して――

そのことがひたすらに一秒を数百回に分けたかのような断続する時間の中で思うこと

「つか――まえたあああ！」

大人な子供。切っ掛けは些細な理由だろう……力を得た理由等

しかし、切っ掛けは切っ掛けに過ぎない

その力を持ち、何を成すのか。何を得たいのか。――何の為に力を

武を行使するのか？そんなものは

「ゆ…祐樹?!」

「しっかり掴まって!乙女!」

祐樹の言葉に反射的に抱き寄せられた乙女は祐樹の首に腕を巻く

幼い頃の男と女だと……女の方が成長が早い

ゆえに、傍目から見ると不恰好で不釣り合いな体勢を晒す祐樹と乙女
だが

そんなことに構ってられる余裕は祐樹にも乙女にもない

眼下を見つめる

——高さ…大体50メートルってどこか…!

見つめる視界の先にある地面…というよりも剣山のような森の姿

叩きつけられれば怪我程度で済まない高度を落ちながらも祐樹は

「^{まいの}護つて見せる!必ず!——^{ただ}Guardian or ^{いち}chiv
alric romance」

誓いのような言葉を吠え……無意識にその“ ”を呟く

フラッシュバックする。“この世界”の祐樹にはわからない光景

——教会なのだろう。聖母が救世主を抱く姿を描いたステンドガラ

スから洩れ出る光を膝を着いて浴びていた

——見上げる視界の中に多くの者達が

——黄金の夜明けのような笑みをくれる……金の絹糸のような髪を両サイドから垂れ、後頭部はシニヨンとリボンで纏めた女性

《ユヘン？ルヘン？…ユウキですか？……うん、ユウキ。良き名ですね》

——銀髪の姉妹。無邪気に笑う妖精。少しだけ陰のある瞳だが見つめる瞳には優しさが込められた瞳を持つ妖精

《るへん！そっちのいろのほうがにあってるよー！》

《その……私達を……いや、なんでもありません！》——似合わない、私が……護ってって言うのわ

——やけにばやけた輪郭。顔すらも不鮮明……確定していないのだろう。灰色の髪。大切な人を失った女性

《

》

——もしも、声を掛けてくれるならば……誇りがあり、愛があり、胸を張って……出会えた奇跡に感謝を述べたくなるような言葉を発してくれるだろう

——目の前に立つ。聖衣服を纏う老人。肩から白く長く決め細やかな装飾が施された布を巻いた…その老人が言葉を成す

——フルフルと視界が揺れた。老人の横に立つ者が穢れなき布越しに持つ……神秘的な雰囲気纏う西洋剣。

——皆が驚きに包まれていた。老人だけが朗らかに再度問いかけてきた。視界が横に揺れた

——人差し指を指した。先には

古ぼけ、薄っすらと血に濡れた後が付く
………盾

——またも驚きが場を支配していた

——差した盾は浄化を受け続けているかのように……ステンドガラスの聖母の眼差しから洩れ出る光を巧妙に当てられていた

——老人は覚悟を問うように言葉を告げる。こちらを伺う。溜息のようでありながらも期待に満ちた声を告げる

——誓いを胸に拝命する

一瞬にして、過ぎ去る光景。今はまだ……時ではないが、確実にそれは少年の心に……無意識の域に……刻み付ける

「青！龍………！鱗………」

左腕で抱き寄せた乙女をしっかりと抱え込み——祐樹は右の掌か

ら蒼く輝く収束した氣を放つ

「おおおおおー!!」

雄叫びを上げ、放ち続ける氣はすぐさま地面へと激突し…一本の柱と化し

ひらすら放ち続ける。自身と乙女を重力に逆らって宙に浮かせるため

「はあっあー!」

そうして、慣性の法則で落ちていた身の運動エネルギーを殺し

徐々に二人の身体を押し上げていく状態まで持つていくと祐樹は氣の柱へとさらに爆発力を込めて

一気に滑り落ちた場所付近へと己と乙女の身体を持つていく

「…はあ……なんとかなった」

安著の息を洩らしながら祐樹は抱えていた乙女の身体をさらに力強くギュと抱きしめる

「?!?!」

状況に頭が追いつけていない乙女はさらに、祐樹が力を込めて自身を横抱きに抱える体勢のままに

抱きしめる力を強めたのを感覚が理解し……さらに思考が混乱するも

「ゆ…祐樹…お、お前…」

モゾモゾと祐樹の胸の中から頭を上げて見つめた視界の先には

「怪我はない？乙女？」

雨に濡れ、べったりと張り付いた前髪が邪魔であつたのだろう

濡れた髪をオールバックにして素顔を完全に晒した祐樹の姿と……
その瞳と表情に込められた思いを前に

乙女は――

「っ？！~~~~~！！！！！！！！！！」

自分の名が示す意味と同じようになった

……………蛇足を入れれば、一番前に一文字、漢字が入るが

意外な弱点……とは思わない（後書き）

さて、ちょっとアンケートを

今の所、ヒロイン選択分岐前ルート上で辰子を入れようと考えていますが

小雪を入れて欲しいという意見もあり……両方入りたいのですが過去の失敗を経験して、なるべくキ主要キャラは減らしたいのでどちらか一方ということ……

メイン張るキャラが増えれば増えるほど、各キャラがおざなりになってしまう……

実力が足りない自分が悪いのですが、今の自分では――

ということ、活動報告のアンケート募集に興味ある方はコメを残してください

感想の中にも書いてもカウントしませんので、あしからず

追記、募集は次回更新まで……

メッセージでもOKです。まさか、来るとは思わなかった……

あと……小雪の場合は恋愛とかには9割発展しないので

気持ちの整理（前書き）

えらく、時間がかかりました…

気持ちの整理

どこをどう走ったかなんて…覚えてない

気がつけば、自らの部屋の隅に濡れた体をそのままに……蹲って座り込んでいた

膝を抱えて――

――怪我はない？

やたら、めつたらに聞こえる……鼓動

壊れたのは心の臓か？音を拾う鼓膜か？

今の少女にはそんなことを考える余裕はなく

抱えた膝の中に顔を埋めていた――赤く火照る顔を冷やすかの
ように

脳裏に浮ぶ――少年の表情を

思い出したいのか……消し去りたいのか……

緋い交ぜになった気持ちはわからない

雨音が発てる——叩きつけるような激しい音と空模様が作りだす暗がりの部屋の中

——乙女？

「——わかんないよ……」

滲む、にじむ、ニジム——視界

洩れ出る……しゃくり上げた小さな泣き声

純粹に、ただ純粹に己を案じてくれた少年に歓喜しているのか

その力を……切磋琢磨に磨いてきた力を凌駕するほどの——力を隠していた事実悲しんでいるのか

心は千切れたように、悲鳴を上げていたが

「……………乙姉」

自室の扉たる襖越しに少年——大人な子供…祐樹の声が洩れ聞こえてくる

その声音に乙女はビクツと身体を震わして、硬くなり……表情が強張った

長い——長い、沈黙が横たわる

——どれぐらいの時間が経っただろうか？

一分だろうか？十分だろうか？一時間だろうか？

体感時間ならば、確実に乙女はこう感じただろう

次の少年の言葉が聞こえて来た時間は……一瞬だったと

自己に埋没する。外界と断絶したかのように……自己に埋没しているのなら永劫とを感じるべき場面において――

乙女には……一瞬の沈黙の後に掛けられた言葉として聞こえてきた

「ごめん……」

どんなに心揺り動かされ、嬉しいのか悲しいのか……わからなくても……

そうであるのであれば――

しかし、今だ乙女はその奥底の心に気づけない。今だ未成熟な少女に、心の小さな機微を気づけというのは酷

だから……少女は襖越しに聞こえてきた言葉に

「なんで……あやまるんだ……！」

苛立った声音、拒絶するかのように言い放った言葉

何に対して謝っているかなんて……わかるはずもなく

襖越しに声を発した祐樹はその言葉を受け止めても——その場から離れない

離れるという選択肢が浮ばない。浮ぶわけではない

——放っておけるわけがない……

気配を手繰ることができる力に感謝する

か細い程に弱弱い氣しか感じられない程に今の乙女は参っており

この場に辿り着くまでにあった、無数の小さな水後

濡れっぱなしで乙女が部屋に籠っているが自ずと分かる

だから…祐樹は己も濡れネズミの姿のまま、襖の前に立ち尽くす

二人を隔てる。心は静謐な空間が、身体は襖という物理的な物に

襖越しに祐樹が立っているのは乙女にもわかっていた

自分がこのまま延々と籠っていて、かの少年は堪えることなく…
延々と立ち尽くしたままだろう

だから――

這うように膝を摺って、掌で前進して……襖の前に辿り着き…力
なく立ち上がり

襖一枚越しに二人は相對する

「……祐樹」

「…何？乙姉」

名を洩らした。だが、またも沈黙が横たわる

ゆえに、今度は

「乙姉」

「……なんだ？祐樹」

「力を……武とは…何か？乙姉はどういう風に感じてる？」

「私は――」

唇を噛む

そんなことを考えたことはない。鉄の家に生まれ、類なれなる才を身に宿し、その力を伸ばすことに違和感はなく

両親とて努力する乙女を褒め称えた……だから――

まだ、乙女はそんなことを考えたことはない。考えるという思考すら浮ばなかった

ゆえに――押し黙ってしまう

でも、それは、当たり前。そんな根底を問うようなことを求める程に……年を重ねていない乙女には当たり前

だから……祐樹は言葉を続ける。――少し、卑怯な問いかけをしたな……と心の中で自嘲しながらも紡ぐ

「俺はね……乙姉。力……武、其の物が悪いことなんてないとは思っ

紡ぎ出した言葉を乙女は黙って聞く

「乙姉みたいに、自らを精進させる為の人。弱きを護り、強きを挫く為の人」

紡ぐ言葉。脳裏に蘇る――自らに振り下ろされる拳。走る痛み。誰も助けてくれない

嘲笑と視界に入れるのすら……けがわらしいという侮蔑の視線。巻き込まれたくないという人々の顔

子供は無邪気さと残酷さを持ち合わせた矛盾の存在

「でも——中には競い合いたい。どちらが上かはつきりさせたい」
左眼を押さえながら紡ぐ

「戦いたい。殴りたい。壊したい。ただ——闘争本能と自らの欲望を満たす為に……大地の上にただ一人立ち尽くしたいと」

釈迦堂。《 》。飢えた狼のように……その身を喰らえば、渴きを癒せると

「武を——力を振るう人が居る」

悲しげに紡がれる言葉

「己の身を守る為に」

紡ぐ。女々しいような

「大事なモノを奪われない為に」

後悔するような声音——繋がった先の”世界”から漏れ出した思いが心地よく侵食——

ちがう。侵食ではない……共感し無意識に自ら受け入れた思い

「――戈を止めると書いて…武の一字」

微かの沈黙

知っている。その身で味わってきたのだから。理不尽に振るわれる暴力を幼き頃に知っている

そして…

”歪な力”は”歪な力”を呼ぶことを――

強い力はお互いに惹かれあうように……全てを巻き込んでぶつかり合うことを

知っていて、**識**^しっている

「だから、俺は……」

「知って——言い訳にしかないな……」

本当に

眼を伏せて、情けなさに呆れて

「ごめん……」

そう言って祐樹は……その場から立ち去った。立ち去るしかなかった。

乙女は

「……………私は……」

書きおこせない表情を浮べ

髪先から零れ落ちる滴に混じって洩れ出る熱い――

――鉄家 縁側

熱い日差しを浴びながら祐樹は縁側に座っていた

胸元にかかる流涙型のPAKが光を反射して輝き

骨伝導によって伝わってくる。お気に入りの一曲を聞きながら……
祐樹はのんびりと空を見上げていた

雨に打たれた日から2週間

あれから乙女と会話を交わすこと敵わでいた。話しかければ、本来の乙女らしくもなく

顔を赤くして逃げるように立ち去ったり、両親へと話を振ったりし

てやり過ごされていた

「はあ……でも、あと3日でお暇させてもらうしな」

雲の白さと空の蒼さが絶妙なバランスで描く……晴れ渡った空模様を見上げながら祐樹は呟く

——なんか……本当に邪魔しに來ただけだったな……

一条との稽古はあの日から、一条より断られた。曖昧な表情と誰かをお願いされて仕方なさそうな申し訳なささが入り混じった顔で

鼓膜に伝わってくる音色に癒しを求めて……祐樹は瞳を閉じて、身を床に広げようとしたが

「ゆ……祐樹！」

空気伝導によって耳へと伝わった

乙女が己を呼ぶ声に祐樹は一瞬啞然とするも

「お……乙姉……」

驚きを浮べた……少し間抜けな表情を浮べて掛けられた声に反応して後ろ振り向く

そこには——普段、短パンにベスト等……少し男の子ぽさが残る。何時もの服装ではなく

「そ……そのだな」

空色のワンピースを着て、片手に地獄蝶々を持って……仁王立ちしながらも真っ赤になった顔を祐樹へと向ける乙女の姿

伝わってくる乙女の声と音楽の音の中。祐樹は

「か……かわいい」

呆然とその姿に感想を洩らす

「ひつぐ？！お……お前と言う奴は……！この前も……！」

その祐樹の言葉にさらにりんごのように真っ赤にさせた頬を地獄蝶々を持ったまま、両手で両頬を押さえ

「お……お姉ちゃんをからかって楽しいか？！」

怒ったかのように声を上げるも……その声音に混じった歓喜の音では——怒り等、感じるわけもなく

「くう！！……ま、まあいい！！」

ゴホンと咳払いを立てて、顔を引き締めて乙女は紡ぐ

「祐樹。私にはまだ……お前の問いかけに答えを出せない」

縁側に座っている祐樹の隣に乙女は座りながら

「い——」

そんな乙女へと祐樹は言葉を返そうとするも…人差し指で口を封じられて

フルフルと首を振った乙女はさらに続けていく

「お前の問いかけに私が答えられないのと同じで……お前が私の問いに答える必要はない」

軽く唇を押さえた人差し指を離して

床につけられていた…祐樹の手に己の手を覆い被せる

それは、丁度……リピート再生されていた曲が始まりへと戻った瞬間

「だから——お前が……祐樹が言った言葉」

触れ合った手。その時から頭に流れ出した音楽に身を浸せるように乙女は

「戈を止めると書いて——武の一字」

「ソレの意味を……私なりに探してみる。そうすれば——」

——祐樹が出す答えがわかるだろ？

少しだけ透明感が浮ぶ笑顔で紡いだ言葉は

祐樹の心をざわめかせる。そうして二人の間に心地よい時間が流れ

出し

「いい音だな……祐樹」

触れ合った手から伝わってくる音に乙女は目を閉じて聞き入りながら

「なんていう、曲なんだ？」

無邪気な笑顔を浮べる彼女に

祐樹は――

「……………とりのうた」

微笑みを浮べて返す

暑い日ざし、晴れ渡る青空

一本の飛行機雲を二人は見つめていた

気持ちの整理（後書き）

さて、アンケート結果は………辰子さんに決定しました
メッセージ及びコメントを残してくれた方、ありがとうございます

依存してしまう武士娘と大人な子供（前書き）

消すくらいなら、最初から感想書くなよ…

依存してしまう武士娘と大人な子供

―鉄家

門前に集まるのは五人

大人が三人に子供が二人。位置取りは大人二人と子供一人が……少年の見送り

「祐樹！来年も……来年も絶対、来るんだぞ？！いいな？！絶対だからな！！」

少年を見送る少女――乙女は祐樹の腕を取って強引に指きりを結びながら一生懸命に言い聞かせる

「あ、うん。わ……わかったよ。乙姉……」

あまりの少女の剣幕さにたじろぎながらも少年――祐樹はぎこちなくも笑顔を持って頷く

「世話になったの。一条」

もう一人の大人……老人たる鉄心が一条へと礼を告げ

「いえ……先生。あまり大したことは……」

少し苦味のある苦笑を浮べて一条はそう言いつつ

「…正直、身体が出来上がってきたら———すぐにでも追い越されてしまうでしょう」

瞼を閉じて…微かな時間だが、稽古を務めた自身の記憶を鮮明に思い起こす

「もはや、あの子は———子供とは思えないほどに……腹に一本の刃を、信念を抱えております」

一条の言葉に

「やはり———お前もそう…感じ取ったかの？」

「ええ」

片目を閉じて、眉をピクリと上げて半眼で問う鉄心に迷うことなく一条は答える

「やはり…釈迦堂との一件か…？」

そう洩らすも

———たしかに、アレもあやつの心根に深く影響しておるっが……

鉄心が内心で呟いていると

「しかし———本当に彼は……見た目通りの子供なんでしょうか？」

「ん……………」

「先生も感じ取っておられるでしょう？私が先にお伝えしたとおり
に……………あまりにも」

己の娘とのやりとり。傍から見えていても……………どちらが年上か？十人
に聞いても十人共が同じ答えを返すであろう

いや、それ以前に――

「己が定まっている」――子供らしい部分も見受けられる部分
もありますが……………それでも行動に言動」

「私との受け答え等……………大人と対話している感覚を覚えましたよ
……………」

一条の言葉に鉄心は

「そうじゃの……………しかし、あやつは紛れもなく。子供。佐橋の倅
じゃ――あやつを血を引いておるからかもしれん」

「^{ライブラ}天秤座の金庫番」の血……………ですか？ですが――」

「それ以上……………言っても詮無いことじゃよ。一条。不自然なほど大人
びておるが」

問答の中、視線を子供達。乙女と祐樹の方へと向ける

祐樹が何か言ったのであろう……………乙女は両頬を染めて、声高に叫ぶ
ように言い募るも……………対する祐樹は柳に風のように

ゆったりと受け止め、言葉を紡いで乙女と絆を深めている

「心根は真っ直ぐに育つておる。真っ直ぐすぎるくらいにの……う
ちの孫娘にも見習わせたいぐらいに」

孫を見守るように見つめ

視線を一条へと戻し――

「しかし……あまりにも」

――真っ直ぐすぎるゆえに……

鉄心が洩らした不安の言葉は……誰にも届かなかった

――川神市 多摩川 土手沿い

「ずりいぞ、ゆうき」

キャップの尖らした唇から洩れる不満声から始まる

本日は夏休みが終わり…始業式

ゆえに

「おれらにだまってぼうけんいくなんてよ……」

文句たらたらに祐樹達の先頭に行くキャップ。後ろ向きのまま、後頭部で両手を合わせながらに前へと歩き

「わたしたちにだまっていくのは……よくないよ……」

隣を歩く一子。小さな犬耳に見立った髪を逆立てて……ほんの少し瞳を潤ませながらも抗議し

「ごめん、ごめん……伝言を頼めばよかったよ」

苦笑しつつ頭を掻きながら二人に謝る祐樹

「……」

そんな祐樹を一子とは反対側に位置取りつつ、手を祐樹の手へと伸ばそうとしたり……引つ込めたりと不安げな表情で

祐樹の横顔を盗み見している京。揺れる瞳は何を恐れているのか？

「——大丈夫だよ……椎名さん」

優しく、癒す様に、惜しめない慈愛の眼差しを持って——祐樹は京へと声を掛ける

揺れ動く京の姿を視界に入れずとも……隣に立つ祐樹には痛いほど

にわかった

その揺れる瞳の感情を——佐橋祐樹は知っている。かつては…

——ゆかりに会う前の……俺と同じか…

かつては、己が宿していた瞳の色合い。村上ゆかりに出会う前の己と同じ姿。

救ってもらった……救ってもらえたから——

——今も俺は……生きているんだ

京の揺れる瞳越しに幻視する。だから、祐樹は、かつて…己が救ってもらったように

「大丈夫。俺は…君の傍に居るよ」

——あたしがあんたのそばにいる!!

「だから——泣かないで、一人じゃないよ」

——だから…メソメソなくんじやないわよ!!

その言葉があつたからこそ佐橋祐樹という人間は形作られていった。普段の態度からは決して洩らさない

言葉では収まらない。深い、とても深い《を。

だからこそ、少年は——青年は己の《を悟った時、託す
であろう

己を救ってくれた女性だからこそ…

それは”何処かの物語”今、ここで語るべきではない…物語

話が逸れてしまった

ゆえに…京は——

「うつ…くつ…うああああつああああ！…！」

泣き出してしまふ

「おおっ？！ゆ…ゆうき、なかしたのか？！？！」

突然の京の号泣にビックリして眼を白黒させるキャップ

「うつ…あつあああ！…！」

「わ、わんこまでもかよ？！」

京と同じく隣に居て、祐樹の姿と言葉。京の恐怖する心

…得てしまったからこそ、手放したくなくて、でも手を伸ばすことも恐くて

学校に行けば…また孤立してしまうかもしれない恐怖。夏休みの間に己の傍から離れてしまっていた祐樹だからこそ…そう思ってしまった

だからこそ、真心が籠った言葉に泣き出した京。心優しく、泣き虫な一子は…子供特有の強い感受性も相俟って

「うあああああ…！！！！」

「あ…わんこまで泣き出して…」

泣いてしまった彼女達を幼いゆえにあまり彼女達と

体格が変わらないその小さな身体を精一杯広げて…祐樹は抱きしめる。その背をあやしなから

「みやことわんこだけ、ずるいぞ！！おれもだきつく！！」

「どわ?!?!お、おい！キャップ?!」

そんな三人に変わらないキャップは祐樹の背へと飛びつく。思わず悲鳴のような言葉を上げてしまう祐樹

——あ…もう…なんでこう

見上げる視界の中にどこまでも続く……少し滲んだ青空

胸元で泣く武士娘に風の少年。こうして育んでいく…絆を

泣いている女の子の前に

こう思うのは不謹慎かもしれないが

——幸せだなんて……思ってしまうんだろう

依存してしまう武士娘と大人な子供（後書き）

なんか、まじ恋らしさがドンドン消えていつてるような……

性を内包する武士娘達（前書き）

うーん…少しはまじ恋らしさが出てるかな？

性を内包する武士娘達

さて……時は、肌を寒さが差す冬の季節

曇り空……とまでは言わないも、若干雲が多めの日曜日の昼下がりに

祐樹は――

「……さむい」

炬燵の中で丸くなる勢いでへばり付いていた。炬燵に……

――なんだって、世界に冬という概念があるんだよ…

世界の摂理に対して悪態をついても状況が変わるわけもなく

ひとり、リビングの炬燵でぬくぬくと寒さを凌いでいる

そう…佐橋祐樹は基本的に寒さに滅法弱い。熱いのと寒いのもどっちが嫌いと言われれば――

――くそ～～……早く春にならないのか…？冬眠したくなる…

即答で寒いの！！というぐらいに弱い

どっかの世界では極寒の地でも着ていた叛逆者のスーツとマントの機能のおかげで

事なきを得ていたも……

「うう……寒い……」

今の少年たる祐樹にはそんな便利な代物はなく、祐樹の中だけの三種の神器に縋って暖を取るしかなかった

——ああ……外出たくない。けど……今日はお師匠様に呼ばれてるんだよな……川神院に

憂鬱な気分そのままに溜息を洩らしながら考えるのは、今日の案件
そつ……ついに、というか……？等々というべきなのか……？

本日は川神院に初の顔出しとなる日

——寒い上に、気が乗らない呼び出し……お師匠様も人が悪いよ……
己の力を誇示することは嫌い。無駄な争いも嫌い。奪う戦いは唾棄すべき

身を守る為の戦いなら仕方なく……けれど、大切な人を守る為なら、
理不尽な戦いに巻き込まれる人を守るなら、いくらでも戦う気概を
持つ少年には

——いくら、顔出しだけで力の件についても伏せてくれるって言う
っても……な

川神院の人達は……釈迦堂を除けば大概、とても親切で優しい人々

その人達自身の人柄に対しては何も思うことはないが

——俺とは真逆というべきか……力を伸ばし、誇る人達だからな……

真つ当に修行している人から見れば……自分という存在がどれだけ理不尽かは理解しているつもりだ

機能によって付加された。天性でも血が生み出した才能でもない力
周りからは天賦の才と呼ばれるも——

——ズルをしているのと……かわらんだよね——

これも…川神院に行くのが憂鬱だと思う原因の一つ
そんなことをウダウダと考えていた祐樹の耳に

チャイムの音が響く

「ああ…もう、そんなじ——って、約束の時間まであと二時間？
誰だろ？」

鳴り響いたチャイムに顔を上げて視界を移そうとした時に見えた時間
間に訝しげになりながらも

玄関へと足を向ける。もう一度、チャイムが鳴った

「はい、はい。今出ますよ……」

炬燵から這い出して半纏を羽織ながら玄関へと向かい……扉を開けた先には

「ゆづき……すき」

「うん。俺も好きだよ。京。でもとりあえず……寒いから中に入つてね」

開口一番。好意を言葉にしながら祐樹へと飛びつく京であった

「……また、もののついでにスルーされた……」

ダッフルコートに祐樹からのクリスマスプレゼントたるお気に入り空色の毛糸の帽子。両サイドから三つ編み状にして先が団子になっている飾り糸が付いた

その帽子の飾り糸を揺らしながら抱きついた京は……頬を少し膨らませながらボヤク

「京」

「！なに？ゆづき」

不服そうな表情を一転させて……瞳を一瞬の内に輝かせ――

「コート冷たい……離れて……」

「うかれたあたしが……しょーもない」

―ることなく糸目になりながら嘆息を洩らす京

そんな京に対して

「玄関寒いから…話は炬燵で」

ひどー！

「どんだけ…さむいのダメなの…？ ゆうき」

三白眼になりそうな勢いの京だが… やっぱし

「おじゃまします」

「いらつしゃい」

京らしく祐樹の都合を優先して… 挨拶しながら上がる

二人がリビングへと入り

「コート掛けるよ」

「ん」

祐樹の言に京は着ていたダッフルコートを祐樹に預け、祐樹はリビング横にある小部屋の中の上着掛けにかけ

「京は紅茶がいい？ カフェオレ？ お茶？」

「ゆうきとおんなじの」

「ん。わかった…さっき作ったのが残ってるし…京、砂糖は？」

「いっこで」

「ん」

キッチンに入った二人はそんなやりとりを交わしながらポットに残っているカラメルティーを温め直し

カップに角砂糖を――

「いつもおもうんだけど…」

「ん？何、京？」

「さとう…いれすぎだともう」

ほんの少しだけ口元を引く付かせながら京は

己のカップに三個も角砂糖を投入する祐樹へと問うも

「…辛党の京にはそう思うかもしれないけど…普通だよ？」

カラメルティーであろうが…ダーズリン等のストレートティーであろうが

「いや、いれすぎ…」

原作の十点グッド札と対なす。零点バッド札を何処からともなく取

り出して

祐樹へと突き出す京

「そうかな？……しかし、いつも思っただけどさ」

そんな京に不思議顔で問い返しつつも祐樹は普段から気になる物体へと視線を移し

「その札…どこから出してるんだ？」

「しりたい…？」

その問いかけに目元を引き締めて…瞳を怪しく輝かせながら京は流し目で祐樹へと問い

「あ…いや…」

第六感がエマージェンシー――

「いいよ。ゆうきなら……」 地文くらい書かせ切らせてくれ！

そう言って京は己の上着を捲ろうとしたすと

「出来たてを振舞ってあげたかったんだけど……母さん今居ないから…」

冷や汗流しつつも、無駄に爽やかかつ強引に話題を変える

「……………ちえ」

小さく可愛らしく舌打ちをする京

今は上着に手を掛けたが…これが後に、いきなりスカート。いやさ、
〇〇〇の部分へと繋げる

電波系工口幼馴染へと変貌していくとは……この時の祐樹には知る
術もなく

「京、京」

「なに？ ゆうき」

「なんで…当たり前のように俺の御座の上に座ってるの……？」

カップを持って二人して炬燵へと向かい

いの一番で炬燵に身体を潜らせた祐樹に続いて京は

そうするのが世界の摂理のように。それが当たり前だと言うように。
祐樹の御座の上に座った

「？」

「え？ 何その、何言ってるのよ的な顔？」

「ナニ——」

「はい、ストップ。小学三年生が言っているいい言葉じゃないから——！」

「しょーもない……。ゆうき、さむがりだから……わたしがひつついてたら」

モゾモゾと体勢が悪いのか御座の上で京は身動きしながら

「こたつ＋わたしであつたかくなるとおもつ」

「……………雪山じゃないんだけど……」

ほんの少しだけ、ジト目で京の顔を覗き込むと

「……………ガリガリのあたしじゃ……」

その瞳から逃れるように京は前へと向きつつ

祐樹の視線からでは頭を垂れ、縦線を背負い込んだかのようなくらしい雰囲気をもし出す

――と

「……そんなことないよ、京………気を使ってくれ………ありがとう」

そんな京の様子に……聞かせてもらった家庭環境。生い立ち等が脳裏を過ぎり

京のお腹の上に手を合わせながら、その小さなうなじへと顔を埋める

「うみゆ………ゆうき」

変な返答が入るも祐樹の名を呼ぶ京の表情は――獲物が釣れ

たとくそ笑みながらグッド札を出す。京…！恐ろしい子！

となるはずなのだが――

「ん…ゆづき」

結局、京にとってなんだかんだと知恵を回して状況を作りあげた動機は

――すきだよ…ゆづき

大切な人との体温を交わすスキップを取りたいだけなのだから――

「ゆづき、あたし…やせっぽっち、なおすよ」

触れている京の身体に力が入ったのがわかった

「ん？……直すとか、そんなことはいいんだよ。京」

「……」

うなじから顔を上げて祐樹が囁くように呟く

「京は京。どんな姿でも…俺達――」

――風間ファミリィ……家族だろ？

囁きを聞きながら、コクツと首を縦に振る京ではあるが

内心では…

——それでも……わたしはゆづきにすきになってもらいたいから

一途に……”仁”を持つ武士娘は——

——がんばる

齡9歳の考えではない。普通なら……

それほどに………椎名京という少女は——

愛に飢えていた

「……おいしい」

「そっか、よかった……」

そうして、二人は鉄心の呼び出しの時間までお互いの体温を感じ取っていた……

——川上院 門前

「はぁ……寒い」

ダウンを着込み、首元にアラン模様のマフラーを巻き…分厚い手袋をつけた完全防寒装備でありながらも

「ざむい……中に早く入れてもらおう」

寒い寒いと洩らしつつ身体を震わせる祐樹は

雷門に似た門を潜り抜けていくと

セイ！セイ！セイ！

修行僧達の盛大な掛け声が中庭兼稽古場と化している場所から聞こえてき

「おオ！祐樹、着たんだネ」

稽古をつけていたルー・イー師範代が声を掛けてくる

「こんにちはルー師範代」

「こんにちは八、総代なら部屋の中に居るヨ。……形打ち１０００本！」

「「「「「雄！！」「」「」「」」」」

「案内するヨ。祐樹」

「ありがとうございます。ルー師範代」

案内を買って出てくれたルーに祐樹は頭を下げて

「畏まることはないヨ……それにしても、祐樹がウチに来るとは……
思わなかったネ」

祐樹の態度に朗らかに笑いながらも不思議そうにルーが問いかけると

「……お師匠様の差し金です……」

溜息を洩らしながら祐樹は暗雲立ちこめる顔色で答え

「はハ！なら……祐樹に百代を紹介するつもりだネ」

祐樹の答えに軽く笑い声を上げてルーは一人納得する

「百代？……誰かに俺を紹介する為に――ですか？」

「だろうネ。祐樹の一つ上の総代のお孫さんだヨ」

そんなやりとりを交わしながら、二人は日本家屋特有の茶黒く変色した木板の廊下を歩き

一枚の彰子に隔たれ部屋の前へと辿り着き

「総代……祐樹が訪ねてきました」

「うむ。中に入れてくれるかの？」

彰子越しに返ってきた言葉に正座をしてルーはゆっくりと彰子を開けると

「待っておったぞ…祐樹」

好々爺の表情を浮べた鉄心と

「爺！会わせたいという奴は……こいつか？」

こちらを値踏みするように視線を細めて訝しげに見つめてくる

黒髪短髪を持ち、腕を組んで仁王立ちの――

「こりゃ！モモ！何度言うたら、言葉遣いを改める！」

”誠”貫く武士娘にして

「……………爺が直接、会わせたいと言うから……強い奴だと思ったのだ
が……」

嘆息を洩らす……………バトルマニア戦闘狂という名の性を持つ少女

後の武道四天王の一人にして四天王最強

「はぁ……………お前、名前は？」

性を内包する武士娘達（後書き）

百代登場。あ、題名の性はサガって読みますからね

“誠” 一文字の武士娘（前書き）

気がついたら…会社から帰ってパソコンの前に座って

ストーリーエディッタ開いて書いていたwww

習慣と言うのは恐ろしい……（苦笑）

後、百代の台詞…漢字に直します。ひらがなだと…どうしても臨場感が出ない…

“誠”——文字の武士娘

— 川神院

黒い短髪。釣り眼の赤みの強い眼。^{まなこ}不敵な笑み

まだ膨らみの小さい胸の前で組んだ両腕。川神百代が…今はまだ、若干勝っている背丈で祐樹を見下ろすように見つめてくる

両者の第一印象は——

——…… やっぱ、なよつちいな〜…

——…… なんとか…… 気の強そうな子だな…

百代は落胆の溜息を胸中で吐きながら、祐樹は苦笑を洩らしながら… 正反対の感想を抱く

「で？名前は？」

白けた瞳で嘆息を洩らしながら百代が祐樹へと名を問い

「祐樹。佐橋祐樹って言います」

丁寧に返す祐樹。そんな二人のやり取りを見やっていた鉄心は

「モモ。祐樹はお前の一つ下の学年の子じゃ…… 面倒を見てやって

くれ」

百代に言い含めるように告げると

「ええ……？……しゃあない……」

間髪いれずに百代は不満の呻き声をあげるも鉄心の様相に洩々……納得する

「釈迦堂さんと稽古する予定だったのに……」

自身にしか聞こえない小さな声で、ぶつくさ言いながら部屋を出ていく百代

「祐樹や」

そんな百代がこちらへと意識を向けていないのを確認した鉄心はこちらも小声で祐樹に呼びかける

「はい。お師匠様」

「……見ての通り、氣が大きく揺れ泳いでおるじゃろう？」

困ったような、心苦しいという面持ちで祐樹へと渋い声を掛ける鉄心へと

「……そうですね……。どこことなく、欲求不満を常に感じているような……現状に苛立っている感じなのは——」

祐樹も感じた印象と氣の揺らめきからそう答えた

「……………モモには建前上。お前の面倒を頼んだがの…」

ひとつ息を吐いて

「才能が突出し過ぎておると嘆けばよいのか……………わしの血を色濃く
継いでくれた事を喜べばいいのか…」

途方にくれたような…深い溜息も吐いて

「力が見せる表層に意識が向かいすぎておる部分が強いのだよ…」
そうして祐樹へと視線を戻して

「ゆえに——あの子……………」

続けようとした言葉を……………飲み込む

「爺ごときが口を出すべき——」

実際に20以上は人生経験を積んできた祐樹には

鉄心が言おうとした言葉も……………洩らす独白も理解できる

ゆえに——

「釈迦堂さんが……………絡んできているなら無視できませんね」

言葉を選ぶ。遠まわしに告げる。

子供と思えない……気遣い

「俺が……一緒に居てもいいですか？お師匠様」

「——すまんの……祐樹」

黒い短髪を揺らし、百代が開け放たれている彰子から顔を出して

「おい！来いよ！！」

釣り眼をさらにキツクして祐樹へと声を放つ百代

「あ……はい！今、行きますね！」

そう言つて祐樹は鉄心へと礼をして――

「行くぞ」

促して……さつさと歩き去る百代の後を走って追いかける祐樹

その二人の姿が消え、部屋に残る鉄心は――

「はあ……情けないもんじゃの……」

老いても最強の武神は肩を竦めて再度、溜息を洩らした

―川神院

廊下を子供が二人歩く

前を女の子が。後ろに男の子が追うように歩いていく

いわずもなが、先頭は百代で後方が祐樹

まさしく”このゲーム”の一側面を切り取った場面。女が男を引っ張るという状況

「どこに行くんですか…？」

目的地を聞いてない祐樹は、百代へと疑問の声を上げると

「ん…？あゝゝゝ釈迦堂さんと稽古だ」

そう言つて、背後の祐樹へと振り返つて

「お前も……川神院に顔を出すぐらいなんだから、稽古はするんだろ？」

「……………まあ、一般程度には」

苦い笑みを浮かべながら祐樹は茶を濁すように告げ

「ま。あたしと釈迦堂さんの邪魔しなければ……一緒に稽古してもいいぞ？」

不敵な笑み。厄介払いを若干含んだ言葉に

「……………わかりました。見学させてもらいますね」

百代の旺盛な戦いへの本能がほんの少しだけ、垣間見える声音に祐樹はそう返す

「なら、いい」

そう言つて…興味を失くしたかのように

祐樹への配慮のない歩みを再開する。そんな百代の態度に

——はあゝ……………第一印象は最悪だな。俺なんかしたか……………？

溜息を微かに洩らして、内心で呟く

祐樹自体は何もしていないが……………鉄心が含みを持たせた言い方をしたのが為に

百代は期待したのだ

——同じ学校の奴?!?!もしかして……………!!

あの日……………いつものように……………平凡な学校の一日が終わり

帰り支度をしていた百代が感じ取った——莫大な氣

期待したのだ。己の力を真つ向から受け止め、返してくれる同じ子供がやってくるのだと

だが――

蓋を開けてみれば

――あゝあゝ……爺に期待した私が馬鹿だったか…

”ほんの微かの氣を持つ”一つ下の男

期待していた分……酷く凹む結果となり

無意識の内に冷たく接する。自分を曲げることを嫌う……”誠”の武士娘

今だ四年生という子供ゆえに――己の欲望にも元来素直な性格ゆえに――

そうした態度を取ってしまう

少しだけギスギスとした二人の空気を

「おう！百代……こつちだ」

修行僧達が表の修練場兼中庭で鍛錬を行っている場所とは反対の

「あ……！釈迦堂さん……！」

百代が掛けられた声に嬉しそうな声音で返しながら駆け出す

裏庭に居た――目つきの悪く、人相も不敵にして人をくつたよう

な人相。

飢狼のようなドス黒い氣を纏った男…… 釈迦堂刑部は――

「おゝおゝ……… なんだよ、祐樹。来てたのかよ？」

心底驚いたという表情と、愉快だと…… 人をおちよくるような表情が混在し

禍々しい闘争本能を借りたてんとする…… 武人の獰猛な笑顔で祐樹へと声を掛けてきた

「…………… どうも。釈迦堂さん」

無然としてしまう。”あの経緯”があつた故に…… どうしても祐樹は知らず知らずに無然な態度を取ってしまう

だから――

「おい！――！」

百代の怒りを買ってしまいが……… それを止めたのは

「釈迦堂さ――」「どいてろ、百代」

獰猛な笑みを浮べたまま…… 有無を言わさぬ迫力を持った声音で百代を下げると

「どうだ……？ まだ、あんな甘っちょろいこと言ってるのか？」

「……………あなたがどう…思おうとも、俺は俺の目指す先を変える事は——しない」

抑揚のない声音。それでも——

——な……………なんだ、こいつ？……………さつきと全然…

側に居る百代の祐樹の印象を変える程の力を持った言葉

「はっ……………そうかい」

ぶらぶらと所在なげなく揺れていた片腕をズボンのポケットに突っ込みながら

「戈を止めると書いて——武の一字」

癪に障る声音。ちゃんちゃら……………可笑しいと。せせら笑うような声音

「違うな……………。違うよな……………。お前だって分かってんだろ……………？」

どうしようもない程に滑稽な……………真実、”武”と言う概念を表すには——

「お前の言葉を借りりゃ——」

ニタツとした笑み

「戈にて止まると書いて——武の一字」

ケタケタと笑い声を上げながらも——その言葉はこの小さな裏庭

に浸透する

「暴力だ。殺戮だ。略奪だ。——武はな」

もはや、場に居る百代にはついていけない

齡10歳の娘に理解できる話ではない。が——それでも、百代は二人の男を見据え続ける

「ただ……渴きを癒す為の力なんだよ」

表情は変わらない。今だ……癩の触る笑みのまま

しかし——眼光は……射殺さんとする程の強烈な殺意

百代に気づかれない程に細く、圧縮した殺気を己の眼まなこから

祐樹の眼まなこへと叩きつける

「俺の拳を見るよ?」

無骨な男の拳。殴りつけすぎて……指の第一関節にある骨が突出したように、硬く、分厚く、盛り上がり……強靱な肉が其れを覆う

「俺の氣を見るよ?」

どす黒い……刃のような鋭利さを持つ禍々しい氣。内なる欲望を撒き散らせといわんばかりに——

「この拳は——強者を決る為で……。この氣は——強者を引き裂

く為だよ」

愉快だと言わんばかりの声音と表情で

「わかつたろ？これが——唯一の真実ってやつだよ」

宣言するように告げ終わり——

”風が音を置き去りにした”

そう表現するのが正しいといわんばかりに

百代の前で、百代には信じられない光景が——

祐樹の顔面……一ミリというぐらいの寸止めの正拳突きを

”祐樹は瞬きも、身じろぎもしない”——不動の体勢で立つ

「……はっ、面白くねえ、餓鬼だな……」

興味が失せたのか？釈迦堂はそう吐き捨てて……裏門から出て行く
うと背を向ける

「真実——」

「……あっ？」

「真実。」武”がそれだけを表していても、どうしよもなくそれが
…それだけが事実であつても」

告げる。謳つように告げる。

「俺は——俺の決めた道に行く」

——こいつ…

百代は何を思つたのだろうか？ただ……揺れる瞳の中にある感情は
決して、先とは——

「……はっ！…精々、頑張んな」

背中越しにそう告げ、だるそうに片腕を挙げて手をヒラヒラとさせ
ながら出て行つた

裏庭に静謐が戻る

——……何処まで行つても、相容れない存在……か

消えた背中にそんな思いを抱きながら……疲れたような溜息を洩ら
すと

「おい」

「……どうしました？川神さん？」

百代がこちらへと声を掛けてくる。先と違った声音で

「……見直したぞ」

照れくさいのか？腕を組みなおしながらソッポ向いて…告げる百代

「???」

なんのことだかさっぱりな祐樹

「釈迦堂さんの寸止め——目を閉じないで受けれるのは…すごいからな」

無骨者同士。特に釈迦堂の性格からしたら百代との戯れなどでは何度かやっていたのであろう

「わ…私はまだ……どうしても眼を閉じてしまうからな」

今だ幼く、釈迦堂の黒い氣を纏わせた拳はどうしても…今の百代では臉を閉じてしまう為、そう告げる

「だから——」

高らかに宣言する。赤みを帯びた頬を隠すように

先のやりとりのことなど——子供にはわかりはしない

だが、子供は子供なりに見ていた。百代は見ていた

あの見たこともない釈迦堂の姿。そんな姿に怯えることもしなかった少年

己に今だできないことをやってのける姿

”誠”の一字を好む——川神百代はだからこそ、己の心の命じるままに

「お前を私の弟にしてやる!!」

差し出された手を苦笑を浮べて握る

こうして……風間ファミリーに後の四天王最強の武人

構え構えと甘えてくる。皆のお姉様

川神百代が加わる

“誠” 一文字の武士娘（後書き）

うまく… 釈迦堂と百代が書けたか…？

まじ恋らしさはないが、理不尽な程の力が振るわれるこの世界なら
ではってことで書いている。この壁にぶつかって行くワン子ルート
の為に——欲しい話なので

ってことで予定は未定な作者wの癖に

次回、“泣き虫武士娘はどっちを選ぶ？”

予告なく変更はざらなんでwww

たくさん感想来たけど……返すのが一苦労すぎるwww
嬉しい悲鳴なんですけどね！！！！！！w

泣き虫武士娘はどっちを選ぶ？（前書き）

俺が…予告どおりに書けるなんて…！

休むつもりが…書いていた…どうも、習慣と言う奴は怖い（苦笑）
ボケ～としているのが辛くてどうしてもエディッタ開いてしまっ…
しかし、文才ないし疲れてるからちまちましか書けやしない…（苦笑）

なんだろうな～…

泣き虫武士娘はどっちを選ぶ？

「ところが！ギッチョン！」

「え……？なにとつ——」

「いや、なんか、前回……俺、超シリアスで終わったじゃねえか？」

真面目腐った顔で云々と頷きながら

「でよ？感想に原作知らない人も居るって事でよ——」

「知らんがな。原作やってもらって知ってもら——」

白けきった眼で矢継ぎ早に繰り出すも

「私、髪伸ばすんだ」

「……………唐突だね。京」

10点満点札引っさげて

「いや、なんか……出ないとイケない気がする」

我等が京嬢のご登場——

最後まで言わせてもらえませんか

「噛みフェチ……それは私が祐樹の耳たぶを噛みたいという切なるリビドー」

両の頬を押さえて恍惚な表情。獲物を見るような瞳

「髪フェチ……それは祐樹の性癖。髪の毛が――」

紡がれようとする言葉を釈迦堂相手に突っ込んでいた祐樹は

両手で機械振り披露しながら、一足で稼ぐ。京の下へ。その唇を塞ぐ為に

「はい。ストップ！ここノクターンじゃないから」

「……ちえ……祐樹のイケず」

不満たらたらかな視線を祐樹へと投げかける京に

「なあ……京……突っ込んじゃ負けな気がするけど……さっきから――」

「うん、ワザとだよ」

クククという含み笑いを洩らす京であった……

「え？コレで終わらせるの？………しょくもない……」

「俺の出番最初だけかよ？………キムカル井食いに行くわ……」

―多馬川 土手

膝を抱えて蹲る少女が…夕陽を照らし返す川の光に当てられている
生来の赤い髪がさらに赤く照らされて――灼熱ような赤さを催す。
まるで――

今の少女が抱える……激しい気持ちを表しているかのように

「おばーちゃん………！」

涙でクシャクシャ。鼻水でクシャクシャ

顔を歪ませて、悲しみに歪ませて――…一子は泣く

大切な…己を引き取ってくれた人が亡くなったことに

時は、百代が加入してから過ぎ去り――

祐樹達が五年生。百代が六年生の春の季節

幾多の者達が多く of 別れを持って新たなモノを迎える季節

一子も……悲しい別れ――養母を炎に託して天へと見送った――
帰道

そんな一子を見守るように

「よし…よし……ワン子…」

同じように夕陽に顔を焼かれたかのように……いや、感情に焼かれたように

京は一子の背から抱きしめてあやす。瞳を真つ赤に充血させながら

「優しい……いい人だったのにな…」

百代も悲しみに暮れる表情でそんな二人を見守るように見つめる。
瞳が潤んでいた…

「………なんで、いい人ばかり先に逝っちまうんだろうな――」

キャンプから考えられないような、苦渋に満ちた声

火葬場で見た…あの男を見たからゆえにだろう

「そうだな……キャンプ」

その言葉を耳にした祐樹もそう抑揚のない声音で頷く

——瞬きのような幻視する。“この世界”の祐樹には分からない。
幾多の戦乙女達の——

「このままじゃ……」

京が呟く懸念の声音。それは……一子の行き先がないという現実

「火葬場に居た奴等の様子じゃ……子供の居ないところが引き取って
くれて感じだったしな…！」

握った拳を己の掌で打ち鳴らすキャンプ

元々、親戚が少ない人だった……だからこそ、なのだろう

一人身が寂しい故に、一子を引き取ってくれたのだろう。そうして

「おばーちゃん——！」

木霊する。魂の慟哭。一子は膝を抱えたままに

——愛をくれたのだろう。たとえ、己の寂しさを埋める為に…引き取ったとしても

無償の、何の見返りも求めない。慈愛を、愛情を——

「このままじゃ……ワン子が——！」

京が切なる想いを吐露する。その先を言葉を口にすれば…まるで

「おばーちゃんともお別れしたのに……！皆とまでお別れしないといけないなんて——！！！」

叫ぶ。声高に叫ぶ。世界は己を嫌っているのかと…問いたげなままに

「そんなの……いやよおお……」

そんな一子を見るファミリィは、思い出す

《おう、どうだい一子、俺の所くるかい》

告別式だというのに…その遠縁の男は酒臭いしゃつくりをあげながら

《おめえ……随分可愛いし》

下卑た視線で身体を嘗め回すように見つめてくる

純粹で、天真爛漫を体现する無垢な存在たる一子を

《おめーみてーのが来ると…生活が楽しそうだあゝぐへへ》

《家事もやつてもらいてーしなあ》

性と使い勝手のいい道具を見るような腐った眼

《明日ぐらいまでに決めとけよーひっく…》

どうしようもない程の腐った男を――

「あんな……！死んだ魚の目をしているアル中野郎に、俺のファミリーはやりたくねえ……！」

キャップの怒声

「うん……！」

「だな……」

「キャップの言う通りだ……！」

京、百代、祐樹の順でそれに頷く

「俺達が揃えば――」

「何でも出来る……だろ？」

キャップの言葉を引き継ぐように百代が告げる

そうして……

「とりあえず…私に任せてくれ。十中八九、なんとかなる。——と
りあえず、今日は解散だ。一子は…川神院で今日は預かる」

百代の言葉に…京とキャップは頷き

祐樹もそれに頷く。ただ、一つ…己の頭に上ったことをどうやって
成し得るかを考えながら

—自宅 両親の部屋

「で……どうしたって言うんだ？祐樹…」

金色の金属製11弁菊花模様を配し、ある議院よりも一回り大きい
——議院バッジを着けた背広を脱ぎながら

年の頃…四十台の男が、祐樹の父親たる…佐橋是親が問う

なぜ——俺の息子は親に土下座をしているのだという…理解でき
ない現状に対して

「あなた……」

それに、是親の背広を受け取りながらクローゼットへと仕舞った久
子が事情を話そうとするも

「母さん、自分で言うから」

うむを言わさない声音で祐樹は母親へと告げて

「父さん——養子をとって貰いたいんだ！」

土下座したままに、祐樹は張り上げるように声を上げた

額をフローリングに擦りつけながら

「…？どういうことだ……？」

訝しげに問う是親

「実は——」

そつして紡いでいく。一子の顛末、進みかけている破滅の道。包み隠さずに

「事情は理解した——が」

瞑目し、顎を摩りながら

「祐樹……犬、猫を拾うのとは——訳が違うのはわかっているな？」

「ああ」

ひたすらにフローリングに額をこすりつけながらも…しっかりとした声音で即答する息子に微かに笑みを浮かべながら

「なら——お前が言っていることに対することも理解しているか？」

問いかける言葉。息子が……「あの日、天から預かった…血濡れの愛する息子」へと問う

どう返してくるのか？その動向に、それに対して祐樹は

擦り付けていた額を前へと向ける。正座の体勢のまま…圧倒的な体格差のある父親へと

真っ直ぐに——向き合って

「理解している………なんて大口、言えやしない」

そう紡ぎ出す

「人を育てるのどれだけの労力とお金がかかるか…」

理解しているなんて、この矮小な…小さな身体で言えるものではない
養われている。庇護されている身で言える訳がない

「学費だけでも——大学まで行けば2000万は軽く掛かる」

1 銭も稼ぎ出せない子供の身体

学費だけで人間は生きていける訳がない。人は食べ、眠り、欲望を満たしていく

食物を、住処を、欲望を、——心を満たしていかなければいけない

「一体……どれだけの金と……父さんと母さんに苦労かけないといけないか」

是親と久子は絶句する……。聡い子だと思っではいたが——

「わかりはしない」

頭を振りながら紡ぐ

まさか……ここまでとは思わず、祐樹が紡いでいく言葉を啞然と耳に入れていくのみの二人に対して

紡ぐ。心の叫びのように。今の大切な時間を壊したくないゆえに

「だけど……それでも……俺は——」

「もついい……祐樹」

頭を振って正座する祐樹の視線に己を下げ、肩に片手を置きながら

——蛙の子は……蛙と言ったことが

自身の父親がここぞという時に浮べていた瞳

久子を貰い受けに向かった先の養父の瞳

——血の繋がらないというに……“佐橋”の“鹿島”の気概を
抱きしめる。どこかで……無意識の内のどこかで思っていたのだろ
う思いを噛み砕いて

抱きしめる。愛する……“息子”を

「父さん…？」

「明日、家に連れてきなさい。私は……仕事があるから明日は家に
帰ってこれんが」

「……………父さん！」

反射的に抱きついてしまう。かつて……己を抱き上げていただろう。
昔の姿たる父へ

「すまんが、母さん。終わらせればすぐに帰ってくる。それまで色
々と頼むよ」

「ええ……」

——川神院 前

そうして、次の日

「「どうする？ワン子？」」

「はうううう……」

百代と祐樹の言葉に……ワン子は眼を回しながら困惑する

事の顛末は――

「川神院^{ウチ}に來ないか、ワン子」

朗らかに笑いながら百代がそう切り出すと

「ふえ……？」

擬音だけが洩れ出た一子。その顔は驚きに満ちており

「私は、お前を妹のように思ってるし……」

そう紡いでいく

「いつそ、真の……家族になろう」

「お……お姉様……」

「川神一子――となれ、ワン子！」

男らしく……失礼。女らしく……も違うが、様になった言葉を告げる

これが本来の歴史の本流なのだが――

“この世界”の知識を捨ててやってきた祐樹にはこの展開がわかるはずもなく

色々と準備の為に母と奔走していた祐樹は遅れてやってき…そのやりとりの真つ最中に

一子を向かい入れられるゆえに、大切な人を守ることができるという感慨ゆえに、普段の気遣い屋な部分が多^た見える祐樹らしからぬ

「一子！！！」

「ふえ…？」

「俺の家に…来ないか？」

百代が巧く纏めかけていた話に——割って入ってしまった

「」「どうする……一子？」「」

「ふええっええ……」

さて、泣き虫武士娘は——どっちを選ぶ？

泣き虫武士娘はどっちを選ぶ？（後書き）

最初…イランかな。こういうノリというギャグといかネタとかは…
向いてないのかな？どうも、普段の書き方だと違和感しか…
となると、まじ恋自体が書けないということに…どうしょ？
後半部分、ちょっと重いからということを書いてみたが…作者が重
い目にあう羽目になってしまった…

“勇”の武士娘と“仁”の武士娘と——“護”の青年

―川神院 前

「あゝ……ワン子の奴、テンパってるよ……」

傍から見た状況を洩らすキャップ

百代と祐樹。どちらも大切な人から家族になろうと言う誘いに

どうしようもないほどに――

「あうう……」

眼をクルクルと回し、小さな犬耳を生やしながら一子は迷う中――

「わ……ワン子。う……」

京が……

「う？どうしたよ？京？」

「羨ましすぎる……！祐樹と――祐樹と一つ屋根の下なんて！」

血の涙が出んとするほどに目を見開く京

「……だめだ、こりゃ」

糸目のキャップ。そんなキャップに目もくれずに京は…

——ううう……ワン子、羨ましすぎる

身をフルフルと震わせながら、両者を見比べる一子の様子を見つめる

——しかも……！ワン子のあの表情……！

左を見れば…

「ワン子、川神院^{ウチ}に来るよな？！」

眩しいほどに笑顔の百代

「ワン子……行きたい方を選べばいい」

やんわりと一子に自主性を尊重する祐樹

そんな、二人の様子を伺いながら一子は

——お姉様…

左の百代へと視線を向けると……妹のような庇護と愛の混ざった眼差し

——祐樹…

右を向き祐樹へと視線を向けると……こちらも妹に対しての庇護と”それに準じた愛”の眼差し

一子は——決断する

「わたし……わたしは……お姉様のところに行く！」

叫ぶように一子は宣言し

「おお！……そっか、そっか……今日から！ワン子は私の妹——川神一子だな！」

うむつむと頷きながらも満面の笑みが零れんほどの輝きを放ちながら

一子を抱き寄せる百代

「へえ……ワン子の奴、祐樹ん所じゃねえのか……俺は絶対、祐樹のところだと思ったんだけどな……」

トレードマークのバンダナを弄りながら洩らすキャップ

「なら！俺が祐樹んところに行くぜ……！」

「いや、お前……家あるから」

いつもながらのキャップからの発言に内心……少しだけ落ち込みながらも、普段通りに返す祐樹

そんな祐樹とキャップのやりとりを一目見て、ホッと溜息を小さく吐きながらも

「そうだね……」

小さく頷く京——しかし、その視線は一子の表情へと……揺れる
小さな心の様相を的確に掴んでいた

——祐樹だもんね……しょうがないか

そんな溜息を胸中で吐きながらも

——けど……負けないよ。ワン子。祐樹の嫁に私はなる！……！

そう彼女だけだ…京だけが

——ううう……

祐樹とキャップのじゃれ合いを百代に抱きしめられながら

その小さな手が己の心の臓を覆い隠すように、ギュッと押し付け。
なんともいえない表情を

——よくわからないけど……なんだろうこれ…？

自身にも理解できない感情を持て余す一子の様子を

ただ、一人…京だけが掴んでいた

さらに、月日は流れていく

四年生の夏の時には……訪ねられなかったゆえ

五年生の夏は赴いた鉄家でのひと悶着は機会があれば――

と言つても

「祐樹！―お前なんで、去年来なかった？―お姉ちゃんは――」

小学生時代とはまた違った……空色のサマードレス、気合の入った物を纏つて

不機嫌そのものにて出迎える乙女。他にも――

「祐樹！どうだ？似合うか？」

中学で着ている夏服のセーラーを纏つて祐樹へと感想をせびる事や

「祐樹！夏祭り行こう！夏祭り！」

サマードレスとはまた違った色合い、真紅をベースにした浴衣でグイグイ引っ張つていく乙女

「祐樹！祐樹？祐樹！―」

と……ことあるごとに構つてくる乙女にやんわりと付き合つていく祐樹というのが殆どであった

そして……一時の別れが訪れる

―多馬川 土手沿い

「そうか…京」

百代が複雑な様相で答える

「離婚――か…」

それに祐樹も相槌をする。心中はまた別件のことも考えながら

「京も一緒に……だよな？」

一子が京の伏せ気味な顔を覗き込みながら、涙目で問いかけ

「真剣^{まじ}か…？」

常とない真剣な表情を浮べて問いかけるキャップ

そう、本編と同じように

百代が中学一年生。祐樹達が小学六年生。

新年が明けて、一月の終わり頃……もう少しすれば卒業式を迎えて
小学生で一番長い春休みが始まるような時期

「うん……」

やるせない表情を浮べた京は、微かに首を振って……心底、どうしようもないという風に声を洩らした

ネタバレともなるが、そもこの作品自体がネタバレの塊だが――

京の母はどうしようもない程の“性”^{サガ}を抱えていた

それが――

「父さんも……とうとう、我慢できないみたい。あのババアの浮気に」

京がそう告げる。そう――どうしようもない程に京の母は……“男に溺れる”。病的なまでに

「ああ――まあ、仕方ないよな……親父さんも良く頑張った方じゃないのか……？」

そうやって返す祐樹。まったくの余談だが――

「あら……坊や。いい目ね……その年齢^{とし}で男の目って感じ……」

一度だけ、京の母と一対一で遭遇したことがある祐樹に対して……京の母はそう告げて

「はあ……？」

そんな彼女に祐樹は戸惑いの声を上げ

「ふふ……そうね。坊やが——15、6ぐらいになったら相手してあげるわ」

さすがは血を分けた肉親と言つべきか？京が成長した姿を連想させる姿を持つ女性

酔いそうな程に色香を漂わせて、祐樹へと流し目を送る

シヨタだ。シヨタが生まれた。彼女の名誉の為に書いておく……本編はモブだからわかりません

——閑話休題

と……そんなやりとりがあつたのを思い出しながら祐樹は続ける

「それで……山梨に行くのか？」

「うん……あの女の性で椎名家の風評はボロボロ。その性で、父さん……ここに居ることが苦痛すぎるって」

「そうか………たしかに、淫売婦が居る家って風評が強いからな……」

百代が溜息を洩らしながら呟く

「インバイフってなんだ？」

純真無垢な二人。キャップと一子がそう疑問府を頭の上に三つほど

乗っけながら問うと

「ん。キャンプとワン子は知らなくていい単語」

そう祐樹は告げてやると

「祐樹がそう言うってことなら、良くないことね!!」

憤慨しながらも祐樹の言葉に…少し成長し大きくなった犬耳をピンと立てて頷く一子

「ぬう！おのれ、祐樹が知ってるのに！ファミリーのリーダーたる俺が知らないのは納得できん～～！！！」

まったく違う所で憤慨するキャンプ。それに祐樹が対応する傍らで

「……別れることになるのか」

なんともいえない表情。百代にはわかりえないことであつたが…

そこに浮ぶ表情を見れば…間違いなく鉄心達はそう感じ入ってくれる心を喜ぶ程にのモノを浮べて

「うん。でも——」

頷くも即座に翻すように

「私…週末にはこっちに来る。新聞配達とかなんでもやって。お金を貯めて」

どんな努力も厭わない。汚濁をすすつてでも、恥を晒したとしても

京は宣言する。——この大切な居場所に居る。大切な人達に告げる

「会いに来る。金曜日の夜にこっちにくれば…週末は一緒に居れるから」

決意の表情を持って……百代は

「そうか…。なら、泊まる場所は川神院で用意する。何、爺がゴネてもゴリ押ししてやる」

好戦的にして、頼もしい表情を浮べる百代

「！！モモ先輩」

「京！あたしだって、じいちゃんに頼み込むわよ！！」

人差し指を立てて京へと、ふふうんという擬音が似合うドヤ顔を晒して

「ワン子…！ありがとう」

素直に二人にお礼を言う京。だが――

「でも――」

キラリと瞳を怪しく輝かせて

「大丈夫。祐樹の床^{とこ}でお世話になるから」

「おお……さすがは、京。転んでも只では起きんな……」

京の商魂逞しいといふべきか？ 凶太いといふべきかの行動に賞賛する百代

「何言ってんだ？祐樹？」

不思議そうな表情を浮べるキャップが祐樹へと質問するも

静寂が一瞬……あたりを包み込み

「あゝ……京。悪い……」

「えっ……？」

罰の悪そうに祐樹は小さく答えたのに対して、京は驚きを貼り付けて

「俺も…川神を離れることになってさ…」

罰の悪そうに、頭を書きながら……意気消沈した声音で答える祐樹に

[illegible]

ファミリー全員が驚愕の叫びを上げる

特にでかかったのは――

「ゆゆゆゆうきどこいくの？なににいくの？よめさんもらいにいくの？つか、わたしがゆうきのよめ！――！」

京である。わけのわからん叫びを最後にワンプレスで言い切り

「ゆ、祐樹も？！」「おい！祐樹どついうことだよ？」

先ほど、京に対してしたように身を乗り出して問い詰めてくる一子とキャップ

そして――

「おい……弟。誰の許可で私の元から離れる気だ……？」

歪な眼光を瞳に爛々と照らし出す百代

「（京はスルー）ワン子にキャップは落ち着け！百姉^{ももねえ}さんは怖い！――」

「あれか？お前が、私が言った姉さんと呼べと言ったのを邪魔した女の所に行くつもりか？」

「女の所？！断固、阻止する……！！」

百代と京が不穏な空気を纏って襲い掛かりそうになるのを阻止する為

「違う！違う！――父さん達が海外赴任するからだ」

そう言つて事の顛末を告げる

元々、祐樹の父はその通り名“天秤座の金庫番”通りに政務に対しては厳格な行動で有名であり

此度の選挙によつて選ばれた…内閣とはソリが合わないということ
で、色々と先方の工作により

予算委員会から外され、加納太郎という男と共に外交官。祐樹の
世界で就いていた職務へと鞍替えされた

詳しい政界の事情等…幾つになつたとしても、直接な関わりを持た
ない祐樹にわかるはずもない

ゆえに、結果だけを見れば今回の異動という形の事実しかわからな
い。ゆえに事実の通りに

「さすがに…今の時期から海外に行くのは——アレだろうからつ
て、父さんが手を回してくれたんだけど…」

この地に……根強い個人的な人脈を持っていなかった父。是親は“
この世界”の幼いときから友に息子を頼むことにし

「加賀に居る…父さんの友達で、黨つて所に行くことになつたんだ
…百姉さんなら知つてると思ふんだけど…」

苦笑しながらそう告げる祐樹。それに対して百代は小さく頷き

「お前の言い方からしたら……劍聖・黨十一段のところか？」

「そう。そこに…三年間お世話になるってことに」

「三年……？」

涙目の一子がそう問うと

「そう、三年。三年もすれば——高校生。そうすれば、ここで一人暮らしをしてもいいってさ…」

実家はそのままだし。三年間、黛さんそこでしっかりとやってればね。といいながら

「家の管理は母さんの幼馴染でもある。キャップのお母さんに頼んでいるし」

「え？母ちゃん？まじかよ？……めんどくさがりの母ちゃんが引き受けたのかよ？」

人生で初めて……心底、驚いたという表情を浮べるキャップを華麗にスルーしながら

「俺を無視するなよ！キャップだぞ！みんなのリーダーなんだぞ！」

唇尖らせてなお、喚くキャップを意図的に全員で無視して

「なんだよ…ちくしょおおっう…」

涙目なキャップは母性本能を掻るが——描写し続けると切りがないので次

「ってことで……俺も京と同じように金を貯めて、なるべくこつちに来るよ。京ほどは無理だけどさ……」

そう苦笑しつつ言いながら、祐樹は周りを見渡し告げた

こうして、“仁”の武士娘と“護”の青年は

この地を離れ…週末に皆が集うようになる。

後の金曜集会という集まりとなる原型の習慣が始まる

そして、“護”の青年は…新たな出会いを果たす

―加賀 黨家

「初めまして……由紀江ちゃん」

「あううう……」

“礼”を持つ武士娘

その腕前によつて地元の者達から畏怖と畏敬の念を持つて接される
故に――

友達を欲する――

――絆を欲する武士娘と出会う

ということだ…川神から離れて加賀へ

次回から中学編。予定変更で額に×の長女と至高のシンデレレはこの編で…

フカヒレ？なにそれおいしいの？

あと、アンケートを

今、現在のプロットでは……クリスティアーネのファミリー参加はなし

…まあ、そこんとこでどうだろうと？

参加なしでいくか。参加するか。…ちよつと最近、迷っているのをご意見お待ちしております。期日は——今週の日曜日までとさせていただきます。

前回、アンケートの結果で決まった辰子は高校一年時に。

“礼”の武士娘（前書き）

日常パートがなかなか……

下準備の為に書いてる部分が大きいしな…

“礼”の武士娘

”加賀”

その昔、今だ…侍が居た時代―

加賀100万石といわれた程の肥沃な土地

大名中、最大の規模を誇った前田家

槍の又左衛門、槍の又左と呼ばれた真の兵^{つわもの}たる前田利家が起こした藩があつた場所

現代においては――

手に持っていた荷物を地に下ろす

足元にあるのは大型のボストンバッグ

そして、肩に担ぐのように背丈並みに大きい黒い生地で作られた特異な形状のカバンを提げて

「お久しぶり…と言えはよろしいでしょうか…？大成さん」

相対する二人の人物の片割れ

「はは…まあ…無理もない。なんせ君が物心つく前に一度会ったき

りだしな」

朗らかに笑う。父親という役目を持つ男。世に響く名——剣聖・黛大成

そして——

「はうう……」

御歳^{おんとし}10歳。祐樹の一つ下たる”礼”の武士娘——黛由紀江

恥ずかしがり屋な少女は父親たる大成の背に体を隠しながらも……顔を覗かせて祐樹を見つめており

「君が……初めまして。由紀江ちゃん……でいいかな？俺は佐橋。佐橋祐樹って言います。よろしくね……」

ふんわりとした柔らかな微笑みを持って由紀江へと挨拶する

「あうあうあうあう」

うつとおしいと言える程に長く伸びた髪。特に前髪は……現実世界たる祐樹の髪型と同じほど目を覆い隠している為

直接的には由紀江には微笑みが届かないものの、口元に浮べた優しい表情と纏う雰囲気ゆえに

由紀江は声にならない声を呻くしかできなく

「……」由紀江。前に出てご挨拶なさい。これから一緒に暮らす

ことになるのだから」

こちら、やりわりとした声音で背後に隠れてしまっている由紀江を前へと押し出し

「あうあう………は、はじめ、まじて――」

目を回しながらも何度か深呼吸して、挨拶し始めるも……舌をかん
でしまい

「つう――」

涙目になって言葉を閉ざしてしまう由紀江

「はい。初めまして。これからよろしくね……由紀江ちゃん」

そんな由紀江を微笑ましく見つめながら、少しばかりある背丈の差を縮める為に屈みながら

祐樹は手を差し出す

「……」

その行動に口を押さえていた由紀江は驚き

「ん？………ああ、ごめんね」

その態度から勘違いして祐樹は苦笑しながら手を引っ込めようとす
るも

「い…いえ！だだ、大丈夫です！！むしろ、お願いします！！」

そんな祐樹の手を引つ込めるといふ行動を止めんと噛んだ舌等、気にもしない程に叫ぶ

「あっ?!…じゃあ、よろしくね」

由紀江の態度に驚きを顔に浮べる…数瞬後には穏やかな笑みを浮かべて手を差し出すと

「おおおおお、お願いします!!!佐橋さん!」

両手で差し出された片手を掴んで上下にブンブンと振る由紀江

そんな二人を横から見守っていた大成が口を開き

「では…家の中に入ろうか？祐樹君も、長旅で疲れているだろうしな」

そう言つて、先頭に立ち家の中へと向かう大成を追う形で二人も続く

手を繋ぎながら……そんな二人の第一印象は――

――佐橋祐樹さん……うっとおしくないのかな？前髪？後ろ髪等も…男の人では、かなり伸ばされていますが…

少し見上げる形となる祐樹の姿。前髪は目元を覆い、後ろ髪は肩より下まで伸ばされた黒髪を見つめながら

——でも…お優しいそうな方でよかった…

ホッと胸中で安著の息を洩らす由紀江と

——うーん……極度な恥ずかしがり屋さん。ってとこかな？

伸ばした始めたように見える、肩口まで伸びているサラサラと摩く黒髪を視界に入れながら

気恥ずかしそうにしながらも、自分から離してくることのない掌を一瞥して

——見た感じの性格だと…あんまし親しい友達とか少ないのか…
…？

そんな取り留めもないことを考える祐樹。その考えがさらに奥深く当たっているという事実気づくのは

三週間と言った時が経った時であった…

さて、件の三週間。

新たな学生生活、“二度目”の中学生生活と誰も知り合いの居ない学生生活が幕を開ける

一週間前たる本日――

黨家の道場に、朝一から三人は座禅を組んで……道場のど真ん中で各人を頂点に見立てたトライアングル

三角形の形で相対していた。瞑想しながら

さて、本来…瞑想とは自己の内面へと己自身を問いかける修練であるのだが――

――はて、さて……どうしたものやら？

自身の左隣の一角を成す由紀江のことを思い描いてしまう祐樹

この二週間。祐樹が来てからの由紀江は基本的に己の後ろをチョコチョコとついてくるというのが全て

朝方、ランニングに出ると…後方にて一定の距離を取りながら付いて来る由紀江――声を掛けて、その日から一緒にランニング

昼は大成が開いている剣術道場がある為、大抵が持ち込んだ本などで時間を潰していると…

彰子の影からこちらを伺う由紀江――京と一緒にしているように…結局、これも一緒に本を読んだり

手に居れた技能……”バイク”と”ヘアメイク”の腕前によって興味を持った二つの雑誌を捲っていれば

いつの間にか、隣で一緒に覗き込んでいる由紀江――女性陣の髪形を気休めにチェンジしたり、手入れをしたりはしていたので

結局、由紀江が興味を持った髪型…セミディをケープを使って軽く作ってやったりと

その殆どの時間を自身とのみ過ごしていることに、気づいた祐樹は

——まさか……最初に思った以上に…友達が居ないのか？

そんな、疑念を持つ

——たしかに……10歳とは思えない程の力を有しているし…

思い描くは大成と由紀江のみの稽古風景。かなり厳しく由紀江に指導している大成と

それに懸命に結果と態度で答える由紀江

——隣近所の人達の態度も……かなり、余所余所しく接しているし…俺に対しての態度なら納得いくんだが

”あの人は…特別な人だから”

”軽々しく、口をきいてはいけませんよ”

そんな言葉が交わされる程……さすがにおかしいということが如実にわかり

——ほんと…どうしたものか——

と、そこまで考えが及んだ時

「祐樹君」

「はい！………すみません」

大成から不意に声が掛かり、素っ頓狂に返事を返した後………ばつの悪そうな声音で謝る

「………何か、気になることでもあるのかな？」

淡々とした声音で訪ねる大成に

「いえ………大したことでは」

考えを表に出せるわけがないと思う祐樹は………苦笑して曖昧に濁すと

「どうかさたんですか？佐橋さん……？」

佇まいを正し、正座に座り直した由紀江が問いかけると

「こら。由紀江……勝手にやめるんじゃない」

「あつ………はい！すみません！父上………」

祐樹の方へと………今一度、視線を向けた後由紀江は元の瞑想の形に戻っていくも

気も漫ろと言う風に先ほどとは比べ物にならないくらいに気が散ってしまつて由紀江に大成は溜息を吐き

「……………由紀江」

「はっ…はい！」

「祐樹君と試合しあいなさい」

「た、大成さん?!」「ちっ父上?!?!」

抑揚のない声音にして真顔で由紀江へと告げた内容に

二人は驚きの声で問い返すも

「…鉄心先生から君の話は何っている」

由紀江に向けていた視線を祐樹へと向けながら告げ――

「!!…お師匠様…」

内心で…なぜ?と疑問が轟くも

「この子の性格は…理解できたらう…置かれている環境にも」

「…えっ…ええ」

戸惑いながらも洩れ出てきた大成の言葉に頷くと

「ゆえに――だよ……」

諦観と苦渋、親として失格だともいいそうな……そんな苦味が走った顔で告げる大成

そんな大成の表情に釘点けになっている祐樹の横で

「い……嫌です！！！！父上！！！」

瞳に大粒の涙を溜めて、今にも目じりから止め処なく零れ落ちそうになりながらも

たぶん、初めてであろう……正面きつて、”武”に對することで拒絶を示すことは……

体全体を震わせながら由紀江は懸命に声高に叫ぶ

「さ……佐橋さんの纏っておられる氣はとても弱いのですよ？！父上なら、お分かりになるはずですよ！！」

由紀江が己に感じ取れる事実を持って反論する——絶対に相對したくないという感情が

「嫌です！！！！い……や……です……！！」

とうとう、堰を切って零れ落ちてきた涙が道場のひんやりとした床に滝のように零れ落ちていく

絶対の拒絶。何が彼女をそうさせるのか？

——ああ……そうか。この子は、由紀江ちゃんは……

強いから。強すぎる故に。

何もかもを犠牲にして手にした力

友を作ることを犠牲に、ただ…普通の少女としての日常を犠牲にして手に入れた力は――

――嫌われたくないだな……俺なんかでも

たぶん、初めてなのだろう

この三週間。何の気兼ねもなく接してくれた人。他人は

――俺如きでも……失いたくないんだな

何処に行っても……剣聖の娘。違うことなく引いた血が成す力。

それが由紀江を――

――なら……振るうべき……なんだろう

決意する

――想いを伝える為に

「あつ……ああ……」

纏うは暖かな輝き。沸き立つ闘気が漆黒の髪を蕩たゆたわせる

露になる。優男と称されることもある……女顔に乘る切れ長な眉と共にある

決意の瞳を乗せた鋭利な眼差しが

「大丈夫……俺達は一人じゃない」

柔らかな笑みを作っていた

“礼”の武士娘（後書き）

さて、次はバトル。何気にまじ恋での初のバトル描写…

前回のアンケートは募集中……なのだが

どうやら、あまり意味がない気がしてきた……

いいのかな？…こっちも好き勝手書いて…

巡り合う。因果の太刀

「へい…おらの出番はどうなったんだ？」

寂しげな声が木霊する由紀江の部屋

その声音の発信源は——ストラップであつた

「へいへいへい……世界最高の暴れ馬たる…おらをスルーとは……」

——ストラップがしゃべる……？

「おつ、画面の前のみんな……。おらが…まゆっちの心の友。つか住んでる松風だ！」

あ…あれ……？

「おお？おらはまゆっちの腹話術で喋ってるのじゃないのかって？」

目の錯覚か……？彼と言う存在は由紀江の無意識下の腹話術によって体现されるはず——

「な～に言ってるんだよ…おらは九十九神。偉大なる神様なんだぞ」

されるはず……。はず……。は…ず…？

「こら～おまえ聞いてんのか～？無視するとおらの天元無限活殺

陣が火を噴くぞ〜」

おかしいなうまのすくらっぷがしゃべるとかつかれているのか

カタコト、カタコトと学習机の上で自己主張をし続ける…松風

あつ、ちなみに本編だとリアルに腹話術

「我は影……真なる影——なんだぞ〜」

それは没案になったやつでしょうが——

—— 黛家 道場

男は…… 幻影を垣間見た

相對する

”護”の青年と”礼”の武士娘は相對する

「お相手願います…………… 黛由紀江」

苦笑いを浮べた後…顔を引き締めて、礼をする祐樹

「あ…………… はい！お、お願いします！」

祐樹の礼に対して、反射的にこちらも礼を返す由紀江

そんな二人を脇に退き見つめる大成は——

—— これほどまでとは……………！

一端の”武”を極めたとは言いきれるほどの腕前を持つ大成の瞳に
映るは

—— 曇りなき…………… 白色の氣。ここまでのものとは

穏やかにして雄大。どんなものにも染まりきっていない白色の色合い

——今の由紀江では…届かんであろうが

相對する二人。祐樹の顔に浮ぶ表情を見て

——狂いはなかったか…

苦笑いを浮べつつも、由紀江を受け入れんとする構え

自然、大成の頬は緩くなるのとしづい苦味が走った面構えとなり

——大人の不始末を…子供にやらせる。滑稽だな私は…しかし、

間違った育て方をしたとは思わない。現に由紀江は品行方正で優秀な武人、そして優しき気立てを持って育っていつてくれている

——娘の孤独を理解してやれんかった私等では…

それでも…どこかしらに間違いがあつたのかもしれないという考えも浮んでしまう

ゆえに、小さく頭を振ってその考えを振り払い

——親友の息子に託すというのも…ありかもしれない

ニヤリとした笑みを浮かべながら——二人の歳若い、武人を見つめる

——しかし…

見つめる先に居る……祐樹の姿に一瞬の幻影が重なって見えた時

——先の……

それを認識した時、疲れているのか？という疑問と共に瞼を押さえあけた時には…当然の如くに消えていた

髪色が違う。まったく違う

艶のある黒髪、靡けばきらめきを放つほどに輝きに満ちた黒髪とは

——老人のように一欠けらの輝きとて失ってしまった白髪

瞳の色とて違う。日本人とは思えない

黒曜石に例えられる程に……気力が満ちた瞳とは

——まるで作られたかのような…機械仕掛けの金の瞳

背丈も違う。少年と青年ぐらいに

——纏うは白き衣…羽織るは檻褸切れのような薄汚れた白き羽衣

ああ、その姿は——

辿り着いた………“ 幸せな結末 ”

それが齎す“全ての結果を受け止めん”とする眼差し

いや……“原因が消えれば結果は消滅”するという事象を知るからこそ

七割の納得。二割の安著。——…一割の諦観

半ばから折れた野太刀。相對する“異形の觀察者”

もはや、二之太刀などはないという程に……その一振りを放つ為だけに体は動く

その一振りの刃の為だけに……その身はあらんというべきに

確信が全てを満たす。この刃は確実に

——事を成し遂げる

その“物語”は………完結される

“幸せな結末”を齎す為に——

すごい

ただ、それだけが思考を占めた

相對する。優しい人。佐橋祐樹

なんの隔たりもなく、ただ、由紀江を由紀江自身としてのみ見てくれた人

身に感じていた氣はとても小さくて…本当に一緒に鍛錬をすることになるのか？と

問いたいぐらいに氣薄な氣のみしか、感じられなかった男の人

なのに――

――敵わない

その考えが脳髓を満たす。穏やかではあるが……考えられないほどに盛大に立ち上がる白色の氣

――父上すら…越えられているなんて…！

初めてかもしれない。父以外に敵わないと思わせる人物は

なおも、さらに時を刻めば……齡16の時には父すら越えることが確約された由紀江に

「さあ……始めようか？由紀江ちゃん」

苦笑を浮べたままに、由紀江からの一手を待つ体勢をとる祐樹

そう…由紀江のありのままを受け止めんとする姿

纏う雰囲気。帯びる氣。違えない視線——ただ、真っ直ぐに己を待つ祐樹の姿に

「あつ……」

小さな呟きが洩れた

その視線に既視感を覚える。そう

——佐橋さんが……家^{うち}に

祐樹が来てからの三週間という日々は、由紀江にとっての……幸せな時の連続

思い返す。数々の日々。共に過ごした日々を

いつも、絶えることのなかった、暖かな——

見据える。眼前に立つ”武”を纏う者を見据える

一息吐き

「……願います。剣聖・黨大成が娘にして、黨流剣術——黨由紀江」

「天秤座の金庫番・佐橋是親が息子。我流——佐橋祐樹」

「「いざ！尋常に——！」」

——弾けた

先制は由紀江。待ちの体勢を崩すことのないことを悟った由紀江は己から始める

元々、黨の剣は神速を尊ぶ剣。後手など、ありえない

ゆえに——

「はあああつああ——！！！！」

斬撃を飛ばす。跳ばす。閃とばす

右から、左から、袈裟懸けに、横薙ぎに、

あらゆる角度から幾多の斬撃を放ちながら突っ込む

「さすがは……黨の剣か……！」

氣を凝縮させ、拳で固める

まるで——白虎の咬みつきのごとき形を持って現幻けいげんする

——十歳でここまで…！

類まれなる血と努力が織り成した圧倒的な数の斬撃

それが全て、祐樹へと向かって来る刹那の中

「喰らうわけにはな……！」

女顔に不釣合いな…歪んだ口元。洩れでた言葉通りに

両の拳で、先手で放たれた飛んで来た斬撃を叩き落していく

剣速に負けない…いや、それ以上の拳速を持って——

「？！っー！ならば…！」

叩き落とされた”飛ぶ斬撃”の末路を見据えた由紀江は

突っ込むスピードをさらに上げる。現状の己の最高の剣技を放つ為に

「薫流剣術が奥義——”虚空”！！！！！」

五月雨の如き、剣撃の雨が舞う。模造刀から繰り出されるのはどれも…神速の域

しかし——付加された力であろうと……”力は力”

あの川神百代と対等に戦える力

「すごいな……本当にすごい！！まさか……このクラスの力を持っているとは！」

感嘆の声を上げて

五月雨の如き剣撃を、五月雨の如き拳撃が掻き消す。なおも――

「だが――」今は「まだ……届かない……！」

それでも、なおも……猶予のある祐樹は告げるように放つ

「びょうしゅう白虎咬」

”虚空”を放ち終えた由紀江の模造刀に打ち放つように

蓄えられていた白色の氣が爆ぜ……

「きゃあっ！！」

模造刀を打ち壊し、その余波で由紀江の小柄な体は1m程吹っ飛ばされて尻餅をつく

「勝負あり！！勝者――佐橋祐樹！」

大成の声が神聖な道場を満たすように告げられ

祐樹は対峙した由紀江へと右の拳を左の掌で覆う形の礼を成して

「——ありがとうございます」

一礼する。由紀江への感謝。大成への感謝。纏う力への感謝

様々なモノへと送る……礼であつた

——黛家 夜 中庭

草木が眠るにはまだ、早い夜

そんな時間に祐樹は——縁側に腰掛けて月夜を見上げていた

朝の一件において……思うことでもあるのであろうか？

難しげな、ともすれば儂いと言えそうな、なんとも寂寥がこみ上げ
てくる表情を浮べながら

両手を背の方向へと広げて支柱にしながら……なおも夜空を見上げて
いると

「祐樹君——」

唐突に家屋の方向から聞こえて来た男の声。大成の呼び声に反応し

「はい？」

「月見かね……？歳若いというに……風上な趣味だな……」

クツクツとした笑みを洩らしながら訪ねてくる大成と

「こ、こんばんわ……佐橋さん……」

出会った時と同じように……父たる大成の背に隠れながら挨拶する由
紀江

——はあ……逆効果だったかな……？

そんな由紀江の行動に……嫌われたかと思った祐樹は内心で溜息をつく

まあ、まったくの見当違いなのだが——

どうみても……初の出会いの時のような焦りの赤みを帯びた頬では
ないだろう

さて、そんな祐樹へと大成は続ける

両手で抱えるように持った——五尺程、約150cm程の長大な
鞘に収められた太刀を

祐樹の側に置きながら

「……？これは……？」

その大きすぎる太刀を不思議に思い、興味深げに太刀へと視線をやると

「これは、刀の分類上では大太刀。あるいは野太刀と呼ばれる刀だな」

そう言つて、嚴重に仕舞われていたのであろう。鞘に巻いていた濃紺の布を剥がした後に現れたのは――

「我が家の……倉に死蔵されていた野太刀」

純白を基調とし、所々に金で彼岸花――仏典からの由来名は曼珠沙華を描き

拵えは大太刀ではありえないはずの……天正拵。きつと、元の鞘が破損するかなにかの事態に見舞われたゆえなのだろう

しかし……熟練の拵師ですら、手間取る天正拵を見事に形作つており吐息が洩れ出るほどの美しさ

鐔は少し大きめの角型。ただの角型というほどにシンプルであり

柄は無骨という言葉が似合う程に実直な雰囲気を漂わせる純白の紐と柄頭は何の変哲もない鋼を埋め込めまれ

「綺麗ですね……！」

月明かりに浮かび上がる白き鞘の姿に感嘆の吐息を洩らす祐樹に

「たしかに…鞘は美しい」

そう返した大成は、刀を抜いていく

「！…こっ…これは？」

そうして祐樹の瞳に映し出された抜き身の刀は――

ハバキは銅無垢一重。それに朱を巻いたかのような真紅の冷たき輝きを持つも

「材質は玉鋼ではあるのだが…かなり特殊な製法なのか――」

現れた刀身は――刃紋すらも見通せないほどの…漆黒に覆われた刀

「見たこともない程の…不吉なほどの黒い刃」

「……これは、どなたの作で？」

祐樹がそう問うと大成は無言で柄の目釘を外して…茎^{なかじ}を祐樹の元へと向ける

「…勢洲^{せいしゅう}右衛門尉^{ごえもん}…？」

そこに掘られていた文字を読み取っていくも――

「最後の肝心の名前の部分が――削り取られてる…」

名の部分が荒く削り取られている為に…読みきることはできず

「銘^ながない野太刀……それで？どうして、これを…俺に？」

野太刀を境として交わした視線

「君に……持ってもらおうと思ってな……」

「なぜ……？俺は……刀なんて振るったことはないのですが……？」

訝しげに、本当に何故？という風に疑問符を頭に浮べることくに問う祐樹へと

「……私自身にも、理屈はわからん。だが——告げているのだよ」

——本能が

置かれた抜き身の刃が月明かりに映える

その漆黒の刀身が鑑のように……祐樹の姿を映す。幻影に折り重なる姿を

大成に魅せる

「持てば……わかるさ」

「……そこまで言われるのなら……」

そう言つて、五尺もの長さを誇る野太刀の重さを考慮して

祐樹は両手で持ち上げようとする。右手は柄を左手は峰を持ち上げるように――

「か……軽い?!羽みたいだ…!」

だが……思いのほか、いや、ありえないほどに――

右手一本で持ち上げれるほどに、まるで自身の手足の延長の如き感覚を齎すその野太刀に驚愕し

「か…片手で持ち上げられないものなのですか……?」

大成の背に隠れたままだった由紀江が呆然と呟く

先の立会いからして、自分の想像の域を超える強さを実感した由紀江には

その野太刀を軽々しく持ち上げられる祐樹は、至極当たり前に出来るものだと思つてしまい

「羽の如きだと?!……巡り合つたという訳なのか…?!」

150cmもの玉鋼の塊と言つべき物を片手で持ち上げる祐樹に

自身が押した手前であつたとしても驚愕に包まれる。重さにして30㍻40kはある

大成自身も持ち運びに両手で抱えなければいけないほどの重量を誇

る物を

羽のようだと言えぬ祐樹には驚きしかあげられない

そうして――

今一度、大成は幻影を折り重ねる

由紀江は見る。見てしまう。――その幻想的な姿を

軒先から立ち上がる。その手に持つは漆黒の野太刀

構える。月夜の元に構える。月下の元に八相を構える

そして……そうなるのが必然であった。“因果”は巡り行く

太刀を大上段に構えたような姿形を八相

ゆえに……野太刀ならば、一際大きく天を突くかのように。聳え立つ刃の柱のように見える

鋭利なまでに、威圧するかのように、全てを斬り殺すかのように

――零れ落ちていった戦乙女達が脳裏を過ぎる

“この世界”の祐樹にはわかりえない光景が、一瞬……過ぎ去る

それを知覚することも、認識することもできはしなかったが――
本能は理解した

ゆえに――

八相が崩れていく

肩を撫でるように峰が降り立つ

その漆黒の刃は黒髪と同化するように……その後ろに隠れていく

切っ先は肩から突き出し水平線のように見える

凪ぐ。空間が凪いだ

「――」

由紀江の吐息が洩れた

先のような鋭利さはなくなった

威圧感は霧散した

斬り殺す？――否、そんなものはない

そこにはあるのは……ただ、

「ま……も……る……？」

護る姿

半歩。身を迫り出す構え

ゆえに、刀身を立てれば……今にも、襲い掛からんとする印象を与えるも

横風に肩にのせられた野太刀は

——その背に多くの者が居るからこそ、その長大な刃が……盾の様に映る

それは境界線。この太刀を越えるものは何人たりとて許しはしないという有様を、理を示す——

“礼”の武士娘は幻視する

異なる世界において、黒き仮面を纏いて戦った……青年の姿を

己自身を見てくれる……心優しき“武”を問う者の姿を

“この人に一生ついていく……そんな決意をさせる殿方が現れたならば捧げても構わない”

本来の物語の道筋で……告げた言葉

今だ、幼い心は恋とは何か？愛とは何か？

それを理解できるほどの齢を重ねてはいない由紀江にはわからないが――

その傍らに立つて、共に歩みたいと幼心おとなこころに決意させる程に

“礼”の武士娘は――“護”の青年を見つめていた

巡り合う。因果の太刀（後書き）

リアルに松風を忘れていました……！

さて、これが乗った時にはアンケートは終了となっていますので
これから集計させてもらいます。って言っても……

参加1。作者の好きなように？。

採る必要はなかったということですね……

至高のツンデレ

「納得いかんあああつあああん!!!!!!」

雷鳴の如き、烈火の咆哮が家中に響く

その咆哮を発したのは――

「なぜ!こちらで暮らしていくというのに……祐樹は家^{うち}に来ないんだ?!?!」

鉄乙女。その怒り心頭の姿で対面の父親に対して

リビングの机を両手で幾度も叩くという行為を伴って、激しく喚く

「いや……鉄家^{ウチ}は確かに祐樹君自身とは面識はあるが――」

やんわりと激怒状態の乙女を鎮めるようにポツポツと喋り出す一条

顔色が憔悴しきっていた……

「鉄心先生の仲介でだしな……親御さん自身との面識は私達にはないのだから」

そう言葉を区切って

「だから……黨の家で預かることになったのであろう」

同じく北陸に家を構える武家の系譜に連なる同士

お互いに親しい間柄である一条と大成。ゆえに、先日出会った時

話の種に大成から聞いた……現在、祐樹がこちらで暮らしているということを知った一条

大成自身は祐樹と一条に面識があるとは思っていなかったのだ

世間は狭いものだ、笑いあっていたものの――

「ぎいぐぐぐぐぐ……」

犬歯を剥き出しにして、奥歯で歯軋りを起てつつ……怒りをさらに募らせていく乙女に

うっかりと母親がその話を洩らしてしまったが為に――こんな状態に

「それに……こちらで暮らしたとしても、お前は松笠の竜鳴館に入っただろう？」

そんな乙女の地団駄を一条は深い溜息と共に言葉を紡ぐ

「幼馴染の対馬君のご両親からは……お前に息子のレオ君を頼んでいる。それをほっぽり出すつもりか？」

視線を鋭くして、現在の乙女が置かれた状況を突き

「ぐぐぐ……」

一条の言葉に成す術のない乙女は……漏れ出ていた呻き声を小さく
していくしかなく

「諦めなさい……」

その様子に事はなつたと……安著の溜息を洩らして湯飲みを口づける

「うううううう…… ゆ~~~~! う~~~~! き~~~~!」

今日一番の咆哮を上げた乙女であつた……

川神學園 職員室

綺麗に整頓され、私物が殆ど見えない。その教員机に

「ふー」

ただ一つ、私物と呼べる写真立てを置く教員卓に座るは……

「あら……小島先生も隅に置けませんね」

小島梅子。今年の春より、小学校での下積みを終えて今年度より

この川神学園に勤めることになった女性。そんな女性に対して

隣に座る同僚の40過ぎの女性が口元を抑えて梅子を茶化す

「?!あつ……いえ、これは——」

「おや?どうかされましたか?小島先生?」

茶化された梅子が言訳いいわけを紡ごうとするも

脇より会話に入り込む男の声に中断される

「いえ——宇佐美先生には関係ありませんので」

そう冷たくあしらう梅子が座る教員卓の斜め後ろに居る男——宇佐美巨人へと告げる

この川神市において、代行業……ようは何でも屋を営んでいる男
学園の長たる鉄心の教育方針の一環として、人生学なる曖昧な……けれど

世の中を渡っていくのに有用な授業を受け持つ男

今は、孤児院から引き取った……

もとい、引き取る予定の息子が加賀の学校に居るので一人暮らしだ

「さいですか……」

額に手を置き、顔全体を覆うように嘆く宇佐美

新年度の準備の為に……三月の初めからやって来た梅子を一目で気に入った宇佐美は

「でしたら……今夜、どうですか？新しい学校に配属となりましたし……」

右手で飲む仕草を作りながら、懲りずにアプローチをかけるも

「ここは先任と仲を深める為にも」

「いえ、今日は家にある食材を使い切らなければいけませんので」

聞く耳の持たずの梅子。茶化されない為に、写真立てを伏せに掛かるも

「あら……小島先生は面食いなのですね」

隣の女性がいつの間にか……件^{くだん}の写真立てを手にとって眺めながら、そんな感想を洩らす

「ほう……どれどれ……って、コレかなり古——」

唐突に言葉が切れる。古という言葉が飛び出した瞬間には——

鞭の餌食になっていた……おじさん、じゃなかった……今はまだ——
おっさん

「返してください」

表情自体は何でもないように…取り繕っていても

「あらあら…」

頬を真っ赤にさせて、引つ手繰るように奪い返すという態度でモロバレだ

そうして取り戻した写真立てを引き出しに仕舞いこもうとするも

「ふふ……頑張ってくださいね。小島先生」

どうみても、後輩の恋の行方を面白がっている女性の姿に梅子は…

「頑張るも何も——この方とは……コレきりですから」

ほんの少し…寂しげな表情を浮かべ

引き出しに入れられ閉められる直前の裏返しの写真立てを見やる

その中に収められた——梅子が17の時に撮った……17歳頃
の祐樹の写真であった

― 川神市 川神院前

さて、祐樹が加賀へと向かった後の風間ファミリーと言えば…

「こんしゅも……ゆうきがこない……」

カタコトで喋っていると言えるぐらいにたどたどしい声音で京が呟く
ギリギリまで出発を延ばしている京は今だ……川神市に滞在してい
るも

「そうだな……」

こちらも覇気のない声音で、やる気のない返事を返す。腕組みをし
た百代

「そうね……祐樹、いつこっちに帰ってくるのかしら？」

ソワソワと犬耳をぴよこんと飛び出させて、糸目でうだうだとなる
一子

「ZZZZZZ……」

朱塗りの柱に凭れて、マイペースに熟睡中のキャップ

全体的にダラ……とした空気が蔓延していた……

「しかし……祐樹が抜けただけで……こんなにも違うモノなのだな」
そんなファミリーを一瞥して百代が感想のごとき溜息を洩らすと

「ゆづき、ゆづき、ゆづき、ゆづき、ry」

エンドレスで名を紡ぎ続けながら、プルプルと震える京を抱き寄せて

「お……よしよし、京。お姉さんが居るからな」

およそ、今日で四週間は祐樹と出会えていない京は——禁断症状にも似たぐらいであった

「あ……祐樹成分が足りないってところか」

百代が遠慮なしにギュツと抱きしめていても何も反応を返さない京プルプルと震える腕の中に抱えているのは——祐樹から貰った様々な物達

「これ……京から取っちゃったら……どうなるのかしら……？」

沢山の物を抱えながらも今だにプルプルと震える京の姿に素朴に思った一子がそう口にしながら

その腕の中に抱えられる……興味を引かれた物に手を伸ばそうとするも

「妹よ——それは悪魔にも劣る畜生のすることだぞ」

キリツと眉を引き締めて、真顔で告げる百代に

「あう……き、気をつけるわ。お姉様」

若干、涙目になりながらも素直に謝罪する一子

「ZZZZZZZ…」

そんな女の子組みのこと等、知らんと言っ感じに我が道行くキャップ

「み、京の物だものね！ア、アタシにも祐樹がくれた物あるし」

そう言って……だいぶ伸びてきた髪——ポニーテールに巻かれた

特徴的な朱塗りの玉が二つ付いた髪飾り。その玉を開けて

「ジャ、ジャー—ン！！おにぎり！！！！」

俵型…というより、もはや真ん丸の握り飯を取り出す一子

一子の誕生日がわからない祐樹は…一子と出会った日を

——俺とワン子だけの誕生日な？

——うん！！！！

そう言って、プレゼントした髪飾り

特徴的な玉が付いたソレは商店街のウィンドウに飾られていた物に
一子が

目を輝かせて見つめていた物。コツコツと手伝いやら小遣いやらを
貯め続けて買った一品

基本的に、祐樹に取っての物欲は…ゲームぐらいなのだが——

この時代のものはもはや、めばしい物はやりつくしてしまっている故に

特に物欲が湧くことがなく……仲間の為になるものに変わることもっぱらだ

「うへー！しょっぱいわ……やっぱし、祐樹のように美味しく作れないな〜」

齧りついたおむすびの塩加減に舌を出しながら呻く一子に

「ゆうきが、ゆうきが、ゆうきがくれたもの——」

その言葉のみに反応して、京がフラフラとした足どりで

一子の髪飾りに手を伸ばそうとすると

「うわわわわ……み、みやこ〜」

ガシツと鷲掴みされた髪飾りを引っ張られる「ポニーテールを引っ張られると同意義ゆえに

これまた、涙目を浮べて呻く一子

「こらこら……京」

そんな一子に助け舟を出す百代。ぐいぐい引っ張ろうとする京を制する為に

後ろから肩を左手で抱き、膝裏に右手を差し入れて——お姫様抱っこに

「うっ……うっ……」

唸りながらも京は離れてしまった髪飾りに手をいまだに伸ばす

「ああ……早く帰ってこい。弟よ……」

——私もかなり、キているのだぞ？

遠い地に居る祐樹を思い浮かべて、百代は遠い目を空へと向ける

「Z Z Z Z Z Z Z」

「なんかむかつくから蹴る」

「うどわっ？！なにするんすか！！モモ先輩！！」

天性の勘と強運で熟睡していたにもかかわらず……見事に回避しきるキャップ

「ちっ……」

そんな、風間ファミリーであつた……

―加賀 黛家

さらに所変わって

「うん……？乙姉……？」

ふと、どこかで叫びを上げているように思えた

もう一人の姉。一番最初に姉と呼び始めた女性を思い出しながら咳く祐樹に

「どうかされたんですか？祐樹さん？」

壁に背を預け御座をかいて座る祐樹の膝上の空間に

ちよこんと座る由紀江が問いかけると――

「いや――」

そう言いながら、胸元に居る。体を預けきつて、手元に祐樹と見ていた本を抱えながら

上目遣いに見上げてくる由紀江の姿に

――う…ああ…や、やばい…

オーバーオールを着込んで、さらに庇護欲を掻き立たせる

ノックアウトされ気味な祐樹。全てを預けて、ここが自分の居場所だと

自己主張しなげな由紀江が、時折…

微かに、祐樹自身に気づかれないように、遠慮しながらも、

頭をグリグリと祐樹の胸板に押し付ける由紀江の姿に押されぎみであつたゆえに

そんな仕草に思考が――

《見上げてくる由紀江の小さくもふつくらとした唇に》

キスする？（セーブはしましたか？）／理性を効かせる？（共通ル
ート継続）

――中学校

さらに、さらに場面が変わり――

本日は入学式の当日

体育館での式自体は終了し、クラス発表が載っている掲示板を見や
つて来たのは

——— ここか

1 - A。一番前のクラスに配された祐樹

木製の引き戸を開けて、中に入れば……誰一人知って居る者いない
空間が広がり

——— まあ……三年間お世話になる土地だし、由紀江の件もあるから
……何人かは仲良くなりたいたいものだな……

そんなことを考えながら戸を潜る

結局、由紀江に対する近所の方の対応は……そうそう変わるわけもなく
そも変わるきっかけもなく、現在進行形で由紀江は他人は祐樹との
みコミュニケーションを取るだけ

——— 俺だけ……というのもアレだしな……大成さんは問題に思っ
てないらしい……

由紀江自身の好きなようにしろとでも言いたげに放置な由紀江の両
親を不可思議に思い

問う祐樹であつたが……返されたのは

「何……今は祐樹君が居る。この土地では滅多なことでは由紀江をそ
うやって見てくれる者が居ない」

そう前置きをしながら

「高校は、鉄心先生が長を勤める川神学園に送るつもりだしな。そこで作っていけばいい」

と気楽に返してくる。いや、祐樹に任せると言わんばかりの態度

——どうしたものやら…

そんな取りとめもないことを考えながら

適当に座った椅子で思考している最中に、担任が何時の間にやら

教壇に立ってしゃっべっており

「では、まずは…正式な席を決めましょうか？」

そう言って小さな箱を教壇に置いて

「この箱の紙を一枚取って、書かれた番号の席に座ってね」

そう言いながら担任の教師は黒板に席の番号を振り始め

同級生が一斉にその箱の前に集まる

——残り物でいいや

そう考えた祐樹は同級生達の群れが引くまで待ち続け

「取っていない人は居ない……？あと二枚残ってるんだけど……」

その掛け声で祐樹は教壇前まで歩くと……

己と同じ考えを持った奴が居たのであろう

かったるそうにしながらも祐樹と同じように教壇前まで歩きより

「てめえから取れよ」

ぶっきらばうに告げる男

かなりキツイ釣り目。切れ長の眉。ざっくり切られたような刺々しい髪型

「いいよ、そつちから取りなよ？」

「ちつ……俺は残り物でいいんだよ」

本編での印象は——“健康的な不良”にして

「そうか……なら、引かせてもらっよ。ありがとっ」

「べ、別にてめえの為なんかじゃねえよ。俺の為にだ……」

“至高のツンデレ”——源 忠勝

とあるルートではファミリィの一員となった

至高のツンデレ（後書き）

題名のゲンさん…少ししか出てねえ…

とりあえず、うだうだしながらクリスの件は考えます
一子の髪飾りの玉はオリジナルです。たぶん、アレに一子は錘を入
れたりしたりしていると妄想したので…

— 中学 1 - A

室内は騒然とし

同級生の者達が思い思いの人と会話を交わし

指定された席へと移りいく中、祐樹と源忠勝…通称、ゲンさんは

「つつても……どっち引いても一緒だな…」

「だな……」

二人して黒板へと映した視線の先には——

学生には人気の窓際の最後尾とその横を引き当てたというより…残っていた

ゆえに、二人は並んで——

「えっと……初めまして。佐橋。佐橋祐樹って言うんだ…君は」

ゲンが並んで歩くわけもなく、自然祐樹は後方に顔を一旦向ける形となり

「……………源忠勝だ」

かなりの間が開き、さらにボソツとそっけない態度で答えるゲン

その名に、祐樹は……

「みなもと……ただかつ……？」

その脳裏に引つかかる名を呟きながら、顎に手をやって悩みながらもゆっくりと歩き

「ああ……？どうかしたかよ？俺の名前になんか、文句でもあるか？」

ぶつきらぼつに釣り目をさらに吊り上げて、睨みつけてくるゲンをどこ吹く風というばかりに

——もしかして………ワン子の言ってた……タッチャんって

思考を巡らせて

「なあ」

「んだよ」

祐樹のその姿に徐々に機嫌が悪くなったかのように声音が荒々しくなるも

「一子って……知っているかな？岡本っていうおばあさんに引き取られた孤児の子なんだけど——」

素朴な疑問のように問いかけた言葉に

「てめえ?!一子を知ってやがるのか?!」

予想以上の反応を持って叫ぶように返すゲン

おかげで教室中が一瞬にして静寂に包まる。祐樹とゲンの回りを除いて

「あいつは今何処にいやがる?!答える!!!」

狂騒の剣幕を持って捲くし立てながら、祐樹へと詰め寄り

「答える!!!」

襟首を掴むゲンに

——はは……真剣^{マジ}で心配しているんだな

そんな剣幕のゲンの様子に内心で嬉しく思うがゆえに…表情が緩んでしまい

「てめええ!!!」

余計にゲンの神経をささくれ立たせる

「ああ。すまない」

そう謝罪を前置きしながら、頬を掻き

「ワン子は幸せ者だなんて思ってた……」

屈託のない笑顔を浮かべながら答える

「な……」

息を詰まらせたゲンに続けて

「ワン子……もとい、一子は今は関東の川神市って所に居る。……聞いたことないかな？川神院って？」

「……関東三山の一つにして、日本の武術院の中で最高を誇る……川神院か？」

「そう。そこに……今、一子は居る。武術を学んでいる……元気にね」

「そ……うか……」

そのやりとりによって最終的にゲンは腕の力が抜けたのか

祐樹の胸倉を掴んでいた手が落ちていき、襟元を正しながら祐樹は

「まあ……そういうことだよ。なんだったら……連絡先を教えようか？」

「いや……いい。悪いな、胸倉掴んじまって」

「いいさ。ワン子からよく君のことを聞いていた……伝え聞いた通りの男で嬉しいよ。俺は」

少しだけニヤケタ笑みを浮かべて、席に向かいだした祐樹へと

「おい?! てめえ、一子から何を聞きやがった?!」

「ひ・み・つ・だ」

キラツと瞼を片方閉じて、ぺこちゃん顔にて答える祐樹に

「てんめえええっえ……」

怒髪天をつかん如きに怒りを内に秘めたかのような険悪な瞳を宿して
ドスの利いた声音にへこたれるような祐樹ではなく……颯爽と窓際
の一番奥の席を目指す

それからの二人は……一匹狼然としたゲンにしては珍しく、祐樹と
波長が合い――

たぶん、一子の世話。もとい、世話焼きな部分が共感したのか……
つるむようになる

最初の邂逅の一件で、最初はクラスから浮き上がってしまう二人な
のだが

エレガントクアットロ

後のイケメン四天王の一人たるゲンにクラスの女子からアプローチが

すぐに始まり、元々がいい人たるゲンは鬱陶しそうにするも…最後
までしっかりと告白なりなんなりと対応する為に

余計に人気が上がり…クラスの居場所を獲得することになる。

祐樹自身はそんなゲンの付属品としての立場へ——目元まで覆ってしまい、今では肩より下ぐらいまで伸びた野暮ったい髪やらの印象で

一部からは根暗。ゲンとは不釣り合いという陰口を叩かれる存在

まあ……祐樹本人はもはや、”そういうことには慣れてしまっている”為に欠片も気にならず

日々をのんびりと過ごしながら、ゲンへのラブレター配達をこなしつつ

由紀江とのスキンシップを楽しむ毎日を——送る前に

——川神市

「大体、一ヶ月ぶりか……」

降り立ったのは川神駅

新幹線の到着駅たる七浜から大体、30分ぐらい行った場所に存在する

地元の駅。その構内に行きと同じ荷物——背丈並みに大きい黒い生地で作られた特異な形状のカバン

黒のテラードジャケット

長袖のシンプルな無地ベースの台襟裏・襟部分をグレンチェック柄で切り替えた黒に中央線にみ白が入ったドレスシャツ

ヴィンテージ加工のスリムストレートの紺のデニム

ウエスタンブーツ…「アダムス」の黒に両サイドにシルバーのリングが付いたショートブーツ

胸元にシンプルなシルバーネックレスを下げた男——祐樹は立ち尽くしていた

纏う服装はしっかりとコーディネートしているくせに……髪型の野暮ったさが全てを台無しにしている為に

誰にも見向きされない——

「祐樹!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

訂正。一人というより……

「見つけ！祐樹——こっちょ——!!」

「遅いぞ！弟！こっちに来い……!」というか、京！来させるんだ!」

「祐樹——!こっちょだ——!!」

第一声は当然、京。その姿を視界に納めた瞬間には……スタートダツ

シュをかけて祐樹へと駆け出しており

その後ろに固まっているのが上から、一子、百代、キャップの三人。こちらへと手招きしている姿が映り

「ゆうき……！」

「わっ……とと」

胸倉へとダイブをかましてきた京を蹈躑を踏みながら受け止める

その恋人同士の１シーン。特に、京のやせっぽっちが直ってきており
掛け値なしの美少女が涙を貯めながら

脇の位置辺りまで伸びた艶やかな青と紫が混じったような淡い輝き
を持つ髪

それを振り乱して飛び込む光景は……注目を浴びる的になるも――

「………ありゃ、相手が台無しにしてやがるな」

「だよな………ブサ面専門か？あの子？勿体ね……」

そんな１０台後半の男たちがボソボソと呟き

「世の中………わかんないもんね。アレだけ可愛いのに………あんなの
のどこが いい のよ？」

「まあ、服装はちゃんとしてるけど……面と髪があればじゃ～ねえ……」

同じような年頃の女達も囁きあう

それを黙っている京ではない。即座に冷徹な視線で射抜こうとする
も――

「こら、やめないか……京」

やんわりとしながらも、明確な静止の意思が込められた声音で告げ
られ

「でも――」

振り返りかけた顔を再び、祐樹の方へと向けて言葉を紡ごうとするも

「まあ……言ってることは本当なんだから仕方がないさ……」

呆気らかんと告げて、肩を竦ませる姿に…

「どうするか……この男」

「自覚なしって言うのも……アレだけど、今のところコレで私のライ
バルは――」

来いと手招きしていた百代達だが――京のシーン演出に待ちきれ
ずにこちらへと足を向け

そんな祐樹の発言に思わず、溜息を吐いて冷めた眼で一瞥する百代
の言葉に京が続き――

「遅いわよ、祐樹。一ヶ月以上も帰ってこないってどういうことよ？！」

犬耳を逆立てさせて、ポニーテールすらも逆立たんとする程に剥れる一子

「悪いって——」

「ワン子だけだから…良いのか、悪いのか…」

「複雑だな…京」

こちらにも粘っこい瞳で祐樹を一瞥しながら、一子を視界に入れる

「ワン子は…無自覚だから、気づかせるのがフェアなのかもしれないけど——」

「けど？」

「祐樹に関しては——手加減してあげられない」

真摯な瞳で告げる。その表情は申し訳なさも含んでいるも…それでも譲りたくない何かを秘め

「まあ……そうだな。それにワン子自身が気づかなければ意味がない……」

一息吐いて、ボヤクように返す百代。その瞳は祐樹へと様々な感情が込められた視線となっており

——…今のところはモモ先輩もどう転ぶか…わからないってところが
心中でも己の恋路の障害の多さに嘆く京であるが——

——まあ、かんけないけどなッ!!!!!!!!!!

表情を一変させて顔全体を引き締めて見やる

「ただいま、キャップ」

「おう！お帰り、祐樹。…いつもは俺が言ってる言葉なのに、今回は逆だな」

蒼のジーンズに両手を突っ込んで、いつも通りの赤いバンダナを巻いたキャップに

「だな」

苦笑しながら祐樹は答える。剥れていた一子の頭を撫でながら

そんな京の心情を知らない男二人は楽しく第一声を開き

「ふやあ〜…」

男としては細い指。大きさは標準の男並なので、余計に細さが際立った手がゆつくりと

赤い髪を梳いていく感触に一子はタレていくしかなく

先ほどまで逆立っていた犬耳は折れていたものの

「そうそう…キャップ。面白い話があるんだよ」

「おっ！なんだ？なんか秘境でも見つけたのか祐樹？！」

オラ！ワクワクがとまんねえ！という感じに瞳を光り輝かせて、鼻息荒く問いかけるキャップの姿に

「冒険好きなお前と違って…俺がそんな物を見つけられるわけないだろ？」

苦笑いを浮べてやんわりと否定する祐樹

「なんだよ…：…なら、何の話だよ？」

「一子が言っていた…：…タツちゃんに会ったよ」

「真剣か？！？！」「タツちゃん？！？！？！？」

再度、構内の人々から視線を集めた程に叫ぶ二人

「…：…と、とりあえず…：表に出ながらな」

至近距離で離れていた祐樹はモロに二人の叫び声を浴びて…：体を一瞬だけ竦ませた後

そう告げて歩き出し、キャップと一子がソレに直ぐ続き

「…：…あゝ…：恥ずかし」

注目の浴び方が恥ずかしいと思える百代は……呆れた声音でそう呟いて

その二人に続き

「ほんと……」

バット札を掲げて頷きながら京も続いていく

「それで?!どんな奴だったんだ?!タツちゃんって!」

「元気だった?!ご飯ちゃんと食べてた?!すぐ、私にくれるから……ちゃんと食べてるか不安なのよ!」

「あああ……聖徳太子じゃないんだ。どっちからかにしてくれ……」

歩きながらも矢継ぎ早に告げられる質問に祐樹は、頬を掻きながら告げると

「なら、俺からだ!」「ええゝ!アタシだって聞きたいこと一杯なのよ?!キャップ!!」

二人して自己主張し……額を寄せ合って唸りあう二人を無視して

「とりあえず、弟よ」

「な——」

こちらに着いてから初めて百代が祐樹へと声を掛け、それに反応した一瞬に——

「一番に私に声を掛けないわ。私から声を掛けないと私に話を振らないお前には―」

ヘッドロックを仕掛け、祐樹を背後から羽交い絞めにする。その中学生にしては豊満な胸を押し付けながら

「も、百姉さん?!?!」

背中越しに感じる柔らかい弾力にドギマギしてしまう祐樹は上ずった声で名を呼び

「――祐樹のいじわる…そんなにモモ先輩の胸がいいか…」

百代には敵わないまでもバストは二番目にしてふくよかな方の京が呻く

と言っても…この下はないちぢむすめ一子しか居ないが…

「罰を受けてもらっしかないな…」

瞳を怪しく輝かせて……《京でも止められないスピードと力で》

「んふふ…」

正面から抱きしめて、頬を舐め、ドレスシャツの止められていた襟元の二段目から三段目を外して

――くちゅ…

そんな擬音が微かに聞こえてきそうなキスをそこに落として

「ん……私好みの体になっているな……ちゃんとソレを維持しろよ？
私は少しだけ、筋肉質のがいいのだからな……」

妖しい笑みを浮べた流し目で祐樹を見ながら、体を離していく百代に――

「モモ先輩ひどい！！自分だけ、そんな羨ましいことするなんて！
ハンカチにでも齧りつきそうな程に悔し涙を流しながら文句をたれる京

今だ、唸りあうキャップと一子。騒動を撒き散らす幼馴染たちに……

「はあ……」

肩を落として溜息を吐くしかない祐樹

肩を落とした拍子に掛けてあったカバンがズレ落ちようとし

「おっと……あぶない」

「なにそれ？祐樹？」

そんな祐樹の姿が視界に入った一子がキャップとの唸りあいを止めて
素朴な顔で問いかけてくる

「あつ、それは私も気になっていた」

「私も……」

「俺も！何なんだ？それ？」

勝手に騒動を起こしておきながら、自身の身動き一つで中断して自分へと意識を向けてくる幼馴染達

——まあ…これが風間ファミリーってか…

心の中で溜息のような、一息ついたかのような…どちらとも取れる息を吐いて

「……ギターだよ、ギ、タ、ー」

疲れたような声音で問われた言葉に返す祐樹

表情はこれもやはり……苦笑いが浮べられており

「見せて！見せて！」「おお！見せてくれよ。祐樹！」

当然の如くにキャップと一子がせがんで来るのが眼に見えていた祐樹は

背負っていたギターケースから……蒼いコバルトブルーと黒が混ざりあったカラーリングを持つ

エレキギター。8弦で、メガウィングと呼ばれる特殊なピックアップに…稼動電圧は18ボルト

フレットは32ある——かの有名なギタリストが作ったギターの……模造品

「へえ……お前にこんな趣味があつたんだな……」

取り出したギターを持って眺め回す百代の言葉に

「まあ……ね。一番、真つ当な趣味じゃないかな……？」

苦笑いを浮べつつ、百代が持つギターをやんわりと取り上げ

「ん？」「ええ?!お姉様だけ?!」「モモ先輩だけかよ!祐樹!」

百代の擬音。一子の不満声にキャップの抗議の声

色々もあるも——

「ごめん……これ、人前で出すのは良くない品でさ……」

「ってことは……やっぱし、それ……スカイギター?」

そう苦しそうな言訳を並べようとした祐樹の声を遮って京が質問すると

「?!?!……よく知ってるな……京……」

心底、驚いたと言う風に驚きが張り付いた表情で京へと顔を向けると

「ふふ……未来の旦那の趣味の把握と付き合っぐらいは妻の役目だよ……」

ニヤリとした笑み。獲物を狙う瞳で祐樹へと返す京に

「あはは……と、とりあえず京の言った通りにコレは……スカイギター」

「…なんで、スカイギターだと人目に晒しちゃいけないのよ？」

当然の如くに知識のない一子が問うと

「コレは……模造品。オリジナルを作った人の許可なく作られた品でね…」

そう、コレは偽者。創始者の許可なく作られた駄作。いくら…優れた物であろうとも――

「家の物置の奥にあったのを見つけてさ……父さんが昔、ひょんなことで手に入れた品らしくて」

一旦言葉を区切り

「物が物だけに…人前に晒せないからそこにあっただけど…」

「ギターって安く見積もっても…中学生に簡単に買える代物じゃないし……求める音がコレなら出せるから」

フェイカー
――贋作者が作り出した物など……なんの価値も無い

それはまさしく……佐橋祐樹自身。所詮は仮初の力しか持たぬ――
――無粋な贋作者

「練習用に……使わせてもらってるんだ」

偽りの仮面を纏う男には……似合いの品

「それに、結構……改造してしまっているから……フルアコだし」

元の姿から、かなり改造してしまっているゆえに……一見すれば自作に見えるほどに手が加えられているのが分かる

「そうなんだ……」

犬耳をしおらしく垂らしてそう洩らす一子

場が重い空気に占領されかけようとするも――

「でもよ」

この男が居る限り――

「コイツは……引かれる為に生まれてきたんだろ？」

風間翔一という――

「だったら……使ってやらなきゃ、日を浴びさせてやりなきゃ……
かわいそうじゃねえか」

ファミリーの大黒柱が居る限り、そんな物に犯されない

「だが……！キャップ——」

祐樹が抗議の声を上げようとするも、人差し指を左右に振って不敵に笑うキャップは

「お前が言ったとおりなら……原型の奴から程遠い形になってるんだろっ？」

「そうだが……」

「ならいいんじゃないかねえのか？俺知ってるぜ！ギターって自作してる奴もあるんだろ？」

その言葉は——

「誰だって、いきなりオリジナルを作れるわけねえよ。巧い奴のいいとこ真似て……自分流を創るんだろ？」

“異なる世界”において……偽りの仮面を纏って戦った青年へと伝わるスカイギターのギタリストも……奏法において、様々な影響を受けていると告白している

ゆえにだろうか？

「いや……この場合は影響って言ったほうが正しいな！」

無邪気な笑顔で告げるキャップの言葉は——翔一の言葉は——

「今、ここにあるそのギターは……紛れもなくお前だけの、ギターだろう?」

借り物。偉大なるその力は――

借り物。誇り高き生き様は――

借り物。己を全て使っても己を助けてくれる人も――

何もかもが……借り物の青年

何一つ……力と呼べるモノを持っていなかった青年にあったのは

ただ一つ持っていたのは――分不相応な想いだけ

だが、それでも、その――“物語”は

青年の“物語”。佐橋祐樹の……“物語”

だから――

――滴が墜ちる

「あ……れ……」

「祐樹?!」

「ど、どうしたの?! 祐樹?!」

「お、おい! 弟よ?!」

零れ落ちる。心の底から

ずっと、棘の様に突き刺さっていたから

“因果”の導きによって“この世界”の

「なんでだろう? …… なんて俺は——」

佐橋祐樹は——涙を

落とす

「泣いているんだろ?」

“ 何で本人に教えないって？……ライバル増やしたくないのよ！

”

b y ゆか

たかだか、五千文字程度を入力するのに1日以上使うのは……わりに合わない

メールでの投稿はもうやりたくないな……

新しいPC手に入れてからだな……

“ 何で本人に教えないって？……ライバル増やしたくないのよ！

”

b y ゆか

― 昼 川神駅前 ロータリー

「わっ……ちょっと、キャップ！何、祐樹泣かしてるのよ？！」

犬耳を尖らせて一子がおっかなびつくり祐樹が流す涙に驚き

「ええ？！俺のせいだよ？！」

一子の驚きようと祐樹の――

「え……？俺………？」

自分自身ですらわからない……涙

なぜ、泣く？

「あれ………？どうして……？」

零れ落ちる涙。両頬を呆然と押さえながら

「どうして……」

フラッシュバックする。“この世界”の祐樹にはわからない光景

“醜惡な化け物の群れ” “機械仕掛けの亡霊” “向き合う仮面” …… “戦乙女” —— 達

「な……なんでなんだ？」

小雨のように次々と零れ落ちる…止まらない涙。ひたすら拭って

「わかんない…けど」

満ちる感情を洩らす

「なんか…温かい……」

心の臓が納まる左胸に右手を乗せて呟く

万感の想いが詰まった声音でつぶやく——

「祐樹……」

左胸に手を置き瞼を閉じて立つその姿に

京は胸に“痛み”が走るのを感じつつも…祐樹の肩に頬を乗せて寄り添う

場がしんみりとしてしまうも——

キャップが髪を掻き乱し

「ああ~~~~！くそおう！」

「祐樹！！泣くのは無しだ！俺も泣いちゃうぞ！」

人差し指を立てつつ、祐樹へと突き付け…涙目なキャップが叫ぶと

「ぷっ……くっ……あ、ああ、そうだなキャップ」

そんなキャップの様子に涙を流していたと思わせない
笑いを耐えた表情で頷く祐樹

「あっ！祐樹、卑怯だぞ?!」

「何が?……キャップ?」

暴れるキャップに軽く流す祐樹

野郎二人を尻目に――

「どう思う……京?」

百代が問う

「わからない……でも、悲しいから泣いてた感じじゃなくて――」

そう答えつつ、一子へと視線を向けると

「うん…京の言う通りよ、お姉様。そんな感じはしなくて――」

「哀しい――か?」

ため息と共にもたらされた言葉に二人は頷く

「何か……想うことがあるのだろう。私達にはわからない――」

「何かが」

最後に百代が紡いだ言葉に二人は各々の心情を覆いながら静かに聞き入れる

そんな女性陣とは裏腹に

「で……まあ、一言で体現すると――」

「すると?」

神妙な面持ちで喉を鳴らすキャップに

「ツンデレだ」

「ツンデレか」

真面目くさった顔で告げる祐樹

「くうくう！聞いてるだけで面白そうな奴だな！」

呻くように感嘆の声を洩らすキャップは

「決めた！！ぜってえ、仲間にするぞ！！」

風の少年の名のごとく

全身で高ぶる気持ちを表し

「熱くなってきたぜ！ここは一発！」

「祐樹のギターバックで熱唱するぜ！！」

「「「「「はあ?!」「」「」」」」」

「プラ。ットダ。。!!」

「すごいネタ振るね…キャップ。それに応じる——」

スカイギターでアプローチしていく

「祐樹も祐樹だけど……」

嘆息を洩ら————してるように見せかけて

「そんな祐樹もステキ」

両頬を押さえて恍惚な表情を浮かべる京

「ネタって?」

一子のつぶらな瞳に浮かぶ疑問は

「妹よ……お前は汚れないでくれ……」

しんみりと返す百代の様子に……さらに

「??????」

頭の上で疑問符を乱舞させて小首を傾げる一子を後に——

「——!」

キャップと祐樹のたった二人のセッションが鳴り響く
その突然のパフォーマンスと本編と同じように子供の頃からずっと
続けている

カラオケ大会の常連優勝を果たす自慢の歌声と類い稀なる容姿で観
客が集まりだす。ロータリー前は即席のライブ会場へ――

「――！止めて！！」

気分を和らげるために開けていた窓から聞こえた旋律に顔を跳ね上
げる

リムジンの運転手が黒髪にヘアバンドをした女主人の言葉に反応し
て車をロータリーの中に止め

「どうしたんですか？お嬢様？」

「しっ……！！紅子……静かに……」

指を唇の前で止めるジェスチャーにメイド服姿の紅子が口閉じ……
窓から入ってくるスカイギターの音色に耳を澄ませて――

「へえ……日本の……学生の中にもスカイギターを操れる者が居た
のね……」

感慨深げに呟きつつ、祐樹の背丈と周りのメンバーから身分を推測
しながら

「……………欲しいかも」

自分にしか聞こえない声音で呟くと

「お嬢様。このままでは公共機関の邪魔に……………楽団の方も――」

「わかってるわ。……………出して頂戴」

運転手の言葉に――久遠寺森羅は少しだけ…名残惜しそうな表情を“こちらに気づいない様子”の祐樹へと向けて立ち去るのであった

――深夜　川神駅ロータリー前

時刻は眠らない街。一歩手前の川神でも、もう二時間程すれば目の前の雑踏が消える時間

――さて……………と

ロータリーの前にある時計台の下。その植え込みを囲うコンクリートに腰を下ろし

荷物のスカイギターと是親が置いていったアンプ。バッテリー内蔵式の小型を持って、此处へとやって来た祐樹

昼の一件で図らずも小遣い稼ぎとなってしまったのでその金で皆でラーメンを食べに行き、なんだかんだと近況を伝えていると……

あつという間に時間は過ぎ、ぐずる京——最初は祐樹と一緒に寝る——を百代が川神院に連れ帰り……解散となった後——

——色々と……考えることがあるな……

ケースからスカイギターを取り出してセットしていきながら

——俺が居れば……自宅を集合場所代わりに使えるが……

こちらに常時居ない。今は無理な案で

——となると……やっぱし、あそこしかないか……

脳裏に浮かぶは“佐橋家”……というよりも母、久子の実家。“鹿島家”所有の空き地にある

——空き家……あそこ、電気も水も通したままで放置してるしな……

冷暖房完備の至れり尽くせり。これ以外にも閉鎖した寮等ちらほらと……

——あそこの維持費は、たしか……“本家”の雑費で賄ってるんだよね？

思い浮かべるは京都の一角に隠居している祖母

——ばあ様に一報入れたら使わせてもらえるだろうな……

内心で苦笑いを浮かべる。夫も亡くし血のつながりのあるのは、もはや母のみ

それも孫が祐樹一人という状況故に溺愛してくれており――

――お願いするか――

――おり……。正直……。あのパワフルな部分がある祖母の相手は大変なのだが……
そんなことを考えながらだとあっという間に準備は終わり

――練習しますか――

軽く入る。流していく。運指……。指を解すように

当然、誰の目にも止まることがあるはずなく

雑踏に消えていく――

その男の印象は……

「はあ……ロンカちゃん……」

“冴えない”それが誰もが抱く第一印象

くたびれたスーツ。少しでも天然のパーマが入った中年くささを感じさせる髪。ちょびヒゲ。そして何よりも――

「せつかく……あそこ迄、育てたのに……」

生気のない顔と哀愁が漂うその姿

「ウチみたいな弱小じゃあ……夢見ちゃだめなのかね……」

吐息が洩れ出る。この男、業界内では“チョコビ”と呼ばれる芸能プロダクションの社長。まあ……今の言葉通り、中小企業……いや、弱小プロダクション。ゆえに――

「はあ……ロンカちゃん……」

街灯の大型ビジョンに映る。男が手塩にかけたアイドルが出るCMが流れる

超大型企業。キリヤカンパニーが提供するCM

「正攻法で来られたんじゃない……仕方ないよな……」

またも、ため息が洩れでる。汚い手で引き抜かれたなら憤ることもできるが……あちらも筋を通して、多額の移籍金。投資した金額の軽く二倍以上にロンカをきちんと納得させている

誰だって良い職場を求めるのは当然――

「金であつたつてな……」

金が欲しくて、この仕事を始めた訳じゃない

貧乏であろうが構わないと覚悟して始めたのは――

「私にやあ…無理なのかね…?」

子供の頃に魅せられた——人をひきつける者。時代を築いた者達

己自身がソレになることを夢みたが……己では無理だと悟り、ならば…己の手で生みだそうと

「はあ……この世には捨てる神様しか居ないのかね…?」

星を見上げる。やるせない声音——

男が洩らした言葉。それはことわざ。言霊

その言葉はこれで完結する

“捨てる神あれば……拾う神あり”

男は出逢う。——その“詩歌い”に

少女は家族と共にバスへと向かっていた

「ああ…！結局、延長戦で負けてしまうとか！」

ぶつくさと言いながらも、前に行く…父と母の後ろを付いて自宅へと戻る——大和田伊予

本日はベイのホーム戦があり、スタジアムで観戦。一進一退。延長

戦に入ってしまった故に……この時間の帰宅

「せっかく……ビデオカメラ持って来たのに……」

竪原の主砲が去年の故障から戻ってき、今日は一発見れると期待して持参したのだが――

「あーあ……」

夜空を一度見上げる。手に持つビデオカメラ越しに

そうして――

「なんだろう?」

少女は時計台の前に幾多の人々が足を止めるソレへと視線カメラを向ける

慣らしが終わった。誰も己に視線を向けていないのを確認し

――さて……テキトウにやってみるか

息を吸う。深く小さく吸う

構えて……弾き始める。バラード調に

“その足は何の為にある?”

何も考えず

“その手は何の為にある？”

唇が動くままに

“その胸は何の為にある？”

今の自分自身が

“C a l l — i n g”

織り成す音がロータリー前を満たしていく

“ただ、日々を歩く為だけなのか？”

雑踏が微かずつ小さくなっていく

“ただ、日々の糧を掴む為だけなのか？”

人々が歩く音が小さくなっていく

“ただ、日々の出来事を記録する為だけなのか？”

多くの視線が彷徨う

“C a l l — i n g”

その音の発生源——“詩歌い”を求めて

“そんなはずないだろ？そうじゃないだろ？”

視線は“詩歌い”を見つける。全身全霊に只、己自身と向き合う――
“護ノ詩”手を見つける

深く、己に埋没してしまっている青年を

“けつまっ未来に向かう為に――”

アイドリングで出発を待っていたバスの運転手が音を止める。雑音を

“けつまっ未来を掴む為に――”

誰も彼もが、その音色を聞き取らんと音を止める。雑音を

“《幸せな結末》を受け入れる為に――”

感受性が強い者達が……訳もわからず、瞳が潤みだす
その中には――

「じ……じりやあ……？！」

男は時計台の前に居る……“護ノ詩”の青年を見つける

その視界はぼやけており

――見つけた……見つけましたよ……！

胸中で叫びながら…脱兎の如くに走り出す

「ヤック…デカルチャー…!!」

—— “ 詩歌い ” の下へ

視線は捉える。その光景を——
カメラ

只、好きなように、周りを気にせずに勝手気ままに歌う…… “ 護 / 詩 ” の青年を

“ 君の名を呼びたい ”

圧倒される。さながら、初めてスタジアムに訪れた時に感じた熱狂に似た何かを——

その瞳が釘付けにされる

“ 僕の名を呼んでほしい ”
カメラ

視線を外すという考えは浮かばない

ただ、終曲まで——

“ 互いの名を呼び逢いたい—— Calling ”

回し続ける

スカイギターの弦から手が離れる

心に浮かんだ言葉をテキトウに調べに乗せた自己満足の音色が止む

深く、無心に…、埋没——“潜っていた”祐樹が瞼を開けると

手と手が激しく重なり…大合唱を夜空に響かせる拍手の群れ

「うえ?!?!?!」

いの一番に見えた光景に驚く

己に向けられた拍手に

「もしかして…：…僕…?!」

にわかに信じがたいという表情の祐樹

ある種、感動的な場面で締まらない行動に観客から小さな笑い声が上が

「よかったぞ!!兄ちゃん!」

トレンチコートを羽織った三十代頃のサラリーマン

「久しぶりに…：…イイモン聞かせてもらったよ」

バスかタクシーか？白い手袋をつけた男

「ねえ？CD出してないの？」

最前列で大学生ぐらいの女性六人が腰を落とした姿勢から上目遣いき問いかけ

「お金つて……どこに入ればいいのかしら？」

OL風の

女性がお札を持ちながら問いかけてくる――

様々な賛辞に顔が火照ってき……恥ずかしげに一礼して

「ありがとうございます」

感謝を表して、質問に答えてそそくさと機材を片付けだした時――

「通して！通してくれ！！」

叫びながら、人々の群れを掻き分けて……男が現れる
くたびれたスーツの上着を振り乱し、荒い息をつきながら……祐樹の
前に辿り着く

「あ……の……！」

乱れる息遣い。整えるのすらもどかしいと言葉を紡ごうとするも、
詰まらせて

「だ……大丈夫ですか……？」

持っていたペットボトルのお茶を差し出す。男はがぶ飲みして一息
つけると……

「あ…ありがとうございます！あのですね——」

礼を告げながらもスーツの懷から名刺を取り出し

「わ、私…こういう者でして！」

勢いよく差し出される名刺には…

「……プロダクション、フロンティア…？」

会社名と男の名が乗っており——

「あのですね！！………ウチで…デビューしませんか？！」

「へ……………？」

瞳を輝かせ単刀直入すぎる言葉に……………理解が追いつかない祐樹は
間抜け面を晒す……

元々、声が良いのだ

出逢いとタイミングがあれば一角のアーティストには成れる実力を
持っていたところに——

機能によるブーストが着いたら今……

こうなるのは自明の理

知らぬは己のみ

夢見た道——

“護”の青年はどうする？

“ 何で本人に教えないって？……ライバル増やしたくないのよ！

”

b y ゆか

音楽関連は付け焼き刃な知識なんで……

詩はオリジナル

文才も学才もないんで、軽く見てやってください……

二人の女王の器 壺

―列車

―どうするかな…？

見落とす先に捉える一枚の名刺

自信をスカウトした男。通称“チョコビ”の名刺と向き合う

腰掛けた座席。くたびれたファーに背をあずけて心中を洩らすは祐樹

スカウトの件から幾日、仲間達の元から旅立ち…加賀へと戻る道中

―正直、興味はある

胸を張って誇れる特技。ギターにしろピアノにしろ、幼い頃から向き合ってきたのだから

だが―

―けど…声はブーストしてるし

一つ目の疑念は能力ブースト。幾ら認識上では“架空世界”であろうとも

真つ当な努力の末に手にしたモノではない

仲間たちを…みじかな人達と楽しむ為“現実では手にすることがで

きない”モノへの憧れ、様々な感情が入り乱れての獲得……それが祐樹の疑念の一つ

まあ…現実でもブースト分を差し引いても日本の音楽界。もとい、ゆかりが独り占めしたいと思うぐらいの力を持っていることを——
——本人は自覚できていない為だが

——ルックスはない。けど……

…もう、知らん…

——やってみたいな…

それが偽りのない感情で

——でも……皆との時間を削りたくはないだよな…

これも偽りのない感情

——エ…じゃなかった。チョビさんのお言葉に甘えさせてもらっかな…？

チョビの言葉。彼自身は祐樹を表に出して売っていきたいという思いもあつたが

ロンカの件もあり、今は水面下でしっかりと地盤…祐樹との信頼関係。縁を作る等もあり

——顔出しなし。基本的にコッチの都合に合わせるに——

等々。色々とかなり美味しいというべき条件を提示してくれ

—— 契約解除金等なし。但し、契約解除後は日本の音楽業界でのプロ活動はなし

ただ一つの条件はかなりのリスクを孕んでいるかのように見えるが

—— コレで一生食っていきつもらない… 楽しめなくなるなら辞めるだけだ…

ギターもピアノも趣味だ。楽しいからやっているものであって、自分が嫌な思いをする為のモノではない

—— …… やらせてもらうか

思考の海から期間した祐樹。心の底に眠る欲求に従い、決意する

その数ヶ月後——

無名にして一切のプロフィールが公開されない歌手

通称、ユーザーから付けられた名前—— “詩歌い”… ナナシ

突如としてオリコンチャートに表れ、第四位を獲つさらっていく

もはや、呪いの域にまで到達せんとする歌声によって…

さて、季節はまたも足早に過ぎ去り――

「で…その後援パーティーに、俺も出るってこと？」

加賀の黨家の受話器を握る。半纏を着た祐樹

季節は冬。中学一年の冬となり、由紀江が来年度には中学に上がってくる年

「そうだ。……都合が悪いのか？」

固い男の声。父、是親からの電話。共に海外に出た男の後援会。その右腕たる役割を持つ

是親からの滅多にない願い

「大丈夫だよ。ソツチに合わせるし…けど、俺なんかでいいの？」

「先方のゲストに……九鬼の娘が二人参加することになってないてな――」

どこか含みのある声音。何かを隠しているようなそんな声音だが経験と年の功によって、まだ年若い祐樹に悟られることはなかった

「加納は独身だからな…引っ張ってきた手前、こちら側で――」

後援会の運営を行う人物が九鬼を引っ張ってきた故に

「接待。お相手しなければいけないってことか…」

言葉を引き継いで祐樹は呟く

「…すまん。お前を巻き込む形になって」

電話越しからの苦渋の声音に

「気にしないでくれよ、父さん。役に立てるなら喜んで引き受ける」

瞼を閉じて、ほんの少し

「すまん…恩に着る」

「親子だろ？そんな言い方しないでくれよ」

笑みを浮かべながら告げる

「…当日は俺も母さんも出席しているが席を離せんと思つ。頼んだ」

「了解。…精一杯エスコートさせてもらつよ」

そう言い、三言葉を交わした後、電話を切ると

「祐樹さん…？」

そばにちょこんと寄るは由紀江

「なんだい？由紀江ちゃ——」

頬を若干膨らませて…少しむくれる由紀江

「ごめん、ごめん…なんだい由紀江？」

苦笑して言い直す祐樹に満足した笑を浮かべながら

「その…今度のお休みは埋まってしまいましたか…？」

上目遣いに問うてくる

「あ…と、そうだね…外せない用事ができたな…」

問いかけに対してバツの悪そうな表情で頭を少しかいて返す祐樹

「そう…ですか……」

全身でしょんぼりと肩を落とし、伏せてしまう由紀江

「母上が洋服を買って下さるというこなので……」

続く言葉は小さすぎて聞こえはしなかったが——手に取るように理解できる

彼女にとって祐樹は過大評価でもなんでもなく——必要な存在

己のことには鈍感のくせに…他人のこととなると——

「再来週の日曜日」

人差し指を立てながら、身長差のある背を屈めて

「??？」

そんな祐樹の行動に頭に？を飛ばしつつ見上げる由紀江

「その日は俺も服を買いたいから付き合ってくれるかな？」

微笑みを浮かべて、さらに腰を落として視線を同じにしながら

「……はい！」

満面の笑顔で返してくれる由紀江に祐樹も笑で返した

日々は過ぎ――

――こんなものか？

クローゼットに備え付けられた姿見に写る自分を確認しながらネクタイを占める

こういうイベント――行事の時の為に用意されていた礼服

“現実世界”においても変わらない濃紺のスーツにスラックス

占めたネクタイもひっそりと溶け込むような平凡な物

——フレグランス…いや、コロン……も今の年だと合わんか？

大人びて見えても“この世界”の年は中学一年生

——父さんと会ってから決めるか。どうせ、ああいう場に合う物は持っていないし

化粧棚…とても言うべき数々のカフスやペンダント、アクセを置いている台を見やる

この年では絶対に手にできない品物達。その訳は——

——まさか、オリコンに名を連ねるとはな……

今でも、不思議に思う。第四位。発売して三週間後のオリコン

チヨビが各方面に掛け合ってUSENに歌が乗ったことにも心底、驚いていたというのに

——第四位……狐に化かされたんじゃないのか…

軽く息を吐いて、ジェルで髪を全て掬い上げて後ろに流す

オリコン入りの一ヶ月後に支払われた給料やら印税やらの諸々で台の上の物たちは揃っており

——中学生が持つ額じゃなかったしな…。おかげで母さん達にバシるは対応してもらっわ…

その時の記憶がぶり返してゲンナリとする祐樹。——親としての当

たり前を想像してもらえれば早い

——…行くか

ふと時計を見れば、頃合の時間。予約したタクシーに乗って新幹線を経由して…川神の九鬼直系のグランドホテルの行程

長い行程ゆえに、今から黛家を出発する祐樹に

「祐——!!」

玄関で見送ろうと待っていた由紀江が声をかけようとするも

完全にさらされた素顔

「行ってくるよ。由紀江」

そう告げて、祐樹は黛家を発つ

「——はっ?!」

残された由紀江が意識を取り戻したのは

カップ麺がゆうに作れる時間が経過した後であった

——九鬼グランドホテル

所変わって、目的地へとたどり着いた祐樹

日は暮れ、すっかりと夜の街並を照らす一つと化した…周辺でも最高の高さを誇る九鬼のホテル

その扉をくぐった祐樹。先んず視界に入った――M V - A u g
u s t a F 4 C C

さすがに興味を示しているが其処までの通ではない祐樹には分からないバイク

中央に鎮座する。メタリックブラック。四連ノズルのバイクに興味深げな視線を送るのみ

「祐樹」

そんな祐樹へと声をかけるは

「母さん」

母、久子。カクテルドレスに身を包む…既婚の女性

「父さんは？」

「あの人は一緒に挨拶回りをしてるわ」

そう答えながら、エレベーターへと先導する久子

「そっか…」

曖昧な感情がこもる声音で祐樹はつぶやきに

「もしかしたら…今日は話をするのができないかもしれないわね」

答える。二人は到着したエレベーターに乗り込み目的の階へと向かう

そのエレベーターの扉が締まる直前

祐樹にとって、生き方が真逆の男が正面玄関から入ってくるのを知る由もなく――

着いたフロアには様々な人物が居た

有名なプロのアスリート。政界の著名人。財界人。e t c , e t c

およそ、一般の人間が関わり合うことがないような人物達の群れ

その中を自然体で歩く二人に――

「やあ……鹿島――ではなかったな、佐橋夫人」

「久子ちゃん、元気かいの？」

様々な人物。特に男の老人からの親しみの込もった声かけ

それに微笑みを持って返しながらも淀みなく歩いていく

——続いて多いのは

「姫、お久しぶりですね」

「きゅっひめ久姫！！お時間ありませんか？」

同年代。もしくは少し上か下の男達からの誘い

コブつき——祐樹が付いてるといつのに眼中にないと言つぐらいに掛かってくる声に

微笑みを“貼り付けて” テキトウにやり過ぐす母に——

「……モテるんだな、母さん」

顔をある意味で引き攣らせながら、色とりどりの味のある男達を尻目に歩いてく久子へと呟く

——女性陣はお察しく下さい

「めんどくさいだけよ。あの人以外、興味はないもの」

一言で斬って捨てる母

「……さいですか」

「さて、着いたわ。ここから先はあなただけになるから……」

一枚の扉で隔たれた部屋の前に立った久子がそう告げ

「——わかった」

一度だけ喉を動かした後、抑揚に頷く

ノックをする久子

「——開いているぞ！」

年頃の女性と呼ぶべき高い声音が即座に返ってき

ドアノブに手をかけ祐樹は扉を開く

出迎えるは二人

一人はセーラー服を纏い、ヘアバンドで髪を飾った

「ふむ——よく来たな」

女子高生と

「よ——?!?!?!」

声を上げようとするも、祐樹の素顔を直視した途端

女子高生の背へと隠れ、覗き見てくる袴姿の年の頃…小学校低学年
の女の子

両者共におでこを全開にし…額に×印の傷を持つ

九鬼揚羽、九鬼紋白

九鬼三兄妹。その長女と末妹が祐樹を見据えていた

二人の女王の器 式

——九鬼グランドホテル

「初めまして、佐橋是親が息子。佐橋祐樹と申します」

深々と一礼する。腰を折り、慇懃に

「御会いできて光栄です。九鬼揚羽さん。紋白さん」

女子高生——揚羽に微笑んだ後

その背に顔を真っ赤にして隠れる紋白

そんな彼女と目線を同じくする為、片膝を着いて揚羽と同じように微笑む

「うむ。——子息の中では久方の美男の到来だな」

深く頷きながら告げる揚羽と更に縮こまる紋白

その様子に苦笑する祐樹

過去にも素顔を晒した状態で相対する女性は何人かおり

モンと同じような状態になる人を見てきたが……決まって

——左目の傷を見れば全てが嫌悪される

「はは……すいません、見苦しいモノをお見せしてしまいまして…」
トラウマを克服できるわけがない。いかに、“この世界”の恩恵によつて消えたとはいえ

左目の挟られた傷から及ぼされた…様々な“苦痛”が脳裏を過ぎ去る
故に、咄嗟に乾いた自虐的な笑いをあげて

「ち、ちがうぞ…／＼!!」

根本的に盛大な勘違いをしている祐樹の発言に、反射的にモンが返す
最後が尻窄みになりながらも

「くっ…ははははは!!…何、佐橋。私の妹は照れているだけだ。
気にするな」

快活な笑い声を上げて妹に助け舟を出――

「意外と私の妹は、面食いであつてな」

したように見せかけてイタズラ顔でニュアンスを含んだ言葉を紡ぐ

「!?!?!?そ、それは――姉上とて!?!」

さらに真っ赤になって揚羽の裾を引っ張って抗議する紋白

そんな二人に常の――赤の他人が知つた時の反応とは違う二人に

疑問符を三つ四つ飛ばす祐樹

その様子に――

「こやつ……天然か……」

「みたいですな……姉上」

両者共に盛大な勘違い中……

「まあ……いい。結局は中身だからな」

「では……やはり？」

小言とで姉妹は祐樹を見やりながら

「いくら、“ガワ”が良くてもナカが無ければ意味がない」

小言でありながらも凜とした声音がモンの鼓膜に届き

「それも、我か紋。どちらかの人生に深く関わることになるかもしれないというなら――な」

「……」

そんな二人だけのやり取りを内心の不安を隠しながらも……穏やかな姿勢で佇む祐樹を尻目で確認し

「うむ。――では、佐橋？」

腕を組み、不敵な笑みを浮かべながら揚羽は言葉を投げる

「で、依頼はソレですか……？」

言外につまらないと言わんばかりの態度と声音で答える

その声に答えるは…初老を超えたぐらいの年の男

「そうだ。……いくら“我が友”の勧めと言えど、娘の人生が深く関わる」

厳かにして静か。相対する男の不遜な態度等、気にする程のもではないという雄大な態度

だが、自然と力がこもっている言葉

「この眼で確認せねばならん。せねば儂が納得せん」
まなこ

「…へえ、そうですか。ようは私や噛ませ犬となればいいと？」

怠そうな…事実、覇気のない声音で訊ねる男に

「嫌ならば、断ってくれてかまんわんが？」

癖へきとした声音で切って捨てる初老の男

「あゝ……そうは言ってませんがな……。で、どという風にすれば？」
手を左右に軽く振って答え、用件に入る

「大筋はその台本通りだ。後は適当に揺さぶってくればいい」

投げ出すように薄い冊子……2、3枚しか綴られていない髪を放り投げられ

——はあゝ……報酬はいいが、つまらん仕事になりそうだな。おい

不服さを内心に押し隠してサラッと流し読みしようとした時——
——1枚の写真で全てが変わった

「くっ……かか。くっははは……」

突如として上がった小さな笑い声。渴きに苦しみつづけ、やっと、
その渴きを癒せる者と巡り逢ったような笑い

その笑い——歓声が段々と甲高くなっていくのを初老の男はほんの
少し眉根を釣り上げるだけで

「こいつはいい！九鬼さん。ここに乘っている野郎がターゲットで
すかい?!」

「そうだ」

男の様子は変わることなく、歓喜の表情を浮かべて

「はっはっああ——今日はタノシイタノシイ遊びになりそうだ……」

写真——祐樹の姿が写る写真を見て………釈迦堂は嗤った

「興奮するのはいいが、場所を弁えたまえ」

「へえ、すいません」

——パーティー会場

先に言った通り。川神でもトップの高さを誇るホテル

その50階にて本日のメイン——加納太郎の言葉は紡がれる

伝説の声音。知る人ぞ知る——若本ボイス

「——であります。……ご清聴ありがとうございます」

慇懃に締めて、段を降りていくと是親の元へと向かっていく姿を尻目に

「ふむ。―佐橋。お前はどう思った？先の者の言葉」

揚羽の問いかけ。それを興味深く、祐樹へと視線を向ける紋。その二人へと返すは―

「――私見になりますが――」

前置き

「よい。お前が感じた言葉が聞きたい」

鋭く睨みつける。値踏みするような視線を気にすることなく祐樹は紡ぐ

「実直さが顕著に見えられる御言葉でした。先のサミットでの発言も納得のいく発言でしたし…。ただ――」

「ただ？」

一拍切った祐樹の言葉を繰り返す揚羽へと

「ただ……日本の欠けている強気な主張。他国の顔色を伺うだけではないというのは受けとめましたが、細かな部分が鮮明ではなくて…」

バツが悪そうに答える祐樹は視線を壇上にて加納太郎が立っていた位置へと向けていたのを揚羽へと戻す。返ってくるのは――

首を微かに動かして、続きを促す揚羽

揚羽の足元に立つ紋は期待の籠った眼差しで見つめてくる

「中東周辺国との関係。特にサミットは先進国のみで今回の議題で最も上がっていた問題の根幹に位置する国々は、特にデリケートな国、――」

祐樹の言葉に続けたのは

「宗教かの？」

紋

「――はい。そうですね。紋白さん」

そんな自身を見上げながら告げる紋の聡明さに驚きと敬意を持ちながら続けていく

「宗教は厄介です。この国の人々は、大多数が無宗教。この日ノ本の国は元々は八百万の神々等。土地や天候を神と崇めてきた由来が大きい部分もあるため、海外の宗教に対してピンと来る方は少ないですが…やはり、恐い部分が多くを占めると自分は思います」

もう一度切って

「そのデリケートな部分に対して…」

「の発言は一切ない。そうだろう坊主？」

祐樹の言葉を付け足したのは――演説をした当人

「中々……目の付け所は悪くないな。態とソツチに当たらんように話したってのに……しっかりと考えを持ってやがる。さすがは、お前の息子ってことか？」

当人――後の内閣総理大臣の座へとつく男。“この世界”では加納太郎という名の男

「誰もが思考を巡らせれば、行き着く答えだ。そんな褒めることでもないだろう」

冷めた声音で返すは是親

「父さん」

「……久しぶりだな。祐樹」

仕事中……ゆえにだろうか？“天秤座の金庫番”たる顔つきで答え

「――うん」

祐樹も、そんな父の様子に慣れた感じに簡単に返す

そんな親子の対面に

「なんだあゝ？久方ぶりの対面だろうが？もちっと心揺さぶるモンになるだろう？」

加納がそう口にするも――

「「こういうモンなんですよ（だ）家は――」」

両者、均一のタイミングで口を開く

「…………くつくつ。そうかい」

そんな二人。特に是親は声が重なったことに対してか

顔の表情は変わらないまでも、少し赤くなっている

加納は楽しそうな声音でその様子を一捌した時、揚羽の頬が微かに動く。ピクリと

「…で、祐――」

是親の声が上がった瞬間

「――なんだ？停電か？！」

場内の誰かが疑問を口にする。暗闇に満たされた会場内で

その声をかわぎりにざわめきが広がっていく中――

不意に一瞬の悲鳴が

「きゃっ?!——」

「すみませんね……」

男の声は悲鳴をあげた紋の声に遮られ、誰の耳にも入らない

その後続いた全身をフードに隠した男の声は

「紋?!?!」

“揚羽の驚きの叫び”それが響いた時には

紋と男の姿は会場から消えており

「揚羽さん?!」

祐樹の反応が次いで帰ってくる

「紋が……!」

周りを見回しながら告げる揚羽の表情と声。それと言葉に

祐樹も辺りを見回して状況を理解し――

「ちっ……!!」

舌打ち一つ残して、人の群れを掻き分けて室内から出る只一つの場所

扉へと、反射的に飛び出す。祐樹の行動に瞳の色合いを強めながら

……その背を追いかける揚羽

廊下へと飛び出した祐樹は飛びつくようにこのビルの二つの移動手段の一つ

「くっ…！」

呻き声が洩れる。超高速にして音と浮遊感を覚えさせない、このホテル自慢の一つたるエレベーターは

もはや、47階差分。つまり、三階を過ぎた行こうとしている状況それは揚羽にも祐樹にも……このエレベーターを使ったのが――

「どうする？」

紋をさらった人物だということを直感させる。そんな状況で揚羽は祐樹に問いかけながら

視線をもう一つの手段。50階もの階段を駆け降りる手段へと向ける祐樹を試すような表情を内に秘め――ほんの少し表情に出てしまっているが――

…まあ、元来…揚羽は謀などに向かない性格と行動原理を持つゆえに話が少し逸れたが

自身を見つめる揚羽の表情を一瞬だけ、見返して

エレベーターと階段の間を視線が一往復する。エレベーターは最早、

一階に

—— 犯人と同じ手段をとっても、先手は取れない

しかり、敵の軌跡を辿るだけでは…… 永遠に後手

—— さりとて、階段を駆け降りるのも… 無意味

当たり前だが、階段は誰もが思い浮かべる折り返し式。小さな踊り場のある

たった一歩二歩の差でも一秒を争う事態。しかも、それが50階分となれば火を見るより明らか

ならば――

—— 取れる方法は……… 只一つ!!

二つしか手段がないのであれば

作ればいい。達成できる――

跳び出す。揚羽が驚きの表情を完成させるよりも早く…その身は――

手段を、紋を取り戻すことのできる手段を――

夜空へと翔び出す。無数の欠片と共に――

「なっ?!?!」

声が

揚羽の音が祐樹の耳を打つと同時に

風切り音が鼓膜を叩きだした

二人の女王の器 参(前書き)

活動報告でも挙げましたが、CR110からMV Augusta
F4CCへと変更しています

二人の女王の器 参

——九鬼グランドホテル

「ふっ……」

響き渡る。砕け散った透明な欠片達が舞い踊る中

「ははっはははっはっは！！！！！！！！」

甲高い高笑いにして、歓喜の雄叫び

「50階もの高さを一捌しただけで！飛び降りるか！！」

一直線に服をはためかせながら落ちていく祐樹の姿を

割れた窓ガラスから顔を出して見やる

最早……“人間^{ヒト}を図るレベルを超越する”行動を示した祐樹へと

「安易に……芝居に講じる相手ではなかったのは嬉しいが——」

苦みきつた声音で紡ぐ揚羽の視界内に——

「我とてこの高さは無事では済まぬ……。策は……」

——白い燐光が迸る

全身を白色の氣が覆う。両手と両足。その掌と靴底の先から……“炎を象る白色の氣”が現幻する

そうして両の掌を向ける……地面へと——落下運動のエネルギーを相殺、いや……殺しきって舞い上がらんと

両の足裏たる靴底を天空へと向け……滑空——翔け行く

「くっ……ははは……よいぞ！もつと魅せよ……我に……！」

頭を振って、揚羽はエレベーターへと向かう

「お前の全てを生き様を……戸惑うことなく、駆け出し、瞳の色を——我らの為に変えた」

巧妙に隠された従業員用のエレベーターへと

「何一つ打算を浮かべることはない！真っ直ぐな色合いを……！」

「すみませんね……荒っぽい方法で」

「よい。……これも九鬼の一面じゃ」

一階のエントランスホールへと降り立った釈迦堂の言葉に素っ気なく答える紋

「そうですかい。なら、上げますぜ……相手が奴ならガチでいかなきゃ、つまらんなのでね」

「どう……?!」

紋の言葉は置き去りになる。紋では絶対に出すことのできない黒い疾風に乗っかってまっている為に、視界は狭まる

視野狭窄を起こしている為、一瞬。瞬き一つする間もないほどの一瞬でエントランスホールから飛び出した

釈迦堂は遮二無二に車道にあるバイクへと目指す。用意された逃走手段へと

「ところが――」

脳天から突き抜けて、全身を貫く強烈な白色の氣を感じているからこそ

「ぐっ……?!」

「ギッチョン! そう、簡単には捕まらねえよ」

「その声……!!!!」

「おら、追ってこいクソ坊主! てめえの力を俺に見せてみる!」

言葉のやり取りの間に、辺りに破碎音が響く

祐樹の着地音…氣を纏わせた脚部がコンクリートで舗装された大地

を砕く音をバツクに釈迦堂が吠える

寧猛な笑みを祐樹へと送り、紋自身も芝居と分かっている――

「ひっ――」

たとえ、幼くとも九鬼の名に連なる血を宿す紋に……心の底から恐怖を感じさせる。ドス黒い笑み

「早くしねえと、どうなるか……わかるよな――!!」

バイクへと跨り、夜の街へと消えていく。紋を連れて

態と……その態と、共に川神院で過ごすことのあるからこそ

己の渴きを癒すことのできる力を持っていると理解しているからこそ

釈迦堂は祐樹の心を逆か撫^{さな}でる。執拗なまでに――

「釈迦――堂――さん!!」

苦い。とても苦い声音で、それしか呟けないという風に

「佐橋!!」

エントランスホールのドアから走り出してきた揚羽の呼び声に

顔を振り向けるも瞳はさ迷う。求める。手段を――紋を取り戻す為の

「揚羽さん!!アレ——動かせますか?!」

呼びかけに答えるように、指さす先にあるのは——

エントランス中央に位置する。MV - August F4CC

——まだ……諦めないか。ふふ……

心が弾む。今日、会ったばかりの紋の為に

「動かせはできる。キーは差したままだからな……しかし、我にはアレを操作できぬぞ?」

ある物、全てを活用して……今だ追い縋ろうとする祐樹の姿に

「動かせるんですね?!なら——」

返答に返すは行動

——うむ。……従者としては合格

飛び込む。飛び乗る。跳び出す。その姿——

「くっふっ……くははは……」

小さな笑み。口元だけが作る。溢れ出る声音は小さく、己しか聞こえないが歓喜に溢れ……揚羽も行動を共にする

タンデム。いや、騎士が主を連れての一騎駆け。時代は移り行く

荒い息と熱気を上げて命を持つ騎馬は

——冷たい体。大気を穢す息を吐くも、風を超える速さで駆ける…
…鋼鉄の騎馬となり

物々しい鎧。動くたびに鉄が擦り合う音を立てた鎧は

——風を避けるための兜一つ。後は風を纏うだけの鎧となる

「揚羽さん!!」

急速発進。動かしたこと等、一度もない

だが、手にした“力”は——最高位のライダー

己自身を動かすように、至極、当たり前のように扱う。鋼鉄の騎馬を

跳び出しながら、掛けられていた…たった一つのメットを“後ろに
乗る揚羽に被せながら”

何一つ危なげなく車道へと乗る

「う…む…」

——こんな時でも、我への配慮を怠らぬか…行動も心構えも

少々、荒っぽい被せ方ではあるが態勢が態勢だ

むしろ…こんな状態で揚羽にメットを被せる祐樹のライダー能力が
驚異的かつ、配慮が

「それで！どうするのだ？！もはや、相手は見えぬぞ？！」

車道へと飛び出し、国道。それも交通量の多い車道の中を

「手は——あります！！」

“フルスロットで車と車の間を縫って走る”という悪魔の所業をこなす

爆音が二人の声をかき消そうとする故に、大声で返し合う二人

揚羽はバイクについての知識を持っていない。故に、だろうか？違和感を持ってないは？

最高速度…315kmh。デタラメだ。そんな速度は普通に走るには不要

だが、“CC”のイニシャルを与えられたこの機体。他のどんな機体より全てがハイスペックで纏まり

さらに……乗り手が最高位の力を得たライダー。佐橋祐樹によって

全てが過ぎ去るような視界の中でも…揚羽は不安に思うことなく、ただ

その——言の葉に全ての意識を持っていかれる

「Guardian or chivalric romance」
ただ いちまいの たてたれ

一夜で、何度、驚かされた？

揚羽の心中は今、その言葉で埋まる

回した腕で最初に感じたのは平均以上に鍛えられた腹筋

抱き心地としては満足。頬を寄せた背中も背筋がしっかりと発達しており

健康的な男と感じていた物が――

「我……等」

洩らした言葉にハツとする

――我が……等……と無意識に洩らしてしまうか

己と祐樹の差に愕然とする。武に於いては九鬼最強を自負する揚羽

軍事は己。紋は今だ未熟ではあるが光る才能を持ち

弟たる英雄は経済の王となる為に……日夜、努力を惜しまず

そして才能に満ち溢れて生まれいでたと自負している揚羽に

――くっくっ……もらう

見せられた。魅せられた。ミセラレタ

—— コレは我のだ。我の男にする

「しっかり、掴まってください！ 揚羽さん！！」

「ああ、祐樹！！！！」

たった一夜。時間にすれば、たかだか三時間程度の会合だというのに——

九鬼揚羽はどうしようもなく——佐橋祐樹を欲した

二人の女王の器 参（後書き）

デタラメすぎる部分があるが…まあ、まじ恋自身もデタラメ感がすごいし、いいかと

星殺しとか

揚羽さんぽくなってるかが疑問。まじ恋でしか知らないからな…

二人の女王の器 肆（前書き）

これで、本日の連投は終了

二人の女王の器 肆

「はっ！いいねえ！こういう展開を待ってたんだよ！」

犬歯を剥き出しにして吠えるように洩らす

バックミラーに写る光景。バイクが飛ぶ姿

そう飛ぶ。否、翔ぶ。足裏へと溜めた氣の群れ

それを爆発させて、バイクごと自身を天高く舞い上がらせる

「釈迦堂さん！！」

「来いよ！！祐樹イイツイイ！！取り返してみろ！！」

己の腕に抱え込む紋を見せるように祐樹の視界へと晒す

身を縮こませ、恐怖に戦慄く姿。釈迦堂が全開で漏らすドス黒い闘気に

完全に怯える姿。たとえ、九鬼といえど

「ひっ、っ——」

今だ、幼い少女に耐えられるものではない。紋だからこそ、恐怖からの自閉……氣を失うこともない現状

だが、ヘタに耐えられてしまっているからこそ――

地に降り立つ。鋼鉄の騎馬の足が悲鳴を上げる音に関わっている時間はない

着地の瞬間、その瞬間は釈迦堂の車体の後ろに追いつくも

「はっ！追いついたのは、褒めてやるが――」

またも、空を切る。その伸ばした腕は……何も掴めない

「それだけだ！！」

一瞬にして離れてしまう。無理もない、釈迦堂が駆る騎馬も出元が同じ九鬼の物

しかも、釈迦堂が乗る騎馬の方が――瞬発力。直線が強い

「どうするよ？！さっきのようなヤツはもう、持ちやしねえだろう？！」

釈迦堂の下卑た笑いと嘲笑の通り。先の荒業を行使した後の着地で悲鳴を上げているのだ…この騎馬は

世界最高峰のMV Augusta F4CCであろうと、ただひと“只人が成しえられこと”の限界を軽く超えた

動作に追いつけるわけもなく、むしろ今だ…祐樹の轡どおりに応えてくれている事の方が驚愕なのだ

もう一度……同じことをすれば、大破は火を見るより明らか

しかし、このままでは紋は連れて行かれてしまう。故に――

――くっ……致し方ない……！百姉さんに感づかれないのを祈るしかない――！！

気脈は開いた。戦闘態勢は

「揚羽さん！」

自身の背中にピッタリと張り付いている揚羽へと

「なんだ？！」

「“真っ直ぐに進むだけなら”、支えなしでもバランスは取れますか？！」

「？……とれる……！存分に我に見せよ……！」

一瞬のみ、訝しげにするも何かを浮かべている祐樹の横顔。瞳

その答えに――開かれる

「では……行きます……！」

ジャケットに入っていた硬貨をアクセルの溝に差し込む。アクセルが噴きつぱなしになる

その状態で――跳び上がって立つ……

「……！」

釈迦堂の祐樹へと見せる為に姿が晒された為

今だ、紋の態勢は追いすがる祐樹の姿が視界一杯に入る状態

「あ……あれは——」

恐怖に強ばった体が……その白い氣にを見るだけで和らいでいく

護ることを——なくさないために……何人も傷つけさせない。“護”
の青年の姿

法定速度を軽く突破している不安定なバイクに降り立つ祐樹の姿に

驚きと——

「っ——」

自身と刹那の時、今交わされた視線に交じった心

只、紋はその真心に触れる——

圧縮された氣が腕の周りを高速に回転する

どんどんと……その氣は手を成し、指を成し

「玄武——」

拳を作り上げる。“青き魂”を宿す。鉄巨人の拳を——

「これだ！これが俺の餓えを——！」

バックミラー越しに見える光景こそが……待ちわびた者

「——剛弾」

走る。二つの白き輝きを持つ氣で作られた拳が

「次は、ガチで遣り合おうぜ！祐樹イイイイ！！！！！！」

——一つは釈迦堂に迎撃させ——

「きゃっ？！」

一つは紋を救い出す。この攻防によって釈迦堂は

颯爽とバイクを駆って車の群れへと姿を消し

紋を連れた幻影の拳が主——祐樹の元へと辿り着き

「ん……おっ……」

抱きしめる。抱きしめながら、バイクへと跨る

——痛いほどまでに

「い……痛いぞ……」

紋が苦言を言っても、力を弱めずに抱き竦める

「……………今度こそ、守れた」

それは無意識。言った本人すら自覚しない呟き

胸に過ぎる。流血を齎さんとする程の切なさと寂寥……“安心”

——護れなかった。幾多の戦乙女を亡くした世界の呻き

「……………」

揚羽には見えない。紋だけが見える。力一杯、己を抱きしめながら

一つだけ、流した……万感の想いが詰まった滴を——

只、紋は——見上げる。固く自身を手放さない……

いや、己の、紋の存在を確かめんと……失わないという想いが籠る腕の中から

そして——手を上げる。手の甲で拭ってやる

「あつ……………」

声が洩れる祐樹

「お主は――」

飲み込む。発しかけた問いかけを。――なぜ、泣く？という疑問を

顔を見続けていれば、どうしたって引つ込めざるおえない

――ただ、安寧を…護りきれた。もう、元には戻らないナニかを護れたと――

浅ましい思う代償のような想いを……

「す…すみません。なんか、みつともないところを…」

腫ればった目蓋で苦笑いを浮かべる祐樹

痛ましいと。一体……

――この者は…

様々な者達と出会ってきた。その身に、この身に流れる九鬼の血に惹かれて

有象無象の者達、取る足らぬ者

中には…その名を覚えておく価値のある者も居た

本当に幼い身でありながら様々な者達との会合によって目を肥して

きた紋だが――

拭ってもらった涙。その道筋が残ったままの顔で

「怪我…ないですか？」

とても、そう…とても心配げな、不安に揺れる表情で問いかけ

「う…うむ。怪我はないぞ」

ただ、祐樹の様子に気がいつていた紋がつつかえながら答えた言葉に

――複雑な、今の紋では…人生という経験を積み始めた少女にはわからない

本当に複雑な想いが無意識に含まれた笑みは――少女を魅入らせる

その表情を何も考えることのできない…空白のままに

「……さん。紋さん？」

「!?!?!? な、なんだ?!」

意識を飛ばしていた紋に

「どつした？妹よ？」

祐樹、揚羽の順に問いかけ

「い、いえ！！姉上、何も…」

そう答えながらも視線は己を抱える祐樹に釘付け

そんな妹の様子に

——む……。腹違いと言えど、姉妹…か

同じ女性。その視線に含まれる感情。己が持つ感情と同種

故に、簡単に気づけてしまう

——紋が…。まあ、よい。我の目に適うのだ…ならば、必然のこと

内心で冷静に言葉にしているも、表情は……今だ、大事に大事に紋を抱え上げる祐樹を

その背中越しに苦い顔を微かに浮かべてみている。自覚なきままに

そんな姉の姿を祐樹越しに見る紋

お互いが理解する。最愛の“妹／姉”が…この気持ちの敵だと

ライバル

九鬼は天を目指す。頂点へとその血が——王の血筋がそうさせる

だから——いつか、ぶつかり合う

姉妹は“護”の青年を心の頂きをめぐって

二人の女王の器 肆（後書き）

フラゲキャラはこれで終了

後は、辰子のみが確定状態…

親子のち“それぞれ”の想い

―九鬼グランドホテル

「大した……力を持つてるじゃねえか。お前の息子はよ」

男は割れたガラスが散乱する窓辺から地上。50階分の高さから下を見下ろす

「ありゃあ……川神院の上位クラス級の力だぜ……鉄心の爺さんはこの事を――」

「知ってるだろう。あいつは川神院によく出入りしているからな」

「そうかい……」

是親が返す言葉に頷きながら、再び外界へと視線を向ける加納

「“あの力”は……継がれていくのか？お前の中に居る。ク――」

ボンヤリとした、だがこの男の声音だと、とても重苦しく感じる声。本人の心情をもっとも反映させた――

「やめる。その名は――捨てた。“この世界に墜ちた時に”」

塞き止める。二人が止める。その紡がれようとした名を

「――すまねえな……」

「気にするな。私も――俺も気にしねえ」

何時もの冷静。ともすれば冷たき声音が乱雑になる

かつて、多くの戦友と共に戦場を

揺れる天秤

として駆け抜けた時のように……その意思が浮上する

――全て、シナリオ通り。か……

窓から見える月夜を見上げ

――俺が“外れ”。十二宮が崩れ、“理”すらもデタラメ

忘却の先にあるモノを見つめたかのような

――“線”は違えど、“俺は俺”。今の俺も……私だ

「ソディアク原罪とは違う。――“因果の番人”の力」

呟く。己の言葉、己のみしか聞こえない声音で

「太極」——「ロスト・ワールド 失い続ける世界」」

頭を振る

「だが……せめて、“この世界”では——」

親の眼差し。父が子を見守る、不器用な眼差し

血の繋がりは……この出会いとて仕掛けられた道

それでも——願う。“幸せな結末”へと歩き出す息子の為に

願う。それが——親というモノなのだから

——川神駅

日は流れ、再び加賀へと

「……行ってきます」

「ああ。行ってこい」

「行つてらっしゃい」

人々の波間の間に佐橋親子の姿。子を送り出す

穏やかな父。ゆったりとした母。そんな二人に見送れる祐樹

「母さんには、また自分から連絡しと来なさいよ？」

「うん…ありがとう」

空家の件についての事を告げる久子に、祐樹は礼を述べて

「じゃあ…」

来た時と同じ礼服とお土産を持って祐樹は背を翻そうとするも

「祐樹。九鬼の娘さんからだ」

懷から白い封筒を取り出し手渡す。無言のまま受け取り

軽く首を縦に振って歩き出す

「…いいのか？教えておかなくて？」

「ふふ…いいのよ。帰ってきた時のサプライズってことで」

是親の言葉は背を向けた息子へと注がれた視線のままに紡がれ

そんな是親に含み笑いで返す久子。手に持つバッグの中には――

「京ちゃんは、あの子のお嫁さん候補よ？私にも良く懐いてくれるし」

リフォームの書類

「義^{むすめ}娘が欲しかったのよね」

夢見心地に瞳を閉じて呟く

事は京から久子へと告げられた一言――

「あの……久子さん。京です」

受話器越しに久子の名を呼ぶ京

「なあに？京ちゃん」

呼びかけに答えるは海外へと出ている久子

この電話、祐樹が加賀で過ごしている間のモノである

「その……折り入って相談が……」

ポツポツと受話器のコードを弄りなが京は告げる

現在の状況。そして――

「高校は川神――祐樹と一緒に過ごしたんですけど……」

そこで一度区切り、息を飲み込んで

「住む場所が……無いんです。それで――」

「家に居候したいと？」

やんわりと久子が告げると

「はい」

即答する京

「うーん…たしかに祐樹が戻ってくるけど——」

受話器越しから小さな唸り声に

「けど…？」

京も小さく訊ねる

「やっぱり、年頃の二人だけで同居はねえ…」

もつともな答えだ

「ダメ…ですか？」

今にも消え入りそうな呟き。だが――

「二人だけはね」

「！！では――」

「ふふ…。ここは久子さんが一肌脱いであげるわ。お嫁さん候補の

お願いですものね」

鈴の音のような声音で告げる…その言葉に声は出さずとも京は小さく拳を握り、天へと掲げる

——外堀。埋めてきた甲斐があつた！

京の性格を知る者なら、わかるであろう

彼女の行動を。目的を達成する為に努力を惜しまないことを

そんなことを露とも知らぬ祐樹

改札を抜け、ホームへと辿り着く。電車が来るにはまだ時間があることを電光掲示板を見上げて確認し

懐に仕舞った手紙を取り出そうとした時——もう一つの物が自己主張する

“ P e r f e c t B a l a n c e D r e a m e r ”

携帯着信音に設定した音色

向かっていた手を携帯へと変え、折り畳み式の画面を開けて着信画面を見る

登録されていない090から始まる番号

「誰だ……?」

見覚えのない番号に首を傾げる。その間にも鳴り止む気配のない電話着信に出るだけなら実害はないと判断し――

「もしもし……?」

「遅い!! 我からの呼び出しには即座に反応せよ!!」

開口一番の理不尽な一喝。しかし、その声音を持つ女性の言葉となれば――

「は、はい! 九鬼さん!」

思わず姿勢を正して答えてしまうの通り

「うむ。良い返事だ――が!」

満足したように最初は呟かれるが…

「苗字は好かん。我の事は揚羽と……愛しさを込めて呼べ」

次は不機嫌に……最後は毅然と微かな情熱を込めて言い切る

「あ…揚羽さん…?」

状況について行けない祐樹。洩らすように揚羽の名を呟く

「むう……祐樹」

その呼び方にむくれたような声音で呻くも

「——仕方ない。まだ“今は”よい」

“今は”の部分を強調して

「あ、あの……」

さらに言葉を紡ごうとする揚羽を止める為に、遠慮がちに声を上げると

「ん……。どうした祐樹？」

「いや、あの……揚羽さんこそ、どうして？それに……自分の番号をどこで？」

素朴な疑問。番号しかりに用件を言わない揚羽

「我は九鬼ぞ？番号等、瞬く間にわかる」

何を当然のことを？——という具合な答えに

「そ、そうですか……」

後頭部に汗を垂らして、呆然と頷くしかなかった

そんな祐樹に電話越しに咳払い一つして揚羽は

「で……まあ、用件なんだが——」

今までのハキハキと答えていた声が急に尻窄みになっていき

「と…特にない」

揚羽でもこういう声音を出すのだろうか？付き合いと言っても高々、一夜を共に過ごしたただだが

バツの悪そうなしよぼくれた声を紡ぐ姿がどうしても浮かばない祐樹は

「は…はあ——？」

なんとも気のない返事を返してしまったがため

「よ…よいではないか？！強いて言うなら私の番号の通知をしたかった——！」

受話器越しからでも今度は想像できる。烈火の咆哮のような姿

祐樹は浮かばなかったが……実際はこれに頬を桜色に染めた姿が正解

「こ、これから。何か困った時は、我を頼れ！忙しい身ではあるが…なるべく時間を取る」

最初は吃りながらも、最後はなんとか平静を取り戻していき

……呼吸を整える

「我は——」

ほんの少しの空白

—— お前の声が聞きたい云えな……

唇のみが動く。音にすることはしない

目蓋を閉じ、口元は微笑みを作れば——自然、その表情は——

心地のいい無音。揚羽は胸中でそう感じていると

「自分に」

無音を破るは祐樹

「俺に出来る事があれば、連絡してください」

真心を持って接してくれる者に対しては必ず

「何時、如何なる時でも——この身在る限り、参じます。あなたの元に」

返す。己の真心を持って

「——。ああ」

——言葉にするか…大それたことを…しかし、

普通ならば…そんな言葉はセリフにしかない

ドラマや御伽話の中の戯れのような会話にしか出てこない言葉なのに――

――お前は…必ず――

そう思ってしまう。納得してしまう。揚羽は

――好いた男だから………ではない

直感。それは王の直感。ただ、理論や根拠に基づく納得ではなく

感情が想いが納得する言葉

再び、心地よい空白が横たわるも――

――四番線に…

「……来ました」

「そうか」「はい」

「では、な。また連絡する。お前も…些細なことでもよいから…連絡せよ」

「…はい。お言葉に甘えて」

ドアの開く音を合図に――両者は同時に切った

——あっ……そう言えば

揚羽との電話が終わり……電車から新幹線へと乗り換えて

一息ついた祐樹は直前の行動

——手紙……聞いておけばよかった……

取り出した白い封筒を手に取りながら心中でボヤきながら開けると

……一通の書類

「は……？」

思わず声が出る。入っていたのは——雇用契約書

内容は……九鬼紋白。専属の執事契約

「あ……れ……？」

呆然と呟く。その白い紙に黒の活字が乗った用紙を手に持てば

さらに一枚……契約書の間から——可愛らしい便箋が顔を出し

そちらに視線を走らせると

“ 我の連絡先をしたためておいた。連絡、待っておるぞ！！ ”

便箋には不釣合な達筆で書かれた文字

「……………」

息を飲むことしかできなかった…

なお、余談ではあるが前回の一件

祐樹の無免許運転は九鬼の芝居ゆえに

九鬼自身が事後処理を行い、祐樹と揚羽―同乗していた為―に御咎めなくするためと

さらには、その運転技術を引っ張る為と迷惑料という感じに日本でも通用する

特例国際免許の発行―――げに恐ろしきは権力と財力であることを

まざまざと見せられた祐樹には…上のような状態になるしかなく…

これで“アグスタ（九鬼魔改造仕様）”すらも届くという事実をこの時の祐樹に知りえる手段はなかった

処は変わり

「人…？」

二階から数多の笑い声。しかし、今立っている玄関にある靴は宿主と己の靴のみ

——また、あいつらか…

心中にて溜息を漏らしながら、家へと上がる乙女

そう、ここは対馬家

——これで、何度目になるか…

さらに、深いため息を吐くも生来の性格ゆえに——

声は目の前の扉越し、ここからでも中の会話がよく聞こえる程の声

息を吸い

「こら！お前達！！何度も言っているだろう！！玄関から入れ！」

一気に扉を開け放って一喝する

その声に反応する。アコースティックギターを持ってクローゼットに凭れるフカヒレ

ポテチの袋を広げてクッションに肘を付いて寝そべる力二

学習機の椅子に片膝を立てて座るスバル

そしてー

「お帰りー乙女さん」

ベッドに座るレオ。覇気のない声音で乙女へとやんわりと挨拶する

「……ああ、ただいま。レオ、お姉ちゃん…いつも言ってるよな？」

これまた何度目になるか――

「ああ、うん。分かってるよ。俺からも言っておくからさ」

レオもいつも通りのセリフで返す。告げる気のない幾許かの煙たそうな答え

その言葉が出て一拍した時、フカヒレは手元にあるIPODの簡易コンポの音を流し出す

「――ぐっ…」

ほんの少しの然め面。聞く気もないのは百も承知

――元々…私が途中からしゃしゃり出てきたのはわかっているが

――
完結していたコミュニティの中に土足で上がり込んで注意しているのは自覚している

彼らにとって自分には必要のない因子

再度、胸中で溜息を吐こうとするが――

「ん…？」

流れてくる音に既視感を覚える。この音は

「これ…知ってる。――曲風はちがうし、男の声だけど――」

コンポの方に顔を向ける

「え、うそ。マジっすか?! 乙女先輩知ってるっことは――」

反応するはフカヒレ。この原曲が採用された物を知っている故に

色めき立ち、顔をニヤけさせて

「いや〜…知らなかったすわ〜乙女先輩もエロゲーするんす――」

不快にさせる笑みが粉碎される。前が見えねえ状態に叩き込む。容赦なく乙女は

「エロ?!?! 知らんぞ! 私は小さい頃に女性のヤツを聞いたことがあるだけだ!!」

真っ赤になって捲し立てる乙女に

「その女が歌ってる奴が原曲。つまりはエロゲーに採用されたヤツなんすけど…」

顔面陥没状態でも声を上げるフカヒレ。彼は……書くことねえな…

「まあ…つつても、エロ要素はおまけ。物語で売ってる作品ですからエロすつとばせば、乙女先輩でもハマリそうなゲームなんですけどね…」

いつも通りの表情に戻ってあっさりと言い切るフカヒレ

「いや…でも、俺もびっくりだよ。一応、俺も知ってるし…内容は泣きゲー…ああ、これいいお話って意味ね——でも、まさか乙女さんが…」

感慨深げにレオは告げ

「いや、だから！私は幼い頃、祐樹に聞かせて——」

その曲を。“とりのうた”を共に聞いた者の名を告げた時

思い出す。あの時——ほんの少しだけ口ずさむように歌っていた祐樹の歌声を

「——祐樹だ……これ」

声質が変わろうとも、好きになった男の、それも幼き頃の一番の思い出の中で歌った歌声を——忘れるわけもなく、間違えるわけもないこれだけは乙女の特権。他の誰も祐樹の歌声は…生の声を聞いた者

は仲間達にすらいない。カラオケで歌うような場合とはまた違うのだから

足がふらつくように音源へと向かい、ペタンと女の子座りになってコンポを持ち上げる

「祐樹って…それ、歌手違いますよ？たぶん…乙女さんも知ってる人じゃないかな？」

そう言つてフカヒレは周りへと視線をさ迷わせ

「おら、フカヒレ。これだろう？」

持っていた雑誌を投げ渡すスバル

「サンキュ。これこれ」

ページを捲る。フカヒレが乙女にみせたのは1ページ丸々使った

「……“突如、現れた？！”ベールに包まれたアーティスト？」

見せられたページの見出しを読む

「そー！彗星のように現れ、初登場…しかもなんの宣伝もしないままに口コミとUSENだけでオリコン四位を獲得した男性アーティスト！！」

勢い込んで喋るはカニ

「俺ら、ユーザーが付けたとされる名前が——通称、“詩歌いの

ナナシ”」

「あつこら！レオ、僕が言おうとしたのに！！」

割り込んで告げたレオにカニが喰って掛かりだし

「まあ…その“詩歌い”が出したカヴァーアルバム。デビュー曲のすぐ後に、少しだけ生産されたアルバム。たぶん本人の趣味がメインかな？アニソンとゲーム主題歌が多いけど…普通の邦楽と洋楽もあつたな〜」

曲目をに目を通しながら

「けど——500枚も物がなかったらしいし、販売されたのは川神、七浜、ココの専門店」

そう告げながら人差し指を立てるフカヒレは

「しかも、どこの店も老舗って、いやあ…聞こえはいいけど、大型チェーンに客取られたとこばっかの店だけしか入ってない。つまり——知る人しか知らない店にしか置かれなかった物なんだ」

チヨビの人脈で置かせてもらえたのが三店。当時は“呼び声”——
—オリコンを採った曲——もUSENに乗ったばかりであり、知名度がなかったゆえ——

「って、聞いてます？乙女先輩？」

意気揚々と説明していたフカヒレだったが……聞かせる相手の乙女がコンポに集中しきって意味がなかった…

「これのCD…譲ってくれないか？」

……

「って、聞いてなかったっすね…物が少ないから、最早それプレミアついてますよ！」

肩を落として乙女の態度に嘆きながら答える

「プレミア？　いったい幾らなんだ？」

値段を問う乙女。制服のスカートのポケットからガマ口財布を取り出しながらだったのだが…

「ネットオク…わからないっすよね…。時価で諭吉さんになってますよ」

言葉の意味が多分、理解出来ないと途中で判断したスバルはのんびりとそう告げた

「諭吉……？　一万もするのか……？！」

告げられた言葉を噛み砕いていった結果、手から力なくガマ口財布が落ちてしまう

顔は驚愕に染まり、弛れた態度のスバルに再度問おうとするも

「ええ。まあ……でも」

「でも！俺も嗜んでいるんでね…すいませんが譲れないですよ」

スバルの言葉を引き継いで――普段の茶化した態度を改めて真顔で申し訳なさそうに告げるフカヒレ

「うつ……」

さすがにフカヒレの態度に無理を言えるわけもなく、そもそんな大金をポンと出せ――

いや、乙女の場合…祐樹が絡めばどうなることが…

「ウォークマンとかIPODとかに移すとかなら…いけるよ？乙女さん」

一瞬、空白にして重い空気となってしまった場を一掃するために助け舟を出すレオ。だが

「うおーくまん？あいぽつど？移す？」

極度の機械音痴の乙女にそんな単語が理解できるわけもなく

「え〜…とね、乙女さん――」

見かねた力ニが説目していく。1時間ほどな！！

「取り敢えず…そのウォーマンがIPODという物を持ってくれば聞けるんだな？」

「『『『ええ……そうですよ』……』』』」

結果、四人は力なく答えるのみ。精も根も突き果てたという姿で…

つよきすの鉄乙女を知る者ならわかるであろう

彼女の機械音痴の凄まじさに。微か数秒…パソコンの画面を見ただけで

デジタル酔いを起こす彼女を知る者なれば

「よ…よし！とにかく善は急げだ！買ってくる！」

そう言つて飛び出した乙女に

「………買つてくれるかな。乙女さん………」

皆、思うことは同じであつた…

さて、結論から言つと――

深夜と言っても11時位だが、IPODから伸びるイヤホンを持つて悪戦苦闘する乙女の姿

――む…難しすぎる！店員は簡単に使えると言っていたが

案の定、豊富な種類を前にしてこんがらがってしまった乙女

店員を捕まえて事情を説明。その店員は良かれと思ってパソコンを持っている——レオが——という話を踏まえてIPODを勧めたのだが——

「うつ……くつ……ええい……!!」

かれこれ二時間の孤軍奮闘。自覚はある。…無闇やたらに押しまくっては——

——これを壊してしまったら——

湯気が立ちそうなほどにヒートアップした頭でも抑え込む

——祐樹の声が聞けなくなる!!

その想いを胸に取説と戦い続け——

「……よし……!!」

思わず拳を握り締めて感嘆を上げる。イヤホンから漏れ出した音を耳にして

イソイソとイヤホンを両耳につける

「あつ——」

声が洩れる。洩れ出てしまう

幼い頃、祐樹と共に聞いたあの曲

それを今度は――

「祐樹」

甘め。その歌声は甘い…夢を見せる青年が紡ぐ口調のように

乙女の鼓膜を優しく震わせる

頭を敷いた布団にゆっくり落とす。女の子座りの態勢から

視界が部屋の中央にぶら下げられた和風の蛍光灯を映した後――
――閉じられる

「会いたいな…」

我知らず――

寂寥が詰まった声音で

腕を顔の前でクロスさせて

その隙間から見える

赤い唇が呟いた

ひとすじのしずくとともに――

親子のち “それぞれ” の想い（後書き）

フカヒレの乙女さんの呼び方が違うような…？

礼の武士娘＋健康的な不良＋護の青年〃“誠”の武士娘の願い

―加賀 黨家

時が待つことはない。カレンダーは誰もが捲つていかなければなら
ず…

今は――

「ちよつと……暑いな」

短い命を劈くような鳴き声でひたすら姦しく喚く虫達が居る季節

「由紀江……そろそろ行くよ……」

「ははは、はいいい！！！！すぐ、参ります！！！」

祐樹の少しだけ力のない弱い呼び声に、襖を慌ただしく開けて

顔を出しながら返す由紀江

その身に待とう服は――祐樹と同じ中学のセーラー服のブラウスに
一年生を表すりボンと

紺の無改造……丈を短くすることもしてないスカート姿に革の学生
鞄と――原作と同じ刀袋に納められた日本刀を持ち

「祐樹さん！」

小走りでやって来た勢いのままに呼び声を上げる由紀江

「ん…じゃ、行こっか？」

「はい！」

満面の笑みを浮かべて頷く由紀江と二人仲良く家を出る。前を祐樹が少し行き

由紀江はそんな祐樹の手に自身の手を絡めてご満悦

常ならば…笑顔を浮かべようとすると、メンチ切って威嚇しているような顔つきを

晒してしまう由紀江だが――

「何時も通り、ゲンを迎えに行こう」

事、身内……と言っても妹以外――由紀江の妹は、また…この先のありえるかもしれない未来の道^{ルート}までスポットは当たらないが――の父母。そして

「はい。源さんとの何時もの“合流”場所ですね」

祐樹のみ。その朗らかな…年の近い男を魅了してしまう程に輝きに満ちた笑顔を見せてくれる

だからこそ

「……ところで由紀江……どうかな？作れたかな？」

無意識に――

由紀江の……風が吹けば綺麗な波を見せるであろう長い黒髪に手ぐしを

一度だけ入れて微笑み……問う

「あ……え……と……その……」

満ちていた笑顔が曇ってしまう。由紀江を知る者ならば分かるだろう

彼女の目標――友達100人計画。本来の道ならば、今だ孤独な道を歩んでいる由紀江

「……問いておいて、アレだけど……気長でいいんだ。その内、自然に出来るよ――由紀江なら」

詰まってしまった由紀江にやんわりと告げる

祐樹自身、ここで暮らし始めて理解している――この地では、もはや由紀江を友と思えるようになる年が近い者は居ないと……

心中、複雑ではあるが……頼み込んでなるものではない。友達とはだから祐樹は大成が言ったとおりに、川神での“本番”の練習と位置づけて

「今は…リラックスして話しかけられるように心がけような?」

「…はい!」

微笑みと共に頭を軽く撫でつけて、由紀江の擦ったそうでありながらも微笑みを浮かべる姿に満足する

「…たく…この暑い中、手つないで登校かよ…」

そんな二人に悪態をついているように見せかけて

「おらよ…。ガバガバ飲むなよ?体によくねえからな…」

何時もの、そう何時も祐樹はゲンが通る時間につくようにしている
小さな橋の反対側から乱雑な言葉と共に歩みつつ、一本の缶ジュースを投げてくる源忠勝の姿

「ありがと、ゲン」「源さん、ありがとございます」

冷えたオレンジのバヤリースを受取りながら礼を言う二人に

「ケツ——てめえらの“お節介”の意趣返した」

そう告げて、さっさと前を歩き出すゲン。ゲンの言う“お節介”とは
昼の弁当のこと。昼は滅多に食わないゲンに祐樹は当然のごとく…
手製の弁当を渡していくこと

最初は予想通り、受け取ろうとしなかつあが…

食材が無駄になったと小さく、あざとく、呟いてみたり

2人も3人も変わんないんだよね〜ボヤいてみたり

とゲンの専売特許たるツンデレ発言のように言ってみる——もちろん、ニソニソと色々と悪辣そうな笑顔を浮かべて

まあ、色々と手を打った結果…受け取る羽目に陥ったゲン。もちろん習慣となるのは必然である故に

今でも——律儀に礼を返す。マメな男である

「ありがたく頂きます。由紀江、はい」

プルトップを開けて由紀江へと手渡そうとすると

「祐樹さんが——先です！」

缶の口元。祐樹の唇。その両方に交互に微かずつ熱い視線を送り

力強く宣言する由紀江に対して——

「???じゃあ、先にもらうね」

少しだけ、訝しげになりながらも祐樹は口に含む

——由紀江の喉が鳴る。つばを飲み込む。そんな姿が缶へと集中している為、気づかない祐樹は三分の一程飲んだ後

「は——」

缶を差し出す。それおを両手で受け取る由紀江。表情は

「はぁ…」「????」

落胆していた…。まあ——後の由紀江の為に缶に口付けない、如何せん…離し飲みで飲んだ祐樹の行動に

気を取り直して由紀江は一口、二口、口付けて飲み

「はい。祐樹さん、私はもういいので“気にせず”飲んでください」缶を返す。態々“気にせず”という言葉強調して

表向きは飲み干しても構わない。——裏は口付けて飲んでも構わない。いや、むしろ口付けて——間接キスを…

自分で言った言葉。瞬時に考えたコト。顔から火が出たように赤くなる

——あううう…。わ、私は…

テンパったかのように瞳を白黒と忙しく変える。自身で言った言葉に

「ありがとう」

だが、まあ——由紀江の変な期待は成就されるわけもなく

最初にそう飲んでいるのだから、気を使っているのだから

由紀江の心底に眠る想い的には……“そんな、気遣いは不要です!!”と恥らないがらも告げたい

実際には絶対に告げられないような言葉が表す想い故に

「はううううう」——わ、私は、なんて破廉恥なことをー!

「元気出せよ。まゆっち。チャンスはいくらでもあるって」

祐樹の飲み干す姿に呻く由紀江を励ます松風

「つたく…おら、行くぞ。二人共」

そんな、やり取りを呆れたように、けれど律儀に待っていたゲンの言葉が二人に掛かった

暑い夏の学生の日常がそこにあった——

—川神院

「爺」

冷たい百代の声。何人をも萎縮させるような禍々しい眼光を持つて、呼び捨てるも

「なんじゃ…馬鹿孫娘。もちつと年寄り労わらんかい」

武神相手には意味なく、スゲなく返される

「恍けるな爺！！昨夜の氣を感じなかったとは言わんさんぞ！！！」

瞳の中にドス黒い…戦闘衝動を満たせながら吠える百代

時系列的におかしくなるが——この二人の会話は祐樹と釈迦堂の一戦後が明けた、翌日の昼のこと

「一方は釈迦堂さん…。それも“本気状態の釈迦堂さん”を超えるほど！！それなのに——」

犬齒を剥き出しにして続ける

「それなのに…爺、おま——」

「ああ、知ってるよ。——“白色の闘気”の持ち主を…の」

長い眉毛の下にある細い目。眼光で百代以上の剣呑さを醸し出して百代の言葉を断ち切り

その片方の瞼を上げて——

「じゃが、教えん。物の言い方を特に弁えんお前にはの——小娘」

禍々しくはない。晴れ渡る程に澄み切った——しかし、川神百代でも背筋に冷たいモノを感じさせる闘気

いや、覇気を持って射貫く

「じ——」

それでも、なお問い質そうと言葉を紡ぎかけるが

「まあ、それで納得するお前ではないしの……。取り敢えず、お前には教えられるものは教えておく」

呆気ないぐらいに陽気な声音で鉄心が告げる

更に眼光が怪しくなりかける百代の姿。瞼を閉じて好々爺の表情で紡ぎ出す

「あやつは………戦い自体を好まん」

紡ぎ出され始めた言葉を黙って聞く百代

「お前も…昔、感じたことはないかの？ 儂ら以外の大きな氣を」

コクリと抑揚に頷く。百代が思い返すは小学生時代に感じた――

「年はお前に近い。お前は知らないかもしれんが――世界に対して儂に挑戦できる資格は百。お前かその者に勝った者だけじゃ」

「私――以外にも試験役が……!!」

「そうじゃ」

考えもしなかった事実には啞然となる百代に頷く鉄心

「だったら何故?! なんで、私に会わせてくれない?! 爺! お前が試験役にするぐらいなら——」

——私の、私の全力を受け止められるはず!!

そう告げたい。幼い頃より抑えてきた戦闘欲求を完全開放して

ありのままの自分を受け取め、返してくれるだろう……その者を欲する百代の心根がわかっていても

「……言つたじやろう。戦いを好まんと。あやつは——」

己の瞳が見てきた。幼い頃から、ずっと、鍛錬してきた祐樹の姿

何が彼を駆り立てるのか? 何があつて“彼を作ってきたのか”?

その瞳に——黒曜石のような瞳のナ力にある……想い

「何を見て、何を感じたのか……幼い頃から見えてきてはいるが、儂には判らん……」

頭を振る。その表情は……武神であり、老耄であり、孫を心底…心配する男の姿

「一体——“どんな経験すれば……ああなるのか”」

因果

「多少なりともイザコザはあつた。あやつの心根に働きかけるよう

な——だが、しかし」

さらに頭を振る。後悔だけが残る表情

百代はそんな鉄心の様子に驚くしかなかった

自身の祖父が初めて見せる……その表情に……黙って聞き続けるしか

「本質的に……」——己を二の次とする。失うことが——怖
ぎて

残りは心中で吐かれた。

それは因果。全ては繋がっている。漏れ出している

願い、欲した……戦乙女達の未来

しかし——彼には彼には護れなかった。むしろ……本来、死すべ
きではなかった命すら散らせてしまった

“偉大な力”を、“誇り高き生き方”を、借入れているにもかかわ
らず

——卑怯チートな力を使っても佐橋祐樹は護れなかった

だから——心の底から

「……あやつが拳を振るう時は……“護る時”。あやつの護るべきモノ。
失いたくないモノが危機に晒された時だけ——」

それが正しいかどうかではない。佐橋祐樹の心が決める。振るうべき時を——決める

武が何なのか自身に問い続けながら、力が示す先にあるものがなんなのか——

「モモ。お前の辛さもわかる。だが……“力”が齎す結果を熟知してしまっておる。あやつは——」

立ち上がりながら伏せて固まったように座っている孫娘にそう告げ去る

「私は」

完全に鉄心の背が消えたとき

「それでも」

零す。伏せた顔のしたにある表情は困惑に満ち、切なさが宿る眼差しを

——求める相手に贈るように流しながら

百代は心の底から願う

「会いたい」

——己を受け止めてくれる。己の全てを受け止める者を欲す

“勇”の武士娘＋皆の“ヒーロー” Ⅱ 恋模様？

― 川神院

読書、食欲、運動…そして、恋の季節

ひと夏の恋とはまた違った模様を見せるであろう――秋

「あう…でも…祐樹い…」

涙目になりつつ、呻くような声音で電話越しに一子が囁くのに対して

「…デートはデートでも、遊びの延長線なんだろう？そんなに重く考えなくてもいいだろうに……」

ともすれば楽観的な物言いで一子に答える祐樹

今年度も終われば…いよいよ高校生となる年の秋に一子は祐樹へと

「でも、私…九鬼君のこと、苦手だし…」

相談。九鬼英雄。本編の中においても一子へと求愛し続けていた九鬼の長男にして揚羽の弟

「当人を知らん俺には…何とも言い難いが……苦手なら受けなれば

よかったものを……」

溜息を吐きながら告げる祐樹に――

「だつてえ〜」……」

犬耳をへたり込ませながら、鼻声で呻く一子

「押し切られたとしても、承諾したからには……な」

「ううう……」

「唸つても仕方ないだろう？――一応、“デート”の形で誘つてきているんだから……整えて行くだぞ？最低限の礼儀だからな？」

「わかつてるわよお……」

小さく掠れるような不貞腐れた言葉で不承不承の様相かつ

観念したような……力のない声音で頷く一子

アレコレとやり取りを交わしてその日の電話はコレで切ることになった

そうして、一子が乗り気でないイベントの日

――うーん……こんな感じでいいかな？

こげ茶色のハンチング帽子を載せるように被る為、何時ものポニーを解き

黒の長袖のプリントＴシャツ。かの有名なディステイニールランドのマスコット。ネズミの王様

その上に帽子の色合いと同じジャケット

濃紺の膝下に5cm程伸びたスキニージーンズ。裾に値する部分にスリットが少し入った物

女の子の子した服を好まない一子

1に機能性。2に機能性……兎に角、動きやすい服を好む故に

それは、女の子としてどうなんだ？と祐樹や京、百代の口出しによつて買った

お出かけ用……オシャレ着の幾つかを手元に出す

——だいぶ、取れちゃった……

鼻をひくつかせてジャケットの匂いを嗅ぐ一子

——祐樹のフレグランス。今度、聞いとかなくちゃ……高くなかったらいいなあ……

そんなことを思いつつ、ちよつと憂鬱になる

ジャケットの匂いを嗅ぐという行動から分かるとおり

元々は一子を買った物ではなく…男物。祐樹が自分自身用に買った物なのだが――

不運というか、不注意でクリーニングに出した方がいいが生地を記入する紙

そのチェック欄を間違え…返ってきた時には縮んでしまっており――着れなくなってしまった

故に、一子の手に渡った次第

…京と百代？彼女達はその母性がアダになってしまったと言っておこう

なお、フレグランス転々は祐樹が服に直接、少量吹きかける為だ

「あつ…時間！」

姿見で自身の姿を確認していた一子の瞳に鏡越しに時計が見え

身支度を終わらせて家を出た

―川神駅　ロータリー前

定番の待ち合わせ場所。特にカップルにとっては

しかし――

「一子殿！……！」

周りを過ぎ去っていく人々がその声の大きさに驚き

「あ……ははは……九鬼君……」

そんな、満面の笑顔で自身を迎える英雄に苦笑いしか上げれない一子

「うむ！普段の一子殿も良いが、その姿も中々に……！」

興奮冷めやらぬ英雄は首を上下に振りながらも一子の服装に賞賛を贈る次第

「あつ、うん。ありがとう……」

乾いた笑いを上げ口元をひくつかせながら、力なくやり過ごす

「では！参ろうか、一子殿！」

そう言つて一子の手を取る英雄に対して

「ちょ――」

帽子が落ちそうになり片手で抑えながら

「まずは、デイスティニーランド……この日の為に借り切っており

――」

意気揚々と紡ぐ英雄の言葉に

「ちょっと、待って！九鬼君?!?!」

目を白黒させて一子がストップをかける

「ぬ?どうなされた?一子殿」

「待って!待ってよ九鬼君!!アタシ、そんなところ行けないよ?!」

あの有名な施設を借り切つてなど、一庶民たる一子には恐れ多すぎてあらずさむ

行けるはずない

「好みではなかったですか…?」

訝しげに一子を見やりながら、少しだけ肩を落として問う英雄

「スケールが大きすぎるわ?!ア、アタシは普通の…その、で…遊ぶのがいいの!」

叫ぶように告げ、後半は…そう言いたくない一子はボカシて英雄を見上げながら呟く

「うむ…。仕方ない。一子殿が乗り気ではないならば、無理強いしてもな…」

唇をほんの少し歪めるも

「して、一子殿？何処か行きたい場所などはありませんか？」

すぐに不敵な笑みと腕組みで一子へと問う

そんな英雄に眉間に小さくシワを寄せて考え込み

「…ゲーセンかな？」

困ったような笑みを浮かべて、頭に浮かんだ無難な答えに

「ゲームセンターか…。行ったことはないが、コレもまた運命の導き！一子殿が私の初めての連れ添いとは…。我が星は輝いておるな
！！」

常のテンションが一子にはマシに見えるぐらいにヒートアップする
英雄

「あつは…ははは…。こつ、こつちよ。九鬼君」

困り果てたような、疲れた笑みを浮かべながら先導する一子

そんな二人を――

「ちっ……」

――あのワン公め…！英雄様とあんなにくつつきやがって…！！

眞実は英雄に腕を引つ張られるままなのだが…彼女の目には

——しかし…！私は従者。主の御心のままに行動せねば…

忍足あずみにはそう見えるらしい…

今も、面白くなさそうに齒を少し噛み鳴らして見つめている中

——うん？あいつは……？

彼女の視界に、目元まで覆ってしまった前髪を持つ男

佐橋祐樹の姿が映った

——…。只の出歯亀じゃん…俺…

溜息を洩らしながら見つめる視線の先

アイスホッケーに興じる英雄と一子の姿

時折、一子がコツでも教えているのだろう。英雄へと寄って何かを
交わしている姿に——

——はあ…何やってんだろ…。心配になったからって…ココまで
するのは変じゃないか…

改めて行動のお節介さに情けなくなり

——まあ…俺以外にも二人の様子を見てる人居るし…相手は揚羽さんの弟さんだし、当然か…

何処に居るか…流石に隠密が専門ではない祐樹には漠然と気配は感じれるが

忍足流——風魔の理を修めているあずみを捉えることは至難。姿を見ることはできない

そんなことを思いめぐらしていると——二人が一つ的大型ゲームの筐体に潜り込む姿をみて

——ん…。アレなら…試せるか？

入り込んだゲーム——

——風間ファミリ^{ウチ}ーの姫君の一人。託せるかどうか……身勝手ながら測らせてもらう

ガンニョムVSガンニョム。一子と英雄が乗り込んだ、反対の筐体へと身を滑らせる

「ふははは！！我と一子殿の敵ではないわ！！！」

「あはは…。CPU相手とはいえ、ヘタツピの私と組んでルートボス倒せるとか…九鬼君、本当に初めて？」

乾いた笑い。次いで不思議そうに問う一子に

「うむ！初めてであるぞ。一子ど——」

満面の笑みを浮かべ、首を縦に振る英雄の言葉を遮るように

アラート音が鳴り響く

「ら、乱入者？！？」「む？」

一子の言葉通りに画面にチャレンジャーの赤い文字

現れるは——ガンニョム エクリア

「エクリア……介入する」

着座し、彼らのルート終了間際に乱入を果たした祐樹

ノリノリでシリアスチックに——彼を演じる。相対する機体から
してコレしかないという

天啓を得て……絶賛、厨二病中……

「ぬう……アレは……」

「おお……九鬼君の使ってる奴のライバル機で来るなんて……」

糸目になりつつ呟く一子。彼女もネタが解るらしいが――

「我のフロッグのライバル……だと？」

判らん英雄には一子の言葉は少し、頭にクる

そんな二人にお構いなしに……分断するためにライフルを放つ

大型実体剣をマウントする武装から

祐樹の思惑通りに――

「ぬ！宣戦布告もなしにいきなりか！！」

「あわわわっわ！！」

英雄は華麗に。一子はアタフタと機体を振って回避する

その二人へスラスターを吹かせつつ、マウントしている大型実体剣を展開し

即座に英雄のフロッグに叩きつけるように突っ込む

対する英雄は――

「名乗りぐらいあげんか！！」

プロペラロッドで受け止める。完全に破壊されるも本体にダメージなしに留める技量

「…俺が頑駄無だ！！！」

楽しそうである。

「ふん！！名を名乗られたならば、我も名乗らねばな！！」

不敵な笑み。破壊された衝撃という名の運動エネルギーを器用に持ち込んで

「九鬼英雄！！！！一子殿に心奪われた男である！！！！！」

捻り出す。スタンプブレイドを挟り斬るように、エクリアへと

「ぐつう…！！」

頭部モジュールの右のツインアンテナ。右の頬に値する装甲を挟み取られながらも

致命傷を回避し、叩きつけた実体剣を持っていた腕とは反対のマニピレータに

腰に差してあるエネルギー・サーベルを掴ませ…一気に抜き放つ

後詰の必殺。これで落とせる。そう確信しながらの祐樹の一太刀に
対して――

「人呼んでえ！！英雄、スペシャルウウウ！！！！！」

コクピット部分に相当する胴体へのサーベルの一撃を

「げえ?! ありかよ!! それ?!」

思わず、素で叫んでしまう祐樹

放ったサーベルの一撃を叩きつけられている状態のロッドを持つ右手を捨てることになるも

思い切りよく、“自ら叩きつける”ことによって機体を強引に取っ組み合いから開放する

サーベルが胴体をギリギリ掠めるような機動。そこから――

「なんちゅう、無茶苦茶ああ!!」

「道理なぞ、我がこじ開けてくれる!!」

タイムラグとかe t c e t c……

何もかも――無視したような…決り出したブレイドを手放して、ライフルへと持ち替えるという動作を

シングルアクションで済ませてしまふ英雄に対して

「どんな、チートだよオオ!!」

普段からチートな祐樹が言っても虚しいだけだ……

連続して襲いかかる銃弾を浴びるも、頑丈な装甲を削られただけ

なおも、削られ方が半端ないが――

だが、これで

「まだ、いけ——」

終わりだった……流された場所には大砲を持った赤い一目の機体が……
ウェルカム状態

「へっへん!! 誰だか知らないけどー!! バイバイ!!」

炸裂するエネルギーの嵐

「中の人が宮。君だったらあああ——!!!!」

——結局、相方ゲーかよおおお!!

口にすることと思ってることが真逆かつ…

祐樹に中の人など、居るわけない

居るわけないって言ったら、居るわけない!

——川神駅前

——疲れたあ…

ウンと伸びをして19時を指す時計台を囲うコンクリートに腰を下ろす一子

ゲームセンターで的一幕の後は、色々と連れ回され…ようやくと解放されたと実感してしまうぐらいに

そんな気だるさが身を包む中、頭上の時計台の時刻を見上げる

——もう、こんな時間…

見上げていた視線を下ろし、手慰みに持っていた携帯を開けて

電話帳。や行。その中の一つにカーソルを合わせるも

眉根を寄せて、難しい顔になりながらも押すか押すまいか迷う

犬耳を逆立てたりヘタリ込ませたり…表情を百面相さながらに変えながら――

音が鳴る。着信音。音色は――

「あわ?!?!」

不意の鳴音。携帯を軽くお手玉してしまうも

着信音が響く。画面には…一子が満面の笑みを浮かべながら慌てて取るうとする者の名

「一子？あー…今、大丈夫か？」

「うん！」

名を呼び、一拍…躊躇するもそう問う祐樹に即答する一子自身でも自覚できていない程に——その声音は弾んでいる

「……どうだった？楽しかったか？」

また、間を開け声音すらも固い祐樹の問いかけに

「うん…楽しいことは楽しかったけど——」

朗らかに答える一子の言葉に心の何処かにトゲを感じながらも祐樹は

「…けど？」

先を促す。あいも変わらず固い

だが、“今”の一子に祐樹の機微を感じることは難しい

しかし——

「なんか、すごく疲れた……ってのが真っ先にくるかな…？」

頤おとがいに人差し指を置きながら

「九鬼君には、悪いけど……やっぱし、私は苦手だなあ……」

苦笑しつつ答える

「……そっか——」

その一子の答えように……声音は柔らかくなり、ホッとしてしまう祐樹

「うん。……ところで祐樹？用件は？」

「あつ、いや、どうだったかな？つて……喉けた手前、気になって……」

一子の言葉に一瞬詰まるも当たり障りのない言葉を紡ぐ

なんとか、声音が固くならないように苦心しながら

「ありがとつて言つべきかしら？うん……まっいつかそれで！」

祐樹の言葉に少し瞑目するも、呆気なく納得する一子

その時、一子の携帯越しに発車音が響き——

「あつ……と。すまん、一子」

暗に乗車するから切るな？と告げる祐樹に

「……うん。おやすみ、祐樹」

寂しそうな声音が乗った言葉が紡がれ

「おやすみ……一子」

目蓋を閉じて祐樹は答えた

見上げる先にはドアの窓越しに半月

壁に背を…重心を預けながら

「…なさない」

弱々しい声

——試すとか言いながら……この様…か

勝負の結果が——ではない

そうやって女々しく、まとわりつく自分自身が

——欲張りだよ…俺は。“取られる”って思っなんて

情けない

——こんなだから…あの時のゆかりにも“拒絶”されたってのに
顔を掌で覆う

——誰を選ぼうとも、一子の勝手だ

仲間として、友として、家族として……それだけでは足りないと

——何時か……終わりが来る。いつまでも一緒になんか、居られないのに

——俺自身。皆を…

一子を、百代を、京を、由紀江を、——

仲間として？友として？家族として？——好きな人として？

どう見ているかすら、あやふやだと云うに、そも、彼女達だけではない

——揚羽さん。乙姉。なんだってこんなに……

出会いは仕組んだ。記憶を捨てた“この世界”の祐樹には解らない

だが——出会うだけだ。その先を紡ぎ出せたのは自身の行動

“因果”の重圧に無意識に晒されたとはいえ――

佐橋祐樹は己で決断した。己で行動した。

だからこそ――

月明かりを見上げる

切なさ。不甲斐なさ。様々なやるせない気持ちのままに

――遠い月夜を見上げる。果てしなき旅路に行く“マブラス自分自身”のよう
うに

今という時間が紡がれている

“護”の青年の道

“勇”の武士娘+皆の“ヒーロー” 〓恋模様？（後書き）

あゝうん……自分にネタとかギャグのセンスがないのは確信できた
…

“寝ぼすけ龍”と“護”の青年（前書き）

辰子さん登場。短いが作者的にはこんなざっくらばんとした方が辰子らしいと感じたので

“寝ぼすけ龍”と“護”の青年

―川神 多馬川 河川敷

中学三年の年。九鬼家の紋さんに拉致……失礼

勧誘という名の連行によって、出会ったメイド部隊の何人かとのフ
ラグかつ

執事教育――本当に執事に必要か？と問いたくなるようなモノまで
叩き込まれた

環境から開放された……中学最後の春休み

黨家にあつた生活品具を運送会社に託して、愛用のスカイギターの
みを担ぎ

「……帰ってきたんだな……」

感慨深げに言葉を洩らしつつ、土手の草っぱらに背を預けるように
寝転ぶ

視界一杯の澄み切った青空。春の到来を告げるような優しく暖かな風
全身で体感する。金曜日から週末にかけて帰ってきていたような感
覚ではない

「帰ってきたんだ……川神に」

本当の帰郷。己が居たい場所への帰還

手を伸ばす。視界の中で燦然と輝く太陽へと

掌が透けたように見える輝きを凝視し続ける

幾ばくかの時が過ぎ、いい加減腕が重くなってきたので大の字になるように腕を落とすと――

「あん……」

柔らかい感触。弾力のある柔らかさ。そう、喻えていうなら……

「うえ？」

素っ頓狂な呟きが口から漏れ……音の発生源。女の嬌声といえば、少し卑猥だが……感的には

「あ……れ……」

首がブリキが立てるような軋み音を上げている気がしながらも……祐樹はゆっくりとそちらへと顔を向ける

線を引いたような瞼。強めの癖毛なのだろう……所々が外側へと跳ねている藍色の長い髪

体格は女性としてはどうかは知らないが……男性としては羨ましいといえる体

そして――その体に乗る。その女性の好物と揶揄される……胸

「うぉぁ?!」

――き、気づかなかったなんて!

切磋琢磨に研磨してきた護る力。武。

生き物の…ある意味での根源と根幹にして切り離せない部分を捕らえることのできる祐樹

いくら、気を抜いて空を見上げていたと言ったとしても

――こ…この人。できる…

そんな、とりとめもないことが頭をかする中

「ん……ふぁ……」

祐樹の叫びに反応したかのように…瞼がゆっくりと開き

寝転んだままの姿で大口を開けてあくびをする。その瞳はぼやけて
いるのだろう

祐樹の姿をぼくっと見つめたままに

「あ、あのお……」

状況は変わっていない。叫びを上げておき、とりとめもない考えが

頭をかすっっているがらも

祐樹の手は女性の胸の上に乗ったまま

実に男らしい。いやさ……健康な思春期男子。その母性の象徴から手を離すという思考が浮かばないようだ

「ふやあ……」

だが、女性にとってはそんなこと——胸に男の手が乗っている事——はどうでもいいらしい

何せ……

「ん……ん……」

「わっ！ちよ？！？！」

寝転がった体勢のままに祐樹へと両腕を伸ばして抱き寄せる

口では慌てたようなことを言いつつも…男としての本能が抗うことを拒否しているのだろう

なすがままに女性の懐——胸の中に頭を埋もれさせる。埋もれさせられる

柔らかい。マシュマロのように柔らかかつ弾力のある胸

「ちよっ！ちよっ！……お、起きて……！」

抗う。さすがに状況を甘んじ続けることにはためらいがある

何せ、佐橋祐樹はロマンチストでフェミニストの毛があるのだから女性に対して、一種…幻想的な願望を抱いているし

そんな女性に対して嫌われないように努力することを怠らない男ゆえに

「ん？……んん？」

さすがに胸元からの悲痛そうな叫びには覚醒する

女性は抱き寄せた祐樹を片腕で抱きながら、もう片方で瞼をこすり

「…あれ……？君、誰……？？」

間延びした声音。ぽやぽやとした声が祐樹の耳に届けられる

「いや、あの、それ……俺が聞きたいんですが……」

そんな女性の言葉に脱力しつつもなんとか返す祐樹

「ん？…ん、辰子だよ……。板垣辰子お」

祐樹の言葉に少しだけ考えるそぶりを見せてから女性——板垣辰子が自身の名を告げる

「どうも…佐橋。佐橋祐樹と言います」

辰子の独特な間延びした声に祐樹は埋もれたままなのでくぐもった
声音で返し

「ぶふぁ。その…は、放してもらえますかね？」

ようやくと谷間に埋もれた顔を何とか上へと上げて至近距離から

——辰子からしてみたら上目遣いに困ったような苦笑いを浮かべた表情

フィカーツィア・ラトロワが言った言葉——優男のような顔

それはあながち間違いではないが……完全な真実でもない

裂傷。抉り取られた左目の肉。それが醸し出す醜悪を足して出した
結論がそれなのだ

その状態でも……優男。否、彼女の人となりからわかるであろう？
それでも、シビアな評価だと

心を許し、真の意味で佐橋祐樹と共に居たいと願う戦乙女達の誰か
が見れば——ひと時の静寂は必然。心地よい静寂

ならば、必然のこと。板垣辰子が求める雰囲気——常日頃から百
代。祐樹が絡んだ時のみ暴走しやすい乙女

その二人によって形成された……気苦労が耐えないデキた弟とい
う雰囲気をも持つ男であり

もたらされた恩恵によって消え去った傷。残るは………絶世の美少女の顔

冷徹なる笑みを浮かべれば、総てを嘲笑うかの如くの冷たき魔女のような表情

暖かい笑顔を浮かべれば、陽だまりに咲く。名も無き花のような表情

そして――

「か」

「か？」

「かぁいいよぉ~~~~~~~~!!!!!!!!!!!!」

全力でハグする辰子。無論、己の力加減の最大という意味で

「うえ?!」

またも、素っ頓狂な声を上げるしかない祐樹

辰子の瞳に映る自身の姿が、困った顔で見上げる――

「いやぁ……妹もいいなぁ……天ちゃんだと、こんな感じになつてくれないもん」

間伸びた声音が告げる言葉

「ちょっと硬い所あるから、男の子だと思ったんだけど〜」

ほんの少しだけ、残念そうな表情。祐樹から見たらのんびりとした
…先ほどあまり変わらない表情で

「こんな、妹もいいなあ〜」

再度、実感するように洩らす辰子に対して

「ち、ちが！…！俺は——」

自身。最大のコンプレックス

遺伝子提供者からして、超絶的な美形。それも女顔、故に遺伝子は
同じように祐樹の顔を作っている

何せ…一番最初の男が自身のクローンとして生み出した女性も傾国
の美女と揶揄されてもおかしくない程の美貌を持っているのだから
ただ——他の者達に比べて、かなりの割合…祐樹は女形として生
み出されている。本人が知る術等ありはしないが

話が若干逸れたが…ようは

「俺は！…！男だ！…！」

普段の温厚な祐樹にしては珍しい怒気がふんだんに込められた叫び
気の弱い者なら竦みあがるだろう声音も

辰子の前では――

「えっ、嘘？男の子？」

天分の才だけで三姉妹最強にして。後の四天王次席に名を置く事になる程の武を持つ彼女には

むしろ、その告げられた言葉の意味に瞳の色をより一層輝かせて

「ええ！！なんなら胸でもどこでも、触ればいい！！」

さらに、祐樹の募る言葉など……彼女にとっては――癩癩を起こした可愛い弟としてしか見えず

「ふあああ………！！！！」

間伸びた声音は変わらない

けれど、辰子の表情と行動は歓喜に震え……思わず祐樹をさらに抱きすくめる

「ちよっ？！？！」

怒っているのに相手は喜んで自身を抱きしめてくる

そんな状況を想定してるわけがない祐樹は、またも呻くしかなく

また、谷間に収められてしまう。どんなに怒っていようと女性に
対して

本当に必要だと判断しない限りは抗うことを良しとしない性格が災いし、何もできなくなる祐樹

……はぁ…気が済むまで…大人しくするしかないか。危害を加えるような人に全然見えないし…

埋もれた場所でそんなことを思いつつ

……や、柔らかいし。いい匂い……って！ダメ！ダメだつて！落ちて着け俺！無我！無我の境地に！！

まあ……男の子なのだから、致し方ない。“現実世界”で赤の他人の女性に触れる機会など…なかったのだから

しばし辰子のカイ繰りと質問やら会話で時間が潰れていき

「はふう……」

誰が見ても一目で幸せという表情でため息を洩らす辰子に

「そろそろ…離してもらっていいですかね？」

疲れたような声音で問う祐樹

「ん……そうだね～そろそろ、帰ってお昼ご飯作らなきゃいけないしね～」

頤に指を立てつつも、時間に猶予がないとわかっている辰子は唸りつつ、残念そうな声音でそう言い

「祐樹君……ケー番教えてほしいな……」

ほにゃとした緩い笑み。醸し出す雰囲気はおねだりする姉そのものの辰子に

「はあ……」

—— つくづく、俺は……

とりとめもない会話だからこそ、辰子の本質が温和で優しい女性だと認識した祐樹

その動作は百代や乙女と共通する部分を多分に含めたお願いゆえに携帯を取り出し…辰子とアドレスを交換する

「ありがと……じゃあ、また会おうね」

そう言つて辰子は去る。何度も振り返り祐樹へと手を振りながら

辰子のその行動が終わるまで祐樹は立ち止まって手を振り返し続け

—— 行つたか…

藍色の髪が見えなくなり胸中で呟く

「なんか……疲れた」

再び草っぱらにその身を横たえて

——…なんだ、これ。なんか、本当に疲れてるのか？…たしかに、長旅だったし気持ち的に抜けているからか…？

強烈な眠気。“作為的な程”の…

携帯のアラームを正午にセットして

——少し…寝よ…

瞼を閉じた

閉じる瞬間に感じた——時の歪みを知らぬままに

“ 仁 ” の武士娘にとって——（前書き）

本編前。 トリを飾るは京ちゃん

“仁”の武士娘にとって――

「どんなに…時間が経とうとも……また、会えるよ――」《》「

一筋の滴と共にその言葉は紡がれた

―ドブ川 板垣家

「んだあ？機嫌いいじゃねえか。辰姉」

板垣家唯一の男。竜兵が荒つぱく呟く

片手に茶碗、片手に箸。白米を口にかきこみ…かつ、米粒を飛ばしながら

「うえ？！汚ったねえなー！竜！！ウチに飛ばすな！！」

飛んできた米粒を払いながら叫ぶは天使^{エンジェル}

親につけられた名が不憫すぎる故に、天と呼ばれる末っ子娘

子供は国の宝。この物語を見ている方々もくれぐれも子供が後悔す

るような名は付けないように

「たしかに……竜の言うとおりだねえ。なんかあったのかい？辰」

そうして、竜の言葉に相槌を打ちながら板垣家の長女。亜巴が問うも

「Z Z Z Z Z……」

茶碗を両手に持っているが…膝の上

完全に眠りこけている辰子に返事をする術はなく

「いつも通りの辰姉だな…おっ、からあげ貰い！！」

寝こけている辰子の皿に乗るから揚げを掻っ攫っていく天

寝ている辰子の表情の機微を正確に読み取る二人も凄ければ

辰子のおかずを何の躊躇もなく食べてしまう天もある意味凄い…

そんな三人の行動に対しての返答なのか

「Z Z Z Z Z……祐樹くん…」

元々、緩ぎ気味だった寝顔が

さらに緩まり、だらしなく頬が垂れ下がってニヤケながらの寝言

「「「おっ……男おおおお！！！！？？？」」」

全員が素っ頓狂な叫びを上げたにもかかわらず

辰子が目を覚ます様子はない

「た……辰姉の口から男の名前が出るなんて……!!」

二個目の奪ったから揚げが箸から零れる

食べ物に関しては一切に譲らず、妥協しないあの天が……食べ物を落とす

それだけでどれだけの衝撃か……わかるだろう——比較になっているのか、なっていないのか難しいところだが

「あの、辰子が……男とうはねえ……」

感慨深げに頷きつつ、意味深な視線を寝ている辰子へと送る亜巴

「辰もついに男に興味を持ったかい。……いつまで続くか楽しみだね」

残る竜兵は——面白くなさげに、より一層荒々しい食べ方に

「嫉妬は醜いぜー竜うゝゝ」

「ち、ちげえ!!」

からかう天に大げさに反抗する竜を尻目に亜巴がスっ気のある笑みを浮かべ

辰子はマイペースに眠り続ける。これが板垣家の日常であった

だが、この時の辰子にはわかりえない

「ゆ…うき…くうん…」

幸せそうに眠る辰子にはわかりえなかった――

――川神 多馬川 河川敷

背骨が…というよりも全身の骨から軋み音になっている

そう感じるほどに

「ん……うつん…」

気だるい身体を引き起こして祐樹は呻きつつ

背筋や筋肉を解す様に伸びをしながら

――　　なんか、頭がぼーとするし……それに、なんか、…切ない

その胸中の中で持て余すほど強い悲しみのような切なさ

——…夢、でも見ていたのか…？でも、夢というには

思い出せるのはキツイ目元を持った

年の頃が同じぐらいの女性

もつとも記憶に残っているのが

——バレッタを……

緋色の髪をうなじ付近で折り…そこをバレッタで纏めていた己の手

それ以外は曖昧過ぎて、思い出すことが出来ない

——…いいか。夢だし…

妙に現実味のある夢であつたが

所詮は夢と片付けて祐樹は立ち上がると——風が吹く。“寒さの到来を告げるような風”が

「……三月も半ばだというのに…寒いな。まだ…」

そつばやきつつ、共に寝転がっていたスカイギターを担ぎ上げて家路へと着く

河川敷から土手へと上がり、しばらくすると仲見世通りへと入って

いくと

——久寿餅…か

色とりどりの物が並べられた商店街

特にここの区画では特産品やお土産品、名の知れた食べ物が並べられており

その一つたる

「いらっしゃいませ〜どうです？お勧めはこの久寿餅！うちの一番人気ですよ〜」

淡い茶色の髪に緩くウェーブをかけた年の頃が同じぐらいの女性が久寿餅片手に祐樹へと声をかけてくる

見せられた久寿餅。甘いものにとんと目のない祐樹

食べたことはあるものの、小学生以来は口にしていない

中学三年の間に何度も短く戻ってきていても

食べる機会がなかった故に、余計に

「えっ…と。その久寿餅を…五つと金平糖を三つください」

「はぁ〜い！！お買い上げありがとうございます」

輝かしい笑顔——営業スマイルで答える女性

——にしても、お客さんには失礼だけど……気味悪い髪型ね……

女性がそう感じるのは無理もない

ほとんど、伸びるに任せる勢い。前髪はもう鼻を覆い隠すほどまで伸び

後ろ髪など、等々腰の辺りまで伸びきっておる。人相などわかるわけもなく

声をかけたはいいが……

——買ってくれたけど、ちょっと失敗したわね……早く行ってもらおう失礼な事を考えつつも、商売人の娘。表情だけは笑顔で商品を渡して見送る

——って、そういえば……ワン子が言ってた人に似て……どう見てもイケメンじゃないわよ

同級生の弱った姿。その人の話をする時は大抵、しょぼくれてしまいう一子の姿を思い出しつつ

——うん……あの天真爛漫を地でいくワン子が大げさに言うくらいだから、結構なイケメンのはずだしね……

瞳を光らせる。その姿、まさしく狩人。

——風間狙いだけど……要チェックよね！

まさしく、ある意味で正しい——花の女子高生であった

そうして……お土産をぶら提げて黙々と歩いていき——見つける

「なんじゃこりゃ………」

啞然と呟く。目の前にある建物と記憶にある建物とが

絶対的に重なり合わない……

——ま、間違えたか？道……

記憶どおりであれば

今、目の前にある建物が実家であるはずなのだが——

——いや、表札はウチの名前だし……父さんと母さんと俺の名が入ってるし

表札には……佐橋忠則、久子、祐樹。この三つが入っている

この時点でこの建物は我が家だとわかるが——その横にある一際デカイ、もう一つの表札が

「さ、佐橋寮って……ウチはいつから寮になったんだ……？」

政府高官といえど贅沢を嫌う父ゆえに

平凡な一軒屋であつたはず。なのに——目の前に立つのは表札に書かれている通りだと

川神学院傘下、佐橋寮

どっかで見たことのある達筆——鉄心作——を下げる我が家を

——俺…なんにも聞いてないんだけど…

呆然と変わり果てた我が家を見つめながらそんなことを思う

数分そうしていたが事態が変わることがあるはずなく

——…とりあえず…誰か居るか、鍵が変わってないことを祈る…

持っている実家の鍵をドアの鍵穴に挿すと

スツと入り何の抵抗もなく鍵が開く

その事に案著しつつ

「ただいま〜」

普段どおりの声で祐樹は声をあげたが——誰も居ないよう帰ってくる返事はなかった

——…三月だし寮生の子は帰ってるのか…？それとも、今年から稼働でまだ誰も入ってないのか？

そう思いつつ玄関を上がる

玄関部分は昔とほぼ変わらず、変わった点といえば祐樹の視点から見る限り

奥のリビングへと続いてた廊下が今は寮へと繋がっているように見え
自室のある二階部分へと続く階段は普通りにあつた

——さすがに、何にも伝えてきてないから部屋は変わってないよな…？

と思うも自身の母親の行動と性格を考えると…無きにしも非ず

戦々恐々と自室へと向かう

たどり着いた扉には小学生の頃と変わらない自身の部屋を指すネームプレートが飾ったまま

そのことにホッとして躊躇いなくドアを開ける

目に入る光景。昔と変わらない部屋取りの中に——

「あれ？京…どうしたんだ？って、勝手に入ったらダメだって前に言っただろう？」

祐樹はごく普通に語りかける。彼女——椎名京へと

京が纏うモノを感じ取る前に、ごくごく普通に——真つ暗な部屋の中に呆然と座り込む京へと

頬は少し窪んでおり、目元も隈だらけ

肌はがさついており……“左手首だけに着けられたリストバンド”

焦点の合わない——死んだ魚のような、光を宿さない瞳

その瞳が——

「ゆ……」

「おいおい…カーテン締め切ったままじゃないか…」

そう言いつつ部屋の中へと入りカーテンに手をかける

「う……」

「また、暗い中で本でも見てたのか？目、悪くするぞ？」

カーテンを全開し、ついで窓も開けて

「き……」

「聞いて——って！おい？！京？！お前、どうし——」

そうして、ようやくと気づく祐樹は

「ゆうきついいいいいい！！！！！！」

死んだ瞳に光が灯る

絶望だけがあったその瞳の中に——希望^{きぼう}を映し出し

椎名京は飛びつく。佐橋祐樹の胸元へと。

ぼろぼろと涙を零して、鼻水をたらして、美人が台無しになるぐら
いにみつともなく

「み、京?!」

慌てて抱きとめる。抱きとめた体の軽さに驚き、骨と皮だけと言わ
れれば納得するぐらいに細い体に戦慄しながら

“仁”の武士娘の荒れ果てた姿を“護”の青年は受け取める

“護”の青年は——生きる意味

—佐橋家 祐樹自室

抱きとめた体。ギュッと抱きすくめれば容易く折れてしまうかと思えるほどに

弱りきった京を莫塵をかき、その上に乗せながらも

「ひっ…す…ぐっ…ふう…!!」

泣き止む気配のない京の薄紫の長髪を下から梳くつては零し、梳くつては零しをやりながら

抱きしめる。己はここに居ると、京の前に居ると——感じさせるように抱きしめる

「みゃこ…」

「ひっ…っっ…!!」

なぜ、こうなった？自問するも答えが出るわけがない

涙混じりに悲鳴でありさえずりである京のか細い答えが先ほどあった…

そっ、佐橋祐樹は——跳んだの時を……9ヵ月もの時を越えた

それが事実であるが……世間は失踪扱い。本人すらもほんの少し眠っただけという感覚しか残っていない

だからこそ――

祐樹は今もなお自覚できない。もたらされた事実をあやふやに受け取るしか出来ないから

――9ヵ月……

携帯の待受画面に映る日付。2008年12月29日

――本当に、俺は……

携帯の日付が狂うことはない。常に電波を受信しつづけ時刻も日付も正しく表示される

ゆえに、それが事実で真実であることが余計に

「……俺は、一体――」

記憶に残っていない9ヵ月。その間に己に何があったのか……不安に思っ心はある

だが、

「みゃこ……」

再度、名を呟く。己の不安な心など瑣末な出来事だと痛感してしま

う程に京が――

「――ごめん、京……」

それしか洩らすことが出来ない。それしか己にはできない

わかっていた……昔からずっと

――こんなにも、京は俺に………依存しているのか

ずっと傍に居続けた。初めて出会い、その傷だらけの心を癒すために――ずっと、共に過ごしてきた

中学の三年間、傍に居続けることはできなかったが……それでも、許される限り川神に戻り京も川神へと戻ってきた

キャップ、一子、百代。ファミリー達と共に過ごしてきた

かつて……己を癒してくれた……村上ゆかりのように己に出来る限りの事を成してきたから

――俺だって……“そうだったんだ”。京だって……同じになることぐらい……！

フラッシュバックする

鮮明に、色濃く、完全に――自覚する

振り解かれた手

胸板に顔を埋め続ける

拒絶の意思が含まれた瞳

泣く…音だけが部屋を満たす

知らない男へ駆け足に辿

り着き、楽しそうに喋る幼馴染

己の姿が重なる。己に

何一つ変わろうとしない自

分。男を磨くことをしない己

“あの時”より人一倍気を使うようになった身嗜み

若い。とても若くて、表

面上しか見れない若さなのだ

どう足掻いても……持っている仮面かおを曝け出す事などできない――
――だから、補う

自身を磨き続ける幼馴染

にとつて、同じように磨く男は輝いている

――だって、誰が好き好んで……“汚い”男と居たい？

世界が閉じていた。佐橋祐樹にとって、父と母…そして、ゆかりだ

けが世界を象っていた

ゆえに、“己に気をかけることはない”

父や母を落胆させたくないから、勉強して体を鍛えて…人並み以上の結果を残した

ゆかりだけが佐橋祐樹にとって異性であり、友であり——他人であつた

笑顔で居続けて欲しくて、ずっと傍に居たかったから……己の総てを費やした。時も金も——およそ、“自分自身”というモノを

委細合切を自身に使うこと等なかった——“その時”まで

壊れたモノが直るまでに長い月日が掛かった。一つの学校が終わる時まで

直る日まで——祐樹は己を磨き続けた

勉強も運動も……今まで以上に結果を出すために努力を惜しまず、己に金をかけた

流行の服。衣服に靴……とにかくファッションと名のつくモノは総て勉強してきた

故に、頭角を表わす。ルックスだけは何時も髪が邪魔をしていたが

勉強も運動もそれでも“昔と比べると見える方になったと自分で思うぐらいに”

失くした温もりの代わりに——娯楽。特に古いゲームやアニメに興味を持ち出したのがこの頃

音を嗜んできた感性もあったが……皮肉にも娯楽達が祐樹の色合いに華を添え——動き出す

知らなければ……いや、詮無きこと。たとえ、どのような“道”を辿ろうとも——歩き続ける

祐樹は——“幸せな結末”へと歩いていく

だから……わかってしまう。かつての佐橋祐樹が村上ゆかりに依存したように

椎名京が

「ごめんな……京……」

祐樹が越えたくて越えたわけじゃない。何一つ、責任はないといえるだが……それでも口に出る。今、目の前で泣き続ける少女に——
己と同じ“イタミ”を与えたのだから、間接的に

「うつ…くつ…祐樹が——」

どれくらい時間は経ったのか…わからない

だが、時間が間伸びたような感覚の中に居た祐樹に

実際には掠れ、か細く、囁くような言葉であつても

「祐樹が…誰かのモノになつても…私は我慢できる……」

本来の時の中でも…彼女は耐えることを選び、一途に直江大和を思い続けたのだから

存在を同じくする——“この世界”の椎名京も

「耐えるよ……祐樹に嫌われたくないから邪魔もしない……いつか、絶対に振り向かせて見せるって頑張る……」

健気に耐え続けて、待ち続ける。だが——

「でも」

“左手首のリストバンド”——片手にしかつけられていないソレ

「祐樹の居ない世界になんて――」

「……?!?!まさか、京?!?!?!」

抱きしめていた体の一部。左手首を掴み、リストバンドを捲る

「イタクナイ」

リストカット

どう――答えれば
いい?

― 2009年 3月30日 川神院

本来の時の中では一年前に行われた戦い

「西方川神百代」

武神の言葉が静謐に満たされた道場に木霊する

「ああ!!」

川神学園の制服を着込んだ百代

常のスタイルたる白い上着を羽織、黒の私服のインナーシャツ

構える。相対する者へと拳を突き出すように

「東方、九鬼揚羽!」

対する揚羽も横っ腹に拳を一つ置き

正中線を内側に片足を前に出しつつ拳を突き出す型

セーラー服。胸元に飾られる淡いクリーム色のリボンと

——本来であれば、未だ短い髪が……腰辺りまで伸ばされた長髪。
前髪を押さえる黒いカチューシャ

額の×印が百代へと向く

「うむ！」

大仰な頷きと覇気のある声音

双方が一息つく様に呼吸を落ち着かせるように

「揚羽さん。これが最後の死合とは…本当か」

「川神の。我は財閥を継ぐ職務と——」

引き締まった表情。死を打ち合う戦いに参じている中でありながら

「我の男を迎え入れる準備で多忙になる」

柔和な笑みを微かに浮かべる。それも一瞬の内

その感情を知らない百代には認識できぬままに

「武人としてお前の相手ができるのは、最後であろう」

武人としての笑み——口元を引き締め、目元が斬り上がる

「そうか……」

ポツリと洩らす。語られた言葉

男を“男”として見たことのない百代にとって

揚羽の言葉の一つは釈然とするものが心に浮かばなかったが……

相手はあの、九鬼揚羽。何一つ迷いのない瞳を浮かべた女王の言葉

自身の頭を掠めた言葉を散らし

「ならば派手に散ってもらおう」

相手自身も散らそうと烈火の気合がこもった言葉をたたきつける

「フ……ハハハハハ！その殺気……心地よいわ！」

「いざ、尋常に」

二つの烈士の氣のぶつかり合いの中においても

静謐な鬨氣を保ち、年若き二人の乙女に

「はじめいいいいいい！！！！！！！！！！」

武神の咆哮を放つ

「「いくぞ……！」」

両者の拳が弾け出す――

時は満ちた

直江大和が辿った道。

その道を――愚者は歩く。護ることを選んだ人形が

バルシエム

――ルヘンにしてユヘン……数秘ゲマトリアの偽り

過去。イングラム・プリステン逆さ吊りの銃の因子を持たされ

現在。クオヴレ・ゴードン平行世界の番人の導きを持つて

未来。一愚かな反逆者にして“護”ユヘン・バルシエムの青年は――歩き出す

恋の物語

今、ここに、

――武士の魂を宿す。乙女達との暖かくも物悲しい物語

“ 幸せな結末 ” を求めて――

ダイバー 真剣に私に恋しなさい

改め――

ダイバー 外伝 愚者は心剣フレイドアーツに恋をした

―― 開幕

平和な日常だとさ…by 背中が煤けている“護”の青年

―2009年 4月20日 月曜日 佐橋寮 自室

あれから時は経ち

自室の間取りも寮の一階へと移り変わった己の自室

早朝。まだ、薄暗い外であるが佐橋祐樹の活動開始時間

AM5:00を時計が指し示した時…祐樹は目を覚ます

「ん……あ……」

本編の島津寮と同じ純日本家屋。当然、部屋も畳が敷き詰められた部屋ゆえに

布団をしいて寝ていた祐樹は掛け布団を蒔くって上半身のみ身を起こして

伸びをしつつ欠伸。しばし、布団の中で座って

「ん……お弁当と朝ご飯作ないと……」

そう呟いて、布団から這い出る

締め切った中庭へと通じる襖をあけると

「おはよう、ボーヤ。今日も早いなお前は」

中庭——祐樹の部屋の前に鎮座するMV - Augusta F4
CC

いや、九鬼家の魔改造を施されたMV - Augusta F4
CC”

その機体から声が上がる。どこかの世界では

アメジストの宝石たる瞳と漆黒の黒髪を持つ絶世の美少年にして

世界最高の頭脳を誇る学生と共に居た——緑髪の永遠を生きる魔
女の声

「おはよう。“アウグスタ”」

本来、CCとはアウグスタを開発し会社を創設した人物のイニシャルを指していたのだが…

何をどうなったのか。九鬼家の手に掛かった現在——御仕えロボと
同じ

「やあ、祐樹おはよう。マイスターにも祐樹を見習って早起きして
欲しいよ」

CCと中庭と自室を挟んだ廊下越しに相對する祐樹に対して

その廊下の端から現れた——九鬼英雄が一子へとプレゼントし

巡り巡ってキャップの元へとやってきた高性能三段階変形機構搭載のロボ

通称——クッキーが祐樹へと挨拶をする

「おはよ、クッキー」

「ふむ、童貞ボーヤも来たか」

メタリックブラックのバイクが不遜な声音でクッキーへとそう告げると

「なんだよ！アウグスタ！僕はロボットだぞ！！なんで童貞ボーヤなんて言われなきゃいけないのさ！！」

常ならば黄色のハイライトを宿すツインアイがCCのからかいによつて赤くなり

「ふざけたことを言っていると切り刻むぞ…魔女」

一瞬にして第二形態——上で述べた美少年の声を持つ。物騒な性格を持つ戦闘形態へと変るクッキー

「ふっ……だから」

それを答えアウグスタも——変形する。九鬼家仕様は総て三段階変形を搭載されているゆえに

金属が擦れ合う音。変形シークエンスを隔てて現れる姿は

「お前は」

完全な人型。その顔は人間の——魔女の顔と同じ切れ長の瞳を持った少女。耳の部分が俗に言うメカ耳だが

体は両脚の踵部分にバイク形態の名残たるタイヤが一輪ずつついているが…全体的に人間の女性と変らない細い脚

ハンドルの名残は肘から突き出すように飛び出ている細い腕。極め付きは――

「童貞ボーヤなんだ」

魔女と同じように癪に障る笑み

「ぐっ……貴様あゝ」

一瞬、言葉を詰まらせる第二形態クッキー。なぜか、どうしてもC相手では

「ふん。貴様と私では――永遠に私に口で勝てることはできません！」

踏ん反りかえって、ロボの癖にふくよかな胸が揺れる。実際の質感も肌触りも人間と同じと記しておこう

そんな犬猿そうでありながら、腐れ縁的な展開をするクッキーとアウグスタ

「ああ……幸せ……」

ギ。ス大好きな祐樹にとっては恍惚な表情を浮かべて浸るのみ
カオスな状況から始まったが……これが佐橋祐樹の大体の日常の始まりであつた

―佐橋寮 リビング兼台所

「おはようございます!!祐樹さん!!」

暖簾を手で押しながら台所に入る祐樹へと声が掛かってくる
楽しそうな弾んだ声音に対して

「おはよ、由紀江。いつもありがとう」

祐樹に対して満面の笑みで挨拶した由紀江に祐樹も微笑を浮かべて返す

由紀江の手元。朝食と弁当用のおかず達の姿

「いえ……その、好きでやってることですから……」

微笑みを直視した由紀江はそう答えつつ顔を前——シンクの方に向けて持っていたジャガイモの皮むきに意識を持っていく

赤くなった頬を指摘されないように。そんな由紀江の行動に祐樹は特に思うことなく、自身専用のエプロンを制服へと着替えた己に巻いていく

「ん……弁当は俺がするから、由紀江は朝食の用意お願い」

並んで目の前の調理中のモノ達を引き継いで手を加えていく。由紀江に指示を出しながら

そんな二人へと

「……また、出し抜かれた…」

糸目になりながら二人に届かせた声

「そ、そんな出し抜いたとか、その…」

長い薄紫の髪がパジャマの上に流れているように見える姿の京の言葉に

瞳を白黒させてつつ慌てる由紀江が持っていたジャガイモと包丁を左右に激しく振って答える

「危ないよ由紀江。おはよ、京」

そんな由紀江の行動を窘めつつ祐樹は京へと挨拶

「ん。おはよ、祐樹、まゆっち」

小さく頷いて返事を返す京

「あっはい。おはようございます京さん」

祐樹の咎めにジャガイモと包丁をまな板において由紀江はお辞儀をして挨拶を返す

「着替えてくる……祐樹も一緒にどう？」

パジャマを肌蹴させて、その白雪と揶揄されるそんな程の瑞々しい肌を祐樹にさらしながら告げる

「冗談は置いといて……そろそろ朝ご飯ができるから早く着替えてきなよ」

何時も通りの京のあの手この手の誘惑行動に些か抵抗力が付いてきた祐樹は

京へと視線を向けず、目の前のオムレツを完成させる為に器用にフライパンと菜ばしを操りながら答える

答えつつ出来上がったオムレツを一個目の弁当箱に詰めていく

「……祐樹のいけず……」

ぶつくさと文句いいつ糸目になりながらも言われたとおりに部屋へと戻っていく京。渋々ではあるが……

京と入れ替わりに現れるは

「……はよ。」

至高のツンデレ。健康的な不良。源忠勝

「おはよ。ゲン」

「おはようございます！源さん」

おざなりそうに聞こえる挨拶だが、常からゲンはこうなので気にもしない二人は普通に挨拶を返す

「ああ。…っと、祐樹。今日、晩はいらねえ」

「わかった。一旦戻ってくるのか？」

リビングの隅においてある雑誌ラックにささる今日の新聞を引き抜きながら

「一応、戻るつもりだ」

そっけなく答えるゲン

「なら、宇佐美先生の方も用意しとくから夜食持ってけ。冷蔵庫に入れておくから」

こう言えば——自身以外が絡む——断る言葉すら出せない性質を連れ添って来た祐樹には手に取るようにわかる為

「……………ああ」

気に食わなさそうな声音。 瞼を閉じた状態で返すゲン。 だが――
これがデフォルト

そのまま新聞を広げてリビングの椅子の定位置に座る

「……………長年の夫婦みたいでいいね。 腐的に」

いつの間にやら戻ってきた京がGOOD札を出しながら答えつつ定位置に座る

「でも、京さんの額に青筋が浮かんでいるのがオラには見えるぜ！」

「しっ！松風ダメですよ……」

そんな松風と由紀江のやりとり。 それを見る横目で見る京にも見える

自身が紡いだ言葉が琴線に触れたのか、それとも妄想逞しい彼女には鮮明に思い浮かべられたのか……

微妙な表情となっている姿を――

「……………先行く」

全身にさぶ疣と第六感が告げるエマージェンシーに椅子から立ち上がり

足早に新聞を片付けてリビングから出て行くこととするゲンへと

「ゲン?! 朝ご飯は?!」

「風間にでも食わしとけ」

事。こういう類の話で自身の事柄に関連する空気……“限定”で超絶鈍い祐樹は

撤退しようとするゲンへと空気読めずに声をかけたが——帰ってきたのは係わり合いになりたくないというニュアンスを多分に含んだ言葉

「……？？なんだ？朝一も仕事か？それ以前に土曜からキャンプ居ないんだが……」

見当違いな言葉に二人と九十九神が付く馬のストラップは………ため息を吐いた

——多馬川沿い

春の暖かい日差しが三人に降り注ぐ

真ん中を祐樹。左を京。右に由紀江という順番に歩いていく行く三人

「暖かいな……こんな中で昼寝できたらいいもんだな……」

伸びをして、欠伸交じりにそう呟く祐樹に対して

「じゃあ……一緒に寝よつか……祐樹くん……」

後ろから抱き着いてくる。その百代並の胸を頭へと押し付けるかの
ようにへばり付くは――

「お、おはようございます。辰子さん」

「ん……。おはよう、祐樹くん」

間伸びた声音で祐樹の挨拶を返す辰子。だが――

「出たな！メロン女！祐樹から離れろ！！」

一瞬の内に右に居た由紀江とアイコンタクトを取って……うまく辰子
の抱擁から祐樹を引き抜いて叫ぶように告げる

由紀江も声には出さないが警戒心を強めて、祐樹の腕をホールドする

「ああ……祐樹くん……」

何時も通りの間伸びた声音の中に寂しさ等を含ませて辰子が唸り

「油断も隙もない……！」

由紀江と同じく祐樹の腕を拘束する京が悪態をつくように呟く

二人と一人の乙女達の間で静かに闘気が張り詰めていくも

「ああもう！三人共やめろって！」

祐樹が言尻を荒くして静止させ

「辰子さん。お誘いありがたいんですけど……これから学校なんで、また今度……」

頭を掻きつつ、辰子へと苦笑いを浮かべて祐樹は告げる

「うっ……埋め合わせは期待してるからね……“あの時”の分も込み込みだよ」

本気で連れて行けるとは思っていない辰子はそう、愚痴るように告げて川べりへと足を向ける

場に敷き詰められそうになった空気が霧散していくのにホッとするのも束の間――

「ねえ……ゆづきい……あの時ってなあに……?」

絶対零度もなくやという程の冷たき視線と声音と

「わ、わたしも知りたいです!」

真剣な表情で上目遣いに見上げてくる二人に

「あ……アレ……だよ。失踪時の――」

とても言いにくそうに、だが……ハッキリと苦みばしった顔で告げる祐樹に二人は何も言えなくなる

伏せてしまう。二人とも、かなり無茶な要求を祐樹に飲ませた時の事を思い出して――

大なり小なり……あの9カ月間の失踪は幾多の乙女達の心に大きなダメージを与え、関係者達も不安を覚させていた

そんなおり本人に自覚がなかったのも致し方ないが、皆的にはひよっこりと戻ってきた祐樹に腹を立てて

特に乙女達は……それが当たり前のように過激な要求を祐樹へと叩きつけた件の一件故に……

「……………」

二人は黙り込むしかなかった。自分達がそうであったのだから

だが、しかし――

「けど、それとこれとは別」「別です!!」

一刀両断に切り裂く

「やっぱし……あのメロン女も墜としてたか……!!」

ワナワナと肩を震わせて、ついでに声も震わせて……京は睨みつける

「ゆ、祐樹さん……………」

京とは対照的に……切なげな瞳。目尻に涙をほんの少し浮かべて見上げる由紀江

「うお…おお…」

そんな両極端な二人に挟み込まれた祐樹は呻くしかなかったが――

「あ、サハっち、椎名っちおはよ〜」

彼女の声をかわぎりに同級生的女子グループが祐樹達へと挨拶する

渡りに船とばかりに

「！おはよ〜！小笠原さん」

「……はよ」

「……私は挨拶してもらえませんでした…」

「元気出せよまゆっち。友達100人作る為にも笑顔で居なきゃ」

盛大に返す祐樹。最低限で返す京。

名を呼ばれることのなかった由紀江はサメザメと涙を流し、松風が
フォローする

そんな風に歩いていた祐樹たちの前に……人垣が形成された光景が
目に入る

「…あ…もしかして」

もしかかしても…多分、万が一にもないだろう

浮かんだ予想を裏切るとは

視線を川岸へと向ける祐樹——そこには予想通りの光景

「ああ……やっぱし」

「まあ、いつも通りだね……」

祐樹の呻くような呟きに京が答え

「……やはり、モモ先輩ですね……」

紫色の刀袋に入れられた愛刀をさらにギュツと胸に抱きしめながら
由紀江も洩らす

彼と彼女達の瞳に入るは——12、3人の明らかに柄の悪い男達。
ガタイのいい奴が多くバット等の武器を持つ集団に対して

周りを囲まれることも意に介さない。仁王立ちにして腕を組んだ——
百代の姿

そして、そんな光景を瞳に輝きを満たしてワクワクと観戦する川神
学園の生徒達

「これは朝から大ピンチ」

どっちがピンチなのか…事情を知らない人間では絶対に間違えた捕
らえ方をする言葉を紡ぐ京

ピンチという言葉も、内情を知っている彼女にしては平坦でどうでもいいような声音

「京さんの言うとおりですね……………不良さん達が」

その言葉に由紀江も頷く。真実を言いながら

そして二人の視線の先には――

「……………やっぱし、俺が行くの？」

自身に人差し指を向けながら言う祐樹に

GOOD札を掲げて糸目な京と曖昧な笑顔と少し引きつった口元を持つ由紀江が頷く

「…毎度。止められてない俺が行くよりも…二人が行った方がいいんじゃないのか…？」

そんなことをぶつくさ言いながらも人混みを掻き分けて

「待て待て！落ち着いて！君ら！」

声高らかに放ちつつ、土手の坂を滑り降りて両者の間に割り込む

「ここは俺が食い止めるから――君らは逃げて！」

毎度同じような台詞になるのは仕方がない。だって、それしか言えない

だから、毎度の如く

「はぁ?!?!俺達にいつてんのか?!?!」

相手の受け答えもいつも通り

「そつだよ。早くした方がいい……」

いつも通りの流れに突入しているのが肌でわかる

故に祐樹はもう…投げやりに言葉を紡ぐ

「喧嘩売るにしても、相手との力量差を考えてくれ…この人が誰か知ってるだろ？」

「わかってんよ。川神百代だべ?俺達の地元。“ちば”まで情報は入ってきてるぜえ!」

ガムを租借する音と共にそう返してくる男達

「なら、なんで…」

盛大なため息を吐きつつ、祐樹が洩らした言葉に

「だから、直々にアイサツにきたわけだよ」

「う、噂つてのは…た、たいていオヒレがついてっからさ」

「七浜のチーム。“九尾の犬”を一人でつぶしたとかさあ。生意気なガキをボールに見立てて Dank したとか…いちいち嘘くさいんだ

よ」

次々と男達が言葉を紡ぐ

「狐じゃないのかよ…」

見当違いな言葉をポツリと洩らす祐樹を無視して

「女だからって手出さないと思うなよ…」

下卑た笑みを浮かべて告げる男達の一人に続き

「俺達は“原点回帰”の“本格派”だからよ。誰だろうとソッコー
“ぶちのめす”！！」

「お、お前は通学路で多くの生徒達が見てる中、は、敗北するんだ
な」

呂律の悪い男の言葉を最後にし、祐樹を無視して告げた

「テトリス、か。懐かしいな」

そんな男達の言葉に百代は男達の中の一人が腰に下げる携帯のストラップに視線を向け

暢気にそう言葉をあげる

「あっ？何言ってるんだ、お前」

ガムを咀嚼している男が不機嫌そうに言葉を放つ

「お前の携帯ストラップだよ」

腕組みを解くことも、余裕綽綽な姿勢を崩すこともなく

「それ、テトリスのブロックだろ？」

百代は問うてきた男にそう返す

「だから何だっらあ！関係ねーだろっがぁ！？」

問うた男とは別の男が奇声を上げ

「つつか何落ち着いてんだお前！！ム力つくぜ！？」

それに続いてさらに違う男が叫ぶ

「久々にやってみたくなった。協力してくれ」

百代が悪戯っ子のような笑みを浮かべて告げた言葉に――

「ああ？！なに――」

それだけしか言葉を返せなかった男達は

「こんな風に……お前達をブロック代わりにしてなあ！」

そのまま、ありとあらゆる間接を外されていく

激痛を齎すようにえげつない攻撃を繰り出す百代の前に成す術もなく周囲の観客から歓声上がる。もはや、ここからは一方的な展開にしかないのだから

「ああーん、今日もモモ先輩超カッコいい!!」

そんな言葉を筆頭に様々な百代への賛辞が叫ばれる中

「一人一発ずつパンチを入れて行ってるね」

「ですね」

土手沿いに居る二人。京の言葉に由紀江は頷き

「まゆうち。不快な笑いをあげてた丸顔の男の顔面に強打」

「はい」

「じゃあ、腹部には何発入れてた？」

そんなやり取りをしている二人の元に戻った祐樹の耳にそんな質問が入り

—— 8 発

内心で即答する祐樹

「6 発かと…」 「3 発」

自信なさげに告げる由紀江。スパツと言いつた京

「8発だー、京もまゆまゆも、まだまだ甘いなー」

そんな二人に男をふっ飛ばしながら答えを叫んで告げる

「弓使いより、目がいい剣士とか……これがまゆっちと私の実力の差なんだね……」

糸目になって、BOD札を掲げて呟く京

「あわわ……そ、そんなことありませんよ！この距離だから見えてい
るだけでこれ以上になれば本職の方には負けちゃいます！」

そんな京に対してワタワタと慌てて叫ぶように後半をワンプレスで
言い切る由紀江

「くっくっ……慌てるまゆっちは可愛いね……」

邪悪な笑み。ニヤリ笑いを浮かべて告げる京

当然のように涙目になる由紀江

「こら、京。由紀江を虐めるんじゃない」

額に凸ピンのプレゼントをする祐樹

「むう……祐樹はまゆっちとワン子にだけ甘い」

BOD札を掲げてジト目で見上げてくる京に対して

「そんなことないって…」

苦笑を浮かべるしかなく

「なら、凸ピンの後の真っ赤な所を祐樹の唇で直して。ほら、昔から言うでしょ？唾つけとけば直るって」

両の頬を掌で押さえながら夢見ごこちに囁く京

だが——そうは問屋が卸してくれないらしい

「駆けつけてくるのが遅いぞ！ゆ・う・き！！」

男達を殲滅し…テトリスを作って吹っ飛ばした百代が戻ってきた開
口そう告げながら

「百姉……」

呻くように告げる。背中に負ぶさって首に腕を巻き

自慢の90の大台のバストを大いに押し付けてくる。真っ赤になる
しかない祐樹

「お前は私の弟なんだからな」

背中越しに揺れ動く百代。次いでとばかりに

腰まで伸びた祐樹の長髪を掻き分けて、そのうなじに

「ん……くちゅ……」

口の中で捏ねた唾液を唇に少量乗せて、キスを落とす

「また……また、モモ先輩に……!!」

「……」

血涙流す京。人差し指を咥えて羨ましそうに見やる由紀江

「お前の白い柔肌だと内出血が目立つからな……これぐらいが丁度いい」

そんなことを告げる百代だが——髪に隠れたうなじは誰にも見れないのだが……

「と、とりあえず。学校に行こう!」

混沌としてきた状況。京に由紀江に百代。それにギャラリー

それも女子の百代のファンには射殺されんほどの視線にさらされる羽目になった祐樹は

上ずった声音で宣言して歩き出す

「ん、お……いいな。これ……」

負ぶさったままの百代が感嘆の声を上げた瞬間——さらに二人も片方ずつ腕を組む

「…………頼むから！離れてくれ…………！！！！！！」

春の日差しが燦々と降る中…………祐樹の絶叫が木霊した…

平和な日常だとさ…by 背中が煤けている“護”の青年（後書き）

この調子だと…分岐ルートに辿り着くまで
どれだけの時間と話数があるか…orz

題名がなくてもいいんじゃない？

―多馬大橋 別名、変態橋

「四月も半ばだが…新しいクラスには慣れたか？」

祐樹達の中でただ一人上級生たる百代が年上らしく皆の近況を聞く

答えるは祐樹

「春休みに新しいクラスメンバーで箱根に旅行したから…まあまあかな？」

少しだけ引つ掛かりがある言葉で返す

「あのオリエンテーションはいい行事なんだが…なんかあったのか？」

不思議そうに問いかける百代に

「あー…」

横目で京へと視線を向ける。向けられた当の本人は小説片手にすまし顔で黙々と歩くだけ

その様子に百代も訝しげになり、祐樹へとアイコンタクトを飛ばして二人だけ少し歩みを落とす

空気を察した由紀江が京へと声をかけて二人が雑談に興じた折を見て

「……クラスの中に…昔、大喧嘩した奴らが居てさ…」

「…ああ。京を助けた時の奴らか？」

その時にはまだメンバーではなく、後から知った話の中の奴らのことを言っていると検討をつけた百代が問う

「うん…そうなんだけど…」

そう言いながら思い出す祐樹は

―箱根 旅館

居た堪れない空気が部屋の中を充満しているのが全員にわかる

「」「」「」……「」「」「」

「はあ……」

思わずため息が洩れ出してしまう祐樹

部屋の中に居るのはキャップ、福本育郎、大橋スグル、熊飼満。

そして――

二人してコソコソと祐樹へと視線をやっては祐樹がそちらへと顔を向けると逸らす

島津岳人と師岡卓也。二人して何か祐樹へと言いたいのだろう……

「あー！もう、なんだよお前ら！！辛気臭くて、俺耐えらんねえよ！」

案の定、キャップが爆発して件の二人に問いかける

「あつ、おつ…モロ」

「なんだよ…ガクト。僕にだけ押し付ける気？」

二人だけで小さく会話して何かを擦り付けあう二人

しばし、そうしていたが…決まったのだろう。意を決して

島津が真剣な表情を浮かべ

「その……済まんかった！……！！！！！！」「ごめんなさい！……！！！！！！」

外に漏れ出さん勢いの叫びと畳に額を擦りつけて謝る

師岡も一緒に続いて島津と同じように頭を下げてる

「……なんだ？こいつら、お前らになんかやったのかよ？」

眼鏡を片手で調整しながら問いかけるスグル

「あゝ昔な」

糸目になつて答えるキャップ

「……俺に謝つても仕方ないだろう？ み——」

祐樹は三白眼になつて、自覚なしに冷淡な声音で返そつとするも

「椎名には謝つた!!」

額を擦りつけたままの島津がそうさらに叫び

「その……オリエンテーションの班決めの時に……」

正座して祐樹へと視線を合わせるのは無理だったが精一杯告げる師岡

「ああ！あれか！なんか島津がいきなり顔面を地面に擦りつけて、
叫ぶように謝つてたやつか」

愛用のカメラをメンテしながら会話に混じる福本

「あの時は驚いたね。僕なんて驚いちゃってクリームパン、一気
食いしちゃったよ」

何時も片手に必ず持っている熊飼。あだ名はクマちゃん

「……そうか。それで京に許して——」

三白眼も冷淡も保ったまま

「おいおい、祐樹。少し落ち着けよ。いつものお前はどこ行ったんだよ……」

キャップが見かねて祐樹を止め

「で、どうなんだ？」

代わりに二人へと問うと

「……許してくれたのかどうかわかんないな……」

「ああ、「そう……」の一言で終わちつまったからな……」

師岡に続いて島津がそう告げて肩を落とす。雰囲気的に二人は許されてないと思っているのだろう

「ああー……もう昔の話だし。京にとっちゃ、もうどうでもいい話なんだろうよ」

呆気らかに告げるキャップは

「まあ、俺らも、もう忘れた話だ！水に流してこれから楽しくやってこうぜ……！」

そう宣言して祐樹、島津、師岡を抱きこんで無邪気な笑みを浮かべる

「はあ……リーダーの言うとおりか……」

そんなキャンプの行動に呆れたようでありながらも笑みを持って

「俺からも京に伝えとく……とりあえず、まあ、よろしく」

照れくさのか髪を掻き耑りながら右手を差し出す

島津も師岡も答えて手を差し出し握手を交わす

「お前ら、終わったのか？」

話に取り合うことをやめたスグルが携帯ゲームに移植されたギャルゲーをやりつつ声を上げたのを皮切りに

「おっ！なら男だけなら……やっぱ、エロトークは欠かせないよな！お前ら48手言えるか？！」

鼻息荒く福本……この話の後からヨンパチとあだ名をつけられる男が意気揚々と喋り出し……

――多馬大橋

「ってなわけで……まあ、俺とキャンプは一応問題はないけど……」

肩を竦めて事のあらましを告げる祐樹

隣を歩く百代は難しい顔を浮かべ

「んー…。京らしいと言えば京らしいか…」

「そうだけど……」

どこか釈然としない言い方の祐樹

「孤独最高」

「うえ?!」

GOOD札を掲げて百代と祐樹の間に割って入ってくる京

「私は…ここに居るみんなとワン子とキャップとゲンさんが居ればいいよ」

しんみりと告げる京

「ロンリーウルフだな」

しみじみと言い京を抱き寄せて頭を撫ではじめる百代

「わんわん」

「はぁー…もつと、“外”へと意識を向けて欲しいけどな…俺は」

毎度のごとくな感想を洩らす祐樹

「くーん」

返事とも返事ともつかない。鳴き声をあげるだけの京

そんな彼らに――

「うーす。佐橋おはよう」

2・S三人組の内の二人。その男

「おはよ。井上」

「はよ。ハゲ」

「……」

「おつおはようございます！！井上先輩！」

井上準が挨拶してくる。見事なまでのスキンヘッドを光らせて

「うお……お前んとこの一年。慣れねえのかよ……」

「仕様だ。我慢しろ。文句あるなら――」

正面からメンチきったような凄まじい由紀江の挨拶にドン引き状態の準が抗議するも

さわやかな笑顔。そう、笑顔なのだが……目が笑っていない。般若を背負う勢いの恐ろしい雰囲気を纏わせて

「ねえよ！！つか、お前も恐えよ！！」「祐樹はほんとに……まゆっちに甘い」

胸のまで片手を坊さんのごとくに立てるスタイルで必死に言い切る準
隣に居る女の子。綺麗な…年老いた髪が放つ白さとは真逆の輝きを
放つ白髪と赤目…アルビノの少女

榊原小雪はつまらなさそうに準の後ろに隠れているのみ

「武力的にはモモ先輩が恐ええけど…精神的にはお前が一番恐え
よ。風間ファミリーの中じゃ…」

ぶつぶつとそんなことを言う準。背中に隠れている小雪は準が相手
をしてくれないゆえに

周囲を見渡し――

「ちようちょー」

唐突に声を上げて背後の気配が離れるの察知した準が振り返り

「こら、雪。車道に出たらダメでしょ」

「なんで〜?」

「車道は車が通るでしょ?危ない行為禁止」

「???らんらんるー」

「唐突に危ない発言禁止!!!!」

二人。祐樹と準はそろって突っ込むと

「ふえ……」

涙目になって準の背中に逃げ込む小雪

「弟、泣かしちゃだめだろー……」

呆れた表情で告げる百代と

「あ……ごめん」

罰の悪そうな表情で謝る祐樹

「そっちの一年と同じ……つか、どうなんだろうな……」

諸行無常とはこれいかにと言わんばかりの複雑な表情で祐樹に告げる準

「僕……こいつ、嫌い!!」

そう言って駆け出していく小雪

「あー。悪いな佐橋」

「すまん……手間を掛けさせてしまった」

「気にすんな。雪のアレはよくわからんからな……じゃあな、また学校で」

そう交わして準は小走りに小雪を追いかけだし

「……なんか、あつたんですか？祐樹さん？」

由紀江が問うてきた質問に……苦い顔で

「どうも…俺、彼女には生理的に嫌われてるらしくてさ」

どんよりとした空気を吐き出しながら答える祐樹

「ん。いいじゃないかな？…これ以上、女を引っ掛けてこない方がいいし、私的に」

ドス黒い笑み。BOD札。悪魔のように一癖ある口元を作る京

「それは一理あるな（ありますね）」「」

残る武士娘二人も即座に同意する

さらに凹まされる祐樹であつたが――

「おや？佐橋君。おはようございます」

甘い声。振り向いた先に居るのは薄褐色の肌を持つ美形の男子

「……おはよ。葵」

少しだけ顔を嫌そうに歪ませて挨拶を返す

「つれないですね…私はこんなにもあなたを愛しているのに…」

スツと伸ばされた手は祐樹のしなやかな前髪を梳くいあげる

露になる素顔。頬を赤くして……視線を逸らせるその姿

わかる者にはわかる——迫る美少年の手練手管に追い詰められる美少女の図

「NO、Thank」

やけに流暢な英語で答える。冷や汗たらしめて、全力で抗うように

「いい。BL的にはとってもいいけど……」

音を立てることもなく祐樹と葵の間に身を割り込ませて

「祐樹の素顔を晒すのはいただけない……さらに女を寄せるから！」

クワツと目をむいて手を払い除ける京

「み、京……」

蛇に睨まれた蛙のように固まっていた祐樹にとって救い

崇めるように京を見上げる。腰砕けになった体勢から

「祐樹のH……」

頬を緩ませ、ほんのり蒸気させながら告げる言葉とは裏腹に——

「京の独断場は頂けないな」

不敵な笑みを浮かべて京が下着を祐樹の視界に晒そうとする行動を
疎外

拾い上げてお姫様抱っこで抱え上げる百代に対して

「うえ?! も、百姉……は、恥ずかしい」

顔を真っ赤にさせて拘束から抗おうとするも

「愛い奴だな〜祐樹は」

頬ずりされる始末。自らの力を封印している現在では

「た、すけて〜由紀江〜」

「……本気を出されればいいじゃないですか……」

「まゆつちだつて乙女なんだぜ〜。嫉妬ぐらいするぞ〜祐樹」

ボソッと告げる由紀江。その感情を補足する松風

「おやおや…振られてしまいましたか」

「…スルーされてしまいました松風…」

「しょうがねえよ〜核心的部分に言及しちまつてる発言だからな〜」

肩を竦めてボヤク様に嘆く葵冬馬。完全スルーの由紀江と松風コンビ

「男に迫られても嬉しくない。だからと言って、京に迫られても“外”を見てからとしか言わない」

百代の腕の中で涙目で冬馬に告げつつ、上げ足とろうとスタンバイする京を牽制

「本当にツレないですね」

無駄にさわやかな笑顔で応えた様子のない冬馬と

「ちっ…」

親指を噛んで悪態つく京

「まあ、いいです。機会は幾らでもありますし——」

やつ、百代の腕から開放された祐樹が服の乱れを直している間に

音もなく忍び寄り——といっても女子メンバーなら誰でも止めようとすれば止められるぐらいだが——

「この美貌なら…エレガント・クワットロ。いえ、チンクエに…」

そう言い切ろうとしたが…

「語呂が悪いですね。なんなら三年の京極先輩を除けますかね？」

爽やかに物騒なことを告げる冬馬に

「嫌味だろ……。それに京極先輩に迷惑かけるなよ？世話になってるんだから」

悪態ついて、心底嫌そうに答える祐樹

心のオアシスたる言霊部。部員数1人——彦一が入部を許可するのが稀な為——

お手伝いの存在で出入りを許されている祐樹は世話になっている人を庇う発言をした為に

「ふむ……。面白くありませんね。本当に排除してしまいますか」

人差し指を頬骨に当ててさも当然と言う風に言葉を紡ぐと

「冗談に聞こえないから！葵！」

必死に意思を止めようとする祐樹に

「まあ……冗談ですけどね」

前髪を梳いて流す動作付きで無駄にいい笑顔

「もういいよおまえどっかいけよ……」

性も根も尽き果てと言わんばかりに地面に這い蹲る祐樹

「そうですか。では、また学校で……」

そう言ってサッサと行ってしまふ冬馬

「お疲れ様です。祐樹さん……」

「由紀江だけだよ…慰めてくれるのは…」

しゃがみ込んで祐樹の頭を撫でる由紀江に祐樹は目尻に涙を浮かべて――

「おーい。お前ら早くしないと遅刻だぞー」

先を行く百代と京

「ほんと、遅しくて……泣けてくる」

色々な意味で泣きが入っている祐樹を引っ張るように由紀江は手を取って

「はい！今、行きますー！」

歩き出す。途中、ワン子を拾って――彼ら風間ファミリーは学校へと到着するのであった

「アタシは?!?!」

地文のやる気メーターが激しく落ち込んでいる為、削られますた

題名がなくてもいいんじゃない？（後書き）

「がるるるるー!!」

ちよ、まって、たべ――

「ワン子、そんなモン食べたらダメだぞ。こっち来い。おにぎり作ってきたから」

「きゃんきゃんー!!」

げふ…そんな、愛玩犬に食い殺されそうになった地文も心配して…

あつくておかしくなってるんです

とりとめもない日常

―川神学園 2・F

「おはよー」

先頭を切るは一子。教室内に居る者すべてに掛ける元気な挨拶
様々な者達が一子の挨拶に銘々に返していく中

「おはよー」

祐樹が挨拶をしながら入り、それに寄り添う形で京も入っていく
無論、京は挨拶など…欠片もする気がない。いつも通りの学校内では無口スタイルへと入る

「おはようございます！佐橋ちゃん」

「おはよ。委員長」

朗らかに返してくれる2・F委員長の甘粕真与

彼女の返事に続くように先ほど挨拶した女子――小笠原千花が手を振ってくる

手を振り返して席に着く。隣の席の京は速攻で読書モードに

「よいしょっとー」

祐樹の前の席に座る一子は徐に鞆を開けると

「てぐ、てぐ!!」

片手にハンドグリップ。片手に先ほど日課の走りこみを終えて合流した時

これも日課になっている祐樹からの差し入れたるおにぎりを持って

「こら、ワン子。食うかトレーニングするか…どっちかにしなさい」

「んや？ひかんとゆう——」

おにぎりを食べながら鍛える一子に苦言を申す祐樹に反抗する一子であつたが…

食べているおにぎりを啜えた形で固まり

「ひゅっぱい?!?!」

「梅干は塩分がより良く含まれているからな…」

したり顔で告げる祐樹。予想していた具とは違つた——普段は大体、昆布か鮭

具によつて口の中の酸っぱさを取りなくなる一子。涙目になりつつあるも

「お父さんは本当に、ワン子とまゆっちに甘いね…」

糸目になりつつも読んでいた本を片付けて、鞆の中から水のペットボトル出す京

そのままワン子へと差し出すと引手繰るように取っていき

「母さんも甘いだろうに……いつもこうだから奇襲を掛けたってのに」

犬耳を逆立たせて一生懸命に水を飲む一子の頭を撫でながら祐樹が乗る

「た、たまったもんじゃないわよ！祐樹！」

逆立ったままに怒り出した一子。だが、その頭を撫でる腕を払いのけたりすることはない

「なら、どっちかにしろ。でないと——」

般若を出しながら告げてやると

「ひい？！わ、わかったよおお…なんだよお…」

犬耳へたり込ませて涙目になって縮こまってしまふ

「8時26分。ワン子が調教されてる。許せない…」

何かに書き込みながら恨めしそうに祐樹と一子を見やる京だったが

「チャイムが鳴る。お前ら、そろそろやめとけ」

後ろの席に座るゲンがそう言うと同時にチャイムが鳴り

「皆さん！小島先生きますー」

一瞬にして雑談がやむ

「まずい、それ僕の漫画！隠して、隠して」

師岡——モロがそう声を上げ

「ワン子。片付け」

「あうう……」

祐樹の言葉に先の事を引き摺りながらも鞆に直す一子

「ちょっと、そのオタク寝てるんだけど」

千花がそう言い放ち

「スグル、起きんと。鬼小島が来る時間だぞ」

島津——ガクトがスグルの揺すって起こし

「ウオ、やべ…夜更かしがたたっちまってな」

その言葉と共に廊下からヒールが地を打つ甲高い音が響いてき

教室のドアが開くと同時に全員の背筋がピンと張る

「朝のHRを始める」

そう告げるは2・Fの担任。小島梅子。通称——梅先生

おんとし
御年、28の緋色の髪を頂から上げてバレッタで止めた美人教師が

凜とした声音で告げる

「起立！礼！」

クラス委員長の真与の号令を合図に一糸乱れぬ礼をする祐樹達

「おはよう！着席してよし」

「出欠を確認する。各自速やかに返事をするように」

そう告げられ、あいうえお順に名前が呼ばれていき

「では、これで出欠確認を終了する」

名簿を硬い紙を勢いよく叩き合わせた音を響かせた時

教壇からは後方に位置する扉が開き

「はあ…はあ…福本育郎、居ます！！」

——うわあ…今来るとか…

内心でそんなことを思う千花

「梅先生……セーフでしょうか？」

恐る恐る伺いを立てるヨンパチだが

「すでに出欠は取り終えた」

無情な宣告。何時も携帯している鞭を撓らせて

「げ……」

「教育的指導……」

ヨンパチが呟いたと同時に鞭が走る。教室内に肉を打つ音が響き渡る

——南無

一言そう思っただけの祐樹

「お前達もよく覚えておくといい。集団生活を乱す者は本来これぐらいの罰が妥当なのだ」

「俗物にならん為にも……この痛み、覚えておくのだ！福本……」

「は……いい……」

梅子の言葉に威勢よく返事するヨンパチ。……最後に小さく誰にも聞こえないほどに小さく洩らした、もつと……

という言葉は精神衛生上、祐樹はスッパリと消し飛ばした。力に優れているというのも考え物かもしれない…

「次に――」

教室の教壇側の黒板の上に掲げられている武具を指し示しながら梅子はヨンパチに釘を刺して

伝達事項を伝えて……教室から出て行く

それによって、一気に教室内の緊張した空気が解けていく

「ふ、福本君大丈夫？はい、このハーブ食べて。打ち身にいいんだよ」

クマちゃんを筆頭に男子連中が集まり、梅子の鞭について談義し始める

いわく、気持ちいい。昨今では問題になりやすい体罰だということに…なぜか、それを問題視する気にならないとか

「サル達がなんかキモイ事、言ってるんですけどー」

そんな話が耳に入った女子達。千花を筆頭になんとも言いがたい視線を男子達に送る

一気に教室内が騒ぎ出し

「宿題写させなさいよ。祐樹」

胸を張ってとてつもなく情けないことをドヤ顔で言う一子に

「ほう……」

「ぴぎゃ?! あわわわ……!」

学習しない子である……色んな意味で

「ワン子。いつも委員長に見せてもらってるんじゃないか?」

「み、みやこおー!」

京が意地悪そうに告げた言葉を掻き消すように一子があたふたするも

「ほう?」

「あわわわわ……!」

般若の前に成す術もなく、チワワのようにプルプル震えるしかない
一子

同じイヌ科。知性も同じくらいかもしれない……

「お父さん。いいじゃない……」

一種の諦めが秘められた慈愛かつ哀れな瞳を持って一子の頭を撫で
る京

キューンと鳴くしかない一子

「はあ……ほんと、母さんも甘いよ……」

そう言つて、普段どおりに戻る祐樹

「あ、ありがとうー！みやこおー」

涙目になって京の胸に飛び込み

「はい、はい」

宥めつつ

——…悪くない。本当に悪くない

お飯事だとしても、満更でもない京であった

結果的に一子はゲンに宿題を写させてもらえて事なきを得たと追記しておこう

「ゲンも甘いな……」

「うつせえよ。タコ。……別に一子の為じゃねえ。課題出した野郎の怒鳴り声が煩せえから見せてやったまでだ」

― 昼休み 2 - F 教室

幾多の男子達がチャイムと同時に駆け出していく。食堂へと^{せんじょう}

そんな中、弁当組は各自グループを作って机を寄せ合い

「おべんと、おべんと」

開口一番。歌うようにそう告げて…祐樹へと両手を差し出す一子

「まったく…寝てばっかだというに、なんでそんなにお腹がすくのか…」

ため息交じりに呟きつつ……自身の三倍分はあるであろう三段重ねの重箱を一子へと渡す

「育ち盛りだもんね!!」

喜色満面で言い切る一子。祐樹の嫌味にたえることなく早速、包みを広げながら

「真っ赤なお弁当」

「おお。京のは七味で染まりすぎね」

糸目の一子の感想どおりに……総てが赤で統一された弁当があった…

「女の子なんだから、あんまし刺激物ばかりとってももらいたくな

いんだが……」

苦笑を浮かべて告げる祐樹に瞳を光らせて

「それは何？遠まわしにいずれ、俺の妻になるんだから刺激物ばかりとって子供が生みにくくならないで欲しいってこと？」

両頬に手を当てて、奇妙に体をくねらせ始めた京を

「なんか、面白いニュースやってないかな？」

「しょーもない……」

振つておいて危険になれば即撤退……つか、逃げ出した祐樹にBOD札を掲げて糸目になる京

逃げた矛先である教室内に設置されたテレビ——ニュースなら見てもいいという許可が出ている——を見やると

「関東地方に、広い範囲で花粉が……」

男性キャスターの声

「何か面白いニュースしないかな？あつ、祐樹も飲む？」

一子がそう言いつつ牛乳を差し出し

「もらう。ありがと、一子」

受け取った祐樹は、食後に残しておき弁当を食べながらテレビへと

顔を向ける

「それでは昨日のニュースです。昨日の午後七時ごろ、埼玉県深谷市の飲食店で無銭飲食をした男が居合わせた男子学生に取り押さえられ――」

キャスターの声が続いていき…

「男を取り押さえたのは神奈川県、川崎市在住の風間翔一さんで…限定メニューを先に注文されて腹が立っていたので本気で追いかけたと――」

途中、訝しげな表情を一瞬だけ作ったキャスターなど意識の外

「ぶはっ！！！」

「妙技、ムーンウォーク」

一子が盛大に牛乳を噴出し、直撃コースだった京は華麗に回避する

「あ、ゴメン。吹いちゃったわ」

苦笑いで告げる一子に

「被害軽微。それより」

そう続ける京が祐樹へと視線を向けると――机に突っ伏している姿

「……あいつはどこでもかしこでも……騒動を起こすな……」

もはや、疲れきったという表情。毎度、某没落貴族が経営する学校の生徒会長の後始末を苦心していた副会長のごとくに…

疲労に満ち、嘆きが張り付いた顔でため息を吐く祐樹。キャップの無謀と騒動の後始末に毎度苦心するのが役目なのだから——そうなる

「前回の新聞からグレードアップだね…当然、これも新聞の片隅に載ってそうだけど」

そんな京の台詞は教室内に残る女子達の黄色い歓声で掻き消され

「なんか、お礼にタダ飯要求してそうー」

ワン子の言葉のみ祐樹の耳に届く

「それは、ワン子だけだろ？まあ……お土産押し付けられてそうだが」

「なにおう！勝負するっての！」

いきなり、スパーをし出した一子を追いやって

「あわわ」「キャップ。電話に出ないよ」

「そのうち…帰ってくるだろ…」

こめかみに細くて長い…女っぽい指先を置いて

盛大にため息を吐くしかない祐樹。食後に残しておいた牛乳に手を掛けた時

「ハアイ、エブリバディ、春と言えば恋だね。でも浮かれて妙な病気にかかるのだけは勘弁な」

軽快な声音で準の声が校内スピーカーから流れ出す

「今週もラジオ番組LOVEかわかみ。始まるよ」

「パーソナリティーは俺、ハゲこと二年の井上準と」

準の自己紹介に続いて

「人生、喧嘩上等諸行無常。三年の川神百代だ」

百代の物騒な自己紹介

なんととはなしに耳を傾けだす京、一子、祐樹

「今日も百代さんに相談メールがたくさん届いてますよ」

軽快な声音が

「さて、一発目……って、おい。正気かよ、今朝の惨状見てねえのかこいつ？」

いきなり怪訝な声音へと変り

「かあ……さすがに——ぐげっ?!」

「何、私から隠してやがるハゲ。寄越せ」

準に一撃入れたであろう。くぐもった悲鳴を上げて沈黙した準に変わり百代の声が聞こえてくるも

息を呑むような……冷たい感覚が漏れ出しているように感じ

「へえ……まだ、私を知らない奴が居るのか。まあ、いい。せっかくのお便りだ。読み上げてやろう」

笑いを含んだ言葉。だが、声音は底冷えするようなものであり

「川神さんは……。する時——」

最初の。が紡がれた瞬間。クラス内に男子の興奮した雄叫びと女子の悲鳴が響き渡る

そんな中、祐樹は一子の耳を両手で塞ぎ百代の言葉をシャットダウンする

祐樹の行動に小首を傾げて、頭上に二、三個？マークを飛ばす一子。顔がちゅ。やさんだ

「答えてやる。変りにタマもらうがな。……ああ、どこに居ても構わん。手紙についてる気配は覚えたからな」

簡単に連想できる。餓狼のような肉食獣が獲物を捕食するような凄惨な顔つきと禍々しい闘気を発するのが

「相手は2-Fの佐橋祐樹。それ以外などありえん。まあ、それも男としてなのか道具としてなのか……秘密だ」

マイクに向かってなめかましい声音で告げ。マイクの主電源を切る。
ブツという音が流れるのを最後に放送は終わった

代わりに教室内で

「ブーーーーー!!」

「秘技！ムーンアタック！！ああ、祐樹の白いのが絡みつくよ……」

祐樹との身長差で被害を被ることのなかった一子の背後で盛大に牛乳を噴出す祐樹

その瞬間——額に閃光を走らせて、かつてないほどの俊敏な動きで突っ込んでいく京

もはや、混沌と化した教室内であったが……放送を聞いた梅先生と鉄心により収束

送った生徒と百代はこっそりと鉄心に絞られるのであった…

—放課後

一子とは別れて京と二人だけで玄関口から出る

「私、今日は弓道場に行くから」

「ああ」

「祐樹も来ない？」

上目遣いで告げる京。昔といっても…

残り少ない一年生。出席日数などの問題は——大学レベルの試験を合格することによって免除

良くも悪くも実力主義的——決闘というシステムがあることから——
—なこの学校のおかげで留年^{タフリ}は免れたのだが…

「うーん…」

困った顔で唸る祐樹。試験と何かの部活に所属するのが条件であった為

「皆——っていうか、私的に祐樹が居るなら毎日行くんだけどな」

頤に指を当ててGOOD札を持ちつつ、意味深な視線を送る京

「いや、行かないよ……前みたいなのは勘弁だよ」

その話を聞きつけた京の先導の元、弓道部に顔出したのが……

「あれは…まあ、誤算だったけどね…」

力を封じているとは言っても…元の身体能力は上位クラス

軍隊上がりの誰かさんと父親からの仕込による射撃術によって

不恰好なスタイルでありながら、初めてで矢を的のギリギリとは言え当てた祐樹

その時の様子が――

「佐橋……お前、銃を扱ったことがあるのか？」

訝しげな視線で問う梅子。彼女は弓道部の顧問であり、色々な伝でその姿から真実を言い当てる

「あゝ、そのまあ……小島先生なら知っていると思われませんが、父の仕事関係で触る機会があつて……」

「ふ――」「ふっ！なら、その腕前！！我が射撃部が戴いていこう
！！」

「なっ！ラト――」

そんなドタバタがあつたが為に

「遠慮する。行つといで」

優しげな微笑を浮かべて言われれば

「……わかった」

従うしか他ない京。BOD札を掲げて祐樹と別れて弓道場へと向かう

―佐橋寮 玄関

そうやって一人で自宅へと帰ってきた祐樹

言霊部は彦一からの呼び出しがない限りは活動がないので

自然、殆どが帰宅部と変わらない

「お帰り。どうだった？」

玄関口で出迎えてくれるは第二形態のアウグスタ

やる気のない声音で訊ねてくる

「今日も……色々だったよ……」

疲れ果てた声音

「ふん。まあ、お前だからな平穏な星の下に生まれてないのだから仕方ない」

ふんぞり返って胸を張る

「……冷たいな。アウグスタ」

「なんだ？優しくされたいのか？京の為に取って置かなくていいのか？なら、もらうぞ？」

「もついいよおまえも……」

そう言つて自室へと力なく歩き出す。主なヒーロー……ちがった。ヒロインが武士娘と強気っ娘なんだから仕方ない

自室の扉をサメザメと泣きながら開けると

「あ、お帰り祐樹ー」

ラーメンどんぶり片手に祐樹の学習机に座るキャップが気軽に挨拶する

「もつ……いや……」

そのまま部屋の隅っこでひざ抱えて暗雲立ち込めさせる

帰ってきた部屋がラーメン臭で汚されていたのがか、その気軽な態度でラーメン啜るキャップに対してか

はたまた全部ひっくるめてなのか——当人しか知りえない……

「どうしたよ？祐樹……？とりあえず、お土産」

持っていたネギの大袋とネギ煎餅の袋を祐樹に渡す

「ほっとけ……」

といいつも片手で受け取る祐樹

「それより聞いてくれよ」警察に解放されるの遅くってさ」

つとつと語りだし

「……お前、この前の野宿の時の懲りてないのかよ……」

話が一段落したところでジト目で見上げる

「ありゃ、怖かったぜ？なんせ、目覚めたら知らないおっさんが俺のジャージ脱がそうとしてたんだぜ？」

ファミリメンバーの大体に共通する糸目になりながら

「まー逃げ延びたから…問題なかったけどな」

最後にハニカんでサムズアップし

「今度、あのおっさん見つけたら同じ恐怖を味あわせてやる」

「お前はもう少し世俗を知れ。それと相手が喜ぶだけだからやるな」

人差し指は額。親指と中指は頬骨。薬指は頬の下部。小指は顎に当たて…深い深いため息をつく

「なんだそりゃ？って、いけね。バイトの時間だ！行って来る！！」

疑問も一瞬。時計の時間が目に入ったキャップは風の如きスピード

を持って祐樹の部屋から飛び出し

あっという間に姿を掻き消す

「……………とりあえず、帰ってきたらクッキーにお仕置きしてもらおうか」

机に残っていた井を見て、病んだ瞳と凍えるような声音でそう呟く祐樹であった…

「お風呂シーンは？」

「覗く気満々だな…京」

「うん。それが私だし、そんな軽蔑してそつで内心してない祐樹の瞳とか好きだよ…」

「発情すんな！！服脱ぎだすな！助けて！！ゲン~~~~！！！！」

「BL脳相手にゲンさんに助けを求めるとは……………玄人だな！祐樹！」

「うぜえよ、お前ら。……特に京。鼻血たらして俺らを恍惚に見るな。おめえは抱きつくな!!」

とりとめもない日常（後書き）

あっぱー過ぎて…運営に消されるかもね

“義”の騎士娘と見せかけて——（前書き）

時間があつたのでHDDを取りにいった…

“義”の騎士娘と見せかけて――

―2009年 4月22日 佐橋寮 自室

「はっ、つい寝顔見て結婚生活を想像してしまった…」

「妄想逞しいな京。おはよ」

「おはよ。私もやっと…祐樹の眠りを邪魔しないグループに入れたね」

恍惚とした表情で告げる京。苦笑を浮かべるしかない祐樹

時刻はAM5:00。通常、祐樹は起床時間までに部屋に誰か入ると即座に起きて…その日一日不機嫌状態になるという厄介な癖を持っているのだが――

「これは…もう、お嫁さんになるしかない展開だね」

「ないない。それを言ったらワン子と由紀江だってそうなるだろう？」

京の言葉に牽制を放つ祐樹

「ちっ…」

親指を嚙んで悪態を吐く京にホツとする

要約すると――京以外に“この世界”でその癖をキャンセルできるのが祐樹の言うとおりに一子と由紀江のみ

幼い頃から二人とも、同衾。失礼、一緒に寝ていた仲である二人のみであつたのだが――一子など自身から湯たんぼ代わりなると言つて潜り込み

由紀江は寂しさと切なげな瞳での上目遣いのダブルパンチによる祐樹の理性をノックアウトしての同衾――

――やっぱ……あれからだよな。きつと

一緒に寝た記憶のない京に関してだけは臆げながらも

――あの時から

世間的に失踪とされた後の…再会

それが決定的に己の中で京が完全に庇護しなければいけないという無意識下に含まれてしまったが為に

――正直。……怖いんだが色んな意味で

……全部台無しだ。この主人公

「とりあえず、起きるか…」

「制服用意しておいたよ」

そう言つて部屋から立ち去る京

その後姿を見送つて祐樹は用意された制服の襟下に手を差し込み。
ブツを回収

小気味よい音を立てて襖を勢いよく開けると――

「あいた！」

二階へと続く階段の影で盗聴器の受信機片手に隠れていた京の頭部
目掛けて

盗聴器を投げつける。無表情で

「うう…祐樹のいけず」

涙目な京を放置して襖を閉めて――

「…出て行つてもらえませんか？由紀江さん」

「おい、こら祐樹！まゆつちが折角起こしに来たつてのに…何、京
さんとストロベリータイム繰り広げてるんだよ」

目を白黒させて顔を真っ赤にしながら、両手の掌で自己主張しつつ
祐樹に文句を言う松風

盛大な溜息が洩れ出る中

「ほら、マイスター起きなよ」

「やだ！もう朝なんて騙されないぞう！」

「なんだよ！お前ちよつとは人の言う事聞けよ！お前お仕置きするぞ」

「なにぃ…お仕置きだと…？」

「そうだよ。僕の言うこと聞かないお前が悪いんだ」

「ま、また電気系の攻撃か…！」

「今度は竜巻系だ、運が悪いと大出血だぞ？」

「わ、わかった起きる。起きるから！」

「祐樹を見習って早起きしないからこうなるんだよ」

「くっそっ」

—— 脳裏に思い浮かぶ光景だな

思わず隣の部屋から聞こえてくる怒涛の会話に想像を膨らませてしまっ祐樹だが

「うう……祐樹さんにも完全スルーされました。私は明日からどうすれば…」

サメザメと泣き出す由紀江。笑顔を浮かべての涙に哀愁が漂う

「って〜こら！祐樹〜！まゆっち泣いちゃったじゃねえか！！ど
う、責任取るんだよ！」

正座から崩した女の子座りで嘆く由紀江の隣。畳の上で盛大に動き
回って叫ぶ松風

今日も今日とて忙しい風間ファミリーの一日が始まる

――多馬大橋

キャップ、一子、京、百代、由紀江。そして――

「んだ？」

「いや、久しぶりだなと思って：前回から数えると二週間ぐらいか
？一緒に登校するの」

“この世界”ではこの時点で風間ファミリーのメンバーの一人。源
忠勝が不機嫌そうに祐樹へと問いかけるも

暖簾に腕押しという感じにいつも通りに答える祐樹

「ちつ……仕事が詰まってたんだよ。文句あるか？」

「いや、ちつとも」

「そうそう！文句なんてないよ！タツちゃんと一緒に登校するのにさ！」

堪えない祐樹。満面の笑顔で元気よく相槌を打ちながら答える一子

「そだね。ゲンさんが居ないと祐樹が色んな男から粉掛けられるから、ある意味文句あったかも」

邪笑を浮かべる京。そのまま

「で？なんで、まゆっちは朝から祐樹とクツツイテルノ？」

あえて…手を繋いでいる状況を正確に言わず由紀江へとガンを飛ばす

「あわわ…」

「なにお～！京さんは朝っぱらから祐樹とイチャついてたじゃねえか～！！まゆっちにも少し分けるよ～！」

顔を真っ赤にしてうろたえる由紀江。由紀江の代わりに反抗する松風

「？粉つて…なんか祐樹にかけたらいいことでもあんのか？」

「お前は知らなくていいさ。キャップ」

疑問符を浮かべるも百代に言葉を一蹴されて終わるキャップ

そんな一行の遙か前に――

――男。武道家か

祐樹の内心での感想と同時に

「橋向こうの方に誰か居る…」

京がポツリと呟き

「男か……武道をやってる人間だな」

百代が腕を組んで、僅かに闘気を開放するも……相手の反応のなさに引っ込める

「そうですね…」

由紀江も相手の力量を把握できたのであろう。認識した瞬間に何時も胸元で抱きとめるように持つ愛刀に力を込めていたが緩める

「お姉さま目当てじゃないかしら？」

……悲しいかな。女子メンバー内で唯一相手の力量を把握できない一子は素朴に告げる

——…やはり…間違いだったのか…

そんな一子へと視線をやる祐樹。誰にも気づかれないように

見据える一子の後ろ姿。思い起こすは——幼き頃に百代のようにになりたいと修行をすると言い出した時

——まだ、決める段階じゃない。それに俺が決めることではない

心の中で頭を振るように

——一子が決めることだ。己の限界は。……それまで俺は、見守るのみ

そんな風に物思いに耽っていると

「どしたの祐樹？もう、終わっちゃったよ？」

覗き込むように見上げてくる一子によって引き上げられ

「もう？早いな」

考え事をおくびに出ないほど驚いたように答える

結果など……わかりきったことであっても——

「いつか、絶対に、お姉さまと同じくらい強くなって見せるわ！！」

軽快な動き。闘志に燃える瞳でシャドーをしながら歩く一子を

一歩引いた位置。後ろからその姿へと何とも言えない瞳を持って見やる祐樹だったが

「……祐樹さん？」

問いかけは由紀江。不思議そうな表情で見やってくる彼女に対して

「ん？どうした？由紀江？」

常の柔らかな笑みを浮かべて返し

「いえ、その……なんでも、ありません…」

視線を横へと、瞳を逸らしてはぐらかす

「いい度胸だね。——まゆっち」

絶対零度もかくやという声音。耳元で囁いてくる京と

「なんだ？なに、まゆまゆと内緒話してる。お・と・う・と」

イジる気満々の百代が癖のある笑みを浮かべて問い詰めてくる

そんな一行は今日も今日とて変態橋を渡っていくのであった…

— 川神学園 玄関口

「あ…いてて…」

「自業自得だ。もてなしてもらったんだったら相応の態度と礼を返さなければならん」

百代から受けたダメージが抜け切らないまま靴箱へと屈んだキャップが洩らす苦痛に

しらけた瞳で嘆息がちに言い切る祐樹

事の発端は昨日…キャップが千花に誘われてスイーツを食べに行つたという話なのだが…

「…お前にソレを求めるのは酷かもしれんが…」

伏せた瞼を半開きにして告げる。聞いた話の内容では……どうみても千花はデート感覚で誘つたというのに

奢りだという話だけで付いて行き、食べるだけで話しに付き合う事すらしなかったキャップの行動。その一件による話だ

「同じようなことをしている百姉が京達にも俺にも——」

同じクラスの京と一子は先を歩き、学年自体が違つ百代と由紀江とは玄関口で別れ

「ゲンにも注意されてないのがわかるか？」

「…俺を話の中に入れるな。めんどい」

男三人。キャップを中心にして左に祐樹、右にゲンの三人で歩いていく

道行く女子達の視線が当然の如くに三人。いや……二人に集中する

エレガンテ・クワットロ。簡単に和訳すると――イケメン四天王

それに名を連ねるキャップとゲンが歩く姿は……お年頃的女子高生達にとっては注目の的なのは必然であり

「……いい絵なのに、あの辛気臭いつてか、ウザったいので台無し」

「ほんと、ほんと」

交流のない者達にとって祐樹は無用の長物。むしろ、彼女達の視点からでは邪魔者でしかない

――悪かったな。辛気臭くて…

前髪によって完全に隠れている。額に浮かぶ青筋は

――お前らの言い分も理解できるが、当人の居ないところで言え…

隣を歩く二人……キャップがヤキを入れられた件でゲンに質問し、素っ気無くも適当に相手するゲン

――……まあ、仕方ないか

その二人を見やって納得するしかない祐樹。しかないわけではなく本当に納得してしまっているが…

「後は、モモ先輩に教えてもらえ。俺は知らん」

やっつけられるかという雰囲気言い切るゲンに

「えゝ…結局、モモ先輩に教えてもらうのかよゝ…絶対、なぐられるじゃんかよゝ…」

唇を尖らせて悪態を吐くキャップ

「後はてめえでなんとかしとけ。祐樹」

そう言い、さつさと教室へと入っていくゲン

——結局、キャップの後始末は俺がする羽目か…

面倒事は自分とて嫌だと思いつつも

「おはよー。さはつち」

「おはよ、小笠原さん。……とりあえず、余計かもしれないがキャップは叱っておいた」

教室に入り、挨拶を交わした千花へと申し訳なさそうに告げる

結局のところ…なんだかだと言って

「あ、はは……聞いちゃったか」

苦笑いを浮かべて答える千花は

「ま、でもいいけどね。風間はいいいガキって感じで追っかけるのが楽しいし」

この年でありながら色香を振りまくような意味深な笑みを浮かべ

横目でガクト、モロ、スグル、ヨンパチ等が集まってエロ談義をしている男子へと

呆れた視線を一度送って向き直り

「サルやオタクみたいな悪ガキとは違って、面白いしね」

ウインク付きの笑み

「そっか……なら、いいんだが」

そう言っつて、ふと思ったことを聞く

「なら、俺は小笠原さんから見たらどっちなんだろ？」

質問に対して千花は、腕を組んで顎に手をやるポーズを作る

「うーん……さはっちはね」

作っつてすぐに答え始めたあたり…… 答えに迷っていた訳ではなく

そう言っつていいものかと、考えていたようだが

「皆のお父さんって感じかな？ 子供じゃないんだよね」

告げる。苦笑気味に

「——っ」

「ごめん。気、悪くした？」

「いや、そんなことはないよ。むしろ、そう思った理由を教えてもらいたいぐらい」

一瞬、言葉に詰まりつつも何でもないという表情で問う

「さはっち達のグループを見てるとさ……自然とそう思っちゃう訳、なんでかって言われると答えにくいんだけど……」

組んだ腕はそのままに顎から手を離して、人差し指を笑窪に挿す。

——結構、喋ってるとこは皆と同じみたいな感じだけだね。そう告げ

「いつも……一步引いた場所っていうか、見守ってるって感じがすごくするの。特にワン子とか椎名っちとか……後、モモ先輩でもだし、一年生の子に風間——」

次々とする言葉に

「あつ、と。これじゃ——源君以外全員だね」

苦笑を浮かべるしかないという感じに告げる千花

「……………そっか」

千花の言葉を聞き、京に宿題を見せてとせがんで……予鈴三分前まで“待て”をされている一子

教室について速攻で眠りだしているゲン。クマちゃんからおすそ分けを貰っているキャップ

そんなメンバー達へと視線を巡らせて——小さく、坦々と……洩らす

——そう。こんな感じ……いつも、何気ない時とか

その横顔を見上げる千花は思う

——ふとした瞬間……宝物でも見ているかのような、

小笠原千花はよく見ている。己がどう見られるかを常に念頭においているからこそ、周りにもよく気づく

——“失くしたモノを取り戻した”ような……“手に入れられなかったモノを手に入れたような”

ただ、今思ったことを言葉にする。心の中で何も思考せずに、反射のような……

だからこそ——その言葉は的を得ていて

「……って、小笠原さん？」

巡らしていた視線を戻して、前に居る千花へと視線を戻すと驚きの声を上げる祐樹

彼の瞳に映るは……一筋の涙を左目から流す千花の姿

「え、あ……な、なんでもないよ！さはっち！！じゃ、私も授業の準備あるから！」

慌てて涙を拭つて祐樹からそそくさと逃げ出す千花は

——…やっぱし、本命…なのかな？

自身の感情が生み出す不鮮明なソレ

——ぜんぜん。イケメンでもないし、お金も持ってなさそうなの

腰辺りまで伸びた髪。表情が薄っすらと感じ取れるぐらいしか出来ないほどに全体を覆い尽くし

千花は祐樹の家柄を知らない故に、パツと見の雰囲気ではそう感じ取ってしまうのに

—— 気になっちゃうんだよね……

ほんの少し振り返って、見る。祐樹を

ま、いっか。その内……わかるでしょ！

一瞥して、感じたことにケリをつけて席に戻った

「おー！そうだ、祐樹！」

思い立ったキャップが祐樹の首に腕を巻きつけながら

引き寄せる。祐樹を

「かなり、売れたぜ！！ありがとな〜！！」

「……もう少し、時間があれば広がり方も違ったんだがな……」

教室内ということもあり、かなり至近になって小声で交わす

「それでも、男が8割だからな。かなりの儲けになるぜ」

「状況は把握していたからな。他クラスとはいえ事前に海外からの人間ってことがさらに話を膨らませるのに都合がよかった」

話は本日やって来るという転校生を対象にした賭け

それをキャップが胴元になって仕掛けたものに対して

「俺が仕掛ける前に…準備を済ませておくなんてよ。流石、俺らの参謀様！」

「どうせ、お前のことだ…旅の資金稼ぎに使うと思って下拵えだけしていた策が偶々うまくいっただけだよ…」

「謙遜すんなっての」

直江大和のように広大なネットワークがあるわけではない祐樹

だが、共に過ごし…子供とは思えない思慮を“この世界”にやって

来た時から持つ祐樹にとって

キャンプの考えることは一応の目安は立たすことはできる。特に冒険の資金稼ぎなどに関しては

狭いが縁の深い縁えにしと学校の掲示板等の公共ネットワークを駆使し

「噂話の出所が俺達だとは感づかれんだろう。そもそも、転校生の話として昨日の朝にこのクラスにやってきたぐらいだからな…」

梅子と仲のいい祐樹は事前に梅子が洩らした…転校生の話から今回の策を思いつき

「まあ…なんにせよ、ありがたいぜ！」

ホクホク顔のキャンプ

「手伝った皆にファミリー一割ずつは渡せよ」

——といっても、ゲンと由紀江は受け取らないだろうが…

実質、京と一子と百代の三人のみなら三割。ようは七割がキャンプのモノとなる

祐樹が入ってないが……わかるだろう。この男の性格ならば

「……みなさん！小島先生が来ますよ……！」

真与の一声により、またも教室内にさらなる慌しさが満ちた後、静寂が訪れ

「おはよう。……耳にしているものも居るだろうが、早速本題に入る」

教壇側の扉が開き、キリツとした姿勢を崩さないままに梅子は教壇に立って

「転校生を紹介する。入れ！」

梅子が宣言すると共に教室内に入ってくるは――

「「「おっさん?!?!」」」

教室内が一気に騒然となる

「おいおい……おかしくねえか？」

ガクトの疑問の声を皮切りに教室内はより一層騒然としていくも

「私語を慎め！お前達！！」

手に持つ鞭で地面を強く叩き、強烈な音を響かせる

それにより、一瞬で静寂となる教室

「この方は転校生の父君だ。……ご息女は？」

梅子の質問に

「ご心配なく。娘はしっかりとしていますので、もうそろそろ着く

頃合でしょう」

赤いロリ——失礼。“赤い彗星”の渋い声音で答える初老の男性がそう告げた時

「おい、外見てみるよ?!」

ヨンパチの興奮しきった声に窓際の者達が外を見ると

「う、馬あぁっぁー?!?!」

思わず窓を開けてやって来る者を凝視する者達の視界に映り、開け放った窓から高らかな声音

それはかなりの距離が離れているに関わらず…2・Fの教室にも響き渡る

「ドイツはリユーベックから推参!!以後、この寺子屋に世話になる——」

金髪。碧眼。アーリア人種特有の透き通るような白い肌を持つ

「クリステイアーネ・フリードリヒだ!!」

“義”の騎士娘と——

「……ふう…ああ、それともう一人。入れ」

深い溜息を吐き嘆くように肩を落とす梅子であったが

もう一人の——“紹介すべき女性”。扉近くに待機していた彼女へと声を掛ける

さらに、騒然とする。緋色が主体のチェック柄のミニのプリーツスカート

太腿まで覆うネイビーのタイツ。足元はレトロ風の黒い編み上げブーツ——袴姿で履いても違和感のない代物

ボディのメリハリが強調されやすい黒のタートルネック……バスト83の胸が特にツンと強調され

片手に刀。竜鳴館館長から譲り受けた——“地獄蝶々”を持って

「失礼」

「「「おおう?!?!」」」

またも驚きが教室内を圧巻する。男子達は特に——

「ボインの姉ちゃん系k t k r!!」

「うおおおお!!!!どう見ても、年上じゃねえか!!」

ヨンパチ。ガクトと続き男子生徒達が色めきたつも

その喧騒を打ち破るような澄み切った音。地獄蝶々を教壇横へと移動し木目の地面へと鞘に収めたままに突き立てる

たった、それだけで静寂が舞い戻る——誰もその静寂を破

することはできない。それを破ることはむごく罪悪感を感じてしまう故に

柄の上に両手を置き、瞑目していた瞳をゆっくりと開いていく

「本日より、この学校の拳法部特別顧問。兼――」

凜とした声音で

「教育実習生としてこのクラスの担当をさせてもらう――」

切りそろえられたショートの前髪が微かに揺れる

瞳は真っ直ぐに向く……………“護”の青年の下へと

「乙…姉…」

呆然と呟くことしか出来ない祐樹を尻目に

強気な娘。否――“この世界”では

愚直なほどまでに相手を信じる。嘘を、疑うことを嫌う

「鉄乙女だ。以後、よろしく頼む」

“信”の武士娘として、再び“護”の青年と出会う

“**義**”の騎士娘と見せかけて——（後書き）

“**信**”の武士娘登場！あつ、題名の続きですよ
完全オリジナルテーマです。乙女さんは
違和感ないんですけどね…自分の中では

まあ、クリスさんがかませ犬と化してしまっているが後悔はない

“信”の武士娘、“仁”の武士娘……“護”の青年にして“愚者”

―川神学園 2・F

その真っ直ぐな瞳が青年を捉える。“護”の青年を――

「乙……姉……」

瞳を向ける者へと呆然とした声音で返す祐樹

しかし、教師内の

「うおおお！！超、大当たりなんですけどおおお！！二人共おお！！」

ガクトの歓声から始まり

「ぐっ……しくった。賭けに負けた……」

神経質そうに眼鏡を押しやりながら呻くスグル。その後ろでひたすらに写真を撮るヨンパチ

「うつそ……肌白！！負けたかも……」

驚きと微かな悔しさを混ぜた表情を浮かべる千花

そんな面々の声に掻き消される

「お前達……静かにしろ!!」

鞭を一振りして一括する梅子によって、ようやく静けさを取り戻す
室内

その静寂を見計らって紡ぎだす——前に

眼光に鋭さを宿す。萎縮させる。武士娘たる京と一子すらも戦慄させるほどの——氣圧

梅子によって作り出された静寂が極寒が肌を刺すような痛みと
訳知らずに冷や汗を流させる緊張に包まれ

「……………今の私は風紀委員ではないが」

小さく呟いた後に

「規律を乱す者に対しては、たとえ見習いの立場であろうが容赦することはない。まずはこれを覚えてもらおう!!」

力強い言葉と共に地獄蝶々を水平に微かに持ち上げて地面を叩き鳴らす

「……………はい!!!!」

祐樹以外の者達が一斉に声をそろえて威勢のいい声音で返事を返し

「よろしい。では、私の自己紹介といこう」

そう言って皆に背を向けて黒板へと――

「性は鉄と書いて“くろがね”」

達筆な文字がモスグリーンの上を踊り歩き

「名は乙女。そのまま呼んで“おとめ”だ。以後、よろしく」

向かっていた黒板から背を翻して、はにかんだ笑顔で告げる乙女

――うおおお……さっきのは超怖ええけど……やべえ……くる……！

ガクトの内心が9割方の男子と一部の女子と一致する。怒られるのは勘弁したいので

表情は真剣を……崩れている者がちらほらと見受けられるが……

「それと、其処に居る佐橋祐樹の姉兼――」

「推参!!」

はにかんだ笑顔で教室内の者達を見渡した後、さらに言葉を紡ぐも……浜千鳥、馬を預けてきた

クリスの勢いよく扉を開けた登場によって潰される。…軽く息を吐いて壇上から降りて入ってきたクリスへと視線で催促しつつ

隣に立っていた梅子に視線を向けて、アイコンタクトを取る

それに頷いた梅子を確認して教室窓際の席の後方——最後尾をゲン、次が祐樹という位置へと移動しだす

その間にも

「ごほん！……先も名乗りはしたが、改めて！ドイツ、リユーベツクから来たクリスティアーネ・フリードリヒだ」

代わって壇上へと上がったクリスが自己紹介を始めた為、皆の視線はそちらへと向かう

故に…京にだけ警戒が多々含まれる視線を浴びる乙女。腑に落ちないも流れを切るわけもいかないために

そのまま、腕を組んで待機する。しかし、それでも刺々しい視線を向けてくる京

そんな二人の様子に気が気でない祐樹

その間にクリスの話は進んでいたのだろう

「川神学園には決闘っていう儀式があるの」

血気盛んに燃える一子の言葉は弾んでおり

「決闘の意思を伝え、自分のワッペンを机に置く！」

制服の上着のポケットから学園の校章。龍を象ったワッペン

「クリス！戦闘で勝負よ！！」

「分かった。受けて立つ!!」

流れるような動作で即座に応じ、一子のワッペンに重なるように自身のワッペンを置く

「…ウチのクラスの女子は逞しい人ばっかだね…」

穏やかかつ諦めのような声音。柔和な笑みを浮かべたモロがそう呟き

「いいねえ、キツパリしてて気持ちいいや!」

ガクトがそのクリスの気風の良さに感嘆するも

「待て、肉体を使用する決闘の場合は職員会での了承が必要だ」

水を差すような冷静な梅子の言葉が響くが――

「ほっほ…。小島先生、話は聞かせてもらったぞい」

武神が好々爺の表情で教室内に入ってきて

「学長…」

「いいよ。ワシの特権で了承する。今すぐやんなさい」

事も無げに告げる

「ワシが責任を持って見届けよう」

教室内が鉄心の言葉に騒然とし

「新入生歓迎なんて勢いが大事じゃからな」

皺を寄せて人好きする微笑みを浮かべて告げ

「ふふーん。日本対ドイツってことねー」

鼻息荒く、威勢のいい一子が鉄心の言葉に満足して声を上げる

「ワン子ちゃん。強いですよ？大丈夫ですか？」

さっそく、クリスを労わる様に声をかける真与

「あの身のこなしを見れば…強さは想像つく」

その優しさに答えるように

「だが、挑まれた勝負から逃げるような真似はしない…！」

悠々と宣言する。自然体から戦闘態勢へと意識と体を持っていくように

その氣の走りを察知できる京は、一瞬だけ驚愕の表情を浮かべ

警戒心丸出しで見やっていた乙女から…視線を離して——最後に一際強く氣を込めた視線で見やって

「ワン子。相手強いよ。多分、私ぐらい」

本編ならば、自身より強いと告げた京であるが——“この世界”ではそう告げるも

「なーに、アタシが日本の洗礼を浴びせてやんよ!!」

京の忠告もなんのそのと言わんばかりの態度で余裕をかます一子

「よし!じゃ、早速グランウンドに出なさいよクリス!!」

「承知した」

口元を右手で隠すように握りこんだ姿で答えるクリス

そんな二人に

「武具は教室のレプリカを使え」

梅子が黒板の上に飾られた様々な武具へと指を指し

「斬れはしないが、優劣をつけるには十分だ」

そうしてお互いの得意の獲物。薙刀を一子が、クリスが自身の武装と同じ装飾を施されたレイピアを手に取る

「では、両者、及びクラスの者たちはグラウンドへ!」

梅子の掛け声で一足先に駆け出した一子を追うようにクリスが駆け出す

そうしてクラスメイト達がめいめいに移動を開始する中

「祐樹」

「…お久しぶりです。乙姉」

皆が出ていった教室内で二人だけとなる祐樹と乙女——教室のドアから様子を覗いている京も一応、居るが話の邪魔をすることはない
空気を読むときは読む子ゆえに……

「……………話したいことは山ほどあるが、放課後にしよう。この町についてもお前から案内してもらいたいしな」

束の間の沈黙。乙女が何かを紡ごうと様々な形を作る唇は……最終的に無難な言葉を紡ぎだしていた

「はい…」

祐樹も乙女の言葉に同意して瞑目する。お互いの間に跨る…静けさが嫌に肌を刺激する

だが、そんな静寂も乙女が破る。彼女は——ただ、愛おしそうに祐樹を抱きしめる

「……………!」 「…お、おとねえ…?」

戦慄が背筋と言わずに全身を駆け巡る。京の体を

そんな京を認識している乙女は殊更に、強調するかのように

右手はたおやかな黒髪が流れる後頭部へ

左手は腕を通して腰の位置へと……抱きすくめる

幼い頃は自身の方が背が高かったのに、何時の間にか……頭半分の差となった身長を

爪先立ちになり、祐樹自身を自身の方へと引き寄せて

自身の左頬を祐樹の右頬に当て、顎を肩に乗せるように顔を埋める

「会いたかったぞ……祐樹」

万感の想いが告げるその言葉。京はこれ以上は無粋という想いと嫉妬という感情が縋い交ぜになった思いを持って……離れていく

「乙姉……」

その想いは告げられた本人に対しても、しっかりと伝わる。首元に感じる……熱を帯びた水滴と共に

「ああ……あとでって言うておきながら、このままお前と話し続けていたいと思う」

耳元で囁かれる

「……ごめん。乙姉」

その言葉を告げるだけが精一杯だ……祐樹は

そんな祐樹に対して乙女は

「お前は――」

乗せていた顔を戻して、祐樹の顔を下から真っ直ぐに覗き込む

視線を逸らすことなく祐樹は濡れる乙女の瞳を見据える

両手で両頬を壊れ物でも扱うように、包み込むように、手を添えて

「――ココに居るんだな」

“信”の武士娘は紡ぐ

“護”の青年をその黒曜の瞳で、ブレる事なき瞳で――見つめる

“信”の武士娘VS“誠”の武士娘” “誉”の武士娘

―川神学園 玄関口

皆に遅れて乙女と連れ立って行く祐樹の前に

「…やはりか」

不敵な笑み。いや、飢狼のような唇を吊り上げた笑みを浮かべる百代と遭遇

校内アナウンスから一子とクリスの決闘を案内する音をBGMにしながら相對する

「あの、独特の刃の氣圧。やはり、乙女さんだったか」

「……久しぶりだな。百代」

揺らめき立つ禍々しい闘氣によって自慢のストレートの黒髪が靡く
そんな百代に対して、涼しい顔で挨拶を返す乙女。唇で苦笑いを象
りながら

「ええ、お久しぶりですね。乙女さん」

口調は丁寧。だが、その態度と氣は相手を挑発しているとしかいえない

「百姉！」

窘めるように祐樹は二人の間合いに割り込みつつ百代を制し

「祐樹、お前と言えど……私の死合い相手との間合いに入るな」

常の姉御肌での声音ではなく、血に飢える獣の如き姿

掌を天へと向け、第一関節に第二間接を威嚇するように内に折り曲げた手

力を込めて入るのだろう……血管が微かに浮き上がり、筋肉が戦慄く

「……ふう。お前は相変わらずだな、百代。鉄心先生の教えをしっかりとこなしているのか？」

向けられる乙女は、どこ吹く風と柳のような声音ではあるが――

武神にもっとも近い四天王。百代の闘氣に当てられれば無意識に体が反応してしまうは自明の理

静かで清廉なる剣氣を竜鳴館館長より譲り受けた“地獄蝶々”――
出向く先では必要だろうという計らいによって――へと這わせていく

「乙姉!!」

そんな乙女の様子が分かる祐樹が叫ぶと

「――なるほど……。乙女さんだったのか……祐樹が言っていたもう

一人の姉とは」

獰猛な瞳。背筋に冷たい感覚が祐樹を襲う

「……祐樹が私をお姉ちゃんと呼ばない理由が、百代。お前だったのか」

一触即発。不穏な空気が満たしだし――

「祐樹の姉は一人で十分だ……なあ？百代／乙女さん」

病んだ姉。ヤンデルおねえちゃん登場……も

「ね・え・さ・ん……たちいい……」

般若参上。とてつもなくいい笑顔を浮かべた祐樹という般若の前には

「ワわわわん子の決闘をみ、見に行かないとな!!」

やけに声高に宣言しつつ、明後日の方向に視線を逸らして冷や汗がきながらグラウンドに向かう百代

声音は見事なまでにキョドっており……

「そそそ、そうだな！百代のいうとおりだなな!!」

乙女は激しく百代に同調する。風の唸り声が聞こえそうなほどに首を縦に振りながら……

二人ものの見事に撤退を開始する。と――

グラウンドから今までも歓声が聞こえてきていたが、今まで一番の歓声がここまで響き渡る

「どうやら決着が着いたみたいだな……」

般若を引っ込めて、常の声音で呟いた祐樹に乙女と百代が安直のため息を漏らす

「だな」

般若に対しては焦る事は焦るも……根幹の戦闘欲求が収まるわけはなく、燦った火種のような瞳で百代がいじけながら祐樹の言葉に同意し

「遅れたが行くぞ」

そう言って乙女が先を歩き出すも振り返り

「鉄心先生の許可が下りれば、な」「ちょ、乙姉」

百代へとそう告げて祐樹の手をとって先に行く

答えることはなくも

「――」

唇を舐めることで応える百代であった

―グ라운드

三人が辿り着くと完全に決闘は決着がついていたようで

熱気の余韻が辺りを覆っている中

「確か…祐樹のクラスの転校生は舶来モノだったな」

違う意味での舌なめずり。美女漁りが日課と化している百代が目の色を変えながら呟くのに

「…まだ、続いていたのか」

自身の体が一瞬、寒気で震えたの明確に自覚した乙女は自身を抱きしめてぼやく

「…乙姉も」

「…ああ、あの時は酷かったぞ？お姉ちゃん、汚されるかと思った…」

深い深いため息を吐く乙女。何があつたかはご想像のままに…

「災難で」

「私にソノ気はない！あいつもナイクせに、手練手管だけは一人前

だから……」

——柄にもなく、本気で悲鳴を上げたぞ……

いつも勝気であり、自身でも少しは男勝りだと自覚はしているものの……まさか、同姓相手に

女の子的な悲鳴を上げるとは露とも思わず

——私だって、“乙女”なんだ！その……初めては……

隣に立つ祐樹を横目で盗み見しつつ、そこまで思考が及んだ時

「じょう、だま、きたああああああああああ……！！！！！！」

魂の叫びのような咆哮を上げる百代に思考を中断され

「あうう……」

「くっ……相打ちか！」

決闘の場となった中央から人垣を割って件の人物たちがこちらへとやって来る

一子は右肩を押さえ、クリスは左ひざを引きずりながら

その姿に両者痛み分けの引き分けとなったのが見て取れた祐樹は

「あーあー……女の子だったのに……」

髪を掻きつつ

「すまん、キャップ。保健室からアイシング…氷囊貰ってきて、京は——」

「合点！…風の俺なら一瞬だぜ！！」「はい。ポーチ」

頼んだ瞬間、日頃から自身を風と称しているのは伊達ではなく

砂埃を盛大に上げながら校舎に突撃するキャップを尻目に京は、祐樹の様々なアイテムが入っている大型のポーチを手渡す

「我ながら、京の気配りには脱帽だな…」

「祐樹ほどじゃないけどね」

京の言葉に苦笑しつつ、一通りのヘアメイクアイテムや生傷が絶えない仲間達のサポート道具が入ったポーチから包帯と

「うえ、梳きバサミしか入ってない……仕方ないこれで代用するしかないか…」

ヘアメイク用の梳きバサミを取り出しつつ

「ほら、こっち来い。ワン子」

「はうう…ゆづき」

すぐに勝負を吹っかけるくせに、涙目になりやすい一子はそのままだに祐樹に甘えるようにフラフラと近づく

躊躇なくワン子の肩に触れ…上着からでは分らない患部を曝け出す為に

「ほら、脱いでワン子」

「うん」

この場がどうゆう場所か抜けているのであろう。何時も通りの一子の治療を行おうとする祐樹

祐樹の言葉に何の疑問を抱かず、言われたとおりに脱ぎだす一子

「おい。おい…弟」

「なんとという習慣…祐樹に脱げって言われたら私ならサービスたつぷりなのに…もちろん、二人きりで」

「あほか。場所を考えやがれ」

「あわわ…。なんとか私も参加できましたよ松風!」「おゝ、まゆっちも立派に壁の役目を果たせてるなこのまま、二話も出番ないとか悲惨だもんな」「松風…」

「なんだ、なんだ?何、皆で祐樹とワン子囲ってんだ?俺も混ぜろ!」

上から百代、京、ゲン、由紀江と松風、キャップの順にそれぞれ

祐樹達を囲うように円陣を組む。幾ら、肩だとは言え…上着を脱い

でブラウスも半脱ぎの状態では男共が色めき立つ故に

案の定、ガクトやヨンパチが脱ぐという言葉に脊髓反射で視線を飛ばしてきたが……百代の威圧で退散した

「っと…そう言えば、外だった…皆ごめん」

仲間達のフォローによって状況を把握した祐樹が思い出し、謝りながらも手馴れた手つきで氷嚢を一子の肩に固定するように包帯を巻いていく

「…手馴れているな。祐樹」

「乙姉のも…世話してきたと思うんだけど」

円陣内に一緒に居る乙女の感想に祐樹はジト目で返すと

「そういえば…そうだったな。夏祭りとかお前と二人っきりで何処かに出かけた先の思い出が一番にあがるから、思いつかなかった…」

顎に手をやって一拍、目をつぶって回想に浸った乙女が思い出したという声音で告げる

「二人っきり…だと…？」

その発言を見逃す弓兵ではなく、目元を吊り上げて荒れた声音で復唱する

「はふうう…冷たくて気持ちいいわ」

犬耳垂れさせて、幸せそうな吐息を吐く一子。京が発した刺々しい空気を霧散させるほどのマスコットぶりに

「うう……ワン子の愛玩動物さに恨み言を上げるしかない……」

BOD札を掲げて呻くしかなかった京であつたが……

「おお、いじけてしまつて……お姉さんが仇をとつてやるからな」

隣で腕組みしつつ壁を果たしていた百代が京の頭をひとなで一撫でして

「爺！！決闘を申し込む！！！！立会いしやがれ！！！！」

「いや……モモ先輩はただ闘いだけでしょ……」

謳うように叫ぶ百代の表情が爛々としているのを見ずとも

手に取るように分かる京がそう呟き

「それに……私自身が白黒つけなきゃいけない」

弓兵の何人も見逃さない。なんびと獲物を定める瞳を持つて——乙女を見据える

「学校の中でぐらい。敬語使わんか！馬鹿孫娘」

群集が百代の宣言に対して色めき立ちつつも、鉄心の声はしっかりと全員の耳に届く

「まあ、可愛い孫娘だから許す」

引き締まっていた表情を崩してそんなことをのたまう鉄心。周りの教師陣も生徒も何時ものこと飽きられ

「で……モモに…椎名もかの？」

二人の視線を辿る先など、検討がつくも

「……“決闘”のことは聞いておるかの？鉄」

「はい。先の教室内でやり取りは聞いておりました。しかし…私
は見習いとはいえ、学校側の人間ですが…」

問ってくる鉄心に生真面目に姿勢を正して、慇懃に答える乙女に対して

「よい。生徒が望むなら、受け入れるのが教師という役目——」

そう告げつつ、視線を祐樹へと送る鉄心の意図

——戦わせなければ、暴発するかもしれんという意味合いを
持たせた視線

しっかりと受け取り祐樹は

「乙姉。ここは……受けてあげてほしい」

乙女に耳打ちする祐樹。ざわめいた空気を張り巡らせるファミリ
ー内の女性陣。乗り気でない乙女でもあるも

「仕方ない…“祐樹”の頼みとなれば断れん」

女としての本能なのか？無意識にもことさらに“祐樹”という部分を強調しつつ了承する

「ううう！ううう！」

「み、京さん。落ち着いてください」

「そうだぞ〜！まゆっちも大人しそうに見えて腹の底で面白くないって考えてんだからな〜！」

案の定、京が呻いて耳打ちした祐樹を連れ戻そうと呻くも由紀江によって阻止され

松風が色んな意味で代弁する

「決まったかの？決闘はこの一戦のみ。モモと鉄の闘いのみじゃ、椎名はまた別の機会」

HRの時間はとくに過ぎており、一時間目に突入している時間帯この闘いを見なくてもいいと思う生徒は川神学園では一割居るかどうか……

教師がどう言っただとしても、ブーイングが巻き起こるのは必死の為そう告げる

まあ…別の理由も色々あるが、本編を知るの者ならわかるである

為に記さない

「時間は五分。どうせ、モモ——」

「ああ、割と全力で行く。乙女さん相手に失礼はしたくないし……
“前回”よりも腕が上がっているようだしな」

「よいか？鉄」

「はい。異はありません」

「ならば、両者。位置に着け」

その鉄心の言葉に円陣を解いて離れる。百代と乙女が位置取りし

「ハイハイ〜！ギャラリ〜は下がったタ。下がった〜！！先生の前
に出たら命は保障しないヨーー！」

ルー先生を筆頭に声を張り上げて、誘導しつつ

「総代！準備は整いました」

「うむ。ルーでは張るぞ」

鉄心とルーが向かい合う形で立ち、そこから闘気による結界を形成
していき

「では……東方、川神百代！」

「ああ！！！」

鉄心の読み上げに意気揚々と答える。いつも羽織るように肩に留めている上着が吹き上げる禍々しい闘気によって吹き飛んでいく

その現象だけで、どれだけ百代が力を解放し期待しているのが分かるなか

「西、方！鉄乙女！！」

地獄蝶々を眼前で横持ちして、刃と鞘が同時に別れを告げるように抜き放つていくのを答礼とする乙女

「揚羽さん以来だ……こんな心が躍る死合いは」

爛々とした瞳が暗い喜びに震える

「そうか」

何を見据えているのだろうか？百代のその姿に淡々と答える乙女の視線は…現れた白鉄の刃越しに百代を見つめる

右手に刀を、左手に鞘を持って――

「はじめいいい……！！」

両者が疾走する。先手は――

「そらああああ……！！」

百代。右ストレートをアッパー気味に掲げながらの突撃

「ふっ！」

地力の差は明白。それでも渡り合える技術と力を持つ乙女は左に持った鞘で飛来する拳の軌道を修正しにかかる

「――！へえ、鉄拵えってか、その鞘」

「ふん。でなければ百代。お前の拳を鞘で靡かせるものか」

擦り上げた拳の感触からもたらされた冷たさと堅牢さに当たりをつけ

「ま。そう――だよな――！！！」

撃ち放った姿勢からそのまま変則の肘鉄をかまそうとするも

「お前ばかりに攻撃させるのも、な――！」

右手に構えている地獄蝶々の柄をカウンター気味に百代の肘へと乗せるように繰り出す

「つううう？！？！神経が集まってるってこと狙うかああ？！」

「そこを狙って打った私の技量を褒めるべきだろ？普通……」

不意に壁に肘をぶつけた時の痛みは……“この物語”を見ている者中にも経験はあるだろう？

痺れる様な痛みが百代を遅い。一種、違った痛みにほんの少し涙目になって告げる百代に呆れる様に返す乙女

その間にも二人はひとつ跳びで間合いを放し——鉄心とルーの体に

「さて、準備運動は終了だ」

さらに力がこもる。もはや、常人には皆目検討つかない領域へと二人の体は突入する

絶え間なく聞こえてくる。剣戟と拳戟の打ち合うと音のみがギャラリーの鼓膜を打つ中

「……辛うじて見えるってか、残像しかみえない。まゆっちは？」

「こちらです……同じ剣士の方の動きはなんとかということですね……」

「うえ……アタシ見えない……」

京の問いかけに由紀江が答え、一子が一人見えない状況に涙目で犬耳をしょぼくれさせる中——

——袈裟懸け7連に対して刀身を叩いて叩き落とすか……

一瞬の刹那の中を悠々と見据える祐樹。乙女が繰り出した幾十の残像が繰り出す斬撃

間と間を引き伸ばしたかのようなコンマ世界の速度から繰り出す故に、あたかも質量を持った分身が各々に繰り出す攻撃を

見極める。本体はたった一人。時間を引き延ばしたかのような攻撃でも動作はたった一人が起こしている故に

順番は決まっている。順繰りに叩き落とせば塞き止められる。順番が決まっただけでもこんな所業ができるのは

——四天王。上位クラスの戦いは違うな……やはり

あとを考えられるのは祐樹の知っている中では鉄心と揚羽のみ

——だが

祐樹の思惑。それを知らないまでも決着がつく

不意に結果内の暴風のような闘いは両者が間合いを離して、地に足を着けたことにより止み

乙女が左手に持つ鞘の中に刀身を納刀し——

「地力は明白。お前には瞬間回復なんていう……やっかいな技^{アーッ}があるしな」

横文字が苦手な乙女であるが、祐樹の影響を受けてこれだけは無意識に紡ぐ

「まあ、最終的にはそうだろうさ……けど」

油断なく構える百代。声音だけが歪さが目立つ陽気さ

「祐樹^{アイツ}が居る前で、無様な姿は晒したくない」

納刀した地獄蝶々に折り返し、折り返し…氣を注ぎ込んでいく

「どうした？百代。動けば…難なく討ち取れるというのに？」

百代に負けず劣らずの不敵な笑みで挑発するように紡ぐも

「それじゃあ…面白くないだろ？乙女さん。私は——」

禍々しい闘氣がより一層と高まっていく

「こんな楽しい…死合いを…簡単に終わらせたくない」

飢えた狼。獣。欲情した女のような——幾つもの表情をない交ぜにした顔。仮面^{ベルソナ}

「ふっ…つくづく度し難い」

そんな表情に臆することなく、澄ました顔で

——使うぞ。祐樹

「来い！！乙女さん！！」

「――風刃閃――」

――仲見世通り

差し向かいで突き合う。久寿餅を

「……うまいな。祐樹」

「はぁ……乙姉」

二人は仲良く見せ前の御座に座って食べる

時は放課後。朝の鬨いが終わって――

「まあ……落とし処があれぐらいしかなかったからな……」

爪楊枝に刺した久寿餅を祐樹の口へと運び入れながら紡ぐ乙女に対して

「……レプリカ武器じゃない時点でお師匠様も、わかっていたこと
だろうけど……」

決着は乙女の神速の抜刀。風圧で百代の闘気でコーティングした頬を浅く切り傷をつけた時点で

「試合には負けたが、勝負には勝ったというところだ」

ほら、あーん。という言葉と共に再度、久寿餅を祐樹へとやりつつ告げる

鉄心すらも意図を理解していた。祐樹とてわかる。際限なく揺らめき大きくなっていく百代の闘気

それを差し止める口実を作るような斬撃を放った乙女

「……実際、口頭での注意だけってところが乙姉がうまく立ち回ったってことを如実にしてるけど……」

「なんだ……？祐樹、お前……お姉ちゃんに完敗しろと言つつもりか？」
頬を膨らませて拗ねた声音で言い募る

「そうじゃないけどさ……」

どうにも釈然としない祐樹。結局のところ――

「二人して危ない橋を渡ってるのが……さ」

「……お前の言い分もあるだろうが、最上ではなくも普遍的な選択だった。それに過ぎたことだ」

最後の久寿餅を自身の口へと持っていく仕草

「百姉…余計に燻ってるんじゃないか？」

「それは、百代の精神修行が足りない証拠だ。そこまで面倒を見るつもりはないぞ？私は」

だが、結局のところ祐樹へと運ぶ乙女。甲斐甲斐しいお姉さんのまに

「もう、いいだろう？ソノ話は…それよりも、やっと二人きりになれたんだ…」

二人の間にあつた皿を除けて……祐樹の体を抱きしめる乙女

「教室では…“目”があつたが——」

「ここにもあるけどねー。衆人環視という目が——」

棒読みで告げる祐樹

「そんなモノは知らん」

斬つて捨てる乙女。さすが剣士。……関係ないな

「んふふふ……」

しばし祐樹を堪能しだす。頬と頬を摺り寄せたり、その長い黒髪を梳き——

「うーん…お前、ウチに来てた時みたいに結い上げないのか？」

「いや、なんか…仲間達から止められて」

ファミリー

ファミリーと言っても女性陣。京に由紀江に百代のみだが…

「ふむ…」

——さしずめ……“敵”を増やさないためか…

一人納得して

「まあ、いい。それよりも、そろそろ——」

抱きしめた祐樹の顎を取って上に向けさせようとするも——

「そこまでだ。鉄の」

青みが掛かった灰色の長髪を風に靡かせるままに

額に乗る×印。薄い黒のカチューシャをつけ、尊大な態度で佇む——

「む……」

一瞬にして不機嫌そのものになりつつ

「ふっハハハ…我！降臨！——」

女王——“この世界”においては…“誉”の武士娘

家を誇り、自身を誇り……汚すことなきように清々しい生き方

大切なモノ——その真の価値を見据え続ける者

「其^{その}は我の物だ。許可なく手を出すことは許さん」

「あ…揚羽様」

紋によって染み付いた執事教育からの無意識の呻きによって

「久しいな…祐樹」

様々な感情が交差する瞳を向ける。九鬼揚羽が其処に居た

年上達の三つ巴（前書き）

キャラが崩れてきたな…

年上達の三つ巴

―仲見世通り

「…随分な物言いだな」

抑揚のない声音。吊り上る眉根。威嚇する瞳

抱きしめた祐樹をその女――九鬼揚羽から隠すようにしながら告げる乙女に

「ふん。妥当な言葉よ。そも、それが当たり前であるからな」

祐樹を自身のモノ扱いした揚羽に噛み付く乙女を

歯牙にもかけないという表情と声音。本編でも伸ばしていたが…好み（・・・）に合わせて

長く伸ばした青みが掛かった灰色の髪をかき上げながら

「して…祐樹？何時まで、鉄の腕の中に納まっているつもりだ？」

笑顔ではある。額にドデカイ怒筋と冷徹なる声音でなければ、道いく男共を確実に落とすほどに魅力的な…

しかし…向けられる当人たる祐樹は蛇に睨まれた蛙が如く

「あ……揚羽様」

硬直して動けず仕舞い…

「いや、待て…そっちも重要だが」

祐樹の呼び方に対して、額に手をやり嘆息をついて

「お前は正式な執事契約を交わしておらんだろう」

そう漏らす揚羽の顔は複雑であり

——紋め……心中は分かるが、我は祐樹に主従関係を求めているわけではないというに…

心中で愚痴のような言葉を漏らすも

「揚羽でよい。様もさんも要らん」

「いや、しかし…」

なおも抗うというより戸惑う祐樹に凄む揚羽。その感情の中に一抹の寂しさのようなモノを秘め

「あ、う、…あ」

自身に向けられる特定れんあいの感情の機微に対しては鈍感の癖に

こういう部分に対しては聡い——

「私を渦中の外に追いやらないで貰おうか？」

「我は祐樹と話している。鉄の…邪魔だてしなくてもらおうか？」

一触即発。なおも乙女が言い募ろうとするも

彼女たちの頭上から巨大な闘気を纏った者が飛来してくる

咄嗟に退避しようとする揚羽、乙女。しっかりと祐樹を抱え込んでいる乙女は祐樹ごと

逃げようとするも――

「揚羽さんも乙女さんも……勘違いしてもらっては困るな!!」

唐突に空中から強襲してきた百代。その腕の中には目を回している祐樹の姿

「百代?!?!」「百代まで来るか…」

「これは私のモノだ。二人とも」

たとえ、相手が尊敬する年上の武人であろうとも

「ああ?!?!お前!?!」「ぐっ…我のモノに…!!」

目を回して前後不覚になってしまっている祐樹の唇にフレンチキスを落す百代

「ゆづきの……は、はじめてが…」

愕然とした表情のままに嘆く乙女

「ぎ、ぐう……我的、我的モノにいい……!!」

珍しく、高ぶる感情そのままに犬歯を剥き出して唸る揚羽

そんな二人の神経をさらに逆撫するように…人差し指を揺らしながら

「チツチツチツ……四回目だ」

勝ち誇った笑みで告げる。妖絶なる表情。抱えた祐樹の唇を親指と人差し指の間で持ち上げる姿

魔王に攫われたお姫様のような場面——そう直に言われれば祐樹が盛大に落ち込むこと間違いない程の

「ファーストキスも私が貰ったもんない」

表情を一新して、呆気らかに笑いながらいまだ目を回したままの祐樹に向かって告げる。同意を求めるように

完璧に余談であるが…“この世界”のファーストキスは由紀江が搔っ攫ってたり…

加賀にて過ごしていた間の同衾時。まだ中学生に上がる前の出来事である…「まゆっち、パネエー」

そんなことを知らない百代は意気揚々と告げる

風が靡く。殺気と言う猛烈な闘気が巻き起こす風が

「お、ま、ええええ……」

地獄の底から這い出るような呪詛のとき呻きを上げる乙女

“地獄蝶々”を構え

「くっ…くく。ハハハハ…今日がお前の命日であつたのか、百代」
拳を、指を戦慄させるだけで間接を鳴らす揚羽

「うーん。今日はなんと、よい日だろう。これも私の美少女ぶりに
神様からのささやかな贈り物ってとこなんだなー」

声音はどこまでも陽気であるが、瞳の色合いと放つ禍々しい闘気が
全てを裏切る

完全に乙女&揚羽VS百代の構図。仲見世通りの店員達が続々と避
難する事態の中で…

「う…うう。み、京やめろ。天帝は、天帝は清涼飲料水じゃねえ…
…」

悪夢を見ていた。起きてても悪夢のような光景なら夢の中でも悪夢と
はこれいかに——って“この世界”では主人公だから苦勞するの
は当たり前か…

激突するのは時間の問題。ジリジリと間合いを計っていく三人の武

士娘達の暴走は

「あれー？モモ先輩と…今日来た鉄先生に…誰だあれ？」

「おめえは、本当に空気を読むつか…無謀な野郎だな」

「まゆっちも居るぜー。絶賛、場面を見て推測して参戦するかどうか吟味中だけどなー」「松風…黙りなさい」「超怖えよ！まゆっち…腹の底で嫉妬してやがーペグ」

「ま、松風ー！だ、大丈夫？！」

上から修羅場もなんのその、見つけたから声をかけたキャップ

そんなキャップに呆れるゲン

松風が由紀江の心中を代弁して咎められたにも関わらずに続けた結果。地面に叩きつけられ

一子がそんな由紀江の所業にビビりつつ、叩きつられた松風を拾い上げて安否を確認する

京は――

「モモ先輩。祐樹は私に託して、存分に闘うといいよ」

キャップが声を上げた時には視線をそちらへと向け、視界内に祐樹の姿を確認した時には残像を残す勢いで百代の下へと駆けており

「あー…流石、京ってどこか。祐樹の事に関したら割りと限界突破

してくるよな…」

「それが椎名京でありますから」

呆れた顔で告げるも京はGOOD札で口元を隠して含みのある笑いをあげるのみ

一行の到着によって百代が真っ先に闘気を萎縮させてしまった故に

「ううう…この怒り。どこに向ければ」「…興が失せた」

水を差されたことにより成熟している二人は、不満ながらも収めるしかなく

「む？終わりなのか？」

最後にクリス——佐橋寮に入寮することが決まっている彼女はファミリー達に街を案内してもらっていたところで

「おつ、なんだ？転入生の案内か？」

「ええ、お姉さま！！クリ、祐樹の所の寮に入るからあたし達が頼まれたの！」

無い胸そらしてえばる一子に

「そうか、そうか…優しいなワン子は」

慈愛の眼差しを持って頭を撫でてやる

「つか、祐樹大丈夫なのかよ？」

そんな二人とさらに乙女と揚羽に視線をやった後

「気を失って、お姫様みたいな祐樹もいい…」

渦中から逃れたかのように、京にさりげなく確保された祐樹は

そのクリスには負けるもファミリー内では随一の白さを誇る肌に

女の子らしい鍛えた感じのしない柔らかな太腿の上に頭を置かれた
……膝枕状態

祐樹の長い黒髪を梳き、自身も祐樹の好みの為に伸ばしてきた紫掛
かった長髪を祐樹の口元へと

猫じゃらしのように遊ばせて税に浸る。口元から溢れるだらしない
涎が今にも零れそうなほどの京へと指差すキャップ

「まあ、京は許す」

「許せるわけないだろ！！待ってろ、祐樹！！お姉ちゃんが看護し
てやるからな！」

糸目になって手をヒラヒラとやる百代とは対照的に一目散に駆け出
す乙女

たどり着いた先で京と祐樹の奪い合いを勃発させ

「…揚羽さんはいいんですか？」

一人、その光景に憤慨することもなく涼しげに立っている揚羽に

「ようよう、考えてみれば――」

真剣な面持ちの中に余裕が満ち溢れる表情で

「アレが我のモノであるのは天地神明の理。道草を食っておろうとも、結局は我の元に参る。先は、大人気なく興奮してしまったがな――」

癪に障るように笑みを浮かべる。王としての破顔

「許せ、百代。フッハッハハハハハハ！――」

甲高い笑いで一蹴するかのように告げる揚羽

「そう言えば……こういう人だった……」

呆れたような顔で呟く百代。だが――

「けど、やっぱり面白くないから殴る。バンダナを」

「なんで俺なんだよ?! じょうだ――」

盛大な炸裂を響かせて宙に舞っていくキャップ

「朝の続きだ――」

滞空時間を少ない目に飛ばされた為、速攻で地面と暑いキスを交わ

す羽目になったキャップへと

やる気の無い声音で告げると

「女にただ飯を奢られるまではいいいんだ。問題ない」

「もっすごい理論が展開されそうだぜーまゆっちー」「黙ってなさい松風」「……まゆっちがドンドン黒化こくかしてってるぜ……」

愛情の注がれ具合が半端ないせいか……従来の性格があだなして参戦することはなくも、京と乙女の争奪戦を凝視する由紀江

「……やってられん」

「なんだ？源殿、どちらへ行かれる？」

「てめえの案内は俺がしてやるから、さっさと来い」

そんな言葉を残して離脱したゲンとそれに付いて行く――

「うーん……」

「一子も来い。野郎やうが熊谷くまがからこっちじゃ珍しい……うまい好み焼き屋を教えてもらってるのを聞いている」

犬耳生やして、キョロキョロとゲンが去ろうとする姿と祐樹が揉みくちやになってる姿を見比べている中

ゲンの言葉に一瞬で瞳の中を輝かせつつ、犬耳をピンと伸ばして

「うん！…ご飯、ご飯！タツちゃんの奢りでご飯…！」

音符を飛ばさん勢いで駆け出していく

「い、犬！待て！」

それに慌てて付いて行くクリスとかったるそうに歩いていくゲンを尻目に

「問題はお前。その立場でありながら、相手を楽しませなかっただろっ」

百代は地面にへばり付くキャップの頭に靴底を置きながら……ある意味での説教をかましていく

「話を聞いて…仲良くしてやんなきゃな」

「そ…そうか。なんか、分かるような気がする」

百代の言葉に釈然としない部分もあるも心でほんの少しだけ理解するも

「でも、めんどくせーな。女と食事ってさ」

トレードマークの紅いバンダナを整えつつ

「やっば、俺は祐樹とかと飯食ってるのがいいや」

ビシッと人差し指を祐樹へと向けながら言い切るキャップの姿に

「多分……出来てる……あの二人」

「私の告白……断つてた理由……分かった」

かなりの小声で囁きあう二人に

「こら、そこ！そんな話をひそひそとしない！！」

復活して開口一番が……洒落にならない噂を撒き散らす二人への突っ込み

右隣にはご満悦の乙女が抱きつき。左にはちゃっかり揚羽が占有、互いに隣へと視線を飛ばしながら

京は実力で劣ってしまった為、あぶれてしまっており百代と小声で交わす表情は不貞腐れていた

「ほんと……泣けてくる……」

さめざめと憎らしい程の晴天の空を見上げる祐樹であった…

「弟。そのおしるこの餅、くれ」

ひな鳥のように口を開けつつ、祐樹のお腕を指しながら百代が告げる
乙女は乙女で学生が放課後でもやることはあり、名残惜しそうに学
校へと戻り

世界を又に駆ける九鬼財閥のご令嬢たる揚羽も多忙である為――

「はい。百姉」

「略奪愛！もぐり」

「京」こいつ少し反抗期だぞー。思い知らせてやるー」

「そーいや、祐樹。あの人に何貰ってたんだよ？」

黒いチョーカーを祐樹へと渡して去っていく

京と百代が戯れる隣で久寿餅を突いていたキャップがそれを問い

「うん？これ？」

チョーカーを受け取る時の祐樹の瞳が今までにないくらい輝いてい
たが引つかかったのだろう

キャップはかなり期待した瞳で祐樹へと問う

「ん…よし、試運転代わりにお披露目つてとこだな」

そー言つて首元に着けたチョーカーに指を這わせて、咳払いひとつ

した後

「おはようございました」

「「「「ぶほおおおお!!」「」「」「やっちまったなーゆうぎ」

四人がなぜ、噴出したかなんぞ……記すことでもないだろう

「あとは……虐殺です!!」

「「「「しま。ろつかよ!!!!」「」「」

全員の突っ込みを受けた後

「へ、変声器なんですね。それ」

由紀江が祐樹の首下に指差すと

「そう。クツキーの声とかアウグスタの声とかもできるよー」

ご満悦に答える祐樹

「おお!なら、今年は祐樹も出るかカラオケ大会?!それなら女の声もいけるだろう?」

「いや、キャップ。たぶん、それ反則だから」

キャップの言葉に冷静に突っ込む京

「あー、まあ、京の言う通りだし。俺は……遠慮するわ」

変声器を使えば、己が“詩歌い”なのはばれなくても普通に失格

さりとして地声で行けば…歌うモノによってはめんどくさい事態になる

「カラオケかー、いいな。今度行こう。また私とデュエットするぞー祐樹」

背中から祐樹へと乗りかかりつつ告げる百代

「デュエット？」

「……モモ先輩。歌の英語の発音つまりから、祐樹とよくソレ系で歌う」

由紀江の質問に面白くなさそうに答える京。彼女も結構なレベルの歌声を持っているのだが

歌うものが“詩歌い”としての祐樹の声音使いと同じなので、そんな機会がなく

「祐樹さん……洋楽が得意なんですか？というか……歌うまいなんて始めて知りました…楽器は知ってたのに…」

ある種のショックを受けながらしよぼくれる由紀江

「おっ？まゆっちも聞いたことあるのか？祐樹のギター。基本的に祐樹にはギターをお願いしてるんだぜ？大会の時」

エア・ギターのように構えるキャップに対して小さく首を横に振って

「いえ、私が知ってるのはピアノなんですが……母が昔から持っているグランドピアノの」

「おい。どういふことだ祐樹？まゆっちが知ってるのに……私達は知らないぞ……」

抑揚のない声音と底冷えするような眼差しが京と百代から飛んでくるも

「いや、その……機会がなかったからな……」

「でも、“基地”にもピアノがあるのに……引いてくれなかったけど？」

ジト目で追撃してくる京

「それも含めて、だよ。気分が乗らない時には弾かないだろ？俺」

「そうだけど……まゆっちだけが知ってるのは不公平だよ……」

口を尖らせてなお言い募る京。隣で自分だけが知っていた事実にも満更でもない顔をする由紀江

「またの機会にな……」

諭すように告げる祐樹。無意識に自覚している京が愚図る時の宥め方。髪を梳いていく

「うう……絶対だよ」

「なら、ピアノで行こうぜ！！今年は海軍の皆さんに応援頼んでるから、打ち合わせしねえとな」

「お前は、毎年派手だな…キャップ」

祐樹の呆れた言葉に

「やるならとことんだ！！」

いつも通りに答えるキャップであった

― 佐橋寮 夜 自室

課題を終わらせて学習機の椅子に片膝立てながら

「はあ、今日も……疲れた」

ため息を漏らしつつ伸びをする

先ほどまで入ってた風呂。長い黒髪故に、今だ湿った感触を持っているが

今はシニヨンにして前髪をカチューシャで止めている為

寝間着もこの年の男としては珍しいすっかりとしたパジャマ

トランクスにアンダーウェア一枚の姿等ではない…黒を基調としたシルク生地 of 長袖

もう少し暑くなってきたら…甚平を出すのだが季節はいまだ春。故に――

襖をノックする音

「すまない。佐橋殿、居られるか？」

「?…もしかして、フリードリヒさん？」

「ああ。それとクリスでいい」

「とりあえず、どうぞ」

そんなやり取りを交わした後、祐樹の許可を貰ったことで襖を開いて入ってくるクリスであったが――

「夜分遅くに申し訳ない。だが、自分としては世話になる場所であり――」

入りながら言葉を紡いでいたが……瞳に写した人物をつぶらな青い瞳をパチクリとさせて

「すまないが……あなたは誰だ？たしか、ここは佐橋殿の部屋のはず…女人のあなたがなぜ、一人この部屋に？」

疑問を口にし

「寮母殿に……どことなく似ておられるから、もしかして親戚の方なのか？」

そんなクリスの問いかけに対して

「……………フリードリヒさん。俺は男で、君が用のある佐橋祐樹だよ……」

長い沈黙の後、苦々しさと空しさが募る声音で顔を覆って答える祐樹

「な?!?!?!いや、待て!どう見たって女じゃないか!!それも、マルさんに匹敵するぐらいの美人じゃないか!!」

その答えに酷く興奮しながら捲くし立てるクリス。いい感じにテッパっている為

「…………そのマルさんって人に失礼だと思っただが……」

糸目になりつつ

「……かなり、言いたいことがあるけど……もう、いい。それで?用って?」

いや……しかし。まさか……。そんな言葉をぶつくさ言っているクリスへとジト目で告げると

「!ごほん。その、済まない。本題は挨拶をしておこうと思ってな」

自身の主観問題を一旦置きつつも、ほんのり紅くなった頬で左手と右手の指先を合わせながらも

「学校では…機会がなかったの。——自分はクリスティアーネ・フリードリヒだ。以後よろしくお願いする」

ハキハキと答えるクリスに

「ご丁寧にも。佐橋祐樹と申します。こちらからもよろしくお願いします」

女、断言をされた為か不貞腐れながらも言葉は丁寧に戻し

「……………夜も、もう遅い。男の部屋に居るべき時間じゃないですよ……お戻りを」

「あつ、ああ。夜分遅くに失礼した」

告げられた言葉に頷き、襖を閉めて廊下を歩く

階段に差し掛かった所で――

青い瞳の中に残った姿――艶やかな黒髪。切れ長の瞳。眼差しが冷たくあった故に

クールビューティーと揶揄される。ヴィレッタ・バディムに酷似した容姿に

「……本当に男なのか……？」

そんなことを考えるクリス。夜はこうして更けていった

その判断は――

――2009年 4月24日

「―――つてことがあったんだよ……」

不貞腐れながら皆へと告げる言葉に

「失礼な女だね。祐樹捉まえておきながら」

剣呑な瞳のままに頷く京

「うーん。でも、クリの言い分もわかるかな？アタシ」

頤に人差し指をあて、犬耳を垂れさせながら無邪気な声音で告げる
一子に

どんよりと暗雲を漂わせて凹む祐樹

「まあ、弟の素顔なんて…今に始まった話じゃないだろう？」

「そうだよなー。オウなんて始めて見た時、男装の麗人かっと思っ
ちまったしな」

松風の言葉に続いて申し訳なさそうに祐樹に視線を送る由紀江
皆が和気藹々と夜も更けだした時間に来まれる…

場所——“この世界”における“秘密基地”

京都のお婆様いおさまより譲り受けた。川神市郊外の沿岸近くにある一軒家

「あの舶来モノは……生真面目そうだし落すのが楽しみだな」

さらに凹みだした祐樹の背後から頭を撫でつつ告げる百代

「私の美少女パワーでメロメロに……」

「微少女のまちが——げふ」

「お前、たまに反抗するよな……。生意気な祐樹は……こうだ」

ワシャワシャとかき混ぜる様に長い黒髪を荒す

「あーもう！百姉！」

流石に遠慮なくかき混ぜすぎてくる百代へと撃退の呪文を唱えて

「そろそろ……貸したお金返してほしいなー？」

本心では別にどうでもいいのだが……たとえば、仲間内と云えどケジメはつけなければいけないもの

百代が変な意味での甘えを持つのは良くないと……貸しても取り立てはきつちりする

「zzzz」

まあ…百代にとっては耳にしたくない言葉ゆえ、速攻で寝たふりに突入

「寝たふりする気持ちは分かるけど、私の分もね」

そんな百代へと、歴史小説を読みながら突っ込む京

「モモ先輩ー。まゆっちの分もだぜー」

「百姉……由紀江からも借りるのは勘弁してくれ……」

松風の言葉に、片手で顔を覆って深い溜息のごとくにぼやく

「さて、ポップコーンでも食べるか」

「無視した」

「なーんてな。しっかりと金は持ってきてるさー!!」

席を外す様に立った百代に対して、ジト目で呟いた京へと

抵抗させる間もなく京をお姫様だっこする百代

「助けて祐樹、寝取られる。狼に食べられちゃう」

「……どう返せと?」

半眼になって京と百代へと告げると

「祐樹、賢^{さか}しいぞ。京、私と一緒に祐樹を調教しちゃうか？」

「いいね。ヌルヌルと調教しちゃおうモモ先輩」

「なんでそうなの？で、由紀江は人差し指啜えて羨ましそうに見ない」

「はう？！？！」「まゆっちのエロエロ妄想なんてお見通しだってさー」

「む？——」

そんなやり取りを交わす中、京を抱えたままの百代が察知する

「この陽気な気とツンツンの気は…キャップとゲンか」

「相変わらず、便利なセキュリティだね」

この一軒家の玄関口前ぐらい以内は百代の独特な氣の結界を張っている為

侵入者や不審者の探知。仲間達の訪問をいち早く察することができる

「うーん。その二人の組み合わせもいいけど」

ニヤリと邪悪な笑み。背筋に寒気が走った瞬間には

「やっぱし、“右側”に祐樹のカプの方が萌えるね」

「……………おい、京。弟の奴、本格的に落ち込んでしまったぞ」

「大丈夫、私が慰める。たとえ貞操失つても慰めてみせる」

ドヤ顔晒しながら、沈めた張本人がそんなことをのたまうも

「既に貞操なかったりしてな」

ポンと出てきた言葉に

「そんな祐樹さんは殺^やります」

常に帯刀している愛刀を鯉口を切りながら冷淡に告げる由紀江と

「殺す。盛大に殺し尽くす」

「てーそう？なに？和菓子的一种かな？」

「ワン子だけだよ……俺の癒しは……」

「わふ？」

冷やかな視線しか送ってこない二人を無視して

話に参加できなくてつまらなさそうにしていた一子が犬耳を生やして問いかける言葉に

答えを返さず、抱き寄せて撫で始める祐樹

「わうう……」

それに素直に甘える一子。そんな中――

「ウィース!!」「うるせえよ。風間」

キャップが盛大にリビングの部屋を開いて姿を現し、ついでゲンが呆れながら入ってくると――

「お、駆け寄ってくるとは俺に懐いているなワン子」

「待ってたわよ晩御飯!!!!!!」

「……晩御飯以下か俺」

「あーそつちね…全員揃ってるし…始めるか」

祐樹の嘆きとキャップのぼやきもなんのその

キャップが持つビニール袋にさっそく手を突っ込む一子

どこから見ても…何かを漁る子犬にしか見えない仕草に

「おら、一子。はしたねえだろ。…これでも食ってる」

キャップとは別のバイト。白い礼服を着る“軍曹”のチキンを取り出して

「わああい! タツちゃん、ありがとう!!」

チキン。肉。ピコツと犬耳を立てて漁っていたビニール袋から手を出して

ゲンにチキンを啜えさせて貰う一子

「ぐまぐま」

「……帰ってきたのはいいが、複雑だよ……」

口に啜えて、先ほどのように……ソファーに座る祐樹の膝に座りなおす一子

「まゆっち、そんな凝視してもどいてくれないと思うぜー」「はう……」

「今日は大漁だぜ？ゲンさんも大漁だしな！！」

ビニール袋から大量の寿司。ざる蕎麦付きの物も混ざった物を出しながら告げる

隣にチキンを置いていくゲン。皿の準備等は祐樹とクッキーが揃えており……それに移していく

「祐樹。はい、醤油」

「ありがとう」

「祐樹。はい、タバスコ」

「あり……がとじゃない。いらないよ」

「いるでしょ？」

真面目くさった顔で告げつつ

「俺はいら……あゝあ…醤油にタバスコ混ぜるなんて……しかも、真っ赤っか」

「そんじゃ、いただきまーす!!」

そんな二人のやり取りを無視して、キャップの号令の元。皆食事を始める

「寿司は…いいなー」

ネギトロ租借しながらの百代。一生懸命に頬張る一子

川神姉妹は遠慮の欠片も無く貪り食う

「キャップもゲンもありがとうな」

ヒラメを取りながら告げる祐樹に

「なんの！金曜日くらいは飯の調達は俺らがやるさ！」

「ふん。勘違いすんじゃない。捨てるのが勿体無いから貰ってるだけだ」

常日頃から。それこそ年がら年中朝も昼も晩も食事を用意するのは祐樹

掃除、洗濯等は寮母たる久子が行っているも……料理だけは壊滅的

な腕前の母に任せられる訳無く

学生と料理人…九鬼家の執事教育の一環で和洋中。なんでもござれ状態の祐樹にとっては

苦になるものではない。むしろレパートリーも腕も上がってご満悦なのだから

「でも、俺は宅配寿司はもう終わりだな。短期だったし」

「何か身になったのか？」

お礼を言う祐樹に対して、どうってことないと手を振って納豆まきを一口で終わらせたキャップ

それに祐樹は問うと

「バイトの作業自体は簡単な宅配だから、特にねーけど」

片目をつぶりながら

「釣り好きな人が店長でさ、夏休み奄美大島に釣りに連れてってくれるとさ。船の中泊まりで！大物とかバンバンつれるとかースングエ楽しみー！」

一度そこで切り、懷から

「後、宅配先ってご老人宅が多いんだ。そこでさ、福引き券とか一杯貰っちゃったりして」

色とりどりにして様々な券を掲げながら紡ぎきる

「よかったな……。にしても釣りが」

そう返しながら…釣りの部分を引っ掛けつつ

「ゲンも一緒に連れて行ってもらったら？」

「馬鹿か？面識もない相手にんなこと言えるか」

「まあ、それもそうだな……加賀に居た時の川釣り。釣り上げた時の――」

「それ以上言ったらクロスぞてめえ」

祐樹の言葉を遮る為に、ドスを効かせた声音で冷たく言い放つゲン

「次は何処でバイトするか」

そんな二人に頓着せずにぼやく

「もぐもぐ。金曜バイトは食べ物系にしないさよね」

「こら、ワン子。食べながら喋るんじゃない」

変わらず祐樹の膝に鎮座する子犬。もとい一子

「分かってるよ。よー食っちゃちな」

「ワン子の食べっぷりは私を越えているな」

一心不乱にチキンにむしゃぶりつく一子を慈愛の瞳で見つめつつの百代に

「え、ほんと?! やったあ!!」

犬耳をピンと伸ばして嬉しがり

「食べて鍛えて武術もお姉様を越えるぐらい、がんばる!!」

「……そうか」

やんちゃな表情そのままに宣言する一子へと同じ瞳でありながらも……姉としては嬉しさと悲しさ

——百姉……

武人としては失望と虚しさを秘めて頷く百代に心中で名を呟く祐樹

「……さっきも言ったがバイト代入ったぞ。お前達」

瞳の色合いを常に戻して茶封筒を取り出す百代

「そろそろ月も変わる。取立て時だと思ってた」

その百代に返す京。真っ赤に染まった玉子が……異様に目立つ

「ほら、うら若き肉体にムチ打って稼いだ金だ」

玉子は完全スルーしてさらに続けていく

「さつさと私に貸した分持つて行け。金の亡者共」

「遠慮なく。今日も月内に払い終えたなあ」

6000円掴むキャップ

「じゃあ私も、七千円だったね」

それに続く京。樋口一葉1人と野口秀雄2人を連れて行き

「アタシは三千円だから……誰か千円札持つてる？」

「ここに……」「ハモってるなー祐樹と京さんー」

「これはもう、天のお告げで祐樹と夫婦になりなさいってー」

「私も回収させてもらいますねー」

一子の両替希望に応える祐樹と京。その重なりように松風が続き

京の恍惚としたセリフをぶった切る様にしつつ、丁寧な百代から4000円回収する由紀江

「お前ら、視線で火花散らすな。……モモ先輩は後輩にまで借りないようにな」

京と由紀江の視線上の火花が散りだし、それをゲンがダブルで突っ

込みつつ諭吉さんを回収していく

「そういう話は弟だけで十分だ」

頬を膨れさせながら告げる百代。彼女の手元に残ったのは諭吉さん三枚

学生としては結構な大金であるし、無茶な使い方をしなければ一月越すのは簡単なのだが――

「で、俺が残り全部か……」

佐橋祐樹が残っており…想像するのは容易いだろう

なんだかんだ言いつつ貸してしまうという構図が

「……おい、残りもしなかったんだが…」

すっからかんになった百代。本編の140円よりも切ない…

「だね。自業自得だよ…百姉」

呆れて言いつつ。ジッピー・ウォレット、その茶の長財布にお金をしまいながら告げる祐樹

「てか、祐樹って何時もお姉さまに結構…貸してるよね」

その財布に目をやりながら素朴に告げる一子

「だな。その財布もヴィトンのやつだろう？お前、どこにそんな金

があるんだか……」

さすがは代行業を継ぐ気のあるゲン。その目も肥えており

「ヴィトンだと……」

瞳を細めて呟く百代

「ちなみに、ゲンさん。お幾らぐらいで？」

GOO札を掲げて問う京へと

「たしか……祐樹の野郎が持つてるのは9万ぐ——」

「「「9万?!?!」」」

ゲンと祐樹を除いた全員が素っ頓狂な声を上げる

「私が……ツライ現場で積荷を稼ぐ日々を必死にこなした分を軽く上回るだと……」

剣呑な百代

「……も、もしかして、私の此れも……」

あわあわとしながらポルトフォイユ・マルコ。祐樹と同じ茶の本革の財布を出すと

「……ヴィトンのノルマレザーのマルコ。6万ぐらいはするな」

「た、誕生日プレゼントでもらったんですが…」

「高すぎだ。ただの友達に遣れる代物じゃねえ」

呆れながら告げ

——俺の時もだがよ……本当にコイツの金銭感覚はこういう仲間
相手だと狂ってやがるし

「当たり前。父さんからの受け売りだけど…財布はいい物を用意する。そうすれば金運も上がるもんだって…教えられたしな」

「それに…大事な仲間だからな」
ファミリー

魅了する。前髪越しかつ慣れてしまっているファミリー達でも一瞬、息を呑む程の笑顔を浮かべて言い切る祐樹に

全員が色々な意味をつめた溜息を吐く

「……挑戦してくる不良どもから巻き上げられればな」

「じいちゃんがそういうの禁止してるもんね」

「お師匠様の言うとおり。それに百姉…それじゃ、カツアゲみたいになるぞ」

「だったら、お前から言ってくれよー爺にー。花の女子高生に小遣いなしとか質素儉約ってレベルじゃないぞー!」

うだうだと管を巻くように文句を言う百代。後半は叫ぶように告げ

「ワン子を見習うこと。実際、ワン子が俺に借りることなんてないもんなー」

そんな百代に対して、何処吹く風という感じに膝に乗っけている一子へと同意を求めると

「そう、アタシはバイトも修行に活用。褒めてよね!」

有頂天になって胸を張る。ナイけど代わりに犬耳がピンと立つ

「ん、一子は偉いよなー」

そんな一子の咽を擦ってやり

「わうう~~~~」

糸目になって祐樹へと向き直り、首元に顔を埋めて嬉しそうに蕩ける一子を尻目に

「じゃあ、今日の議題な」「くっ……私も祐樹の犬になりたい……!牝犬という名の犬に……!」

キャップは本題を。京は血涙流さんとするほどに悔しがる

「明日、どこで遊ぶかですか?」

小さく挙手する由紀江。瞳も表情も常なのに……纏うオーラだけが

「それも、重要だが…転入生のクリスのことだよ」

「ん？クリがどうかしたの？」

埋めていた顔を上げて一子が問う。それによって由紀江のオーラは静まり、京も落ち着きだす

「俺達のグループに入れようかって議題出てたろ？」

「ねえよ。そんな話」

ゲンが突っ込むも

「で、俺はイイと思うんだけど？」

「……相変わらずの唐突さだな。キャップは」

呆れたように返す祐樹。瞳は楽しくないと言わんばかり

「梅先生にも頼まれたじゃん」

「俺はその場に居なかったけどな…」

ジト目でキャップを見やるも

「俺、気に入ったもん。一緒に遊びてえって思った」

堪えることなどない

「で、まゆっちに続く新メンバー加入。どう思うよ皆？…まずはモ

モ先輩から」

「賛成だ。クリスは欲しい。色んな意味で」

手をワキワキとさせながら親父くさい笑みを浮かべる百代

「次、ワン子」

「クリはいらん子だと思うけど…まあでも、勝負を挑める相手が增えるのはいいわね」

「でも、クリ自身。こーいうの好きかしら？」

疑問を口に出す一子に

「様子を見て、柔軟につてか？」

「じゃあ…次は。そこで浮かない顔してる京」

「私は反対」「即答だなー京さん」

脊髄反射で一息に斬る京。突っ込む松風

「…あ、やっぱり？」

「他人は増やさなくていいよ。そんなのいらない」「最近入ったまゆっちゃんには厳しい言葉だぜー」

「馬刺しにされたい？」

斬って捨てた刀を返して、松風に穿つ。テーブルの上で暴れていた携帯ストラップは微動だにしくなる

「この七人でいられるのが好き」

「一子。京を説得するんだ」

「はい！お姉さま！……ごほん。へい、ミスター京！」

「うあああ……そんな怖い顔でにらまないでよおお……」

最終的にチワワのように震える一子の完成しなかった……

「じゃ、次。ワン子をあやしてる祐樹に物欲しそうな目で見てるまゆっち……」

「ちよっ！モモ先輩！俺のセリフとるなよ……」

「あうあうあう……」

「……まあ、入ったばっかで今の京の言葉の後だと言えんわな……」

由紀江の様子に回答不能と判断した百代がそうばやき

「ええい！次、ゲンさん！」

「けっ、テメエらの好きにしゃがれ……」

「……ああー。ものの見事に分かれやがったなー」

ゲンの何時もの返しにキャップが呻きつつ

「賛成2、反対1、様子見2。祐樹、お前の意見は重要だ…聞かせてくれよ?」

「俺は――」

“護”の青年は…バルシエム愚者はどれを選ぶのか?

“護”ることを選んだ愚者の…片鱗

―2009年 4月25日 川神駅前 ロータリー

ギターケース。一人タクシーの乗り合い前で待つ

「チヨビさん……遅いな」

祐樹の姿。仕切りに腕時計に瞳が向くも、時間が進むのが早くなるわけもなく

肩に下げて持つギターケースを背負い直して

「……やっぱ、ギリギリ間に合わないか…な？今日も」

「遅くなりましたよ！！祐樹さん！」

漏らす言葉尻に前方から走ってくるチヨビ

本日は――

「ささ！行きましょう！！待望のサードシングルのレコですからね
！」

満面の笑顔。紫のサングラスの奥にある瞳を輝かせながら

祐樹の背を押し、やって来た方向へと連れて行く

「お、押さないでください。チヨビさん…」

チヨビに対して苦笑を浮かべつつ言葉を紡ぐ

そんな二人を……一人の女性が物陰から見つめており

会話を交わしながら目的地——チヨビの会社がある小さいなビル

そのビルの扉へとチヨビが潜って行くのを見てから

「乙姉」

「…やっぱし、バレてたか」

「氣殺しても分かるよ……何年の付き合いだと思ってるの?」

背を向けたままに背後の狭い裏路地……と言ってもここ自体も小さな路地だが…

その状態で乙女へと咎めるように告げる

「……今日は何をするんだ?」

尋ねる言葉なのに、その瞳と態度は見透かしていると断言しているように毅然で

視線は祐樹のギターケースへと強く突き刺さる

「……どこで?」

暗になぜ、知ってるのかと問いかけると

「最初のカバーアルバムを…私の知り合いが持っていてな。そこで――あの曲を聴いた」

「――“とりのうた”…か。まさか、乙姉が一番に気づくなんてな…」

一番、流行とか音楽に興味なさそうな乙女より…京が最初に気づくと予想していた祐樹

「…お前。もしかして、お姉ちゃんをバカにしてるな…」

だが、その言葉は乙女の堪忍袋を痛く刺激する言葉であり

かつムクれさせる言葉である。現に頬を膨らませ、肩を怒らせながら

祐樹へと近づく。そんな乙女の気配に冷や汗を垂らして振り返り

「ないない…。それに、まあ乙姉が最初に気づく可能性もあるってわかってたし」

今、さっきの乙女の“あの曲”発言で思い出した癖に、のうのうと告げる祐樹

こつ言わなければ…

「ほんとか…」

膨れ面。ジト目で上目遣いにして…唇が何時重なってもおかしくない距離から

拗ねた声音で告げてくる乙女の姿に——生唾飲み込みながらに

「本当だよ…乙姉。あの曲を歌ったのって……百姉の前でしか他はないから…」

無駄に爽やか、かつ微笑んで紡ぐ。内心で目の前の“信”の武士娘に、鼓動を高まらせる心臓を撫でつけながら

「ほんとに、ほんとか？」

密着して腕を祐樹の首へと絡め、潤い……なめかましく濡れる唇で持って再度問う

ここで乙女の機嫌を損ねれば——

「本当だって…乙姉」

今日の時間というモノ全てを乙女に持っていていかれてしまうことを理解している祐樹は

その魅力的な唇と——潤んだ瞳に必死に抵抗しながら優しく告げるそれでもなお、膨れ面で見上げる乙女と祐樹の間に甘美な空白が生まれるも——

「祐樹君——早く来てくださいな——！！ってあれ？」

チヨビが着いて来てない祐樹に痺れを切らして姿を現す。一気に霧散

乙女は慌てて飛び離れ、祐樹も頬を赤くしながら

「あつ、はい……ってことだから、行くよ？」

そう告げて去ろうとする祐樹へと

「ま、待て。祐樹！……その見学していてもいいか？」

指先。五本すべてを合わせつつ、そっぽを向く乙女

心なし頬が赤くなっておりその様子に今もドギマギとする祐樹

「あれ……？私、お邪魔虫……だったような……」

蚊帳の外状態の“チヨビ”であった……

この一カ月後。一年以上の沈黙を破り……3rdシングルをリリース

“呪われた声音”は三位へと侵食するのであった……

―多馬川 土手沿い

担ぐギターケースが盛大に揺れる。息を吐き、吸って

ひたすらに駆け足。視界の先に映ってくるのは――

「ああ…やっぱり間に合わなかったか…」

乱れる息を整えつつ土手から川沿いに視線を走らせる祐樹

「……………つと、二人…か」

視界に体操服姿でゲンからドリンクとタオルを受け取って汗を拭く一子と

そんな様子を見守るゲンの姿

瞳の中に優しげな光と一抹の寂しさを宿しながら…

その祐樹を、土手の方を見上げた一子が見つけ元気よく手を振る姿にてを振り返す

二言三言。会話を一子と交わした後

「…今回も無理だったな」

「…だね。まあ…仕方ないかって、いつでも俺だけしか納得しないか…」

済まし顔。瞳を閉じて言葉を投げるゲン

答える祐樹は乾いた笑いを上げ

「クリスの奴を風間が誘った。次の“金曜集会”が披露目だ」

そっけなく告げる

「そっか」

川沿いを二つのタイヤを引っ張りながら走る一子の姿を見つめながらに答え…

二人の間をしばらく、静けさが満たす

「ゲン」

「……」

祐樹の問いかけに固めを開けて、再度閉じるゲン。腕を組む

「ファミリー居場所”はキャップが作った。かしら頭は当然…アイツ」

浅く息を吸い、そのまま吐き出し

「——この場所に居ること事態が……俺にとって“奇跡”だ」

一子を映していた瞳は、夕焼けを反射して光る多馬川を映して閉じる
思い出す。幼い頃、“現実”の幼き頃を――

「あの時――キャップと、翔一と出会ってなかったら――」

意識は20年以上の時を覚えていようと

頭を振る。想像した先を捨てて

「…意見も、間違っていると思うことも、本当に危ないということも、俺は言う」

静かに聞き入れる続けるゲン

“護”ること、己の中の大事なモノを。それを“護”ること

「だけど——。“この場所”は、アイツが作った場所」

あれだけ個性……私の強いメンバー

初めは一子、次いで京、百代。ゲンと由紀江

「切欠は——言っても詮無い事だな……。——全て受け止めて纏めたのは…アイツ」

自嘲気味に言葉を途切れさせながらも……紡ぐ

瞼を閉じれば、ありありと浮かぶ

無邪気な少年のままに成長し——夢に向かって走り続ける少年

「みんな、先を見ている」

一子は百代と同じくらい強さを、由紀江は友を100人作ることを

皆それぞれに“先”へと歩いてる

「ゲン。お前だって、宇佐美先生の後を継ぐために頑張ってる」
当たり前だ。彼らの人生は始まったばかりなのだから

「俺だけ——」

先は音にできない。だって——紡げば、己の“卑怯^{チート}”を……
言葉にしてしまえば、直視せざるおえない

“なんにも、持っていない……^{ただひと}凡人”であることを

言葉にしてしまえば——失くしてしまう。居場所を

閉じた瞼を開けて、ゲンから見える横顔

今だ夕焼けを纏う川へと顔を向けたまま

「だから——」

——愚者は愚者足りえるからこそ——

「いつか、俺が皆の重石になった時」

ゲンへと向き直る。その気配にゲンも閉じていた瞼を開けて

その瞳が映した祐樹の姿は――

「俺を排除してくれ」

反射的であつた

「わっ？！ど、どうしたんだよ……ゲ――」

祐樹の視点から見れば、突然……何時もの顰め面をさらに歪ませて襟首を掴み上げる

「ザケンな！！ボケ！！」

ボディに一撃。不意の一撃を綺麗にもらい咳き込む祐樹に

「てめえが俺をココに引つ張り込んだんだろっが？！」

「ゲン……」

「こつちに着いて早々、てめえは消えるわ。一子は消えたてめえの性で泣き出すわ。風間はコツチの都合はお構いなしにてめえを探す手伝いをさせるわ。京は自殺をはかるわ。モモ先輩は暴れだすわ。由紀江は錯乱するわ」

次から次へと苛立ちと共に吼える

「あげく…てめえはそれか?!?!…ふざけるのもたいがいに
やがれ!!」

横つ面を殴る。“力”を持つ祐樹にとっては肉体的に簡単に避けら
れるはずではあるが――

避ける事などできるはずがなかった

盛大に食らって地面に仰向けに倒れ

顔を覆う。腕で目元を隠して――込み上げるモノを隠すために

その様子を見つめる

――疲れてんのか…?俺は

“排除してくれ”

そう告げた祐樹の姿

――感触はあつた。手応えもあつた。

苦虫を噛み潰したかのような表情で

――錯覚にちげえねえ…。勘違いだ

風景の中に、夕焼けに染まるように――

まるで…… 最初から無かった様に”

瞳を開けた時、垣間見た姿。横顔

溶けて消えていきそうなその姿を…… ゲンは振り捨てた

“寝ぼすけ龍”は――癒せるだろうか？（前書き）

累計 5 1 2 ' 2 4 0 アクセス 7 2 ' 6 2 0 人 いつの間にや
らこんなにも……

後、怒られました…流石に、検索まで除外するのはどうなんだと…

“寝ぼすけ龍”は――癒せるだろうか？

―2009年 4月26日 多馬川 土手沿い

緑に背を預け視界の大半を占める青をぼんやりと見つめる…

時刻はお昼が終わる時間。 正午過ぎ

腕を組み、それに頭を乗せて…人目にはのんびりと日向ぼっこ

実際は――

「……………はぁ…」

深いため息を漏らす祐樹

そんな彼に

「どうしたの？祐樹君？」

腰に巻かれた黒の上着が祐樹の視界を覆い、鼻先を掠める

くぐんだ姿勢。胸の谷間が見えそうなほど

祐樹からして真上から覗き込んでくる。常の糸目の辰子が問いかけてくる

「…辰子さん」

そんな状態の辰子を見た瞬間に、目をやってはいけないと背けるような態勢を取るはずの祐樹であるが

「元気ないね〜……」

糸目ながらも困った表情かつ憂いげな瞳

祐樹の横に座って、頭を梳くように撫で始める

何かを見つめ続けているかのように……ただ、空へと視線を投げ出している祐樹を

「…うん…」

自身の髪の毛を梳くったり弄ったり…とにかく、心許す者の手が触れれば

心なし気持ちよさそうに甘んじるのを知る辰子にとって

このような状態の祐樹は目にした事はなく―

――心ここにあらずか〜……寂しいな〜…

シユンと肩を落としながらも健気に自身に意識を向けてもらおう為に撫で続ける辰子。そんな辰子の願いが届いたのであろう

意識を投げていた祐樹が感触に気づき

「…？。！！た、辰子さん？！」

意識を戻した祐樹には、何時のまにこのような状況になったかわからず

慌てて体を起こして辰子へと向き直る

「あ…」

撫でていた頭から腕が離れたことに対して、小さく音を上げる辰子

「す、すみません…：ボーとして…気づきませんでした…」

罰の悪そうな表情を浮かべて頭を下げる

「んんゝ別にいいよゝ」

先ほど腕が祐樹の頭から離れた時に感じた一抹の寂しさを億尾にも出さず

辰子は朗らかなでかつ眠そうな笑顔で返し

「じゃあ…祐樹君、時間空いてるよねゝ？」

膝を横に崩した女の子座りの体勢から覗き込むように顔を近ずける。

「え、ええ」

その黒に限りなく近い濃い紺色の瞳に惹きつけられたのか…

祐樹は至近距離にもかかわらず視線を外す事ができないまま

「お出かけしよう。おいしいメロンパンのお店、この前見つけたんだ」

「は、はい」

祐樹の返答に立ち上がって、ズボンについた草達を払った辰子は

「行こう、祐樹君」

座ったままの祐樹に手を差し伸べ

惹きつけられた瞳に今だ心臓の鼓動が早鐘を打っている祐樹は

おずおずと手を差し出し

「メロンパン無くなっちゃうかもしれないから、いそご」

辰子は強引に祐樹を立ち上がらせてそのまま強引に引っ張っていく

その表情はご機嫌そのもので

引っ張られながらも…辰子のそんな姿に

——…俺は……居てもいいのかな…？

クリスに対して出した自身の答え

そのことを悩み。この場所に居る経緯、己だけが知る事実

“架空世界”と祐樹は認識し——本来居るはずのない自身——が仲間の邪魔をしていいのかと…

——今は、今…ここに居る俺も、この世界の一員…だよね…？

自身を引っ張っていく辰子の嬉しそうな顔を見つめながら

祐樹はそんなことを考えつつ、引っ張られるままについてくのであった

——ベーカーリーラクステイ

辰子曰く

「そのお店ね、直ぐに朝一じゃないと直ぐに売り切れちゃうんだ」

引っ張っていた構図から、二人並んで歩く体勢へと変わり

「だけどね、三時頃にパンが追加されるんだ、まあ、それも四時頃には無くなっちゃうんだけど…」

そんなことを告げる辰子。祐樹は携帯の時刻をチェックする

時刻は二時半を過ぎた頃

「あつ…見えてきたよ…今日は人が少ないほうだね…」

焼きあがるを待つ人達が十人ほど列を作っていた

パン屋でこれならば…かなりの人気店なのだろうと祐樹は予想し

その人垣の中に一際大きな体格の男を見つけた時に確信する

「あれは…クマちゃん!」

「ん?やあ、佐橋君かい。奇遇だねー」

祐樹の呼びかけに反応して…大きな体格の持ち主たる熊谷が答える

「クマちゃんが居るってことは…当たりのお店か…」

小さなこじんまりとした店であるが、品のいい風格を醸し出しており

「そういつてもらえると嬉しいな…。うん、僕のお勧めのお店だよ」

そう切り出した熊谷は

「ここ、ベーカリーラクスティは生地がパイみたいにサクサクってなっていてね。絶品なんだよ」

「生地がパイみたいにサクサクか…確かに、辰子さんがー」

熊谷の言葉に辰子がこの店を気になっている理由が直ぐにわかった祐樹であったが

「Zzzzz」

「って、喋らないと思ったら……辰子さん、起きて」

いつでも、どこでも寝られる特技。辰子にとって興味のない人物と話し出した祐樹

必然的な結果たる行動である…

「起きて、辰子さん」

少しある差のある身長。辰子の方が背が高いゆえに肩を掴んで揺り動かす

「んん…？お話終わった…？祐樹君」

割と揺すって、なんとか目を覚ます辰子

「う、うん。そうだね」

そう答えつつ、視線を熊谷へとやり意図に気づいた熊谷は生来の大らかな性格ゆえに

気にした風もなく列の前へと視線を戻す

——「ごめん…クマちゃん

心中でそう謝ると、パンが補充されたのであろう。列が動き出し

「メロンパン〱十個〱」

祐樹たちの買う番となり辰子がイの一番でそう告げる

「じゅっ、十個ですか…辰子さん」

「うん、私と祐樹君が今食べる分と〱…天ちゃん達の分のおみやげ
〱」

「おみやげ…〱って俺の分は自分で出しますよ」

おみやげの言葉にファミリーの姿が浮かび、ある程度の量を持って
帰る為に祐樹も注文しようとするも

辰子の発言に意を唱えて代金を置こうとする辰子を制して、おみや
げ分の注文と共に自身のお金を置く

「……祐樹君…」

彼女の気質的に祐樹の行動は…辰子がしょぼくれてしまう結果とな
ってしまい

メロンパンが入った袋を受け取って肩を落として、どんよりとして
しまう…

「あゝ……ええっと、」

そんな辰子の腕を引いて店から離れて歩き出す祐樹は

「その、かつ、格好つけさせてください…」

顔を赤らめつつ、頬をかいて祐樹は囁くように告げる

ファミリー以外において…こういう機会はあまりなく

あっても乙女や揚羽という。年上のメンバーだと強引に勘定などを
持っていかれたり…

乙女は自身をお姉ちゃんも（・）兼任していると自負しているし

揚羽は世界屈指の財閥令嬢。自身が払うのが当然というか、払わせ
るつもり等…サラサラない故に

ある種の男としてのアピール

自身がよく女ばいと揶揄されているが為に…こういう男の視点から
の男らしい行動を取りたいと思う祐樹

故に、恥ずかしくともしつかりと言葉にし

「うー…まあ、いっか…ありがとう、祐樹君」

祐樹の言葉に唸り声を上げつつ、そんな祐樹の姿に身悶えして祐樹
を羽交い絞めにしつつ御礼を告げる辰子

年下の男の子が…その意味での背伸びをしている感覚を覚えるから
こそ

首の前で腕をクロスしてそこでパンの袋を持ちつつ…背中から抱き
しめてくる

「あつ…と、辰子さん…」

「んー…なあに？」

顎を祐樹の頭に乗せるように張り付く辰子へと祐樹は戸惑いの声をあげるも

間延びした声音。のんびりと居心地よさそうに答える言葉に……次の言葉を紡ぐことはできなかった

ーラ・チッタ・デッラ

一種異様な出で立ちとも言つべき体勢から

なんとか辰子を誘導して元に戻った時には、ここ。ラ・チッタ・デッラへと辿り着いていた

駅前繁華街と似たような活気に包まれているこの場所は、休日多くのカップルや学生達が遊びやショッピングを求めて集う地であり

「うーん…どうしようか、祐樹君？」

隣に居る辰子。声音と繋いだ手から今だ共に居るつもりなのは明白であり

祐樹もせつかく会えた辰子と今日は一緒に過ごそうと思っており……自然、視線は辺りを物色するように彷徨いつつ

「そうですねー……」

目ぼしい物を見つけれず、そう答える祐樹。視線に映るはカフェのテラスに対面で座るカップルやら女子のグループ達など

様々な人々。雑多に多く人が居る為に、“力”を封じているが為に……

「…………私の誘いは断ったくせに、メロン女とデート…………許せない。許さない」

ビルの一角から三つの視線

「ゆ……ゆうきさん……」「どうようのあまりにおらもせんぶひらがなだぞー」

京に由紀江に松風。ファミリー達の姿を見過ごす……

そんな暗い視線を一心に浴びている祐樹であったが

「あつ、祐樹君ゝあれやろゝ」

辰子が指差す先に意識を向けたが故に視線に気づかず、指された先にある

「動物占い？」

デフォルメ化された数々の動物達の姿が所狭しと描かれた機械

プリクラ等と似たような筐体が、その一角には集っており

「ほらほら、祐樹君は？」

お金を入れ、自身の誕生日を入力した辰子が祐樹をせかし…祐樹も己の誕生日を入力していく

「くっ……イの一番に相性占いを選択するとは……！！悔れない……！」

「あううう……」「今度、一緒にやればいいじゃねえかーまゆっちー」

二人してそんな光景に歯噛みする。ちなみに小さな筐体、しかもこの距離で画面付近は二人の体でだいぶ隠れているというのに

察せられたのは京の視力のおかげで記しておく

「おお…私、ゾウだ」

最初に入力した辰子の結果が画面に映る

ゾウのキャラクター。説明欄には信念が強く、やると決めたらやり通すがモットー。そしてさりげない努力の積み重ねで目標をクリア

人の話を聞かない傾向と書かれており……最後は、“本編”を知る者にとっては理解できるであろう。普段穏やかな人だけにキレると怖かったりという一文

「うゝん…合つてるとこもあるけどゝあんましだね…」

結果に首を捻る辰子

「よーしゝ次は祐樹君のだー」

そう告げて自身の結果を終わらせて、次に入力した祐樹のデータを呼び出そうとするも

「んゝ…？エラー…？」

次画面のボタンを押して浮かび上がったのが赤い文字のERRORの文字のみ

「あれ？おかしいな…ちゃんと入れたんだけど…」

“この世界”における生年月日を正確に入力したと確信が持てる祐樹であるが

画面が映し出す結果に、不安を覚え

「んゝ…相性占いまで、できなかったなゝ…」

「今度は一人で入力してみますよ、それで出たらもう一度やればいいだけですし…」

肩を落として落胆する辰子を慰めるように告げつつ、再度入力していく

―それが、己にとって痛みを生む結果となることも知らずに…

「あつ…いけ――」

「出たね…ってあれ」

映し出された結果。デフォルメされていようが

「隠しキャラってやつなのかな？でも……」

卑しそうな笑み。憎憎しげな瞳が作り出す風貌

ありえない。占いとはいえ…人が楽しむ為に作られた物なのだから縁起の悪いモノが採用されるはずがない。実際には神社のおみくじに大凶が入ってないぐらいに

こんなモノを表示されれば誰もが悪態をつくような

「ハイエナはないよ」

辰子の困った声音が右から左へと抜けていく

愕然とする。佐橋祐樹は愕然とし……心の奥底で納得してしまう

表情は暗く、硬いまでも……認めてしまう

——現実から架空世界へと、どれだけ言葉を並び立てても…己の都合のいい世界へと逃避したと言っしかない現状だからこそ——

唇が…自嘲的な笑みを作り出す

龍の心根——“悌”の武士娘

——ラ・チッタ・デッラ

その生き物は……神を受け入れたかはつきりしないあいまいな人間の象徴として

中世のキリスト教は見定めていた

一見すれば……両性具有の性が一定しない姿。今では迷信であるが……子を成す行為をせずとも子孫を残せると信じられていたぐらい

——似ている。一見すれば……男か女か定かではない姿

そして、現代では——“死肉を漁る者”

——他人の物語を漁る。そう取られてもおかしくない。何もかもが変わっていくのだから……

“この物語”を見つめる者達が生きる時代より……遙か先の可能性の一つたる未来

生活模様は然程変わらないまでも……高度に発達した技術が齎した——薄れいく繋がり

人と人を繋げるものがほぼ、冷たい機械越しに為っていかうとしている時代

己にしか興味がなくなる。己の欲望を満たすことがより一層と強くなる時代

時代が呼んだのであろう、人が呼んだのであろう……己の意のままにならない“世界”とは違う

己だけの世界。“架空世界”。アクタイオン社が作り上げた——
“タイムダイバー”

デフォルメされたハイエナ。その顔が嘲笑っているように見えるからこそ

「そつだよな」

洩らす言葉。力なく、呆気ないほどまでにストレートに零れた言葉

画面の内容なぞ見なくても分かりきっている

瞳を己の手にやる。掌を見つめる——幻影が走る

207。青い髪の小柄な少女——終わるはずのない場所で終わりを告げられる。音を切り裂く鉛球を食らったが故に

— 白銀^{はくぎん}が居れば終わりを告げられることはなかっただろう

戦乙女。朱色の髪にカチューシャをつけた少女——終わるはずがなかった。大きな傷を受けるとも逝ってしまった仲間達を戦乙女^{ヴァルキリーズ・データ}戦記を語り続けるべき者

— 黒きアナグラムの青年によって刈られる事はなかったであろう

ひた走る幻影を……受け止める。自分自身も自分自身も己自身なのだから オルタネイティブ フレイドアーツ

瞳に暗く鬱屈したモノが宿りだそうとする。だが……暖かな温もりが押し止める

「恐い雰囲気出したらダメだよ……祐樹君」

後ろから羽交い絞めにし、祐樹の頬に自身の頬を摺り寄せて囁く辰子

「私には……わかんないけど、今みたいな祐樹君は……いやだな……」

寄せた頬から伝わってくる熱。視界に微かに移る瞳は閉じられており、紡がれた言葉は悲しげに

祐樹の胸元で交差された腕がそのまま寄せた頬とは反対の方へと誘^{いざな}われていく

優しげにたたえられた笑顔。愛しむように、癒すように——一筋の液体を救い上げて

救い上げられたモノは……細く開けられた瞳。その中に宿る間延びした雰囲気とは違う

凜猛な感情。今日の前に居る男は己のモノだと言わんばかりの色合い

だが――

それとは正反対な優しい色合い。今にも崩れいきそうな男を受け止める眼差し

相反する感情が混ざり合った視線のままに――愚者を、“護”の青年を癒す

「俺は……」

幻影は先に。想いの欠片を手にして

寄せられた頬、寄せた頬。二つの間に今一度……雫を流して

相反する瞳を閉じた“寝ぼすけ龍”――家族を大切に思う心

その感情が刻む想い――“悌”の武士娘が抱きとめる

――2009年 4月27日 2 - F

もつとも喧騒する時間と言ってもいい昼休み

「まぐまぐ」

お米を口一杯に頬張る一子と

「……」

元より紅い人参のグラッセが紅く染まった固形物と化している物を橋で掴み口元に運びつつも

横目で隣に座る――

「……」

掴んだブロッコリーをそのままに……意識を飛ばして呆ける祐樹を見つめる

「?どうしたんだ、佐橋殿？」

キャップの発案によって土曜日の遊びから試験的に輪の中に入っているクリスが

祐樹へと声をかけて

「…ん?あ、いや。なんでもないよ。フリードリヒさん」

問いかけに反応して、なんでもないように告げて箸を口に運ぶ

「むう……クリスでいいと言っているだろうに、佐橋殿」

「あまり、馴れ馴れしく名前を呼んだら…君のお父さんが来そうだね…」

適当に思いついた理由を並べて答え

「いいんじゃない？しょーもないことだよ」

事も無げに京も箸を動かしながら、クリスへと淡々と告げ

「だが…」

「呼び方なんて、人それぞれだよ。ゴリ押ししても意味ないよ」

「……椎名殿」

「まあ、いいじゃないのクリ。祐樹の好きなようにさせたら？」

頬張っていたお米を飲み込んで、一息ついた一子が宥めるように告げたことによつて

「ん…むう。犬の言うとおり…か」

少し肩を落として…どう見ても教室の雰囲気と釣り合わない豪華すぎる弁当に手をつけたす

そんな中——教室の扉が盛大に開き入ってきたクラスメイト

「ちつくしょおお！」

ヨンパチが唸りながら、教室内を見渡し祐樹を見つけて近づいてくる
「どうしたのよ？サル」

仲のよい真与とその他数名の女子が席を囲んで食べていた千花が

椅子の背もたれに体を預けながら、後ろに振り向くように尋ねると

「腹が立つことが2つあった」

憤慨しながら言い切り

「一つは可愛い女子のスカートが風で捲れたら…中がスパッツだった」

漢の表情で鼻息荒く言い放ち

「お前は、泣いてもいい」

横から話に参加したガクトが漢泣きしながら同意

「なんだ…いつもの如くか、心配して損した」

呆れた表情であっさりと告げた千花

「で、もう一つが“賭場”で大負けしちまって…」

「賭場………ね」

話の持つて行き先が理解できた祐樹がため息を吐くのと

「佐橋い！仇取ってくれえ！！」

ヨンパチが泣きついてくるのは同時であった…

「はぁ…で、何にで負けたの？」

「麻雀…」

「また…難儀な物を…それにしては、エライ剣幕だったが」

「相手が隣の2・Sの女でよー」

悪態を付くようにヨンパチが言い出す

「さんざんバカにして勝ちやがって悔しいんだよ！！」

「アゝンタ。バカにされることなんて慣れまくりでしょう？」

千花がどこ吹く風と髪を撫で付けながら、ヨンパチの言葉に茶々を入れると

「俺達をバカクラスっていいやがってさ！見下したんだ優等生だからって！」

ヨンパチのヒートアップぶりに納得したのか、感化されたのか…千花も不機嫌に

「腹立つわね。2・Sの奴らなら言いそう」

同意する

「とりあえず、想像の中で（ぴーー）たけど腹の虫がおさまらねえ！」

「なんか、変な音しなかった？」

「察してくれる？師岡」

「うわあ？！札で指さないでほしいな…椎名さん」

「ともかく！！想像の中でだなんて…アンタどこまで情けないのよ…」

ヨンパチの物言いに呆れかえりつつ、再度ため息を洩らす千花

「カワイイだけに…余計ムカつくって言うか…」

そう返そうとしたヨンパチの声を遮って

盛大な扉の開閉音が響いて…

「ほほほっほほほ！！！！劣等クラスの猿山に…わ・ざ・わ・ざ」

艶やかなピンク地。際立たない程度に牡丹の花が散りばめられた着物を着込む

2・Sの不死川心。表舞台に立つ名門御三家の一角、不死川の一人娘たる少女が

口元に手をやって高笑いし、タメを作って

「高貴な此方が――」

再び甲高い音が響く…

「で？ヨンパチ？」

「時々、思っけどよ……大概、佐橋ドＳだよな…」

「アンタと意見が一緒なのは心外だけど……同意するわ」

容赦ない仕打ち……心が開け放った扉を同じく勢いよく閉める祐樹…

「によっわわわわあっあああっあ！！此方を無視するなあああ！

！」

涙目になりながらも扉を開け放って喚く心

「……えと、確か…」

――着物通学で有名な不死川。多大な寄付金で特別許可をもらって
る人だっけか…？

「2・Sの不死川さんが、何用ですかね？」

苦笑いを浮かべながらに問いかける祐樹に対して

「おまえっええ?!?!扉閉めておいてそれなのによかあっあ!!！」

瞳を潤ませついでに舌も噛みつつも抗議するも……噛んだこととその涙目の為に迫力はなく

「ごめん、ごめん、めんどくさいことになりそうだったからさー」

「によわああ！！棒読みで失礼なこと言うなーーーー！！」

黒髪を逆立てて吼えた心であつたが……気を落ち着けて

「ふん！まあよい。平民の粗相は上流階級たる此方が躰けてやろつぞ……」

瞳を光らせて、ヨンパチを

「その負け猿の遠吠え。此方の高貴なクラスまでに響いてくるもんじゃからのゝ聞き苦しいことこの上ない」

挑発する流し目。一々、相手の神経を逆なでするような言い回し

「仕方がないのでな……お前達の誰かにこの猿の仇を取らせてやろつと足を運んでやったのじゃ」

着物の袖で口元を隠し、盛大な侮蔑を込めて辺りを見回す心

それに対して――

「それは……また……とんだご配慮を」

そう切り出して

「しかし、生憎と自分達のクラスにはS組みと勝負したい奴はいないのでね…お引取り願いま——」

やんわりと、瞳はあきれ返っているが…告げようとするも

「受けるぞ—!!」

盛大な宣言。いきり立っているクリス

「さつきから侮辱した言い回し…S組みとやらがどれほど偉いかは知らないが、クラスメイトへの侮辱は許さんぞ—!!」

鼻息荒く、腕組みして心へと啖呵をきるクリスとそれに対して口元を歪ませた心の視線が絡まる中

祐樹は天を仰いで顔を手で覆い隠し

——そうだな—そういう奴だな……フリードリヒって…

嘆くように心中でボヤク

「では、決闘…という訳じゃな。噂の独逸^{ドイツ}人の力量を定めてやろうかの」

もったいぶった動作で紡ぐ心の言葉を引き継ぐように

「では——私も混ぜてもらってよろしいでしょうかね？」

「かあ…俺は不死川のそのとても、あれだ、雅でない精神構造が嫌いじゃないがね…」

冬馬と準。三人組みの男メンバーが顔を出す

「うわぁ…流石、トーマ君。ただ教室にはいるだけでも様になるわ
エレガント・クワットロ
」…イケメン四天王筆頭は違うわね!!」

瞳を輝かせ手を胸元で合わせる千花の言葉をかわぎりにクラスないの女子が色めき立つ

「……エライのまで来やがった…」

たったこれだけの事象だというのに、頬をこけさせた様にどんよりとした空気を纏って呻く祐樹に

「おや？つれないですね……私はこんなにも佐橋君を求めているというのに」

無駄にさわやかな笑顔を振りまきつつ祐樹へと返す冬馬の横にて片手を菩薩のように立てる準へと

「……真性^{マシ}なのあの人」

「若のあれだけは…わからん。そも、あれだけはわかりたくないな…俺は…」

二人そろって肩を落としている最中にも――

「では……勝負は心さんとクリスさんの決闘。そして――」

冬馬が組み合わせと試合内容を決めていき……

「私と佐橋君が」

自身の頭を人差し指で指しながら

「ココで勝負ですね……前は私の勝利となりましたが…今回はどうなることやら」

愉快そうに紡ぐ冬馬。瞳の色合いは――

「はあ……結局、こうなるか」

「頑張つて！祐樹」「頑張れ！祐樹」

拳を握り締めて突き出すように胸元で掲げる一子とおざなりな声音で声援を送る京

その視線――“腐食”しているような視線。背筋に悪寒が走る祐樹

「さて、では…始めましょうか？佐橋君」

貴婦人をエスコートするが如くに手を差し出す冬馬

前門の変態、後門の変態状態――

「…泣けてくる」

サメザメと泣く祐樹に冬馬のファン達からのキツイ視線

より一層と泣けてきた…

仮面の残光 VS 客神

― 2 - F

クリスと心の一戦と同時進行の為にこの場に残るは…

「トーマ君、頑張って」

「F組なんてやつつけちゃえ」

「F組のやつら、キモいの多すぎ」

冬馬のファンたる両手の指では足りないほどに居る2年生女子達

「羨ましいものだな…」

男なら誰もが一度は羨む…女性の群れを引き連れるような姿に祐樹はポツリとこぼすと

「佐橋君も居られるではないですか？」

「祐樹、シニタイノ？」

祐樹の発言に瞳を暗くして貫くような視線で刺す京

「あわわわわ……祐樹いゝ…」

京の剣幕に気圧されて、涙目の一子の二人へと視線を送る

——普通の女の子に迫りたいと思うのは………贅沢すぎるか…

青空を見上げるような澄み切った瞳で遠くを見つめるかのような祐樹
ヒロイン全員……… 武士娘と言うのも…ある意味でツライのかもしれないが——後ろの男子連中からのキツイ視線は両者ともに然程大差がないのが真実

「まあ…いい。で？何で勝負する？」

振り切って冬馬へと問いかける祐樹の言葉に

「肉弾系なら私の出番！！祐樹の剣！川上一子！祐樹の敵を薙ぎ払う！！」

犬耳をピコピコと逆立てて勢いよく名乗りを上げる一子に続き

「祐樹の鞘！椎名京！祐樹の剣を受け入れる！！」

「あ痛…」「あう…」

無言のままに祐樹は京の頭をはたき、一子にはでこピンをプレゼントし

目で冬馬へと催促する

「では…観客もそう多くはないのでポーカ―に致しましょうか？」

上着のポケットから封が切られていないトランプを取り出してにこ

やかに告げる冬馬

その様子に、ほんの一瞬……悟れるものは鉄心、百代、揚羽、乙女とマスタークラスの実力を持つ者が同室に居る場合のみ

感知できるほど……刹那の時、瞳を尖らせて

「ああ」

そう言いながら首元のチヨーカー。髪に覆い隠された其れに手を当て

「では……」

笑みを浮かべた。そう……判る者が少ないほどに軽薄な笑みを浮かべてトランプの封に手をかけようとするも

「私がシャツフルしよう」

「!?!?」

全員が驚愕の表情で――その声。クッキー第二形態の声音で発した祐樹へと視線を向ける

「ゆ……祐樹の声がクツキーになったわよ?!?!」

「そーいや……ワン子あの時居なかったけ……」

犬耳をピンと張り詰めさせて京の袖を引っ張って質問する一子に

どうでもよさげに返す京

「……………さはっちつて、こんな声も出せるんだ」

純粹に驚いている千花。F組みで唯一の祐樹側に立っているものの……ちやつかり冬馬の声援も送っていたり

「ヨンパチ並にかっこいい声なのにね……」

苦笑して祐樹の姿——長い黒髪によってディテールが隠された野暮ったい姿——を残念そうに見やるモロ

そんな者達を置いて当事者達は

「おや？」

数少ない、驚かなかった者たる冬馬が不思議そうに問いかけ

「戦場^{フィールド}に駒^{カード}までも用意してもらったのだ……ならば、私が選定^{シヤッフル}と勝利^ルを決するものだろう？」

流し目。挑発するような、瞳の中の色合いが鋭利さを増すように細くなつていく様な感覚で見やる祐樹

「いえ、大丈夫——」

「それとも……私の手が——現時点^{……}で触れることは拙いのかな？」

「そんなことはありませんよ？そうですね……では、お願いしてもよろしいかな？」

「ふっ…では、ルールは通常のポーカー。ピックは展開されたカード好きな場所から引ける。52までの宣言した数字の場所から引くと言っことでいいかな？」

「構いませんよ？」

ほんの少し、愛好を崩して答えを返しなら

——ふふ…言い回し。前回で学習済みということですね

封を切ってカードを冬馬へと表に出し…52枚が綺麗に整列しているカードをお互いが確認し

——ですが…そのカード自体がマジックカード。微かに裏地の生地が違います…追加したルールが仇となりましたね。私の勝ちです
そっち心中で思いつつも、毛ほども表に出さぬまま

「シャッフルする。ストップはそちらで決めてくれ」

——触覚はOK。嗅覚もOK。狙い通りに…視覚はダウト。ならば！

一般的にはリフルシャッフル。某有名なカードゲームにおいてはシヨットガン・シャッフルとも呼ばれる切り方

「シャッフル、すごく鮮やかですね…その細く白く…舌を這わせた指に映えますね」

爽やかに告げる冬馬に鳥肌を立ててつつ無視し…リフルシャッフルを継続する

「では、ストップで」

「（８…か、では）…カット、どうぞ」

冬馬によってカットされていくカードの束を見つめる

カットされたカードを片手で掬い上げるように持ち、そのまま敷くようにカードを横一列に並べる

寸分たがわない。その整列された５２枚の列…冬馬の目論見は

—— おやおや…これは…見透かされていましたか

その並びはマジックカードの文様を上からさらにカードが覆うように並べられた配置

冬馬に解るのは——

—— トップは…ハートの９ですか

唯一見える先頭の文様がハートの９を指す模様。この見事なまでの配置では——

「おおう！祐樹、器用ね」

「ほんと、ほんと…綺麗に並んでるわね」

一子と千花の物言いどおりに見事に並んでいる故に

——下手に崩せば…あらぬ疑いが掛かるということですか

相対する祐樹へと顔色を変えぬままに視線を向ける

机一つ分の距離。祐樹のほんの少し吊り上げた口元を目に入れることができない

——展開されていますし……ここは運否天賦の勝負となりますか

「では、私は…」

不意に教室内に始業五分前のチャイムが鳴り

「どうやら、一本勝負となるようだな」

「…ですね」

声音を変えてから足を組む形に座っている祐樹が肘を机に立てて告げる

同意する冬馬。数字を宣言し…手にしたカードは

——9のフルハウス…ですか。……どうやら今回の流れは——

冬馬が己の手札をチェックしながら心中で言葉を紡ぐ中

祐樹の方もカードを選び終わり……互いにカードをオープンする

——佐橋君にあるようです

歓声が上がる。F組み側から――祐樹のハンドは

「冬馬君がフルハウスで…さはっちがロイヤルストレートフラッシュユ?！」

叫ぶように言い放った千花の言葉と共にチャイムが鳴り

「こりゃ!―お前達、クラスに戻るでおじゃる!―」

歴史教師。平安時代の白塗りの肌に坊ちゃん頭の綾小路が一括しながら教室に入ってくるのをかわ切りに

幕を閉じた――

――2――S

「不死川は引き分けと…」

5、6時限が終わり放課後となって準が心より戦績を聞き出し

「で、私は負けたと言うことは…こちらの負けですね」

軽く肩を竦めて告げる冬馬

「葵君が負けたじゃと?! F組なんぞに?!」

心が信じられないという表情のままに叫び

「トーマー…負けちゃったの？」

祐樹の居るF組に近づくことをしない小雪が…離れていた分を補充しようとして冬馬に体を摺り寄せながら聞く

「はい、ユキ。……準。佐橋君は何回カードを切ってましたか？」

「8、9回だったと思うぜ」

「そうですね……トップはフェイクだったということですね」

楽しそうに告げる冬馬の物言いに理由のわからない心が

「どういうことじゃ？葵君？」

「勝負はポーカーだったんですが……ものの見事に騙されましたね。あれだけのシャッフルでしたし……もう少し探ればよかったようです」

「つまり…なんじゃ？」

「若…もしかして」

「ええ、準の思うとおり。佐橋君はパーフェクトシャッフルを掛けてきたのですよ」

「ぱーふえくとしゃっふる？」

「規則正しくカードを一部のミスもなく噛み合わせていくリフルシャッフルのことをいうのですよ…ユキ」

祐樹との対戦で使ったカードを一束づつ持ってシャッフル姿を見せる

「それが…どうして、騙されたということになるのじゃ？」

「パーフェクトシャッフルってのはある程度のシャッフルを重ねると最初の位置に戻る。これは数学的にも証明できるんだが…」

準が己の小雪によって剃られた頭に手を当てて答え

「まあ…めんどくさい式になるから割愛するわ。とにかく、それの
はずなのに…」

そう言いつつ冬馬へと視線を送ると

「策士、策に溺れるという事です。なまじ仕込みを作ったからこそ見える…絶対的情報に過多してしまったといことですね」

「ってことは」

「はい、仕込みを逆手に取られてトップを摩り替えたのか…私の目に留まらないスピードで順番を変えたのか…ですね」

負けたと言うのに満面の笑み。まるで、恋人を自慢するかのよう
に話す冬馬に

「あれだけの手先に…動体視力まで付いてくるか…流石、風間のと
この奴だな」

その表情に付き合うつもりのない準は言葉だけ受け取り返す

“力”そのものを封印している祐樹であるが…感覚や知覚。不良共に叩き込んだパンチ

京も由紀江も間違えた数を正確に把握する等においてはブーストしたまま

当たり前だろう。その感覚すらも封じられては…いざ開放した時に役に立たないのだから

人とは常に状態を一定に保とうするのだから

「ふふ……この気持ち。やはり——」

「おい、ハゲ……葵君——」

「言っな、不死川」

引きつった笑みを浮かべる心と何時も通りの菩薩ポーズを取る準であつた…

—放課後 一年C組前

「ひいー！」

「ど、どうしたんですか祐樹さん?!?!」

「…な、なんでもない。京が朝布団に潜り込んで…“既成事実だね…”って言われてもこれほどまでに立たないだろう鳥肌が立っても問題ない!」

「変声機入ったままだぞー」

「そ、それよりも…友達はできたかい？」

「……」

「野暮なこと聞くなよー祐樹ー」

――放課後 弓道部

「はっ?!今、途轍もなく美味しい場面を逃した気がする!」

「……部長。椎名先輩がプツレミアムに…」

「そっとしておいて上げなさい……」

夕焼けに染まる——“誉”の武士娘

—2009年 4月28日

降り注ぐ朝日の中に

「さあ、愉快的仲間達！出陣だ！」

「何気に時間ギリギリだよ」

「おら。いくぞ」

キャップの号令と京の呼びかけを合図に

キャップ、祐樹、ゲン、京、由紀江、クリスで佐橋寮を出発し

途中で川神姉妹の二人を拾って多馬川の土手沿いへ

「そっいゃ…祐樹。昨日、S組の奴らと決闘したんだって？」

キャップの質問に対し

「キャップは…屋上で昼寝していたか。昨日は」

「おうよ。結果だけしか聞いてないからよー」

存外に中身を話せと催促する。一緒に歩いているクリスが顰め面に

なるのを

「そうそう。クリは引き分けだったのよねー」

祐樹が勝利した故に勝ちを拾ったものの、本人的には納得していないクリスを茶化すように告げる一子

「くっ！無手でなければ、勝っていたさ犬！」

「ふーん…でも、ルールが無手なんだから負けは負けでしょー」

「ぐっ…！」

生来の負けず嫌いな部分が触発して言い返すも正論返されて…結局言い返せないクリス

そんな二人のやり取りを横目で流して

「結局、葵冬馬はイカサマを仕掛けてきたの？」

京の質問

「そう。マジックカード。裏地が瞳の焦点をずらせば判るタイプの物だったな…」

そう返す祐樹。それを百代はスッと瞳を細めて見る……刹那の間に

「まあ…種が判れば」

「ああいう置き方にと？」

「そうだな」

「でも……それだと、祐樹さんはロイヤルストレートフラッシュを引ける理由にはならないかと……」

仕掛けはわかってても其れが防げるだけで……後は運否天賦の勝負。それでは都合よく最強の札を揃えられる筈はなく

祐樹の方も種を仕掛けてはいないのかと問う由紀江

「由紀江の言うとおりだね。……ワン子。昨日、俺がカードをシャッフルした回数は何回だ？」

「えっ……と。確か、八回のはずよ」

頷に指を当てて、少し記憶を掘り出してから答え

「そう。八回……規則正しい順番で並んでいれば……京、ごめん。鞆持ってて」

「ん」

そう言つて祐樹は鞆の中からランプを一組出して……全員にオーソドックスな市販品の並びの形に並び替えたカードを見せて

手の中でリフルシャッフルを開始する

「わぁ……祐樹さん。お上手ですね……」「テーブル無いからどうするのか……って思つたんだぜ」

澱みない鮮やかな手つき。手の中で形を変えて音を立てつつシャッフルされる52枚のカードを見つめながら由紀江と松風が感嘆の声を上げ

「ほお…見事であるな。佐橋殿」

「流石、私の旦那様」

「……いや、別にキャップもゲンもできるぞ。コレ。というかキャップの方が上だな……プラモ作らせたら多分…上位に食い込むぐらいだし」

「俺を担ぎ出すな」

「カードに関しちゃ、祐樹の方が上だぜ？ま、その他は俺の方が上だけだな！」

そんなやり取りを交わしつつ

「7、8…と。では、ご開帳」

そう言つてシャッフルしたカードを展開すると

「おおう！全部…最初と同じになつてゐるわ…！」

一子の驚嘆の声が全員の心中を代弁する

「へえ……本当に色々と器用だな…弟は」

先ほどまでとは違…色合いの瞳を戻して、祐樹の首に自身の腕を巻きつける百代

「多芸に…これなのになー。何で、家の奴ら以外には評価が低いんだー？お前」

巻きつけた腕で祐樹を自身の胸元へと引っ張り込んだ百代

そのまま祐樹の前髪を梳くい上げて…不満そうにぼやく

「いいよ…別に。俺の評価なんてさ…そりゃ、良い方になればいいけど。俺には」

周りを見渡す。体は最早、大人と言ってもいい仲間達だが――

「皆が居れば…皆が理解してくれていたら、それでいい」

その視線に宿る。一抹の縋るような色合いは…誰にも、まだ理解できはしなかった

「それだと、私の気が済まないんだ！」

若干、声音を荒げて…頭を胸の谷間に押し込む

「あー！…！！モモ先輩！ズルイ！！私も、私も…！」

次は自分だと高らかに自己主張する京

「あ…うう」「まゆっちー。自己主張しなけりゃ、チャンスなんてめぐってこねえぞー」

「はっ、破廉恥な!!」

由紀江、クリスと続き

「お前は私の弟なんだぞ？姉としては不満なんだぞ？…わかつてるのか」

ジト目で覗き込んでくる百代

「私の子猫ちゃん達から…お前の名前が出るときは途轍もなく、不快なんだからな…」

——今度、機会があれば…

言外に非難されているということを告げる

根本的に百代が特別扱いしているのを面白く思わない子達が多いのと、評判などが低い故に好き放題いう子も居る

「おかげで……何人かの子は捨てたしな」

なんだかんだでファミリーが第一。所詮はある程度の上辺だけの付き合いなのだから……こういう風に告げる百代

と、そうこうしている内に——

「も、百姉。っ、着いたから…離して。京も」

多馬大橋へとたどり着き…祐樹はそう告げる。本日は——

「あー…そう言えば、揚羽さんから呼び出しか…」

あまり面白くなさそうに答える百代

「うー…今日は金曜集会の日だよ。ちゃんと帰ってきて…」

京も頬を膨らませ、BOD札を掲げて祐樹へ忠告する

「ん？佐橋殿は？」

「前から連絡があっただよ。九鬼財閥のご令嬢のお呼び出しだ」

「そ。ゲンさんの言うとおり」

「だから、クリ。祐樹はサボリじゃないわよ」

クリスの発言にゲン、キャップ、一子の順で答えて…一子が釘を刺す

「べ、別に自分は何も言っていないではないか？！」

顔を赤らめて言い返すクリス。染まった顔色に全員が納得したかのような顔つきになる

「う…」

それにたじろいで…少し拗ね気味になるクリスを置いて

「分かってるよ京。夕方までの付き合いって言ってられたから…ゲン、晩御飯の用意頼んだよ」

京の青みが掛かった薄紫の長髪を優しく撫で、ゲンへと言葉を飛ばし…返ってきた手を振り返す仕草を一瞥して七浜へと向かう

―七浜 中華街 門前

「…早めに着いたか」

制服のジャケットの下に着込んでいた私服

大きめに取られた襟。白いシャンブレーシャツに黒のショートジレベスト

好んで穿くヴィンテージ風の紺のジーパン

フェイクスウェードワークブーツ。ベストと合わせた黒

「…カーゴパンツにすりゃよかったかな？」

ウィンドウに映った自身の姿を一瞥して顎に手をやって唸る

荷物は最寄のコインロッカーに仕舞い込んでおり

「もう、そろそろ…かな？」

携帯を開いて時刻を見る。時間は9時半前を指しており

「待たせたな…祐樹」

揚羽の声。背筋が自然と伸び…主を迎える者たる姿勢に自然となつていく祐樹

視界に現れた姿は仕事着としているノースリーブのベスト。スーツパンツ。どちらも白に近い茶の色合い

それを着こなし、長い青みが掛かった灰色の髪を揺らめかせ、腕組みのままに歩いてくる

すれ違う男達の視線を独り占め状態。当たり前だ……彼女程に輝いている女性ならば

男ならば誰もが瞳を奪われるに決まっている——それは祐樹も例外ではなく

見惚れる。春風に浚われるままにたなびく髪

凜とした瞳。強い意志。進むことを躊躇わないその強き瞳

全てが合わさった肢体。スラリと伸びた足が直前で止まるまで

「——うき。祐樹？どうしたのだ？」

その見惚れた瞳が己を覗き込んできた時に意識が戻り

「！す、すみません。揚羽——」

「様は。……いらんぞ」

「…さん」

様と紡ごうとした祐樹を逸早く制する揚羽。面白くなさそうに瞳が剣呑としており

間を挟むも修正する祐樹

「ふう……紋には仕置きが足りんかったか……」

嘆息し…実家に居る妹へと祐樹へと施した執事教育の件で絞り上げたというのに

足りなかったと思うぐらいに面白くないのである

「お元気でしょうか？紋様は」

「……お前は変な所で鋭い癖に……こういう部分では鈍すぎる」

恨めしそうに睨み上げてくる揚羽に…冷や汗垂らすしかない祐樹

案の定——睨まれている原因。出会って祐樹自身から発した言葉が自分ではなく紋の事となれば——女性としては心中穏やかでは居られない者もの

特に…こうやって態々呼び出して

「えつと……きよ、今日はKOSの下見ということだよかったんですよね…?」

「…ああ」

常の揚羽では考えられない——仕事を半ばダシにしてデートの体裁を取るようなぐらい

恋心を。己のモノにしたいと願う男との逢引では不機嫌になるのは自明の理

気まずい雰囲気。初っ端からコレでは前途多難であるが——

——……詮無い。只でさえ……身内に多くの敵を抱えているのだ。
これでは時間を捻出した意味がない…

この鈍感男に対して意地を張っても損をするだけと無理矢理納得し
絡める

「行くぞ、祐樹。今日はしっかりと我をエスコートするのだぞ?」

不機嫌なオーラを捨てて、祐樹の腕を己の腕で絡めとり歩き出す

「わっ?! あ、揚羽さん?!」

そんな揚羽に引っ張られるままに祐樹は連れ立って歩き出した

そうして歩き出した二人

正直に言つと……ここ、七浜は揚羽が高校時代に来ることが多かった土地でもある為

「で…あちら側が飲食店街になりますね。知り合いに美味しい春巻きを食べさせてくれるお店を聞いたので…後で伺いませんか？」

多くのガイドは不要なのだが――

「ほお…そうか。なら、行ってみるとしようか」

自身の主観は大切だ。己自身で見聞きするのと聞くだけでは雲泥の差がある

しかし――自分だけの情報では

「で……あちらは住宅街。この前、幼稚園が新設されましたし…ここ数年で何件か新しい保育園も出来ていますね。…できればあちら側は戦闘禁止区域。もしくは立ち入り禁止区域がよろしいかと」

高校卒業と同時に家業を継いだ揚羽では…こういう最近の話はトンと耳に入らない

それに他人の意見も聞き、吟味しなければ真の意味で理解したとは言わないだろう

「ふむ…」

「……今年の開催は…まだ本決まりではないのですか？」

「まあ…な。私のスケジュールもここ最近には特に流動しておる…中止になるやもしれんが、開催することを前提に動きたいのだから…」

組んだ腕。腕から伝わる85もあるバスの感触に何時までも慣れることはない祐樹の赤い顔を見て

揚羽は先の鬱屈した気分が和らいでいくのを感じながらに

「従者部隊はまだまだ欲しい。世界中の才能ある者を集めるには一番効果的な策であるからな」

「そうですね…まあ、変なもの釣れますが」

「なに…その為のKOS。賞金に目が眩んだ亡者を振るい落とすのと…私の目に止まる者を選別するためなのだから」

不敵な笑みを浮かべる横顔。祐樹はそんな揚羽を優しい色合いの瞳で見つつ歩く

二人の足が住宅街から外れて…今度は先ほど言っていた飲食店街へと入り込む

「そろそろ…お昼ですし…食べに行きませんか？」

「うむ。そうするか」

祐樹の問いかけに二つ返事で返す揚羽

「春巻き以外にも…シューマイが美味しいらしいです」

笑顔で告げた祐樹の言葉に揚羽は唐突に嫌な予感が走る

——…ぬう…

屈託のない笑顔で連れだって歩く祐樹を見ると益々その予感はざわめきだし

件の店へと辿り着いた時——それは確信へと変わる。店の中から聞こえる

軒先にも響くほどに

「…祐樹。違う店にす——」

揚羽が言い終わらない内に祐樹が見せの扉を開いて——

「ったく〜！李はほんとに細けえよな〜」

金髪碧眼。ツインテールの粗野な感じを受けさせる女性…ステイシー・コナーと

「…ステイシーが気にしなさすぎなのよ…」

黒髪に釣り目。ショートカットの冷徹な感じを受けさせる女性…李^{リー}
・シンチユー
静初

その二人が店内に居り

「あれ…？ステイシーさんに李さん？」

祐樹が見知った人物に呼びかけると

「おお?! 祐樹じゃねえ—— 揚羽様?! こ、このような所でお会いするとは…」

声掛けに気づいたステイシーが気軽に声を掛けるも…すぐ隣に居る揚羽の存在に気づき

椅子から跳ね上がった姿勢を直す——そして、相棒たる李の方は…

祐樹の呼びかけに最初は方を跳ねさせ、次いで恐る恐る声がした方角たる祐樹の方へと顔を向ける

そうして視界内に祐樹を映し出した李は俯き、顔を逸らせる。紅くなった頬を隠すために

「ちよっ…おい。李。揚羽様だぞ?」「?!?!」

ステイシーの囁きによって隣に立つ揚羽を感じ、ステイシーと同じ体勢へと変わる

そんな二人。特に李へと視線をやった後に揚羽は頭を振って瞑目し

「よい。二人とも…非番であろう。今は楽にしろ」

「?」

前の二人には分からず、隣の祐樹には分かるように溜息を吐いて告

げる

その言葉に…しばらく同じ体勢のままで居た二人だが、揚羽の外さない視線が続いた為に

力を抜く。それと同時に揚羽も視線を外して祐樹へと

「…我が居れば、二人が真に休まることがないであろう。店を変えるぞ」

耳へと舌打ちする。李から見れば…甘い吐息を掛けるように身を寄せて二人だけの大事な話のように映る

「…そうですね。ご配慮ありがとうございます。揚羽さん」

関係を察すれば…自明の理であり、揚羽の提案にこちらも小さく返す祐樹

「何…主人なのだ。従者の配慮も当然考えてやらねば…真の主人ではないからな」

そう告げて店から出ようとする合間に

「あ…と。また、今度お会いしましょう。ステイシーさん、李さん」

優しく微笑んで二人は店から出る。一瞬、流れていた空気が変わり

「ふいい…そう言えば、今日は祐樹の奴とKOSの下見すると言っておられたな」

席について餃子に箸を伸ばして吐くように言葉にするステイシー

しかし…相方が何時までたっても席に着こうとしないので見上げると

「…あゝ。そう言えば、お前もそうだったよなー」

苦笑いを浮かべて…切なそうに祐樹が出ていた扉を見つめている李へと

「確か…お前が帝様の…あー、暗殺を仕掛けたときだっけ？出会ったの？」

その言葉によって、ようやう動き出した李は席へと着き

「ええ…そうよ。彼が止めてくれなければ…私は此处に居なかったもの…」

好物のシューマイへと箸を掛けるも…取り皿に置き

溜息をつく。主人の想い人。そう考えて、諦める様に自分を諭すようにして騙しきれないままに…瞳が揺れ動く

「あっちもこっちも…フラグ立てて…アイツ、そのうち刺されるぞ…」

ボソツと呟いたステイシーの言葉はシャレにならない…

―仲見世通り

「ふう…」

「お疲れ様です」

揚羽の溜息に祐樹が労いの言葉を掛けながら――金平糖を手渡す
和風の小さな紙袋に入った砂糖菓子達を見つめて

「今日はご苦勞であつた。祐樹」

「いえ…こうやって、揚羽さんと一緒に居れるのは…嬉しいのです」

茶屋によくある紅い敷物が敷かれた店先の椅子に並んで座る

夕暮れが綺麗に見える時間帯。夕日に照らされた隣に座る揚羽の姿を…まともに見れない祐樹はそう返す

「そう…か」

それでも視線は隣に居る女性へと向かい、横目でチラチラと見る
紅い光景の中に佇む姿。今朝の凜とした姿もいいが――

――こういう姿も…お似合いだな…

優しげに、より女性らしい。^{エンプレス}女王とはまた違った……年相応の姿

今だ20に届くか届かないかの女性……何かを迷うような姿は九鬼らしくはないが

それでも祐樹はそう思う。今目にしている姿もまた――揚羽の一面であることなのだから

両手で持っていた金平糖の袋を持ち上げて封を切る。一粒口に含み

「祐樹」

「はい？なんで――」

続きは言葉になることはなく……防がれる

硬い感触は金平糖。柔らかい感触は揚羽の舌。甘いのは――

「あ、あげ――」

離れたのは一瞬。またしても口を塞がれる

今だ溶けきっていない金平糖が祐樹の口内と揚羽の口内を行き来する

カラコロ。カラコロと……滑稽なほどに乾いた音がやけに脳髓に響き渡るのが自覚でき

やがて、溶けた金平糖が音を鳴らさなくなり――舌を舐られる。二人の唾液が絡まりあう……水滴の音だけが鳴る

「あ……う……」

「ふふ…」

妖しげにして女の顔。夕日に照らされている為に…なお、一層のこ
と網膜に焼きつくほどに印象的なその表情

もう一度、金平糖を口に含んで…同じように唇を重ね合わせ、舌を
重ね合わせ、脳内を焼き尽くすように――

「…祐樹」

唇が離れる

「我は…暇いとまはない」

そう切り出して

「望んで着いた居場所だ。文句はない。だが…それでも、お前と
共に過ごせる時間は余りにも…少ない」

顔を正面へと向ける。祐樹からはその凛々しい横顔しか見えない

「だが――諦めるつもりは毛頭ない。覚悟覚悟せよ――これは戦いくさな
のだから」

瞳を閉じ、歌うように告げる揚羽は――

「お前の選択は自由だ。だが——忘れるな」

「」

揚羽が告げた言の葉は——“護”の愚者と“誉”の武士娘だけが知っていればいい……

激突する想い

―住宅街

夕日によって…紅く染まった頬が目立つことはなく

そも、通行人がほぼ皆無というこの道を歩くは―

「揚羽…さん…」

洩らした言葉と共にフラッシュバックする光景―接吻^{キス}…

より一層と頬を紅く染めつつも目的地たる“基地”へと足早に歩き
つづけ

住宅街でも外れの位置。周りの家々より少しだけ大きめの庭のある
一軒家

“鹿島”家の持ち屋。“この世界”の秘密基地へと辿り着き

―始めてるか

リビングのカーテンが閉められその中から光が漏れており

それを確認して玄関を開ける。中から何やら……

――…ん？喧騒……いや、コレは――！

聞こえてくる声。扉越しにも険悪な雰囲気漂ってくるリビング

それに祐樹は嫌な予感を覚え、靴を脱ぎ散らかして

強引に扉を開け放つ。目に飛び込んできた光景は――

「よくも、好き放題イツテクレタナアアアアアアッアア！！！！」

クリスへと全力で拳を振りかざす京を

「祐樹！！抑えろ！！」

羽交い絞めにして抑える百代

「分からないだろ、お前には！！この場所が…此処が無ければ…！
どれだけ…どれだけ大切な場所なのか！！！！！！」

吼える。吼え猛る。涙を振りまき、激化し百代に抑えながらも…も
がく

「え…え？」

そんな京の鬼気迫る姿に…啞然として呟くしかないクリス。状況を
理解していない

「だから！こんな、新参入れるのは嫌だったんだ！！！！」

荒い息。齒軋りが聞こえそうなほどに唇を噛み締めて……叫ぶ

「処分すべき？よくもそんな事この場所で言ってくれたな！！！何様だと思つてやがるんだ！！」

「み、京。待て、自分の話を——」

戸惑いながらも発した言葉は——

「帰れ！！！！お前なんか仲間なんかじゃない！！きえろおおっお！！！！」

燃え盛る炎が収まる気配などない。京にとってこの場所は……自分を生かした（……）場所

「やめろ！！京！！」

今こうして……正面から抱きしめて胸元にかき抱く祐樹が残した居場所

「ゆ……き……」

半年。たかだか……半年。されど、“この世界”の京にとっては耐えられない程の年月

生きていなかったのだ。ただ、心臓が動き、呼吸しているだけの人形でしかなかった月日……

“この世界”の京は——

「ゆ……き。じ……ぶじゅ……いのぼつゆ……」

涙と鼻声でグチャグチャの言葉。呻くように言葉にしていく…祐樹の胸元で

「ひ…ひて…したんだ！！！！」

「…もつと強く抱いてやれ」

百代の言葉が紡ぎきられる前より早く…包み込むように強く己を感じさせるように抱きしめる

「ふうふうふう…うつつう…！」

泣き崩れだした京。腰を浮かせて抱え上げ、リビングのソファに座り…寝転がった自身の上に乗せる

胸板に縋り付いて泣き続ける京の髪を梳きながらにあやす

“本編”とは比べ物にならないくらい…心が…

そうだ。彼女は経験していない。自殺の会が作られる時…およそ五年生まで受ける筈であった陰惨なイジメ

たとえば、暗くツライ経験であろうとも…それは京を強くする試練でもあった。そうであって欲しい

でなければ――

「京…！！！」

同じような経験をし…“ある種”の強さ。“卑怯^{チート}な力”とはまた違

う…諸刃の刃のような心の強さを手にした

愚者が惨め過ぎる……

京の呻くような泣き声だけが…リビングに響く

ゲンは顰め面で隣のソファに座ったまま

由紀江は成り行きにオロオロするのみ

百代は片目を瞑って腕組み——場の空気が静けさを取り戻し

「な…何だ。何が気に障った」

京の激化を理解できないクリスは今一度、声を上げる

「自分は正しい事を言ったはずだが…」

少し自身がなさげに左手で右の肘を押さえて体勢で立ったままに紡ぐ

「クリ……本当にそう思ってるの？」

少し剣呑気味に問いかける一子。普段なら和みを齎す犬耳も…今回はばかりは荒々しく尖っており

「あ、ああ。そうだが…なんだなんだ犬」

一子の剣幕にも驚くも肯定する

「クリ……」

その答えにシュンと犬耳を垂れて、悲しげに呟く

「なんだ…なんなんだ?!?!理由を言ってくれ!!納得できない!!」

胸元に手を当てて叫ぶクリスに

「私が言ってやろう。クリ、お前うざいぞ」

「え…モモ先輩?」

「意味が無いってのも、建設的ではないってのも…全部お前の物差しだろうが」

淡々とした声音で紡ぎだしたが…最後は吐き捨てるように告げ

ソファの上で京を癒し続ける祐樹を一瞥して

「私たちは理屈抜きでここに集まっている。好きでここに集まっているし——京にとっては…命を繋いだ場所だ」

「どう…いうことなんだ…?」

「……京は一度、自殺を図ってる」

「?!?!?!」

「去年の半年……コイツが失踪していたからな。見ての通り…京は祐樹が一番大切な存在だ。何故かは自分で聞け。そこまでは話さな

い」

斬り捨てるように続けていく

「祐樹自身も自分の身に何が起こったか…理解していない空白の半年。だが——京には重すぎた」

今の京の姿を見れば…理解できるであろう。故に、クリスはそれを飲み込む

「…話が逸れ過ぎたな。故に、私たちは誰に指図されようと止めるつもりは無い」

「……だが、それでも自分は」

「もうよせ。クリス。これ以上は……俺も黙っちゃいねえ。今、この場ではお前が悪い」

今まで沈黙していたゲンが静止するも

「…自分が、悪だと?!」

「わからねえか? お前の言葉がどれだけ…」

ゲンが冷めた声音で紡ごととするも

「悪などでは断じてない!!」

それを遮り、クリスは言い募り

「確かに、自分の物差しではあるが自分以外も普通はこの意見のはずだ」

視線を引き締めて…自分に向けられる冷たい眼差しに對抗し

「何故、それが悪になるか…分からない!!」

強く言い放つも……誰もが同じまま。冷めた視線をクリスへとぶつけるのみ

そんな中――

「クリスさん」

「なんだ…まゆっち」

「クリスさんにとって…大切な持ち物ってありますか？」

「ある。…それがどうしたんだ？」

「どんな物ですか？」

「どんな物って……ああ、もう!!父様から貰ったぬいぐるみだ！何の関係がある?!」

スツと瞳が細まる由紀江。底冷えするような声音で

「そうですか……そんなくだらない物を集めている人に言われる筋合いはないですね」

「なっ?!!?!貴——」

激化し言い募ろうとするクリスよりも早く

「さっき、クリスさんが言った言葉をそのまま返してるだけですよ?」

にこやかな笑み。貼り付けた偽りの笑みで返す

由紀江には分かる…同じ男に恋した女なのだから、同じ…孤独の中で手を差し伸べてもらえた者同士なのだから

同じような出会いをすれば……己もそうなっていたと確信し、大切な友であり、大切なライバル恋敵だからこそ

「なん…だと」

「クリスさんの…ぬいぐるみが私達にとってのこの場所なんです」
諭すように、強い意志で

「誰が何を大事にしているのかは…人それぞれです。それを侮辱していいわけはありません」

「!……そうか」

由紀江の力強い言葉に…目を見張り、罰の悪そうな顔で

「それだけ、大事な場所だったんだな…」

「自分の先の怒りが皆と同じであつたのなら…さぞ、先ほどの発言は腹が立っただろう」

意気消沈した声音で紡ぐ

「椎名京。皆。謝罪する。……すまなかつた」

一礼する深々とし

「だが、自分はまだ…皆と共に居たい」

「こつやつて…自分の間違いを正してくれる者は居なかつた…得がたい友だ。先ほどのような発言はしないと誓う。だから――」

胸元で祈るように手を携えて

「此処に居させてほしい!」

「おい―す!!風間寿司で―す!!タマゴばつかでわりいが食いねえ!―!!」

ドシリアスな空気を軽快に蹴つ飛ばす。ファミリーの大黒柱たるキヤップ

「つて、あれ。なんだこの空気?」

引きつった顔で皆が皆…キヤップを見るも

「ずるいぞ!!祐樹!リーダーの俺を除け者にして、青春っばいことするなんて!俺も混ぜろ!」

「……おいー」

喉を擦ってやつたり、頬を寄せたり…まるで愛玩動物を愛でる様に京に接していた祐樹の肩を振り回しながら

キャップが喚く。涙の後を拭くこともせずに、恨めしそうにキャップを見やる京と成すがままになる祐樹

そうして事情を説明し

「なんだよ。謝ったなら解決済みじゃねえか。まっ、一回ぐらいはこついうのはあらあな」

「寛大な処置じゃないか、キャップ。同意見だ」

「京も機嫌直せよ。な？」

「っーん」

「…ってことで、祐樹ケアよろしく!!」

「結局、俺かよ…いいけどさ」

「シリアスは苦手よ…ていうか、本当にタマゴばっかね…」

「こぼしてんじゃねえよ…一子。おら、こつち来い」

口々にメンバーが言い合う。一子に到っては犬耳が力なくヘタレており

「しっかし…まゆまゆも言っじゃないか。一ヶ月前は同じようなものだったのにな？」

ニマニマとした笑みを浮かべて百代が茶化す

「あつ、その、えと……い、言わないといけないと思ひまして…」

「そうだぜーまゆっちだって、時にはガツンというんだぜー」

「そうねー。まゆっちの言つとおりよ！クリにはいい薬よ！」

「くっ…何も言い返せない」

祐樹と京を除く面々が楽しく談笑を続ける中

「ほら、京」

タマゴを手づかみで取り、そのまま京の口元へと運ぶ祐樹

「はむ…」

添えられた指ごと口に含む京。余韻を残すかのようにタマゴを器用に飲み込んだ後も

啜えた指をしゃぶり続ける——男を誘う。女の色香を宿した瞳で見上げながら

「こら、京。指をしゃぶらないの…まだまだあるんだから」

しかし、完全に愛でるモード。一子をあやす様な状態にスイッチが

入ってしまったっている祐樹に

それは通じず…指を引き抜かれて次を持ってこられるだけで

——うー…嬉しいけど、嬉しくない…けど、嬉しい…

心中複雑な模様であるが…目の前の美味しい状況を堪能することに
専念する

転んでも只ではない起きないのが京であるものの

「……他の女の匂いが強い。……ゆうきなにしてたの…？」

「え…？——え、あ、その…」

京の質問にはのぼのと返すも——今日の出来事を思い出して直ぐ
にしどろもどろになって

「何その反応?!?!?!?!まさか、初物捧げてきたんじゃない
だろうな…」

「恐いわ!そも、女の子がそんなこと言わない!…」

「電波系工口幼馴染は伊達じゃない!」

「そんなこと聞いてない!」——…これぐらいで…大丈夫…かな?

不意に肩に重みが掛かる。頭一つ分の

「ゆづき…」

「ん…」

「ありがとう」

「お礼を言われることじゃない。俺がしたいから、こうしてる」

京のお腹へと腕を回して抱きしめて

「でも、ありがとう……好きだよ」

「……ありがとう」

― 深夜 佐橋寮

「すまないな…アウグスタ」

「そう思っているのなら、夜更かしさせるな。私の柔肌にダメージが来るぞ」

「ロボの癖に、ピザばっか食って油塗れのお前がソレ言つか?」

「乙女の純情を踏みにじったな…」

寮の玄関へと出る祐樹。それに付き従うは人型形態のアウグスタ

「……此処まで来れば、迷惑にはならんだろう」

深夜の時間にバイクの排気音が響くのは安眠妨害に相当する

「わりと…歩いたからな。本当にお前はそういう所に気を使う」

「当たり前だ。何時だと思ってる？」

「そっくり返してやるよ」

「ぬかせ…。いくぞ」

そんなやり取りを交わして、バイク形態へと変形したアウグスタに
跨り

夜のハイウェイを目指す。目的地は決まっていない……ただ、走りたいだけだ

ヘルメットに内蔵されたアウグスタとの通信機を介して

風を切る音と共に交し合う

「で？どうするんだ？」

「……………なにが？」

「分かって言ってるだろ」

「……」

「ふん。肝心なところでだんまりか…つくづく私の飼い主は臆病なこ
とだ」

「…分かつてはいるよ」

「当たり前だろうが。あれ程、露骨なアピールで鈍感通すつもりな
ら、死ね」

「…ひどい言いようだな」

「女の敵にはまだ甘い。創造主もこんなものの…どこが いいのやら」

クリエイター

「…京と揚羽さんか」

——こいつ、コロしたいぞ…

祐樹が上げたのが二人だけなのにキレそうなアウグスタ

もう、呆れて二の句が告げられない。心中だけで思う

両者が無言となり…風を切る音だけが二人に届き

不意にアクセルを全開に

「おい?! もっと、丁寧に扱え!!」

アウグスタの抗議を取り合うことなく——暗闇の中を駆けるのみ

「……俺は――」

迷う姿。そのものであった

激突する想い（後書き）

後は体育祭を描いて

本編の箱根の最後の占いをモチーフに

マブラヴ編で描いた一度きりの登場の“案内人”に描いてもらって

分岐ルートへ

戦争と平和

それは、どこかの世界の未来のおとぎ話

「光灯る街に背を向け」

吹き荒ぶ……命を食らう

— Being of the Extra Terrestrial
ial origin which is Adversary
of human race

ヒトの敵

「我が歩むは果て無き荒野」

揺れ動く乳白色の髪。老いたような輝きの無い髪。それが隠す左目
が見通す

醜い…醜悪な傷跡。たとえ、肉を抉ろうとも——其処にあるという
存在は消せはしない

「奇跡もなく標も無く」

左目を覆い尽くすように、浮き上がる紋章。オリジネーターの証

デウス・エクス・マキナ
機械仕掛けの神。仕組まれた15番目の数秘
ゲマトリア

「ただ夜が広がるのみ」

温もりを失った……“壊れた”少女を抱え——愚者は交差する。
“護”を掴んだ自身と

「揺ぎ無い意思を糧として」

託された想い、思い、おもい。

「闇の旅を進んでいく」

世界は優しくなどない。だが——

「——
テトラ・キュテュス・グラマトン
“——” 往邁進」

果たすべき願い。果たしたい願い。多くの命を散らせて……ここに
居る

——2009年 6月18日 佐橋寮

「なんか、いきなりな感じがするわ……」

「こら、ワン子。楽屋事情を察して口を閉じなさい」

「楽屋事情？」

「犬と京は何を話しているんだ？」

女三人寄れば姦しいとはよく言ったもの

現在、彼女達が居る場所は――

「っていつか。祐樹がこの時間に起きてないって…何気に初めてじゃない？」

「そういえば……佐橋――っと。祐樹は何時も自分が起きたときには台所に立っているな……」

「まあ、ご飯に関しては祐樹に決定権と義務があるからね……お継母様に作らせたら……」

一子のぼやきにクリスが同意し、クリスの話の内容に顔を青ざめさせて答え

「でも、本当におかしい。……熱でも出してるかも」

「なら、私と京で突撃ね！！」

鼻息荒く、犬耳をピコピコさせて襖に手をかける一子

「待て！！殿方の部屋に無断で入るのは――」

「私とワン子はフリーパス。あと、まゆっちも」

「……自分が入ってないが」

「クリ。祐樹と一緒に寝たこと無いでしょ？祐樹、一緒に寝た人以外が寝ているときに部屋に入ると」

ワン子が最後に顰め面になって

「一日中、不機嫌なんだもん。だからクリはアウト」

「納得いかんし！そもそも、男女が一つの布団で寝るなど!!」

顔を真っ赤にして捲くし立てるクリス

呆れた表情で

「小さい頃からの付き合いだしね。ワン子なんて両手の指に収まらない数、一緒に寝てるしね……」

クリスへと告げて……底冷えする眼差しで一子を睨む

「うああああ……。そんなに睨まないでよ京ー」

「湯たんぽ代わりになるってホイホイ潜り込んだのは忘れない」

「うわわわわ……ゆうきいー」

京のイジワルな視線に耐え切れずに助けを求めて祐樹の部屋へと突入する

「あつ！こら、犬！」

「…しょーもない」

開け放った襖の先に敷かれた布団に眠る祐樹。その姿――

「祐樹？！大丈夫？！起きて！」

大量の汗をかいて魘される姿。左目を無意識に抑えている姿に…

切羽詰った表情のままに肩を揺らす一子

「祐樹？！」

続いて部屋に入った京の叫び。それによってなのか…

「う…あ…わ、ワン子。み…やこ…」

左目を片手で押さえながら目が覚め

「大丈夫？！？！左目が痛いのか？！病院、病院に連絡――」

「だ…大丈夫。そんな…慌てなくてもいい。京」

そう返して…左目から手を離すと――流れ出す雫

「あれ、俺なんで――」

涙を流す理由が分からない

「……涙を流すようなツライ夢を見たのか？」

一子と京の剣幕に部屋に入るか葛藤していたクリスが入ってきて

祐樹の様子に心配げに問いかけると

「いや、そんな——あ、つうう?!?!」

黒い仮面。ゲシュペンスト。騎士団。ノルン。サラ。

走馬灯のように様々な光景が脳裏を直走る

「なんだ…これ…!」

頭を押さえる。過ぎ去った光景を理解できないままに新たな光景が流れる故に

何一つ理解できない

逆流してくるような情報に頭痛が起き始め、頭を抱えると

「ゆづき…!」

もはや京がパニック状態一歩寸前まで来ているような

そんな焦りがありありと浮かぶ表情で祐樹の両頬に手を添えて

「だ、大丈夫…。収まってきた…」

最初の激痛から始まった光景の奔流が徐々に収まり

頭から手を離して京の手に自身の手を添える

「大丈夫だから…さ。ほら、もう痛くない。頭も抱えてないでしょう？」

額から流れ出た嫌な汗もと止まり……本当に先ほどの痛みが嘘だったかのように

祐樹は本心から京へと諭すように告げるも

「でも…」

「本当に大丈夫。…って、もうこんな時間?!?! 弁当用意しないと?!」

京へと向けた顔。その視線の先で偶然見えた時計が指す時間に驚き慌てて布団から飛び出すように立とうとする

「まゆっちが用意してたから大丈夫よ。それより…ほん、とうーに大丈夫なんでしょうねー」

祐樹の慌てぶりに一子が釘を刺して…疑いの目を向ける

「ワン子まで……だー」

「…という時の祐樹は信用できないもの! 昔っから!」

逆立てた犬耳とは正反対の揺れる瞳の中の不安

「……………本当に大丈夫だって」

向き合う祐樹に対して一子と京はその瞳を凝視して――

「嘘は…ついてなさそうね」

「そうだね……………でも、明日の体育祭の為に今日はお休みするべき」

一子の言葉に京が続き

「……………迷惑掛ける訳には行かないな……………」

「そうそう。明日の体育祭の景品狙ってるしね。キャップも皆も」

「自分も…手芸部お手製のあのぬいぐるみが欲しい。皆の力が必要だ」

祐樹の言葉に満足そうに頷きながらの一子の言葉に

肯定するクリス。商店街の商品券やら校内の部活が作った品物など…様々な景品が用意されている為に

F組はかなりのモチベーションとなっており

「分かったよ。今日はおとなしく寝ている」

「ん。なら私たちは学校行ってくるね」

そう言っただけクリスと一子が支度の為に部屋を出て行き

「…しかし、今日は朝一から寮にワン子^{うち}が居るのが不思議なんだが…」

「今日が体育祭だと勘違いして、三時に起き出してきたからあの子…」

「はあ、アイツらしいというか…で、京はさり気無く俺の布団に入らない。お前も学校行け」

「妻が夫の看病するのは当たり前」

「妻でもなけや、恋人でもない。ほら、遊んでないで…マジで遅刻するぞ」

「ちえ…祐樹のいけず」

唇を尖らし、頬を膨らませて渋谷部屋から出て行く京を見送って…もう一度眠りについた

—2009年 6月19日

夏。川神学園の体育祭は夏季に行われ

プログラム等の内容は三つの種類から毎年ランダムに行われる

そうして——今年は

「水上体育祭……だ……！！！」

驚くべきに川神学園生徒会長を勤め…違った、君臨する百代が

盛大な雄叫びのような言葉を発して伸びをする。服装はスクール水着

学長の趣味が完全に反映された胸元に名前が入ったゼッケンを刺繍された

「えらい…元気だね。百姉」

「そりゃ——」

辺りを見回せば…スクール水着に身を包んだ

一部は祐樹に敵意の視線を送る百代のファンの女の子達

「女子の水着が溢れているからな！ひいやああああほおおお——」

「男子以上に大喜びだね……」

歓声上げつつファンの子達に突撃していく百代を呆れた目で見送る

「ふおふお…よい光景じゃのー」

「お師匠様。……もう御歳なんですから、控えられて…」

「かぁー！なんじゃ、祐樹！お前、老い先短い爺の小さな楽しみ奪

「う気か！」

「…先短いつて、会った時からその台詞なんですが…」

「細かいことは良いんじゃないよ。のお、宇佐美先生」

「ええ。目の保養になりますよ」

鉄心と宇佐美の物言いに溜息を吐くしかない祐樹

「また、ゲンに呆れられますよ？」

「かてえこと言うなって、おじさん…忠勝にもこういう風に反応してもらいたいんだがな…」

「…無理じゃないですかね？果てしなく」

「だな…。そこら辺は気長につてことで…で、お前はどつなんだよ？」

「いや、そりゃ…俺だって男ですから…」

宇佐美の言葉に若干顔を赤らめながらも辺りの女子達へと視線を動かそうとするも

「祐樹！！」

「あつ、乙ね——！！！」

掛けられた声に反応して振り返った先には——

「ほ。鉄も攻めるのー」

鉄心の言葉の意味。それは…乙女の姿

白いビキニにハイビスカスのパレオ

「どうだ？」

パレオの両端を摘んで――

「「おお！」」

「…学長に宇佐美先生。邪魔しないでいただけますかね？」

絶対零度もかくや、この真夏の炎天下でありながら

鉄心と宇佐美の全身が冷え込むような殺意に退散する男二人

「で、どうだ？」

「どうだって…そ、そんなの言えるわけないだろう…」

魅惑的だ。その括れた腰も中央に形よく配置された小さな臍も

上へと伝っていくと豊満なバスト。百代に大きさでは敵わぬも

真っ白いビキニ映える瑞々しい肌色を持つ胸は瞳を釘付けに

「むー。冷たいぞーゆ――」

するも――

「はい、そこまで。先生が生徒を誘惑するのはご法度ですよ」

「み、京…」

嫌な汗が背筋を伝う。現れた京の三白眼と嫉妬に震える肩

「む。椎名か……別に、誘惑しているわけではない。これは姉として弟に意見を聞いているだけで」

「どっから見ても…そうにはミエマセンガ…」

激突視線。両者の間で火花が散る幻影を見てしまう祐樹

一触即発な空気であったが…

「こら！鉄！職員は至急集合だ！さっさと来ないか！」

梅子の掛け声によって

「ぐっ…」「ふふーん…」

乙女は唇を噛み締め、京は勝ち誇った表情。それが両者が離れていく時に交わされた顔

そうして乙女が梅子に連れて行かれた後

「……何、鉄先生の水着に鼻の下伸ばしてる」

「あつ、いや、その」

「私のも、じっくりねっとり嘗め尽くすように見るべきだ!」

「…いや、そんな目で見てないから」

覗き込むようなポーズを取る京に呆れて返す

「くっ……こんなことなら私もスクール水着じゃなくて、紙製のビキニ着てくるんだった!」

「紙製って……」

「今からでも戻って着替えて祐樹を誘惑したい!」

——京を海に投げ捨て帰りたい……

そんなアホなやり取りをスルーしたり、突っ込んだりしたりしながら

二人がクラスの外に返ると——

「……水着、水着、水着、水着、水着、水着!」「……」

盛大なコールによって梅子が際どい水着姿となっており

「28歳……最後の輝きというわけか。笑える」

スグルの禁句発言によって

「始まる前から早速一人病院送りとか…」

モロの言葉はスグルが崩れ落ちていくと同時に紡がれていた…

ところ変わって…こちらは2・S

「ふふ…女性の水着も素敵の一言ですが…男の乳首とかも、つい凝視してしまいます」

そう告げて…隣の青龍軍に属する2・Fの祐樹へと視線をやる冬馬に

「若。さらっとドン引き発言やめてくれ」

準が辛そうに告げる

「おい。女子共おじさんに水着コールは絶対するなよ。絶対に絶対にするんじゃないぞ」

「言われなくてもやりませーん」

語尾に星マークがつきそうなほどに軽い口調で

九鬼秀雄の従者たる忍足あずみが即答し

「滲み出る加齢臭で目をやられたらかなわんのじゃ」

続く心

肩を落とすしかない宇佐美であった…

再び、2 - F に戻り

「素晴らしい眺めだな。クリスいいスク水だぜ」

「どうにも素直に喜びづらいな」

「笑顔笑顔！カワイイだからさ！」

上からガクト、クリス、ヨンパチ

集う数人の男子同様…二人ともにニヤケタ面にクリスが顔を少し顰める

「まったく…男子達は色めきたっちゃってまあ」

「まあそういう所がお姉さんから見れば可愛いですけどね」

千花に真与の二人

「と・こ・ろでー…風間も源もイイ体してるよねー」

猫のような瞳になって…トランクスタイルの水着一丁の二人を眺めだし

「エレガンテ・クワットロの二人が居るクラスって超ラッキーよね

「!!」

千花の言葉にクラスの女子達が同じように頷く

「千花ちゃん達も色めきたってますね……」

「いいじゃないー。さはっちは……」

そう言つて今度は祐樹を探し出し

「うーん…相変わらずの髪型ね。それに上着……」

——でも…覗き見える腹筋とか胸板とか…あの二人よりも凄いわねー

そんな感想を持つ千花

「ガクトさん。凄いですねー」

「…あそこまでいくと野獣でパス」

そう言つて斬り捨てた千花であつた…

「祐樹ーどうよアタシ成長したかな？」

「…したといえば、したんじゃないか？」

悲しい優しさで返す祐樹。瞳は慈愛で埋め尽くされていた…

「本当！イツエイー!!」

「言わない祐樹の優しさだね」

「ん？犬はアレで成長したのか？」

「こんにやるー！！クリー！！」

「上等だ！犬」「クリもアタシと変わんないでしょうがー！！」

そして始まる乱闘という名のじゃれ合い

「さて、この水上体育祭はクラス対抗式だ…それに伴って――」

それを無視して梅子が説明しだすと

「そこから先は私が」

冬馬が梅子の代わりに前へと出てくる。女子達の歓声と男子達からの嫉妬の吐き捨て

「さて、では…私達S組からF組に川神戦役を申し込みます」

紡がれた言葉に全員が叫びを上げる

「川神戦役って？」

「ワン子…お前それでもお師匠様の孫娘か…」

「では！そんな一子殿の為に我が特別に説明しよう！！」

何時の間にやら、クラス一同でやって来ていた英雄が声高らかに宣言
そんな九鬼にビクリと体を震わせて祐樹の背中に隠れる一子

「川神戦役とは5つのテーマごとに抽選で競技を決め、総合力を競
う決闘システムである！」

「勝利することに相手クラスから人材を一名奪えることになってお
り…敵戦力の要を自軍に引き入れることができるのだ！！」

張り叫ぶように告げた英雄はそうして己の背後に居るクラスメイト
達を一瞥して

「私のクラスとF組は争いが絶えぬゆえ、一度決着がつけたいとい
う申し出が多くてな」

その中に居る者達。特に心は――

――くつくつく…個人では不覚をとるやもしれんが川神戦役は総
合力。S組が後れを取るなど万に一つもありえんのじゃ

蔑む瞳のままにそんなことを考え、それに似たような考えを持って
いるS組のモブ生徒達。……モブ

「どうだ？F組委員長？」

「……お姉さんはそういうのは…負けたら誰かを取られてしまいま
すし」

「ですよー。ほら、お前ら！F組委員長が困ってらっしゃる！！

散れ!!」

「そなたどっちのクラスじゃ…」

そんなやり取りの中――

「どうですか？佐橋君。ここは一つ我々と一戦？」

冬馬の言葉に

「……決定権は俺じゃない。リベンジ戦なら個人でやるべきだろう？」

「ええ。ですのでコレは単純にウチのクラスとF組の因縁の決着なだけですよ？」

「どうだか…」

そうこう腹の探りあいをしていると――

「勝てば何も問題ないわ!!私はS組と勝負したいわね!ぜひとも!!」

一子がない胸張って声を上げると

「ワン子!よく言った!俺もやるぜ!相当キツソーだが面白れえ!大勝負だ!!」

クラスのムードメーカーでもあるキャップの一言により

クラスメイト達も色めき立ち

「うっ……ウチの子達は好戦的な子ばかりです」

嘆く真与であつたが…

「仕方ありません……川神戦役、お受けします!」

告げる。戦いの火蓋が斬って落とされる

「さーて!! 実況は私、川神百代と」

「教育実習生。鉄乙女が勤める」

マイク片手にテントの下に作られた放送席の机に片足乗せてのりだす百代と

我慢せぬ態度の乙女の二人

「勝負は5回!! はたして…何人がクラス替えを余儀なくされるか!!」

「注目の第一回戦!! テーマは身体能力! 決闘方法はービーチバレーだあ!」

百代の言葉によって先生方がテキパキとセットを設置していく

そうして…進み出たのは――

「頑張れ！！クリ&カズ！！」

「お笑いコンビっぽく言うな！！キャップ！」

キャップの言葉に噛み付く一子。対するは

「アタイとユキのコンビに勝てるかな！」

「僕が拾ってーあずみが打つー」

あずみとき小雪のデコボココンビ。または餌付けコンビ

「クリ&カズの力見せてやるぞ！犬！」

「えっそれアリなのアンタ？！」

そんな掛け合いを見せつつも試合が始まり…

「先制点はこっちが貰う！いけ、犬！」

「合点！！でりやあっあ！！！！」

クリスの打ち上げに合わせてスパイクを放つ一子

あずみの足元。際どい位置に叩き込み点を奪う

「ちっ…舐めてた」

「タイムー！あずみーあずみー」

「なんだ？ユキ？」

「あのねートーマがねー」

そうしてあずみに耳打ちする小雪。ニヤリとして頷くあずみ

攻勢はまだ――

「でえええい！！」

お次はクリス。こちらでも強烈なスパイクを放つも

「ほい」

今度は小雪に拾われ

「おっと！S組取った！スパイクチャンス！！」

「いくぞ……」

百代の実況通り取った時にはすでに上がる準備を終えていたあずみが

舞い上がったボールへとタイミングよく合わせて

「おーと！打たない！フェイントだー！！」

押し出すような柔らかいモノ。だが…

「任せる！犬！」「まっかせて！！」

コート中央。そこに着陸するようにされれば

「！！！！」

「お見合い！これは上手い具合にお見合いさせたー！」

「S組は……どうやら相手の相性を突きにきたようだな。際どい場所にとす……」

マイクに向かって叫ぶ百代の横で淡々と呟く乙女

フィルードの二人は案の定――

「ちょっとクリ！今のはアタシのボールでしょ……！」

「自分の守備範囲だ！！お前こそ出しゃばるな！犬！」

いがみ合いを始め――

「あー…個人能力は高くても…あの二人」

あれよあれよとマッチポイント

「チームワーク…ゼロだった…」

祐樹が頭を掻いて呟いた時には、それすらも軽く取られ

「S組！完勝ー！！だらしなぞーワン子ー」

「…個人的感想は入れるな。」

「へーい。乙女さん」

二人してがつくりと肩を落とす

「クリ&カズをあしらうとはやるじゃねえか！倒し甲斐があるって
もんだぜ！」

「気楽に言ってるがな…キャップ。負けたから誰か持っていかれる
ぞ」

「あー？！」

「きっと私が指名されるわ…さよなら真与」

「はい…。私が指名されるんですね」

——なんだろう。この100%な安全感

祐樹とキャップのやり取りに千花と真与が互いを抱きしめて悲壮感
を演出し

モロ、ガクト、ヨンパチ等の男達が微妙な安著感を噛み締めている
中——

「では、英雄。予定通りにいいですね？」

「よかるう。任せる」

そう言つて冬馬が指差した先は

「私達が欲しいのは——佐橋祐樹君」

祐樹の姿。場がざわめき立つ

「おー。S組は祐樹を指名だー！つて、こら葵ー！勝手に持っていない！」

「だから私情を挟むなと……学長に後で担当をS組に変えてもらわねば……」

「おーい。おもつきし乙女さんも私情バリバリだからなー」

そんな放送席の二人を放置して

「はあ……ルールだしな。仕方ない」

長い黒髪を弄つて溜息を吐き出す。場の大半の者達……特にS組女子は——

「えー……？冬馬君なんで佐橋なんか？どうせなら、風間か源を持ってきたほうが良くないー？」

「そうそう」

不満であり

「……トーマー。僕……嫌だよー」

「おやおや…これは、また辛辣な評価ですね」

「ほつとけ。何なら変えるか？」

「いえいえ…しよげている佐橋君もイイですね」

「嫌な言い方するな！！後、手を握るな！！」

冬馬が祐樹の評価に苦笑し、祐樹がむくれるという構図

それに指を絡めるように握ってくる冬馬

「祐樹…安心して。私も実力でSに行くから…」

「いや、次勝って取り戻してくれよ…」

ワザとらしい涙目で祐樹を見送る京

「ふふ…よろしく願いますね」

「真剣^{マジ}で次ぎ勝ってお願い！！！」

息が吹きかかるほどの距離を詰めてくる冬馬に半泣きになって叫ぶ
祐樹……いと哀れである

まあ…だが

「よく来たのー佐橋」

「…山猿じゃないのか？」

「同じクラスとなれば話は別じゃ。それに……この前の葵君との勝負は人伝だが聞いておる」

優雅に口元に手をあてて

「まあ、Sクラスに相応しい頭脳は最低限持つておるようじゃしの」
笑いながら告げる

「おら。コレでも飲んでろ」

そう言つて差し出されたのはグラスに入つたトロピカルジュース

「あずみさん…」

「はっ。しっかし……なんでソツチに居やがるんだが…英雄様も不思議がつてたぞ」

手渡した後、耳打ちするように顔を近づけて話し出すあずみに

「仲間達が…居ますので」

「お前が言いそうなことだ。英雄様は内心それでお前に不信感を持たれてるぞ？揚羽様と紋白様の従者候補」

一度切つて英雄へと視線をやつて再び

「その筆頭なんだ…。恥を晒す様な姿はするなよ」

「……その話は、まだ」

「わかってる。が、英雄様自身がそれで納得されていない。コレばかりは個人の感情だ……特に英雄様は只一人ご姉弟の中で男なのだからな」

「……ええ」

「なら、アタイからは言うことは特に無い……っと李のことも見とけよ？」

「???はい」

「わかってねえだろ……李も苦労するだろうな……」

呆れ果てて離れようとするも

「なんじゃ？忍足。お主……佐橋とはそういう関係なのかの？」

傍目から見たら……その距離はかなりの親しい者。特に色恋に興味
が特に強い学生にとっては格好の的であり

茶化すように心が告げ

「どれ、高貴な此方が素顔を覗いてやろう。あの九鬼命の忍足が選ぶ
ぶくらしいの男じゃしな」

「ちげえーよ。オロすぞてめえ……って、バカやめろ……!!」

いらない勘繰りをしてくれた心に冷徹なる視線をぶつけるも……心の行動を制止しようとするが

「…あの、やめてもらえませんか？不死川さん」

冷たい視線でジトと覗きこんできた心を見返すも

「……………」

「あゝあゝ…知らないぜ…」

固まってしまふ心。数秒後——動き出しあずみに

「ど、どういうことじゃ?!?!あやつ男ではないのか?!」

「正真正銘男だ」

「ただだがしかし!あれはどう見ても、女じゃぞ?!しかも…」

前半息巻くように飛ばすも…後半は萎んでいき

「まあ…そう思うわな。だが、現実見据えろ。それに鋭みがあるかな…髪型しだいでかなり男っぽく見えるぞ」

「そ…そうか。って見たことあるのか?」

「まあ…一度な」

——その一度で…オチかけてた李を完全に墮としたんだしな…あいつ。他にも居るしな…。しかし、李も面喰いなことで…

そんなS組とは裏腹に： 2 - Fは

「おい…川神が飼い主無くして落ち着かなくなってるぞ…」

ひたすら……ソワソワと辺りを見渡して、祐樹の姿を求める一子を見てガクトがそんな感想を洩らす

もはやデフォルメ。二等身と化したように見えそうなほどに落ち着き無くソワソワする一子

「取り返してあげやなくちゃね……」

ガクトの言葉にモロが相槌をうつ

「さあ、次の種目に移りましょう！二回戦！テーマは可憐！注目の種目は――水着コンテストだーーーー！」

「うおおおっ！」「うおおおっ！」「うおおおっ！」

⌋

「ただし、女装で……」

「ふざけんごらあつあつあゝ！！！！！！！！」

└┐└┐└┐└┐└┐└┐

意気揚々と箱から取り出した紙を読み上げ

すかさず男子達が雄たけびを上げるが……最後の百代の一言に

雄たけびがブーイングへと一瞬にして変わる中

——ちゃんす…だなこれは

百代は瞳から怪しい光を放ち

「乙女さん…ちょっと耳貸して下さい」

「なんだ？百代？——！いいだろう。協力しよう。私もそう思っていたところだ」

「でしょ？…ここらで一発、アイツの評価を——」

二人の会話を聞いてはいなくとも

背筋に冷たいがモノが走った祐樹は…

「……嫌な予感がする。…が避けられないやな」

憎らしい程の晴天を見上げて、滝のような涙を流すのであった…

“愚者”の素顔

目の前に居る二人を止めることは叶わないだろう

「…ふふ、祐樹…観念しろ…」

「そう。お姉ちゃんに全てを任せればいい…」

大胆に後ろの生地を切り抜かれたような黒のパーティドレスを持つ
百代

化粧品の数々を持つ乙女の二人

「あは…ハハ…はあ…」

この世全ての不幸を一度に被ったかのような…絶望にくれた表情の
ままに…祐樹は溜息を吐いたのであった…

「これは葵君が似合いそうですね」

あずみの言葉に冬馬は

「女装…ですか。確かに私は女性も男性もイけますが…それは男として。自分自身がスイッチヒッターというわけではありませんので

…」

すまし顔告げると

「そうですね…ここは佐橋君に——って居られませんか？」

辺りを見回すも件の祐樹の姿が見えず

「あー…。若、川神戦役戦で獲得したメンバーはその川神戦役戦では出られないぜ？」

「そついえば…そうですね。自身からの参加意思が無い限りでしたね。割と他にも規定がありましたし…ですが、そうなれば誰が出ることに？」

「しょうがないなー。ハリー・ポツチャリに似ているこの僕が行くよ」

モブが自己主張しS組決定。この間にすったもんだの末にF組はモ口が出ることが決まり——

「モモ達どこ行つたのか…。仕方ないワシが代理を務める」

放送席がガラ空き状態。故に鉄心が座り説明しだす

「ルールを説明するぞい。時間は一時間。観衆達に審査員になってもらいどちらが可憐な女子が決着をつけてもらう」

「化粧をさせる人間はどこからでも引つ張ってきてよい。ただし、校内の人間に限定する。以上…では、始め！！」

「って…っわぁ、もう始まった…」

モロがそう呟くと風間ファミリー達が円陣を組み

「…こういう種目で祐樹が抜けているのが痛い…」

「京の言うとおりだな…。髪に関しちゃ、アイツの右に出る奴はいねえ」

京の言葉にゲンが頷き

「メイクは京とチカリンがメインでいけたのにねー」

「なんだ？犬、祐樹は髪を結うのが上手いのか？」

「ちつつっ！アタシも京もお姉様も基本的に祐樹に全部やってもらってるんだ」

「何？！…犬にしても京にしても…何時もどこの美容院でしてもらってるのか聞いたかったのだが…答えがそれとはな」

「ふっふーん！チカリンが文句なしに褒める位だもん！当然でしょ！…」

「まあ……自宅に美容室を揃えるお義母様も、お義母様だけどね…」

「もしかして…あの、勝手に入っではいけない部屋が？」

「そ。もう祐樹しか使ってないし…自分が居ないときに入ると怒る

から入らない方がいいよ?」

「……………」

「あー…もしかして、クリス入ちつまったのか…?」

最後に京が告げたことに対して…無言で視線を逸らせるクリスにキヤップが質問するも黙ったまま

「あとで、謝つとけ。先にな…じやなきやエライ目にあうぞ。話は逸れたが結局…どうするんだ?」

「居ない…ってか。S組に持っていかれたなら無理よー」

ゲンの言葉に悪態をつく一子。一同…頭を悩ませるも結局解決案はなく——“本来”の話と同じような姿に

「では。この一時間は小休止として…言霊部のトークでも披露してもらつかの」

鉄心の言葉に放送席へと呼び出された京極夏彦。そうして――

「…子供の頃より親から植え付けられた教えも一つの言霊だろう。君達を縛っている呪の一種だよ、善し悪しあるがね」

夏彦の言葉の延々と続く言葉のショーに観客がへこたれる前に

「さあて…時間がやってきたわい。では東方、2 - S!」

出てきた者を見たか者達の反応は…

「……寒いのに会場の反応もじゃが…ワシのピュアな心が凍りそうじゃ…」

「くっ！女子達が化粧の方向性で纏まらなかったんだ…！」

「よくいう……。あら言い訳してますね」

最初は毒を吐くように、後半は英雄の前での猫かぶりモードで告げるあずみ

「うむ。ルールが無ければ…佐橋にしたものを」

心が辛辣に告げてモブの心をへし折る。仲間内でも容赦ないのがS組

「S組は纏まりがなさそうだな。そこが付け目か…」

片目を閉じてキャップがのたまうと

「では、気を取り直して…西方！2 - F！」

「んむ？恥ずかしがつておるようじゃな。お、でて——」

鉄心の言葉は切れた。それは会場の者達にも言えることであり

登場した…モロの姿は——

「恥ずかしいなあ…やっぱり」

テーマに合致している。可憐な美少女。いや…乙女の姿

短いツインテールの髪。女子に負けない白い肌。極めつけは恥らいながらの立ち姿

会場の男達のボルテージと一部の腐った女子の雄叫びが木霊する

「勝負あつたようじゃの。勝者！！西方、2 - F！！」

鉄心の宣言に

「え…？かつ、勝つたの僕？！」

自身が一番信じられないモロがそう洩らし

「ぼ、僕に歓声が…こんなの初めてだ…」

頬を染めて、その歓声に感じたことの無い快感が駆け回るのを感じる。——放おって置いたらアブナイ道に走りそうな

そんなモロにガクトとヨンパチがニヤケタ面で駆け寄って言葉を交わす中

「さあ、選ぶがいいF組！誰を指名する」

「じゃ。わ——」

「葵冬馬で……！やられたらやり返す……！」

千花が瞳を輝かせて京の言葉を遮って宣言。それに追従する女子の

クラスメイト達

「小笠原…」

「そんな恐い目で見ないでよ椎名っち……ほら、さはっち人質だと——」

京の冷たい視線に肩を震わせて、冗談みたいに済まそうとする千花が

「囚われの姫ならぬ——って、あれ？これであってね？」

「あながち……間違いじゃねえって言うてしまっり……アイツも難儀だな」

キャップが燃えるような言葉を紡ぐとするも……途中で合つてると理解して呟いた言葉は

抑揚に頷くゲンによって肯定される……

「と……肝心の祐樹がS組の席に居ないが……？」

キャップとゲンの視線が件の人物を探し出したときには見渡し終えたクリスが発言すると

「はははは……！お前達！活目してみろ……！」

ステージ上に音も無く何時の間にやら立つ百代

腕を組み見下ろす形で告げ

「これよりエキシビジョンを行う！」

S組ともF組とも違うカーテンサークル。ステージ上に配置されていた三番目にして中央サークル

選手をメイクアップさせる為のサークルを指差し

「さあ、私の弟。否！もう一人の妹を見せてやる！！出て来い、祐樹！！」

百代の叫びに応えるように

「ほら、祐樹。お姉ちゃんの手を確り持てればコけないからな」

観客達には背を向けた姿。両手は前に差し出され、誰かを牽引するような形

そうして一步一步後ろ向きに歩みだした乙女の後——続く

長い黒髪。目元を完全に覆ってしまった野暮ったい髪型は

——纏め上げられシニヨンに余る髪は三つ編みにしてそのシニヨンの周りの土台部分に巻かれ、前髪を人房垂らして……その吊ぎみの瞳に一筋の色香を与える

大胆にカットされた背中。乙女に両手を持たれて穿いたことのないヒールの高いサンダルで覚束ない足取りのままに中央へ

―男達の視線が集まる。その白磁…陶器のようできて瑞々しい、命の躍動を感じさせる肌

全身黒一色。しかし飾り付けられた胸元のロザリオが首元まで届くひし形の胸の生地…その中央にヒツソリに合わさり

―首元から足元まで…ゆったりとしたドレスが脈打つことに、祐樹の体が生地を上げて動くたびに、その場所に視線を移す

その姿、まさしく“WOMAN THE COOL SPY”。――異なる世界”^{マブラヴ}ではまた違った印象を色濃く残す男であるが…

モロの比ではない大歓声上がる。思わず…

「うわぁ?!」

乙女に引いてもらって何とか歩けるヒールを引っ掛けてしまつて盛大にコケ

「…た、倒れる姿も色気がありすぎだろ」

「つか、今の表情で立ち上がろうとするのも…やべ、俺トイレ行ってくる!」

ガクト、ヨンパチの声が男達の代表的な意見であり

「ちよっ?!?!マジでさはっち?!?!……ま、まけた…」

「うぐ……先も見たが……くっ！此方は認めぬ！大体アレは男じゃ！……そう、男……なのじゃ……」

「祐樹ちゃん……お、大人のお姉さんすぎます……」

「あーあー……可哀相によ。李が居れば甲斐甲斐しく慰めるのに……つくづく運の無い奴だね。二人とも……」

概ねメンバー以外の女子達の反応はこういうもの。皆一様に呆けた表情が多い

そうして——風間ファミリィ。同い年の三人プラス

「……モモ先輩。あれだけお願いしていたのに……」「そうだぞーそしてオラ達体育祭で初めてのセリフだぞーもっと出番増やせー」

「やってくれたね……モモ先輩」

「？」

「……！！……な、なななな……」

滝のような涙を流す由紀江。悪態つく京。？顔の一子。真っ赤になるクリス

「……ちつ。やっぱし……色目使い始めやがったな」

京がさらに毒づく。聡い女子達が早くも……あの容姿ならば素材のレベルの高さに気づき

今までぶつけていた視線とは正反対の視線を浴びせる。まあ…流石に六割は今までの容赦ない言葉を浴びせてた故に

そう簡単に変えることは出来なかったものの。それでも囃したてる者達が居り…中には――

「「「お姉様………!!」」」

「今…自分の耳には空耳が聞こえた気がするのだが…」

「事実だよ。クサレビツチドモノキョウセイハ」

「あわわわっわ……み、京……!! タツちゃん助けてー!!」

「わわわわわたしも! 京さん並にー」 「よくねえぞーまゆっちーあんまし黒化は評判よくねー」

そうして……大混乱の坩堝に嵌った体育祭は

最後の勝者権利を京がちゃっかり書き換えて祐樹を戻す結果とし

ステージ上で百代がコールされるままに祐樹とデュエットし始め…今日、この日より

百代は“モモお姉様”祐樹は“ユウコお姉様”……というファンの子達からの名を付けられることになる

そうして鉄心が生徒達の大反響に折れて有耶無耶の内に締めきられてしまう。まあ……鉄心自身も

祐樹と百代のコンサートと化してた会場を眺めて孫馬鹿が発動したためであつたが…

「あら………この調べ」

ステージ上に乱入したキャップの声に祐樹が飛んできたギターで応じている

「ふふ………“ 詩歌い” 見つけたわ…」

黒髪にヘアバンドをした女主人。久遠時森羅はそう呟く…校門前に止まったリムジンの中で

「いつか、私とあなたの道が“ 交わった時” を……楽しみにしているわ」

― 基地

「あー！！！！歌った歌った！！」

盛大に声を上げて百代はソファへと体を投げ出し

「なんか、今日の美味しいとこ全部モモ先輩に持って行かれた気が

する」

「何言つか京。お前も途中で乱入してきたらう？」

「……鉄先生が邪魔しなければもつと歌えたのに……」

「ありや、筋金入りだな……俺ももつと祐樹と歌いたかったぜ！」

「京もお姉様もキャップもいいわよ……アタシとまゆっちはオンチだもん……」

「ですねー」「泣けてくるほどなー」

「自分は……」

日は暮れ……ファミリー一同は秘密基地へとやってきており

「おら、お前ら……これでも食え。疲れも溜まってるだろうしな……夕飯までの繋ぎだ」

冷蔵庫から仕事場で余り物としてもらったプリンを人数分持つてくるゲン

「おう！……所で弟は？どこ行つた？」

「祐樹さんなら」「二階に用があるって行つて上がったぜー」

「ふーん。そう——？！」

軽く返事を返そうとした百代であったが……向かいにある誰も座つ

て居なかったソファに

「…フオフオフオ…：どうやら、“時”が満ちたようでございますな」

ただの人ではありえないほど長い鼻。ギョロつとした眼。おでこから頭頂部まで禿げ上がり

後頭部の髪は白髪。耳は尖っており、着ている服は黒スーツ。そしてその胸ポケットに純白のハンカチを挿し

それに右手の人差し指を柔らかく乗せた姿の初老の男性が…そこに居た。百代に気取られることなく

「お——」

言葉を発しようとするも、初老の男性が人差し指を立てただけ…声も体も自由にならなくなる

「ご心配めされるな。私はあなた方に危害を加えることはない」

“愚者”の素顔（後書き）

割と省いた…

現実と虚構の狭間で何が見える？

「フオフオフオ……初めましての方も居られれば、久方ぶりと言うべき方も……居られますでしょう」

その空間は青白い部屋

只一つのソファに腰掛けた初老の男

「初めてお会いした方にはご挨拶が必要ですね……。私の名はイゴール。とは言いましても……この“物語”を見られている方が知るイゴールとはまた別」

その部屋にはイゴール以外の人は居ない

いや、揺れ動くものは……部屋の中央に飾られた直走る様な逆走を見せる時計のみ

「“愚者”たる者の心においてもつともこの場に相応しい形を取らせてもらっている……“愚者”の心の一部」

誰も居ない。けれどイゴールは語る

―物語を見つめる者達へと、幾多ある世界の一つに住まう……物語を見届けんとする者たちへと―

「さて……本来の道筋とはまた別のこの“物語”も…運命が交差するかのよう“因果”が侵食し始めました…」

大仰な仕草で腕を掲げ

「“因果”を断ち切ることはできやしないかもしれません。が――」

掲げた腕を戻し…腕を組み、胸ポケットに刺さる白いハンカチへと指先を置き

「“選択”は出来ますでしょう」

頭を振り

「これから先……幾多の在りえたかもしれない未来への“道”を“愚者”は歩き出しましょう」

「その先には未来を決定付ける…“因果”の選択肢が貴方様方の前に現れる」

↓その結末を受け入れる

その結末を受け入れない

「このような形となつて……」

「それは…“愚者”が愚者のままに終わるのか。“護”を持つ“愚者”となりえるか」

「誰にも先が分からない世界を生きる“愚者”。心剣に恋する“愚者”」

歌うように告げる

「選び取りし未来。 “選択”が……かの者の明日を紡がれることを……願います」

「願わくば——少女達の心に残る選択が選ばれることを」

「願わくば “最高のお客人であつた” とならんことを——」

ただの人ではありえないほど長い鼻。ギョロつとした眼。おでこから頭頂部まで禿げ上がり

後頭部の髪は白髪。耳は尖っており、着ている服は黒スーツ。そしてその胸ポケットに純白のハンカチを挿し

それに右手の人差し指を柔らかく乗せた姿の初老の男性の姿は——

“勇” ルート 開放

“誠” ルート 開放

“仁” ルート 開放

“礼” ルート 開放

“義” ルート 開放

“信” ルート 未開放 条件Ⅱ ???

“誉” ルート 未開放 条件Ⅱ “礼” ルート後

“悌” ルート 未開放 条件Ⅱ ???

想いが描くキセキ 未開放

S ルート 未開放

“礼”の武士娘の“メランコリー”

・西暦××××年 日本 帝都

個別ル——つて全部

希望

——“礼”ルート——で

タイムダイバーシステムは“観測者”を確認

……“希望”を確認

青白い光が満ちる部屋のモニターにそう……映された

——2009年 6月19日 基地 二階

向けられた腕。黒を纏うと言っても過言ではないその姿

仮面の反逆者——ゼロ

差し出されたような手とも、拒絶されたような手とも呼べるような……
分らない意思。仮面に塞がれた瞳と顔にはどのような感情が乗っているのだろうか？

「ぎい——がつあああああつあああああ！——」

しかし……絶叫をあげるしかない出来ないほどの激痛に襲われる“愚者”にして“護”の青年には

そのようなことを考える余裕など無く

「あゝあがつあゝあがつあゝあゝあゝ」

最早、言葉として成立してない声が上げながら頭を抱えて激痛に耐えるしかない

その姿に反逆者は何も語らず、向けた腕を下ろし……見据えるのみ

——かつ……は……

蹲る。体を折り曲げて床に無様に体を投げ出して……青年は思う

——た、たすけて

流れいく……“様々な記憶”と“失ったイタミ”が自身を襲うなか

——た……すけ……て……ゆ、き……え

“この道”に於いて……選び取る大切な人の名を呟く

——基地　一階

「……ん？私は……何をしていた？」

一瞬の意識の途切れを確認は出来る。それを自覚している百代がその声を洩らすと

「あれ、モモ先輩もかよ？おつかしいなー……誰か、そこに居た気がしたんだがよ」

キャップが百代の対面にあるソファを指してそうのたまうも

「えー？誰も居ないわよー？キャップ」

一子が誰も居ないソファへと足を運んで座りながら告げ

「…うーん。なんか、凄いの見た気がしないでもないけど…」

糸目になりつつ京がボソボソと言った言葉に

「京に同意だ。自分も…何かを見た気がするのだが…」

見た何かを思い出そうと顎に手をやって考え出すクリス

そんな仲間達の姿と現在、一子が座るソファへと交互にゆっくりと視線を動かした後

瞑目して考えに浸るゲン

そんな中…

「呼んでる」「ん？どうしたよーまゆっちー」

ただ一人。由紀江だけは

「行かなきゃ！！行かなきゃいけない！！」「わぁー！まゆっちー！！」

座っていた椅子から立ち上がって駆け出す。二階へと

開けるのすらもどかしいという形に乱暴にリビングの扉を開け放つ

「まゆっち？！」

「まゆまゆ？！何処に行くんだ？！」

一子と百代の言葉に反応することなく…直ぐ横にある階段を駆け上がっていく

「…！！祐樹！」

由紀江のその行動に逸早く気づけたは京

彼女も同じように由紀江の後を追いつ出し…他のファミリー達もそれに続く

そうして――

「しっかりしてください！！ゆうきさん！」

二階の部屋。開け放たれたままの扉から由紀江の涙交じりの声が聞こえる

祐樹の頭を胸元まで抱えあげ、必死に声を掛ける姿

「……ゆ…き……え」

目を瞑ったまま…ただ、体は無意識に己を抱え上げる者を認識しているのだろう

吐血した血を拭うこともできずに力なく由紀江に抱えあげられる祐樹と

血に濡れることを厭わずに…必死に祐樹の意識を呼びおこそうとする由紀江の姿がそこにあった

―蒼紋病院 個室

この場所に身を移されるは必然

吐血し意識を失っている状態の祐樹はここへ搬送され…

「祐樹さん…」

時刻はとうに深夜を指していると言つのに

何故、由紀江がこの場所に居れるのか？

それは――

「――」

音に成らずとも…唇の動きで分かる。指が掴む先で分かる

力が込める。寝かされた祐樹の隣で粗末なパイプ椅子に座る少女の手に

由紀江の握りこまれた両拳に

その中で左手を強く握られているにも関わらず…痛みに顔を顰めることもなく

むしろ…強く握りこまれることを望むように力なく横たわっており

その指が申し訳ない程度の力で由紀江の指を握る

赤ん坊が差し出された指を条件反射のように握り込む様に…祐樹の手は由紀江の人差し指を握る

「祐樹さん…」

音に成らなかった呼び声に答える

握り締めた拳を解き、祐樹が求めるように握りこんだ人差し指がある右手は

ベッドに横たえて…握られた人差し指の周りに漂うようにいる祐樹の手を残りの指と手で覆いつつ

左手は長い黒髪で遮られた顔。頬を撫でる

指で梳く。前髪が退けられた顔、穏やかな寝顔を晒す

「……嬉しいと思うことは…悪いことですよね？」

今にも泣きそうな表情。眠る祐樹から返事が返ってこないことは百も承知で紡ぐ

「…でも、こんなにも」

握られる指。握り返す手。自身が思うことは不謹慎なのかもしれないが――

「こんなにも」

由紀江には

「求めてもらえることに……私は――」

由紀江は伏せるように胸元に顔を埋める。薄い病院服が直ぐに濡れていく

「わたしは」

この気持ちはある種の――メランコリー憂鬱

こんな状態になってしまっている祐樹を見据えて

泣き笑いの表情を浮かべた顔を重ねる

“礼”ルート 突入

告げるは――

――葵紋病院 朝

手先が震えた。寒さによるものじゃない――

いや……これも寒さかもしれない

「……ん」

目覚めた意識。今だ……ぼやけた視界の中に映る

白のみを描いたシーツの上に踊る黒髪

夜通し見守っていたからだろう

パイプ椅子に座った体勢からうつ伏せる様に体を横たえ

「――」

微かな吐息が祐樹からも由紀江からも洩れ出た

祐樹は――眠る由紀江の姿に飲み込まれたが故に……

由紀江は――ただ…良き夢を見ているかのような安らいだ顔から自然と…

そんな二人の間を繋いでいた指は今は途切れてしまっている

無理も無い。お互いが眠りについてしまっていれば、それも詮無いこと

だから――

「……」

衣擦れの音。シーツから緩々と這い出る自身の手が無意識に動く

先に述べた“寒さ”を無くそうと求める

指が到達する……由紀江の頬へと

一番近くにあるのは必然

由紀江の姿勢は今は左頬をシーツに乗せて、右頬が天井へと向かっているのだから

伸びていく指、手―― - 触れる

「……ん」

微かな吐息と声。触れた瞬間に伝わる温もりと柔らかさ

女性特有…それも女子高生という年齢が齎す魅了するような瑞々し

さと弾力

何時までも触り続けたいと…男を誘惑する美しいソレ

最初は人差し指。次いで中指、薬指、小指という順に乗る自身の指達

一番初めの指につられ、毘に落ちたかのように離したくなくなる…頬

それから伝わる体温——温もりは祐樹の心を落ち着けていく

「由紀江」

唇のみが形を作る。音に成っていないのに祐樹の耳には確りと聞こえている

常の祐樹ならば…このような行動を取っていれば慌てふためき

手を引っ込めるであろくに——今は…

そうして——見つめ続ける視線に気づいたのあろつか？

ゆっくりと…切り揃えられた前髪。その下にある細い睫毛

それらが動き出す……ゆっくり、ゆっくりと

その二つが動き出すならば……瞼が動き出すのも自明の理

二つが重なる。両者の――

「由紀江… / 祐樹さん…」

瞳と声がお互いを縛り付ける。お互いに――

重なり合う視線が導くままに――

祐樹は上半身をくぐめていき――

由紀江は体を起こしていく――

両者が目指す場所は同じ。瞳が交差し続けるままに――

「うーす。佐橋ー飯もっーすいませんでしたー!!」

ハゲの登場と退場によって両者見事に固まってしまう…

「どうしたんですか、準?…おや、これは」

陽気に扉を開けて喋りだそうとした準は最後は棒読みになりながら開けた扉を閉めていこうとするも――

すこし後ろを歩いていた冬馬によって完全に閉め切ることが出来ず…

「これは、これは…失礼致しました。ごゆっくり」

常のスタイルたる両手をポケットに突っ込んだ姿勢で一瞬のみ目を見開くも――

営業用に見える爽やかなスマイルを一つ置いてこちらも退出する

残された二人は――

「……」

「あわっわわああ……」

祐樹は固まり。由紀江は泡を吹きそうな勢いで唇をカタカタと動かし

「し、失礼しましたああああ――!!」

脱兎の勢いで病室から飛び出そうとする

が――

「きゃ、ゆ――」

飛び出そうとした由紀江の腕を掴み、強引に

奪う

「――」

お互いの唇が合う。言葉を発そうとした由紀江は目の前の光景と

唇に感じる感触に目を丸くし……

睫毛と睫毛当たりそうなほどに近い祐樹の顔を、瞳を呆然と見返すことしか出来なく

「ん…は…」

触れ合うだけのフレンチキス。本来なら鼻で息をしてまだまだ続けられるのだが…

固まってしまっている由紀江の様子からソレは無理と判断して、一旦唇を離す

触れ合った感触。温もりが離れていく

「あ—」

由紀江が離れいく唇を名残惜しそうに、切なげな声音を本能的にあげる

「由紀江」

「ひゃ、ひゃい！—ゆうつきさん！—」

背筋を伸ばしすぎな程に伸ばして直立不動になる由紀江

それに呼びかけた祐樹は微かに微笑んで……手繰り寄せる

自身が腰掛けるベッドの中へと、己の腕の中へと

「はっ?！」

祐樹の行動に思考が追いつかない由紀江は素っ頓狂な声をあげるも

一度として——抵抗しない。するはずが無い

自身の腕の中に捕らえた由紀江の頬に祐樹は自身の頬を寄せて

ゆっくりと語りかけるように囁く

「由紀江」

「ひゃい?!」

「由紀江」

「はひ!」

「由紀江」

「は…はい」

「由紀江」

「…はい」

「好きだよ」

胸元に抱く…愛しき“礼”の武士娘をギュツと抱きしめる

痛みを与えるのではなく…愛しさを与えられるように

強く抱きしめながらも、弱く抱きしめる

相反する言葉。その二つを重ね合わせる抱擁で

振り向く顔。愁いを帯びた瞳、潤む瞳、喚起に満ちた瞳

それらが祐樹の瞳に映る。それらが映し出す自身の表情もまた…似たようなモノ

答えるように

近づいてくる。真紅の唇は少しだけ開かれており

「わ、わたしも……好き……です」

「むー…アイツ生意気なんだよー」

「ほら、ユキ。そんなことは言わないですよ」

「ってか、俺ら出歯亀かよ…ぶっ！」

「おやおや…直撃ですか準。ここは大人しく引きますかね…」

告げるは——（後書き）

初っ端から飛ばしてますね…

さて、共通ルートで長々とハーレム風に書いていたので

各ルートは最初から大体こんな感じで、まあワン子と百代は違いですが…

後、アンケートを取らせてもらいます

現状……情けないことなんですが、デートぐらいは一回書こうとしているんですけど…シチュが全然頭に浮かんでこないというか…こんながらがるって言うか…

何か、希望のモノ合ったら感想にでも下さい…

後は……現状、ダイバーシリーズを書くのが苦痛というか、疲れたというか…

恋姫。恋する姫と鋼鉄の男の話がポンポンと頭の中に湧いてくる始末というか…（苦笑）

ダイバーシリーズ、もしくは恋姫。どちらが見たいかも書いてもらえると嬉しいです。踏ん切りがつくと思うので

では…

想いに決着を

―佐橋寮

「一夜明けたらカップルとか鬼畜！」

全身を震わせながら血涙を滂沱の如くに流さんとする京は

慎ましく、手を繋いで帰ってきた祐樹と由紀江に言葉を浴びせる

一日だけで退院し寮の玄関を開けた途端にコレ

さすがに祐樹も由紀江も後頭部に冷や汗垂らすしかなく…

「帰ったか」

奥のリビングへと続く暖簾を掻い潜って

何時もの不貞腐れたような面構えで祐樹達を出迎えるゲン

「ああ。ただいま、ゲン。京」

「た、只今帰りました！」

「…ああ、おら京。玄関で突っ立てねえでこっち手伝え。病み上がりには飯を作らせるわけにはいかねえだろ」

「あああのの！！それでしたら私が手伝います！」

「あ？」

ゲンの言葉に何も言わずに素直に従おうとした京の機先を制して

由紀江が手を上げて志願し先に寮の中にかかる

そうして……残されるは京と祐樹の二人

「……まゆつちを選んだんだね……」

「ああ」

思ったような――激化することも泣き出すこともなく告げる京に
対して淡々と告げる。一切の躊躇いなく

「そっか」

肩の力を抜くようなポツリとした声音

「……恨むか？」

「なんで？ていうか、それ私に対する侮辱だよ」

キツと眉根を寄せて目を吊り上げる

「私は刺したりしない。病んでもいない。普通に愛してる」

「でも、重いかもしれない」

吊り上げていた目が落ちる

「…ああ。重い。限りなくね…」

「はつきり言っな…」

「俺の為にも、京の為にも…ハッキリさせるさ」

頭を振り、視線を伏せ気味な京へと真っ直ぐに向ける

真っ向から向けられる瞳に京はただ見据えるしかできなく

「女として私は何が足りないのかな…？」

「やめろ、京」

「やめたくないな…」

「……そういうのじゃない。由紀江と京の間に何が足りないとか足りてるとかの話じゃない」

拳を握る。強く

「俺が、俺が選んだ…ただ傍にいて欲しくて……願いの先を届かせたくて」

「俺を…男として見るのはもうやめろ。俺にとって…」

「それは祐樹が決める事じゃない！！祐樹を私がどう見るかは私の

自由！」

紡ぐごうとした言葉を遮る。それだけは紡がせまいと
痛い沈黙が二人の間に横たわり始める…

「……………そう、簡単に切り替えられないよ」

「京」

「でも——少し考えてみる」

「……………ああ」

そうやって、京は自室へと引き上げるも

——そんなわけないけどなっ！！

強く心の内で叫ぶように

——待つしかない…邪魔して嫌われたら…意味が無い

グッと拳を作り

——鳴くまで待とうホトトギス。歴史はソレが勝つと証明したんだ！！

― 2009年 6月21日 佐橋寮

― 昨日の体育祭の代休も昨日で終わり、本日は週末

― これで…いいか

自室のクローゼットに付いている姿見で持つて確認する

何時も無造作に放置されていた髪を

― やはり…切った方がいいか？

男として言うよりも…女性としてもロングと言える程に伸びきった髪

自然…ネットを彷徨つてもカタログや雑誌を見たところで

ココまで伸びきったメンズ物は無く

束ね上げて結う。さながら大きな三つ編みを一本垂らすような髪型

コレを肩から前へと流してしまえば…… 某ジャム… 某邪夢の人と変わらない髪型

「うーん……どうするか」

姿見の前で悩んでいれば

「ほー、ようやっと髪にも手を加える気になったか」

「…また、お前は部屋で食う…リビング行つて来い」

「私が何処で何を食べようが、私の勝手にこの部屋は私でもある」

床に寝そべってクッションを引きその上に身を乗せて

ガールズファッション誌に目を通す人型バイク

「で、それで決まったのか？」

雑誌に向ける視線を動かすことなく問うアウグスタに

「全然…せめて、由紀江に恥をかかせんぐらいにしたいんだが…」

「ふん」

祐樹の溜息交じりの言葉に鼻を鳴らして答えたのち

部屋の襖の前から

「ゆ、祐樹さん」

「入っていいよ。由紀江」

由紀江の声が上がり間髪入れずに返答して促す

ゆつくりと襖を開けて…ちよこんと顔を出す由紀江に笑みを浮かべ

て手招きする

アウグスタはその様子に白けた瞳をして…庭側の襖から部屋を出る

「うわわわ…塩で本当にナメクジ溶けるのだな」

クリスが生々しい光景に対しておっかなびっくりで

「そうだぜー、こいつ食えないから嫌いだ」

拗ねたように唇を尖らせて

「というか食ったのか？これ？」

口元に手を当ててキャップの答えに驚くクリス

「前に一度サバイバルした時な。盛大に吐いたわ」

「それは、そうだ。先人の知識をありがたく生かさないからだな」

「お！アウグスタじゃねえか。祐樹は——」

「部屋でさかっている」

「は、破廉恥な！」

キャップの言葉を遮って返し、ソレに対してクリスが頬を赤くしながら非難する

「いいじゃねえか。仲間内でカップルができたんだ…俺は歓迎する

ぜ」

「気楽なもんだな。お前は」

「あれー、なんだアウグスタは歓迎しねえのかよ？」

人差し指を突き出して意味深に瞼を閉じて宣言するキャップに対して
つつけんどんな答えを返すアウグスタ。ぐぬぐぬと顔を上気させる
だけしかできないクリスを置いて

「ふふ…マイスター。そのピザバイクは祐樹を取られたと思って
——」

「喋るな坊や。これだから…デリカシーの無い童貞は——」

「ロボ相手に童貞言うな！貴様の方がよっぽどデリカシーが無いわ
——」

第二形態状態のクッキーがアウグスタに茶々を入れるも

ピシャリと言われて激化。二人…二体は口喧嘩を巻き起こす

「なあ、キャップ。何故、クッキーはいつもアウグスタと会う時は
第二形態なんだ？」

「さあな？俺も知らない」

二人の疑問が宙へと飛ぶのは必然で

「でなければ、うちゅうのほうそくが乱れるからだ」

「なんだそれは——と祐樹、そのおめでとう」

「ありがとう。フリードリヒさん」

「お前…何時までそれなんだ…」

その言葉に外にいる二人からしたら再び祐樹の部屋の襖が開き

中から部屋の主たる祐樹が姿を現し疑問に意味不明な返しする

突っ込んだ後、祝福を述べるクリスに対しての言葉にクリスが納得しない風に返すと

「そうだぞー。リーダー命令だ！祐樹、これからクリスのことはクリスと言うように…！」

キャップがそれに同意して祐樹へと告げる

「…はいはい。クリス、ありがとう」

「うむ。——して、それはアレか？記念にしているのか？」

祐樹の肩を竦めて普通に返した言葉に満足して

腕を組み。祐樹へと問いかける——その髪型の意味を

「おー！まゆっちとお揃いじゃねえか」

「迷ってな……由紀江が弄りたいというから任せたらこうなった」

ニヤニヤと隣に立つ由紀江へと視線を向けると

縮こまって顔を伏せ…赤くなる由紀江

「いや、しかないねー。新しい風の二人。刺激的で…しかも、一人は祐樹が手にしたしな」

キャップの物言いに益々肩を窄め、顔中赤いところがないぐらい染まる由紀江

それは祐樹にも伝播し……頭を掻き、赤くなりながらソッポを向く

「俺の勘どおり。上手く回りだしてきたな」

「…そういうのは二人の居ない処でだな。キャップ」

深く頷いてるキャップに対して

腕を組んで白けた瞳で見やる祐樹。当の二人は興味津々に

クリスは顔を突き出さん勢いで、由紀江は祐樹の服の裾を握って遠巻きに

二人の性格の違いが如実に浮き上がる格好で耳を欹てる

「えーいいじゃねえかよー」

「……ある種。お前らしいよ……まあ、割り^{マシ}と真剣にぶつかり合っ

たな」

「うぐ。そう言っているながら乗るのだな…祐樹…しかも、耳に痛いことを」

クリスがおどけた様な言い方である祐樹の言葉に胸を押さえて恨めしそくに返す

「俺達だってココに来るまでに喧嘩もけっこうしたろ」

「だな。別にクリスだけじゃないさ…割と俺とキャップはぶつかり合いが多い」

「そうだぜー。何かにつけて、危ないからとか節度を持てとか…母ちゃんかよーって思う事が多かったなー」

頭の後ろで腕を組んで、糸目になって唇尖らせて言い募るキャップ

「だから…お前はほんと…懲りないよなー」

「なにおう！冒険家からスリルとったら何が残るんだよー！」

「はい。はい。もう、お前もいい歳だ…行動に対して結果は受け持てよ」

「そんなの当たり前だぜ！俺は俺のケツも！！ファミリーのケツも持つー！！」

勇ましく宣言するキャップに…眩しいものを見るように目を細めて、慈しむモノを見るように

「む……なんだか、私達が蚊帳の外だぞ」

「だな。話が逸れちゃった。で、クリスは同級生だから問題なしとして……まゆっちだ」

「ひゃい?!」

突然、キャップに話の矛先を向けられて素っ頓狂な声で返す由紀江
「まあー。祐樹が面倒見てるから大丈夫つか、ゲットしちゃってるけど」

「俺達以外に友達できたか?まゆっち」

キャップの言葉にシュンとしてしまう

「その……まだです」

弱弱しく答えるも顔を上げて

「で、ですが!お友達になりたい思う方は見つけました!!」

「おお!そうか!まゆっち、助太刀する!何か、自分にできることがあれば遠慮なく言ってくれ!」

「俺だって協力は惜しまないぞー!!」

「は、はい!お二方ありがとうございます」

クリスとキャップの言葉に丁寧にお辞儀で返す由紀江の肩に手を置いて

「俺も…な」

「はい…祐樹さん」

「なら、善は急げだ！祐樹はまゆっちが狙ってる奴の情報収集！俺は――」

捲くし立てるように告げ

「友達ゲット祝いの旅行をモモ先輩と相談だ――！！」

風の如くに一気に飛び出していく

「まったく…アイツは」

呆れたように言葉にする祐樹

クリスはキャップの突如巻き起こした突風に体を回されて目を回し…

由紀江はそんなキャップの行動に啞然とするのであった

―多馬川 川沿い

夕暮れの中

「あれ？準―あの人どっかで見たことあるよ？」

「え、何が、誰？幼女？」

小雪が発した言葉に敏感に反応する準

「おじさん」

その一言に一気に脱力して

「全然興味わかねーし」

そう言われたら、こう返すと言う

男の代表的な言葉で返す。ごく丁寧に胸元で手を立てて

「あは、そうだ。総理大臣に似てるよー」

「どれどれ……」

小雪の言葉の中の単語には興味を引かれ…小雪が指す方向に顔を向ける

「――ははっ。確かに遠目から見ればな」

軽く笑って返すと

「僕サインもらってこよーと」

笑みを浮かべて駆け出そうとする小雪

「本物が入るわけないだろう？そっくりさんだよ」

それを制する準の言葉に

「なーんだ…そうなのかー…」

シユンとして肩を落とす

「元気出せ…マシユマロ買ってやるから」

そんな小雪の姿に対して準がおどけた表情で返してやると

「わっほーーーーい!」

大はしゃぎで飛び跳ねる。現金な子である…

「あーこちら。スカートで飛び跳ねたら見えちゃいますよー」

「元気な若者だな。そうでないとな」

その様子が見えていた——話の渦中の男

日本国民の意思を総代する……“この世界”の本物の総理

惚れ惚れする射撃の腕を持つ男の目は、一介の武道家程度とは比べられない程に優秀であり

先ほどの二人の様子をしっかりと見ていた

「やはり、多馬川はいい。……見ていると落ち着くぜ、心が」

肩を竦めて目の前に広がる……赤と青が入り混じる水面を見つめる

「煩わしいモノを総て洗い流してくれそうだよ……」

疲れた声音と哀愁が漂いそうな雰囲気で呟く

「くく……こんなセンチメンタル……ガラじゃねえわな」

そんな総理を見つめるのは彼らだけではなく

「本物の総理で候?!」

「まさかー。そっくりさんですよ主将」

弓道部の矢場弓子と小杉武蔵の二人が遠目から見やる

「ふ……さて、リフレッシュもできたし」

「総理、そろそろお時間です」

「おうよ！頑張るとするか！！！」

国を憂う侍が……立つ

―何処かの野党 一室

「間もなく総理の任期が満了する……」

「その後の選挙で勝つのは我々だ……」

拳を握って呟く

「悲願の政権交代を必ず成し遂げてみせる！」

総理は敵も味方も多い

野党の幹事長たるこの男。蘇我も目指すは総理と同じ

国民の安らかな暮らし

「総ては愛しき国民の為に！」

が……方針の違いから足並みが揃う事など無く

政党の対立は続き、総理の戦いは続く――

―秘密基地

赤い夕日に照らされる

真っ赤に染まったそれに当たる少女

彼女の一度犯した過ちを知る百代にとっては…忌まわしき記憶を思い出させる

「……………モモ先輩？」

二階のベランダに立ち夕日浴びる少女たる京は…入ってきた百代に言葉を発する

背中を向けながら

「泣きそうな美少女を私は放っておかない」

「……………ありがとう……………」

百代の言葉に…弱弱しい言葉で返す京

「祐樹とまゆまゆ……………か？」

「会ったの？」

「いや、キャップに聞いた」

「そっか…」

途切れる

「…まさか、あの二人がくつつくとはな…アレは何だかんだで、まゆまゆを女としては見ていなかったはずだが…」

途切れた会話を続けようと百代がそう言う

「ねえ…モモ先輩」

「なんだ？」

姉として答える

「私になくて、まゆっちにあるモノってなんだろう？」

ポツポツと言葉を紡ぐ

「私には…………何が足りなかったんだろう」

ポロポロと零れる

「どうして、祐樹は私に振り向いてくれないんだろう」

「なんだか…………とられると思うと情けないよ…」

涙が

「……悔しいよ……」

「京」

「三年。三年一緒に居れなくて……代わりにまゆっちが居た……一人だけで」

視線が夕日を追っていた

沈みいくその様を

「その差……なのかな……」

ぼんやりと

「それ以上に一緒に居たのにな……その三年が——」

「京」

それ以上の言葉は消えた

百代が後ろから羽交い絞めにして

すばやく自身の胸の中に正面から抱きつくように体勢を変えて

「私は……この気持ちか男として愛しているのか……弟として愛しているのか」

茜色の空を見上げ

「正直言ってわからん。だがな——」

そうして胸元で涙を零す——

「私達は……風間ファミリー」

愛しき妹を見据えて

「私が京に対して抱く……ワン子と同じように大事な妹というような感情と同じで」

「アイツも……お前の事を私と同じように見ているだろう」

諭すように、自身の感情を確かめるように、百代は告げる

「女性としてより——家族としてか」

「そうだ……“今”のアイツはそうだろうさ……」

「だとしたら……なんか——距離が近いつて難しいね」

「だな。近すぎても……恋には成らずというところだな……」

「まゆっちも……そんな感じだったのになー」

京のいじける様な言葉に

「さあ…な。ソレばかりはアイツの心に聞いてみないとわからんさ」

スッパリと斬るように言い放つ百代

「うん……ありがとう、モモ先輩」

「どーいたしまして」

胸から顔を上げて、離れながらに感謝を述べる京

対しておどけるように返す

「このまま一人だったら……鬱になって——」

「泣き言言つなよバーカ。それにそうしてみろ、絶対アイツも私達も今度は許さないからな」

最初はそのままの雰囲気で、最後は本気で怒ったように告げる

「うん……」

自覚がある京はしょんぼりと頷く

「本当に好きなら——耐え忍んで待つぐらいしろ」

「最初からそのつもりだよ」

「あっ！コイツー」

百代の言葉に伝家の宝刀たるGOOD札を出して

シレッと答える京にジト目で返しながら

——それにしても…こんな可愛い子を泣かせて…

ベランダから離れて部屋へと入っていく京の後姿を見ながら

——生意気だぞ。アイツ

ここには居ない

“愚者”であり“護”の青年に心の中で呪詛を吐いた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9745q/>

ダイバー 外伝 愚者は心剣(ブレイドアーツ)に恋をした

2011年9月10日17時22分発行